

8-1 no. 49-1

一般資料 No.49



生活時間の 自主的な設計のために

第8回全国婦人会議記録

保
録
労働省婦人少年局

は し が き

労働省では、昭和三十五年四月十日から一週間「生活時間の自主的な設計」を目標として、第十二回婦人週間を全国的に展開しましたが、この週間の中央行事として、第八回全国婦人会議を四月十三日から四日間、東京において、日本放送協会と共催で開催いたしました。

会議には、全国からの応募者二、一四九名の中から、中央選考委員会の書類選考によって選ばれた六〇名の会議員が参加しました。会議は四部会にわかれ「生活時間の自主的な設計のために」をテーマとして、リーダーの助言のもとに第一日第三日の二日間話し合いが行なわれました。第一日目の産経会館の部会討議に引続いて、第二日目は、東京・神奈川・埼玉・千葉の四班にわかれ、移動会議を実施しました。これは、事業場、社会施設等の見学、地元の婦人たちとの話し合いなどをおして、より視野を広めることをねらいとして昨年初めて試みられたもので、今年は二回目です。

なお、今年はいじめての試みとして、全国に組織をもつ婦人団体、労働組合婦人部等から推せんされた方々に特別オブザーバーとして各部会に参加していただき、会議の傍聴と、ご意見の発表をお願いして会議を援助していただきました。最終日の総会では、会議リーダーおよび会議員による部会報告ならびに一般傍聴者との質疑応答が行なわれました。

ここにその会議の速記録をまとめて刊行いたしますが、婦人問題に関心を持たれる方々のご参考になれば幸いと存じます。なお、紙数の都合で割愛した部分があることをお断りいたします。

昭和三十五年十二月

目次

はしがき

全国婦人会議の構成

全国婦人会議次第

メッセージ

講演

自由時間と民法について……………東北大学教授 中川善之助……………三頁

部会

第一部会……………一〇頁

第二部会……………五頁

第三部会……………一〇頁

第四部会……………一四頁

総会……………一九頁

移動会議……………二〇九頁

全国婦人会議の構成

名 称 全 国 婦 人 会 議

——生活時間の自主的な設計のために——

主 催 労 働 省・日本放送協会

期 日 昭和三十五年四月十三・十四・十五・十六日

場 所 東京産経会館・NHKホール

部 会

第一部会 家庭婦人の問題

第二部会 勤労婦人の問題

第三部会 家庭内で収入活動に従事する婦人の問題

第四部会 農業・漁業にたずさわる婦人の問題

六〇名（全国の応募者中より中央選考委員会が決定）

出 席 者

中央選考委員

東北大学 教授

中 川 善 之 助

（選考委員長）

會議リーダー

事務局

第一	中央大学教授
第二	評論家
第三	東洋大学教授
第四	評論家

日本放送協会教育局長
日本放送協会婦人少年部長
労働省婦人少年局長
労働大臣官房総務課長

那須宗一	西村清子	塚本哲夫	団野信夫	浅沼博	江上フジ	谷野せつ	大野雄二	労働省婦人少年局婦人課職員
------	------	------	------	-----	------	------	------	---------------

全国婦人会議次第

四月十三日（日）

開 会 式

一〇・三〇～一一・三〇

——合唱「世界の花」——

開会のことば

あいさつ

メッセーシ

選後所感

外国からのメッセーシ

部 会

一三・三〇～一七・〇〇

四月十四日（月）

移動会議と視察（東京・神奈川・千葉・埼玉）

労働省婦人少年局長 谷 野 せ っ

労働大臣 松 野 頼 三

日本放送協会々長 野 村 秀 雄

東北大学教授 中 川 善 之 助

（全国婦人会議選考委員会委員長）

評 論 家 西 清 子

（全国婦人会議選考委員会委員）

四月十五日（火）

部 会

九・三〇〇一七・〇〇

四月十六日（水）

総 会

一〇・三〇〇一二・三〇

——合唱「世界の花」——

あいさつ

日本放送協会教育局長

浅沼博

経過報告

労働省婦人少年局婦人課長

高橋展子

部会報告と話し合い（会議リーダー、会議員、一般傍聴者）

記念講演

東北大学教授

中川善之助

アトラクション——影絵と歌——

閉会のことば

労働省婦人少年局長

谷野せつ

まず 生活の時間割を

そして 自由時間を

—— 自分のために みんなのしあわせのために ——

—— 第十二回 婦人週間 スローガン ——

メッセーヂ

第十二回婦人週間を迎えて、ここに第八回全国婦人会議を開き得たことは、女性にとっても、男性にとってもこの上なき歓びといわなければならぬ。封建意識の泥沼の中にさまよう男性が、いかに多くの女性を不幸にしているかは、今日なお日常茶飯事のごとく見聞きするところであるが、同時にまた、旧態依然として個人の尊厳に目覚めず、公共の福祉に無関心な女性が、そのためにどれだけ「自分自身の幸福を取り逃がし、ひいては夫をも、子をも、家庭をも、旧時代の殻にいつまでも閉じ込めて、われも人も不幸になるような愚かさを繰り返しているか」は、想像に余るものがある。民主主義の憲法が施行されてから十三年、婦人が参政権を獲得してから十五年、しかも今日なお、伝統は改革をはばみ、慣例は反省を妨げ「凡て女の道は、人に従うに在り」となすことき思想が、ただに男だけではなく、女の口からさえ平然と語られることのあるのを、われわれは悲しく、また腹立たしく思う。

しかしわれわれは、ここでくじけてはいけぬし、諦めてもいけない。先ず女性自身が、一人でも多く手をとって、かたみに頼り、助け、励ましながら、混沌とした今の過渡期を、女性みんなの力と智慧とで乗り切らなければならない。

今日ここに集まれた六〇人の会議員諸君は、日本のあらゆる地域から、いろいろの職業の体験者として選ばれた人たちである。北の人と南の人が教え合い、勤労婦人と家婦人が話し合うことは、必らずや諸君に、新らしい知識や、経験や物の見方、考え方を数多く与えるであろう。それを諸君は諸君の故郷に持ち帰って、もう一度町の人たち村の友達たちと語り合うに違いない。そうしてこそ、この全国婦人会議が貴重にして且つ健康な成果

を挙げることになるのである。私は今日の開会式にあたり、このような成果の限りなく大ならんことを、切望しまた確信するものである。

昭和三十五年四月十三日

第八回全国婦人会議選考委員会

委員長 中川善之助

講 演

講

演

自由時間と民法について

東北大学教授 中 川 善 之 助

私はみなさんの婦人会議でのご討議をうかがいまして、大げさにいえば、まことに涙ぐましいものを、みなさんのご努力に対して感じたのであります。

自由時間という言葉が使われておりますが、現在、自由を持っている人、束縛のない人は、自由というようなことは考えないだろうと思います。そういう意味で、全国婦人会議のテーマとして、自由時間がとりあげられたということは、日本の婦人がまだ時間的に自由でもない、もしくは時間というものに対して主体性がない、自分のために使う時間がない、あるいは少ない、ということではないかと思ひます。

みなさんのお話し合いの中にも、一日働きまわっても自分は不眠でないとか、また勤めている方で、有給休暇があるのだけれども自分は休暇をとったことがないというようなことをいわれた方もありました。それを「休めないほど忙がしくて、つまらない職場だ」という意味でいう人もあれば、また、嬉しそうな顔をしていつている人もありました。また、私などのように学問をしているものは、毎日有給休暇のようにみえるかもしれませんが実は年中無休でありまして、休みの日でもゆくり遊べるという人がないのが実情であります。しかし、学問をしている人間は、どんなに研究が忙しくて、それだから研究をやめたという話は聞かないのであります。それはどんなに忙しくて、その時間の使い方に自主性がある。つまり、自分がその時間の主人になっている。その人は自分の時間を持っているからで、そういう人には自由時間ということとは、あまり問題にならないのではない

かと思うのであります。忙しく研究に追われている時間がすべて自由時間なのであります。

戦争中に聞いた話ですが、潜水艦に乗っている人は、船中の空気の分量がきまっているので、自由に空気を吸うことができないそうで、なるべく空気を消費しないようにしなければならぬ。それで思う存分空気を吸いたいなと思う、というのです。普通、陸にいる者は、空気を節約しようとか、自由に空気を吸いたいというようなことは考えないのであります。そういう意味からでしょうか、男の集まりでは、あまり自由時間ということが問題にならないようでありますが、まだまだ、婦人の生活には生活時間について、いろいろな問題があります。つまり婦人の生活自体がまだ拘束されており、自分の生活になっていない面が非常に多いのではないかと思われま

す。

婦人が、自由時間というものを考える時には、何か「へそくり」のような感じではないかと思ひます。一種の隠匿財産のようなものです。小説を読もうと思えば、その時間をひねり出さなければならぬ。世界中どこでも、家族制度のもとでは女は大体、財産を持っていません。婦人には自由財産というものがないから、自分でお金を持ちたいと思う。子供にあげや鉛筆を買ってやるのにもいちいちしゅうとさんに出してもらうのではなく、自分の財布から出してやりたい。田舎などでは年に千円のお小遣いしかもらえない、いわば千円嫁というような、まことに気の毒な妻君があります。そういう人たちには、その千円がほんとうにうれしいが、さらにそれを二千元にしてもらいたいというような悲願の声を聞くのであります。そうするとしゅうとは、いいさえずればいつでも出してやる、というのですが、経済の上でも、時間の上でも、人間の自然の欲求として、自分の自由がほしいのです。そして、その自由が、大まかにいって、男にはあるが女には少ない。そこで、男が自由であるように、女も自由でなければならぬということになるわけでありま

す。

しかし、男女が共同して家庭をつくっていくうえに、お互いが勝手に自由を主張していたのでは、家庭生活がなりたたないということになるので、一家の幸福ということで、お互いが自由を譲り合わなければならないのは

当然でしょう。しかし会議でも、妻が自由時間を得るためには、夫の協力が必要だという声がありました。言葉は「協力」であっても、その中に何か「お恵み」という意味が含まれていないでしょうか。たとえば、婦人会などに出席する場合、近所の人たちが呼びにくるので「みんなが行くなら仕方がない、お前も行ってこい」と夫が許したとします。この程度の同意なら、ほんとうの協力ではない。これはただの同情か恩恵にすぎないと思います。男が婦人会というものの役割をほんとうにわかってくれて、出席することを認めてくれるのでなければ、ほんとうの意味の協力とはいえないと思うのであります。

そこで、婦人が昔から手内職をして、自分の自由財産を腹巻の中に巻き込んで、こっそりためていた、いわゆる「へそくり」が、だんだん公認されてきて、妻も財産を持つのが当りまえだという考え方が出てきたように、自由時間とか自主的な生活時間の設計ということが、今回問題として取り上げられたというのは、婦人が公然と生活時間の主人公になる道程ともみられるわけで、非常に、このましい、うれしい便りだと思っております。

私は民法を専門としておりますが、民法においても、昔から男女の平等と自由ということは考えられていたものであります。しかし、民法というものは、社会のかがみといいますが、その時代時代の進歩性なり、反動性なりを包蔵しているのであります。そういう意味で民法も社会思想の一つの現われでありますから、社会一般の考え方が一つの方向に向ってこない、その方向の民法は現われてこないものであります。

日本の民法は明治三十一年にできたものであります。当時は非常に進歩的な民法だと思われていました。たとえば、結婚は当事者の同意がなければ無効であるという規定は、親が決めた結婚に子はいやでも従わなければならなかった一時代前の法意識と比べて、非常な大変革であったといえましょう。しかし、その中に、男三十才女二十五才までは父母の同意がいるということが規定されていまして、実際に子が円満な生活に入っても、親が同意しなければその親は子の結婚を取り消すことができるようになっていたのであります。やはり、家族生活の中で親の意思を中心とする思想が残っていたのであります。

このほか、かん通罪、家督相続権などにも、男女平等の規定がありましたので、学者たちはこの改正の必要をたびたび論じていたのですが、昭和二十二年まで、結局改められないままできたところに、日本社会における封建制の強さが示されているのであります。

明治民法でも、先ほど申しました婚姻の場合の当事者の意思や、夫婦協議による離婚の自由というような立派な規定がありました。これが果してそのとおり実行されていたかと申しますと、協議離婚というのも名目だけで、実際は「追い出し離婚」の仮面であったのであります。昭和二十一年にできた新憲法の二十四条に「婚姻および家族に関する事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない」とありまして、これに基づいて、民法においても全部平等にしたのであります。それでは、現在「追い出し離婚」というようなものはないかというかと、やはり相当多いのであります。それで、家庭裁判所でいちいち、本当に別れる気なのかどうかを確認してから協議離婚届を受理することにしてはどうかという意見がありました。現在の数少ない家庭裁判所では、とてもできることではありません。

また、親権についても、新民法では、父母は共同親権に改められましたが、旧民法では、父親が生きている間は原則として父が親権者で、母は親権者ではなかったものであります。新法により父母の親権が平等になりましたが、そしてまた実際は子供の教育を受け持っているのはむしろ父親ではなくて母親なのに、今日でも母親を除外した「父兄」というような言葉が通用しており、いう方も、聞く方も平気であるところ、まだ問題があるのではないかと思います。

相続についても新しい民法では、男女平等ということになっていますが、女の子は結婚するとき、タンスを持つていくからいいだろうというので、相続分がタンスだけと交換されてしまうようなことがよくあります。そういうことで、実質的な不平等がやっぱり残っています。

また一方、形の上で男女平等になると同時に扶養義務なども平等になりました。もちろん、扶養する実力のある

い人は義務もないが、実力があれば平等に扶養義務を負うことになっています。ところが夫が亡くなって、中風の母親を誰が世話するかということになると、みんな長男に押しつけようとする。しかし遺産のことになると、民主的に兄弟姉妹平等に分けるという。責任の分担はなるべく旧式に昔ながらのやり方でいこうという考えがまだ一般にあります。それで平等の規定ができて、実際にはなかなか平等にならないということになるのだと思います。

結婚した場合に、夫婦の氏をどうするか、つまり苗字をどうするかということも、私たちの間で問題になっております。明治民法では、原則として妻は夫の家に入るといって、夫中心に考え、結婚すれば夫の苗字にかわるというのが普通になっていました。日本の古い時代、また中国、朝鮮においても、氏というものが血統を表わす意味で使われていたころには、結婚しても氏は変らなかつた。夫婦は別々の苗字を使っていた。それが日本では明治十四、五年ころから、夫婦は同一の氏を名乗ることになったのであります。しかし、どっちの姓を名乗ってもいいではないかという問題が起こって、昭和二十二年の改正の時「夫婦は、婚姻の際に定めるところに従い、夫又は妻の氏を称する」と定め、夫婦どちらの姓を名乗ってもよいことになり、形の上からは全く平等になったのであります。実際にはたいてい夫の氏に統一されているのであります。

このような統一を避けるために、昔のように、夫婦別々な氏を名乗ったらよいではないか、また、別な第三の氏でもいいではないかという意見も出ておりますが、婦人がそういうことを主張すると、男はとかく「苗字なんかどっちだっていいではないか、どうせ符ちょうなんだから夫の氏に女が変ったからといって、夫婦の平等がくずれるなどと考えてもなからう」というようなことをいいます。どっちでもいいなら妻の氏に統一したらどうか、という「それは困る」という。なぜ困るのかときくと「何となく工合がわるい」という。そういう習慣的な不平等意識というものが、今日も残っているのであります。

法律というのは、人々の生活の意識を包むワクであります。このワクがどんなに立派でも、中身の意識を引

き上げなければ、何にもなりません。法律は百の権利、千の権利も婦人のために与えることはできませんが、何千の権利を婦人が持ったとしても、それを確実に実行できるような環境と、その環境によって規定される意識が、平等を実現できるまでに高められていなければ、実生活において本当の平等は浮かび上がってこないのです。こういう意味で私は、法律は川のようなものだと思いたいです。夫婦の場合、昔は妻の川はなくて、みな夫の川に入っていました。今は二本の川が流れています。しかし、妻の川はまだ細いのです。これを平等だからといって妻の川幅も夫の川幅だけにただ広げただけでは水は足りなくなります。そこで二つの川幅が同じで、しかも両方の川の水がよく交流し合うように連続することが、これからの生活で重大な問題ではないかと思うのであります。

よく「誰でも馬を水のそばまで連れて行くことはできるが、馬に水を飲ませることはできない」ということがいわれます。法律は婦人にいくらでも権利を与えることはできますが、その権利を生かすのは婦人自身であります。与えられた権利の上に婦人が眠っていたのでは、どうにもなりません。せっかく獲得した権利ですから、目をさまして、自由平等の意識を盛り上げていかなければなりません。私は、まだまだ、婦人の実生活より、民法の方が先に進んでおり、婦人のために民法はたくさんさんの権利を用意していると思います。もっとも実際にはなかなか簡単にいかない点もありますから、法技術面でも、もっと婦人の権利が行なわれやすいように考えなければなりません。何といっても根本は、自由平等な意識を婦人自身が身に付けることだと思います。議員のみなさんも全国の各地にお帰りになって、ほんとうに自由な婦人の考え方というものについて、さらによくお考えになることをおすすめて、私の講演を終わります。

部 会

出席者

特別オブザーバー

リーダー

宮大福愛広大岐長東埼群栃福宮北
海
崎分岡媛島阪阜野京玉馬木島城道

小	小	奥	那	福	小	松	末	大	神	猿	中	奥	古	土	山	国	谷	田
森	池		須	島	池	尾	広	本		渡	沢	宮	谷	屋	崎	分	津	村
道	順		紀	宗	安	憲	君	八	隆	美	美		し	政	京	礼	千	カ
			伊					重	代	治		惇	づ					ヲ
子	子	子	一	代	子	代	子	子	子	子	榮	子	か	江	子	子	代	ル

無職

11

二

11

11

11

11

11

11

11

11

11

11

11

11

11

(中央大学教授)

(主婦連合会)

(日本婦人有權者同盟)

(全国友の会)

社会の役に立つために

那須 家庭の主婦の部といたしましては、全国婦人会議のテーマに基づきまして、討議に入りたいと思います。

最初に家庭の婦人として自由時間を持つ場合にいろいろな障害があると思うのですが、そういう障害が一体どこにあるのかというふうなことに、皆さんの体験からお話していただきたい。そしてまたこちらに出てくるまでに、もしも話し合いがあったとするならば、そこではどんなことが問題になったかということ、そういうことを最初に問題にいたしたいと思います。その話の中で、今年のテーマになっている「自由時間」という言葉の意味——外国には自由時間という言葉はなく余暇時間といっています。特にこれを自由時間とうたっているところに非常に日本的な特長があるともいえます——その自由時間というのをどういう意味にとらえたらいいかということも皆さんの話し合いの中から出てくればいいんじゃないか。無論、自由時間のとらえかたには、それぞれの自由時間の内容を結びつけて、ずいぶん違った意見が出てくると思いますが、それはそれなりに結構ですから、私はこういうふうに自由時間を考えていきたいということもつけ加えてお話し願えればいいんじゃないかと思います。

また家庭の主婦は自由時間が二十四時間あるんじゃないかというふうなことをいう人があるのですが、それらのことを合わせまして、自由時間をどういうふうに作ってゆくかということも討議の内容としていきたいと考えますので、そのような心組みで、ひとつご発言を願いたいと思います。それでは田村さんからどうぞ……。

田村 私は自由時間というものは、妻、母、嫁、主婦といった束ばかりから解放された個人として使える時間を自由時間だと思っております。私の主人は炭坑に勤めている坑内の職員なものですから、勤務時間が四交替になっておりまして、一週間ごとに勤務時間が変わりますが、生活時間というのは、本当にめっちゃくちゃなんです。

そこで、どうかして自分の時間を、いくらかでもほしいと思ひまして、買物とか、掃除、そのほかのことを家族全部に協力してもらうことにしました。買物などは三日分くらい一ぺんに仕入れ、お掃除なんかは、二日に一ぺん、洗濯も、のりつけのものと、そのほかのものとに分けまして、一週間に二回くらいやるようにし、子どもにもそれぞれ仕事を分担させるようにしましてやっと自分の自由時間が少しとれてまいりました。おかげで近頃はイライラすることもなくなり、家族とたのしく過ごすことができるようになっております。

谷津 私は主婦になる前に勤めを持っておりましたが、その頃から、自由時間というものは誰にも支配されないで自分の意思で自由に使う時間が自由時間だというふうに考えてまいりました。主婦になりましたから六年、家族は、勤めの夫と、それから病気がちで発育の遅れた三年六ヵ月の女の子がおります。以前は辺地におりまして、子どもの通院生活やら何やらで苦労しましたが、現在は団地に住み非常に恵まれた生活環境です。ですから、私の場合は、自由時間というものは、私が積極的に求めようとすれば、工夫次第では簡単に求め得られる状態にあるのです。それで、その自由時間を生み出すための工夫ですが、まず第一に生活を合理的、計画的に行なうということだと思います。

主婦の仕事というものは、本当にのんびんだらりとやっておりますと、一年中、まったくひまのないものです。それで私は一年中の仕事、一ヵ月の仕事、一週間の仕事というものを、大体頭の中で整理して、生活の時間割のようなものを作りました。初めは夫も交えてのそれを作ったのですが、夫は、二日中外で束縛されているのに、家庭に入っても、束縛されるのではやりきれないといえます。それはそのとおりだと思ひまして、今では、夫のことをいちいち時間的には束縛はいたしませんけれど、私の頭の中では絶えず夫を支配しているというふうな気持ちで動いております。

それからアパートの奥さんは、非常にひまがございいます。朝の九時頃からお茶飲みにいращいります。私はまず朝の仕事からお客様がいらしてもはずかしい程度に予定をじゅうぶんに組んでやっております。一週間のスケジュールをとりましたら、朝の仕事、掃除やら全部含めて二〇分です。それからアパートの奥さんがいらして、合にはしかたがございせんから、絶えず手を動かしてお話をするようにしております。ぬいものやあみものに一日五十五分くらい費やすので、その分としてお付き合いをするわけです。次に子どもの問題ですが、まだ幼いものから一日二時間程度は子どものために遊んでおります。それも午前中は近所の子どものために一緒にみてあげて、午後はこちらのほうの奥さんにやりくりしてもらおうという具合にします。そこでもだいぶ自由時間を生み出しております。それから夜の生活ですが、私は夏に編物とか冬のものを作り、冬に春や夏のものをするようにしています。そうすると非常に気分的に余裕ができて、あくせく働く必要がないようです。それから洗濯は大体一週間に三日、掃除は特に重点的には一回、あとはまあまあという程度にやっております。そのようにしまして、秋に時間を調べましたら、私の自由時間は一日に三時間十五分ござい

ました。この頃は、夫も非常に協力的になりましたので、三時間二十分ぐらいはとれると思っております。

国分 私は一日二十四時間全部自分の時間だといつても過言ではないくらいに非常に幸せに自由時間を持ち合せておりますが、以前は非常に無計画に、とんできた仕事に全部とびついて婦人会、あるいはPTAの会というように出席して忙しい忙しいといつて暮らしておりました。それが今度作文を書きまして、初めていままでの生活があまり漠然としていたということに気がついたので。いろいろな会の役員やなかで出歩く事も勉強になると思つて是認しておりましたが、それ以外に自分自身で勉強しなければならぬことや自分でやらなければならないことを見出したわけです。これからの一生のうちにやらなければならない仕事——私は、読書や、小説や、童話を書くことが好きですが——というはっきりした目的を一つ見出したわけです。私の場合、その目的のために自由時間の設計というものができたわけですが、それができたら、やはりこれはある程度の障害をのりこえて実行しなければなんにもならんし、また、その自由時間を意識して使うか、使わないかということで、非常にその価値に差があるのだということを改めて認識させられたわけです。

山崎 自由時間の定義として、私は日本の主婦が誰もし

なければならぬ炊事とか、洗濯、掃除、育児などをやって、なおも余った時間の中で、自分を高めるために、誰にも干渉されずに、自由に使える時間のことを自由時間だと私は考えております。私は東京の師範を卒業しまして、昭和十九年に結婚して、疎開をかねて主人の実家である塩原温泉にゆき、それ以来十五年山間へき地をあちこちと転動しましたが、上の子どもが小学校に上ると同時に退職しました。家庭に入りまして、私は、よい子を育て、よい家庭を築きあげるためには、よい母でなければならぬ、それには毎日の生活を甘く考えずに、自分をいかして真剣に勉強しなければならぬと思い、大体の目標をたて、計画をたてたのです。

まずいちばんお金がかからずに、いちばん効果的な勉強法として、ラジオに頼ることに決めました。婦人に関する番組や、教養番組、学校放送などテキストをとりまして、継続的に聞きました。時間にすると、大体午前中二時間、午後二時間くらいを、その時間にあてまして、放送と放送の合間に家事を片付けてゆくようにしました。家事は主として肉体労働ですから、頭と身体と交互に使いいかも肉体労働のあとに、ラジオを聞きながら身体を休めることができます。いまは、そんな工合に毎日一定のリズムにのって、希望をもって毎日を迎えております。また子どもがだ

んだん大きくなりましたして、育児の時間がういてきましたので、昨年あたりから婦人会などの団体の役員などもボツボツ引き受けまして、地域を明るくするために微力をつくしたいと考えております。

土屋 私は一週に一日を自由時間に持っておりますけれど、そこにゆくには、私なりに努力をしたつもりです。主婦の仕事というものは、やる意思さえあればいくらでも出てくるものでして、それをうまく処理するのはその人の能力次第だと思うのです。そこで私はどうしてもしなければならぬ仕事と、まああともいいという仕事とを区別しております。そして一週間の計画を立て、土曜の午後や日曜日は家族がいて、仕事が思うようにはかどりませんから、その日は私も家族と歩調を合せて、仕事をしないようにしております。また私は、あみものから洋服いっさい、主人の背広なんかは別ですけれど、自分で仕立てておりますので、そのための時間がとてもかかるのですが、水曜日を私のための本当の自分の時間に決めて、その日は好きな刺繍や読書や竹細工を練習しております。

まあそういうふうに水曜日は私のお休みというふうに決めて使っておりますけれど、ここまでくるには、何かこう家族にすまないような、自分がなまけ者のような気持の抵抗があつてつらいこともありました。いまでは私もほかの

日に十分やることをやっているのだから、このくらい自由時間をもつのは当然だと信ずるようになっております。自分の暮しをたのしむことは、自分ばかりではなく、家族のものや社会のものをも幸福にすることのように思っております。

でも、せっかくそういうふうに自由時間を生む努力や、活かす努力をしても、他人におかされてはなんにもならないと思います。おかさず、おかされずといまじょうか、私のグループは訪問なんかも午前中は避けて午後にするとか、そんなふうに心がけております。そして私の場合、週に一日の自由時間は、いまのところ私のために使っておりますが、もう少しできましたら社会のお役に立ちたい。そんなふうに考えを進めてゆきたいと思っております。

古谷 私の自由時間は十二時から三時までです。三時間の自由時間はせいたくなようですが、幸か不幸か、私は洋裁も、和裁も不器用でできませんので、もっぱら自分の教養を高めるために自由時間を用いております。高校、中学校のPTAの仕事を手伝っておりますので、学校新聞の発表会や、青年学校、それからいろいろな会合などにも努めて出席して、私の自由時間を有意義にしております。

自分のたっぷり恵まれた自由時間を、自由時間の少ないお母さんたちのために奉仕することは、ひいては社会のお役

に立つのではないかと、ほこらしい考えをもっております。そして日曜日には必らず教会に行きます。教会生活も十年になりますが、その自由時間が形のない形になって、私の信仰として実を結んだことは、意義があったことと思えます。

奥宮 私には女の子が三人おりまして、ただいまはアパートに住んでおります。自由時間の解釈としては、家族とか、よその人に束縛されないで自分で使う時間というふうに考えております。私は戦時中に結婚したものですから、ちょうど娘時代と、それから子どもを育てる時代が混乱した時代で、あまりものを考える暇もないままに忙しく過しておりました。朝から晩まで仕事に追われているということの無意味さに気づき、自分のしたいことができるようにできるようにとつとめ、そういうことからまた生活勉強のことをちゃんとしなければ、そういう時間が出てこないということなんかもわかってきました。わたしはあまり時間割をたてて、キッチンと毎日生活するということが得手でないものですから、明日はどこかに行かなければならないとか、なにかたのしいことがあるからというような、自分のたのしみのことを先に目標に立てては、励んで自由時間をふやしてゆくような方法になってしまったんですけれど、いまは子ども会を一つ自分で好きでやっております。それ

が預かっているお子さんのお母様に、自由時間を生み出してあげているような結果になっております。

だんだん子どもが大きくなって、今度は子どものほうが、学校で生活時間のことなんか勉強してきますと、こうしようじゃないかといってくれますし、家庭内では、私の自由時間に対する障害はありませんが、むしろ、世間の目と申しましょうか、そういうことがとても障害になっているように思うのです。お母さんがしょつ中外に出ているから、子どものことをあまりかまわないから子どもさんが愛想がないとか、そういうようなことをいわれて困っています。

中沢 私は主人が教員で、以前は松本にいましたが、ただ忙しい忙しいといって毎日過してまいりました。けれども世間には家庭をもってちゃんと立派に勤めをしていらっしゃる主婦の方もおいでになる。自分はただこれじゃいけないと思って、なんとか自分の時間を生み出して、少しは勉強したいと考えました。

まず、立ち話ですが、買物などに行きますと、忙しい忙しいといいながら、つい三十分、一時間くらいは費やしてしまっていたのです。これはもったいないから、なるべくお天気のあいさつくらいにとどめて早く帰るようにしました。次にお洗濯も、一日中ボツボツと洗っておりますの

を、日を決めまして、週に二回とか三回とか決めてしまいました。立話と洗濯に気をつけるようになりましたら、ほかの家事にも少しずつ注意するようになって、ずいぶん時間が出てきました。ラジオを聞いたり、新聞を読んだり、いろいろできるようになりましたが。

そのころ主人が農村の小学校に転勤し、子どもも大きくなりましたので、私はとても生活に時間の余裕がでてまいりました。そして田舎にきてみてびっくりしたのは、田植えなどの時には朝の四時頃から、おばあさんをはじめ一家総出で、たき火をして田植えをしている、そのそばに子どもがワアーワアーとまっ黒い顔して、綿入れの寝まきのままで泣いている。保育園がなかったからですが、私はなんだか一人で家にいるのがわるいような気がしまして、保母になるにはどうしたらいいかというようなことを、少しずつ勉強しました。そして、なんとか試験のほうも受かり、村の方に話しましたら、ぜひとも、というわけで、それから季節保育を始めまして今年で六年目になります。そんなことをしているうちに、今度は村のお母さん達と大変親しくなりまして、話し合っただけでグループを作り冬になりますと、一緒に活動します。そのグループも、夜も皆さんなかなか忙しくて、集まる時間がまちまちなんです。その時に皆さんのおいでになるまで雑談しながら待つものですから、

その時間がたのしいだんらんの時になります。ふだん道で立ち話をしないので、そういうときに、いろいろ話をためてやっております。ただ、いま一つ悩んでいるのは、どうしても忙しいので、雨降りとか、夜にしか集まらないのです。なんとかこれを休みの日を決めて昼間集まりがもてるようになればと、そういうところに関心をもっています。

猿渡 私は自由時間としましては、ラジオを聞きながらあみものをしたり、裁縫をしたりするのも、のんびりしてよいから自由時間にいられています。けれど一人で誰にもさわられず読書のできる時間がいちばん魅力です。それで、自由時間を出しますやりくりですけれど、私のところでは、夫が自分の寝具の上げおろしはもちろん、自分の部屋の掃除も整理もやってくれますし、子どもも小さい時から自分のことは自分でするという習慣を身につけておられますから、私の場合、自由時間を生みだす際のいちばん大きなさまたげは不意の来客です。

耕 私なりに考えております自由時間は、少し抽象的にありますが、自分の休める時間であり、またバタバタと家事に追われやすい自分を叱り、振り返ってみて、いちばん大切に思う時間でもあり、ともすると眠ってしまいがちな感覚を呼びさまして新しくしてやる時間であると考えております。広い知識を得るために広い勉強が必要だと思ふん

ですけれど、それも自由時間に当てたいと思っております。この自由時間を生みだすのに、私の努めた点は、いちばん最初に、ありきたりのことですけれど、自由時間の必要性ということを、家族特に夫と話し合いました。第二に子どもに自主性を持たせるようにということもあります。が、家族全部の時間割表を作りましてそれを台所にはりつけております。第三に家事の合理化、能率化を図るために、まず一年間の仕事の予定と計画をたてました。それから家具、衣類なんかの徹底的な分類ということを考え、索引帳を作りまして、家族の誰でもが、どこに何があるかということがすぐにわかるようにしてあります。第四に他人の時間を下ロボウしないと共に、自分も姿勢を崩さないようにということを考えました。特に形式的な交際とか、礼儀、無駄話などに時間をとられることがないよう努めました。それから夜はなるべく早く寝て、朝の六時には、サッと起きて仕事ができるように努めております。

それからこれはただ私だけの問題ではありませんが、日本の家の建て方が、普通の家であれば、主人の書斎があり子どもの勉強場があっても、主婦の仕事場とか勉強場がないということ、主婦を休ませる時間とか場所を少なくしているという点で障害があるように思います。

大本 自由時間と申しますのは、さきほどから皆さんお

っしゃいましたように、まったく解放された時間を自由時間としたいのですけれど、私のように家族構成が、五才の子どもを頭に赤ん坊まで三人の子供をもっていますと、家事を百点満点にやっておては、とても自由時間が残らないのです。そこで私は二十四時間の中から、三時間を抜きとったわけです。ちょっと強引なようですが、私の生活には、二重時間というのが非常に多いのです。おっぱいを飲ませながら小さい子どもに童話を話してやったり、お台所しながら幼稚園の子どもの話を聞いてやったり、また来客があつたらつくりや何かをしながら応待する。洗濯とか掃除というものを、午前中になすべきだという既成概念をなくしてしまつて、午前中の静かな時間を、とにかく自分の時間にして、洗濯とか掃除という時間は午後になわしてしまふ。それから忙しい忙しいで、頭の中がゴタゴタいたしますから、台所に黒板をかけて、なんでもメモすることにしてあります。それから買物も保存のきくものとかはまとめて買うようにしております。

そういうようないわば消極的な時間の作りかたというものと一緒に、積極的に、台所の設備の改善とか、住宅の問題とか、家庭の電化というような面も進めてゆきたいと思ひますけれど、それは経済の問題とかからみますので、私人の力ではどうにもなりません。さきほどどなたか自由時

間を託児のほうに使っていらっしやるとおっしゃいました
が、託児というものがもっと普及してゆきますと、私たち
のように乳幼児をかかえた年令層の女性が、自由時間を多
く持てるのじゃないかと思っています。

母の時代と娘の時代

末広 私、この年になりまして、未だに独身で教員をや
っております。母に家事のこと一切やってもらう、据膳の
結構な身分のもので、お前は失格者だぞとおっしゃ
られるかも知れませんが、私のことを少し話させてもら
いたいと思います。

小学校の教員というものは、八時間労働では割り切れな
い、ゴタゴタした仕事を、ふるしき包にひっ下げたり、頭
の中に持って帰ったりで、ずいぶん時間的には制約されて
おります。その中で私自身が自由時間をどう持つかという
ことは、私自身にもいろいろ問題があるわけです。私はた
のしい時間を自由時間だと思っております。自分自身の教
養を高めるといふ面も、家庭のお母さんでは自由時間に入
れられると思いますけれど、私としては、それは仕事のた
めの勉強というふうに思って割り切って、たのしい時間を
自由時間と呼びたいと思うのです。そこでそのたのしむた
めの私の自由時間というのを少し話させていただきます。

ご存じのように、教師には数年前から勤務評定という問題
があります。ここで勤務の是非を論ずるつもりはありません
が、私たちはたとえどんな評定が行なわれようと、やは
り本当の教育がしたいと願い、そのためには、お母さんた
ちと手をつながなくてはならないと、しみじみ思ったわけ
です。そのためにお母さんに呼びかけ、そしてグループを
作ったのです。そしてそこで、お母さんたちの集まりを重
ねてゆくうちに、お母さんたちの本当の生きた言葉や声を
聞くことができました。お母さんたちに本当にいろいろ
と勉強させていただいたのです。私にはどの自由時間より
もいちばん楽しいのが、グループの集まりなんです。次の
楽しみはものを書くということです。自分をみつめるため
の手段として、思い出した時に好きなように、日常生活
の感想などを好きな時間に書いていくわけです。もう一つ
書くことの楽しみの中に、遠くのかたと——仲間とか、
先輩の方たちと——文通する楽しみというのがあるのだ
す。身分違いと思えるような人からご親切な返事をいた
だけ、励まされることもあります。

また私たちのグループに、ちくがき帳というのがありま
す。お母さんたちが思いついたらなんでも書くノートにし
ましょうね、ということ、十人ほどの会員で一ヵ月で回
覧して思い思いに気のついたことなどを書き連ねてゆくわ

けです。また、私は自由時間の一つと思って、楽しみながら子どもの文集を作っています。その他、山や野を歩きながら一人で考えることも楽しみの一つですし、演劇を見ることも大好きです。以上が、大体の私の楽しむための自由時間です。

松尾 おばあちゃんの問題として出してみたいと思います。私のところはいちばん小さい子が高校三年ですから、自分の自由時間というのは、たいへん自由にとれるわけです。おばあちゃんは八十過ぎておりますが、働くことがとても好きで、しょっちゅう中こまこまやってないと気が済まないのです。私が自由時間を持っておりましても、おばあちゃんが何かしておりますと、やはりおばあちゃんに対して遠慮するんですね。私の家庭は非常に円満だと自分もそう思っていますし、人からもそう見られているのですが、それでも家庭内では、そういう問題があるわけです。私の考え方が古いのか、そういうことを話し合いたいと思います。

小池 私は独身で家庭にいる娘ですが、抽象的にいって自由時間が欲しいとみんなが願うのは、仕事からの解放、周囲の人達からの解放と、それから婦人が一個の人間として成長したい、自己の確立という、この二つの面を考えての自由時間がほしいという問題ではないかと思っております。私は四人姉弟の長女で、家庭内も円満ですし、話し合

いの場も十分あって、よそさまから見れば、大変結構なようですが、長女の私には私なりの不服があるわけです。昔の、私の母の時代は、女性が勉強したり、読書をしたりすることを好まなかった時代じゃなかったかと思います。ですから私が丁度いちばん読書をしたい時に、弟妹のお守りなどで、母は私に読書をする時間を十分に与えてくれなかったわけです。

いまでも、読書をしたいたか、そういうところでよく母と摩擦するのですが、そこでまず母の気持を換えてもらい、母の気持とか、私の気持とかを、成長させるために、二年ほど前に私の近所に住むお母様方八人ばかりで、小さいサークルを作りました。そこで家庭の問題とか女性の生きかたの問題について話し合ったわけです。そうすると私としての問題、母としての問題が、個人としての話し合いではなくて、一つの大きな問題として、その会でとり上げられますから、非常に効果がありました。その中で母の気持というものも変えられて行きましたし、私自身母に対して理解してゆかなければならないことも、このサークルから学ぶことができたわけです。母も私と同じようにサークルに参加することになれば、お互いに時間を大切にしますし、母が忙しい時には、私が手伝いをしてサークルに出るようにするといった工合に、家庭内でもお互いに理解し、相

談してゆけるようになりました。

ここで問題として、ぜひ皆さんとお話したいのは、いままです婦人が自主性をもてないということの原因が、何か男性のほうばかりに責任があるようでしたが、私自身がそんなふうにも母との摩擦とか、いろいろなことを経験しましてむしろ、婦人同士がお互いの自主性というものはばんでいるのじゃないかということに気づいたのです。古い社会環境から、若い時に読書をしたり、自分の時間というものを持ち得なかった人たちこそ、次の世代の人たちに対して理解をもつべきだと思うのですが、その時の抑圧というものから、次に生きる人たちにも同じような生活を繰返えさせてきているのじゃないかと思っております。ですからしゅうとと嫁との問題でも、娘と母との問題でも、つきるところは同じじゃないかと思えます。

福島 先ほど松尾さんがおっしゃいましたように、私も母とのことで自由時間を考えてみたのです。私も結婚して一月たち、二月たちするうちに、やはり母との年令の開きが、いろいろな問題を生みだしてきました。これではいけない、必要以上の遠慮や、気がねをなくして、母には母で老後の自由を楽しんでもらい、私も嫁といたしましてのびのびと生活してみたいと思ったのです。

それで毎日の身近かな生活の中で工夫してみました。ま

ず掃除のことですが母はお掃除がとても好きで、最初のころは私がもうこれで切り上げてもいいのじゃないかと思っても、母が満足そうにしませんから、また同じところにぞうきんをあてたり、そんな無駄な時間を費やしてしまいました。それで一週間の掃除予定表を作ってみました。一通りは毎日いたしますけれど、そのあとで一日一カ所だけ入念にやってみるようになりました。そうしますと、ガラスふきとか、タイルみがきとか、目立ちますので、母も喜んでくれ、私もお掃除の時間に区切りがつくようになったわけです。次に午前中に家事労働を終えますと、お昼過ぎはちょっとひまな時間があります。その間に私の好きなことをやってみたいと思いますけれど、母がそばで手もちぶさたにしておりますと、やっぱり気づまりです。ところがある時、母が読書好きのことを知りましたので、図書館で本を借り出しました。それから母が本を読むそばで、私は気がねなく、自分の好きなことができるようになりました。

次に毎日の買物ですけれど、私の住んでおりますのは、町からちょっと離れておりますので、日曜日には一週間分の献立を、大体立てて必らずメモをとって入用なもの、保存のきくものをまとめて買うようにしています。次にラジオですけれど、家にこもりがちの主婦にとりましては、ラ

ジオは唯一の楽しみですし、教養や、知識の吸収源だと思
うのですが、やはり母に気がねをして、聞きたい番組も十
分に聞けない場合が多かったのです。それでニュースや婦
人番組など、ぜひ聞きたい時にだけスイッチを入れるよう
にして、母を誘いました。最初は一緒に聞かなかったの
ですけれど、だんだん聞くようになり、それがまた夜、主人
を交えての懇談にも大きく役立つようになって、うるさい
ものときめていたラジオを母が喜んで聞くようになりまし
た。こんなことは本当に小さいことですけれど、こういう
身近なことから、母と私の生活をとけこませることがで
き、私の自由時間も得られるようになったのです。

個人の自由時間と集団の自由時間

那須 いろいろな体験をうかがったのですが自由時間と
いうことについて重要な定義が出されていると思ったので
す。一つは自由時間というのは、結局意識の問題で、自分
で自覚することから自主性が生れてくるのだという点。そ
れから、自由時間というのは、労働から解放された時間、
人との結びつきから解放された時間でなければならぬとい
う意見があったように思います。これと関連するのです
が、自由時間というのは、家庭のなかで自分のためにもつ
時間だという意見と家庭のそとの集団の中でもつ時間だと

いう二つの意見がありました。それから内容と関連します
けれど、自由時間というのは、一つの創造的な行為のため
の時間でなければならぬという意見と、気楽に楽しめる
時間でなければならぬという二つの意見もあったと思う
のです。こんなふうに自由時間の持ち方や内容についてい
くつかの意味づけが出てきましたが、まず、家庭のなかで
ひとりでもつ時間と家庭をはなれて会合などのなかでもつ
時間とありますが、どちらに自由時間を意義付けたらよい
かという問題から討議に入りましょう。

猿渡 自由時間は単独でもつ時間と集団でもつ時間と、
両方あっていいと思います。グループの例会をもちまして
も、単独の時間の持てない人は、集団でもつ時間だけをや
りくりして出てきます。そうすると、せっかくの例会が、
発言内容のない魅力のないものになってしまいます。私は
両方必要だと思います。

土屋 いまの両方必要だという説に賛成ですけれど、と
にかく自分のための時間を先に生み出すことが先じゃない
かと思うのです。それを持ち寄りまして集団で何か社会の
お役に立てるといような段階に進んでゆくべきだと思います。

那須 小さいお子さんをもっている場合どうなのでしょう
うか。たとえば子どもさんを家においてでも外に出てゆく

ほうがいいのか。それとも先ず自分の家の中でそういう時間をもうつほうがいいのか。

大本 やはり小さい子どもがありますと、むろん集団の時間もとりますが、単独の自由時間というほうがパーセンテージが多くなります。

田村 私の場合は、社宅街で、皆さんそれぞれ勤務時間が違うという関係から、よその家に話しに行くということより、まず自分の家での自由時間がいちばん先です。

谷津 私は、自由時間というものは、単独集団にかかわらず、その人が楽しみをもって、その人が満足していることとなら、全部自由時間として認めてもいいのじゃないかと思ひます。

小池 単独の時間をもつということも、おしゅうとさんがいるとか、という場合は、とりにくいんじゃないかと思ひます。ですから、家族の関係の中で、どうして自由時間を持つかという問題がその前にあるのじゃないかと、思ひます。

国分 私は単独の場合でも、団体の場合も、両方自由にとれるのですけれど、そのどちらを先にするかは、やはり自分自身のその時おかれた状態からの、価値判断に左右されると思ひます。

中沢 私の今までの経験から申しますと、子どもが小さ

くて手がかかる場合には単独のほうで、子どもが大きくなって少しひまが出てきますと、集団のほうに向かつてゆくのじゃないかと思ひます。

山崎 単独も集団も、両方とも必要だと思ひます。単独では学習のできないことが集団では学習できるという効果があります。

松尾 私は、大体昼間を自分の集団の自由時間というものに当てて、夜は子どもたちと一緒に自分も勉強するため、自分の単独の自由時間ということにしております。

末広 子どもが小さい時は単独が多くなって、集団には出にくいというお話がありました。それはとても不幸だと思ひます。小さい子どもがあつても、集団で勉強しなければならぬことがたくさんあるんです。私たちのグループでは、乳飲児を連れて、おしめをもって出てこられるお母さんもいらつしやいます。

生活設計の障害

那須 いろいろ出ましたが、話がいま障害の問題に関連して来ましたから、これに移りましょう。障害があつたほうが、かえって自由時間を持ちたいという意識が出てくるし、努力するということが、これはたしかだと思ひますけれど、障害があり過ぎて、およそ自由時間なんていうものを

全然持てない、あるいは持てないと思ひ込んでいる人たちが相当いるわけですね。主婦の立場で自由時間を持つ場合とか、サークル活動の場合のいちばん大きな障害になっているものは何だと思ひますか。

田村 私のところは、いま争議で有名な三井鉱山なんです。鉱山社宅では、本当の労働者と中間の職員と、それから上層の幹部というふうな生活の層がはっきりと別れていて、サークル運動をはじめしても、上層はすべて自分の思い通りにいってしまふし、中間はどっちつかずでふらふらしているし、下のほうは炭労の炭婦協のような組織ががっちりある、という具合で全然育っていかないんです。自由時間なんか全然受けつけない状態です。

山崎 私達の地方は封建的でした、自由時間があつて、みんな一緒にグループで勉強しましょうとお誘ひしませんが、世間の目——昼間から何かやって遊んでいる——という世間の目を気にして、何か口実をつけて集まるのを避けようとするんです。また家庭内では主人の抵抗がありません。私もどっか出ようとするやめると必らずいわれます。家をあけて外に出て、けっして家庭がマイナスになるようなことはないと話すんですけど、なかなかわかってくれません。だんだん抵抗はうすくはなっておりますけれど、まだ全然ないというわけにはゆかない状態です。

古谷 私が日曜に教会に行きましよう、親しい方にお誘ひしますと、主人が毎日働いて忙しいのに、日曜くらいはサービスしなければいけないから、とおっしゃいます。夫や、子供が協力して、明るいお母さん、理的なお母さんに仕立てるために、自由時間をもっと与えてあげたいいんじじゃないかと思ひます。

福島 映画を見に行く時には、ご近所の奥さん方に対しても「映画に行きます」と平気でいえますが、婦人会とか講演会とか、自分の勉強のためになるような会合にでかけようとする、あの奥さんあんなところに行つて威張っているという目で見られるので抵抗を感じるといふことがあります。

那須 夫に理解がないということが盛んにいわれますが、夫側から申しますと、夫としては会社がひけて家に帰る途中がいちばんの自由時間だ、という調査の結果がでております。ということは、結局いまの男性にとっては、特に都市の場合ですが、職場がいちばん楽しみになりつつあるわけです。家庭とか、自分の住んでいる周囲には楽しみはなくなつてきているわけです。家庭に魅力がなくなつてきているということ、これは問題にしていいたいと思うのです。主婦の楽しみとも関連させて。

榎 私は男性の味方に立つほうなんです。私は夫を大事

にしたいと思います。主婦は家におりましたら、自由時間も持てますけれど、夫はお勤めの時間は、働きであり、その時に生産をしているのですから、帰ってくる夫にとって家庭が楽しい場所であるように努めております。それで夫に対する私のサービスというとへんですけれど、夫に対する私の思いやりと、子どもに対する思いやりの面のバランスをとって、夫にも不満がないように、子どもにも不満がないように努力しております。特に欲求不満ということがいらいらする気持ちにつながって、それがいちばん不幸な状態だということは、私もときどき思い知らされていますので、その欲求不満のしわよせがなるべく、男性の負担にならないよう、思いやりということと共に、家庭の仕事の面では、私が精出して能率をあげるようにしております。お互いに幸せになるためには、やはり男性を、男性の本能、本性というものを理解し、男性にもまた私たちの、人間として成長したいという意欲を理解してもらうことが大いに必要なことではないかと思ひます。

中沢 私もしまご意見には賛成です。私は夫にとって家庭が楽しい憩いの場所であるようにと思って、日曜日などには二、三年前から、私も一緒に暮るんかやって、楽しんでおります。

那須 いまのお話はいいですね。つまり今までの日本の

家庭には、夫婦で楽しむ工夫が足りなかったと思うんです。ですからお勤めの人は自分を回復する場所を外に求めます。これは主婦の場合も同じだと思いますが、いつも同じ場所ですと、自分というものを回復できないから、一たんそういう集団から離れて、自分を回復したいと思うことがあります。男性側として、そういう家庭を楽しくする工夫をぜひやっていただきたいと思ひます。

谷津 私は自分も勤めを持ったことがありますし、割り合い男性と接する機会も多かったものですから、お酒もいただくんです。土曜日には二人で晩酌やるんです。暮もするんですよ。そのほかまず男のするようなことはたいてい私もするんです。ですから、夫と一緒に楽しむことはできるんですが、やはり私に対する魅力以外に、外で求めたいという男性的な本能はあると思うのですよ。いかがでしょう。

那須 現在の日本の主婦は、自分の時間をもてないくらいに家の中の仕事に追い回されているという状態ですから夫以外の男性を異性としてみるだけの余裕がないのじゃないかと思ひます。これがもう少し時間と経済に余裕が出てきたら、夫をもう少し客観的に見られるのじゃないでしょうか。そうなれば、女性も男性と同じで、一概に、そういうことが、男性だけの特権だとはいえないんじゃないかと

思うのですが……。

末広―私の知っている新婚早々の奥さんで、こんな奥さんがあるんです。ご主人がとても勉強家で本を買ってきて夜勉強するんです。ところが奥さんは、私のことをかまってくれないと不満なんです。激しい時には、電気を消してご主人の読書を妨げる。私が男性から本を取上げられたり電気消されたりしたら腹が立つと思うんです。だからやはりお互いに奥さんも、ご主人も干渉しない、自由時間、それは本当に単独の個人の時間がなければならぬとその話を聞いて痛感しました。

松尾 お互いの自由時間を干渉しないようにということですが、私の主人は頭を使う仕事なものですから、帰ってきますと、固い本を全然読まないんです。子どもから何か質問された時に、それでは頼りないと思うんです。男の人にも、もう少し勉強してもらいたい。

神 そのご主人の勉強してほしいということで、私もそれを感じるんですけれどね。やっぱり主人は疲れて帰ってくるんですから、主人に勉強せいというよりも、家庭で勉強できる主婦が、本なり、ラジオなりでたくさん入ってくる知識を、逆に話し合い、教えてあげるようにしたらいいと思います。

奥宮 いまの主人と主婦の問題でも、私は外で主人が不

満を発散するのも、やはりその時は発散してきて、いい状態で家に帰ってきたいという気持ちだと思うんです。ですから、自由時間というものも、そういう明日のための励みになるような、そのために自由時間というものを使いたいと思います。

那須 奥宮さんの発言は、自由時間の楽しみの場合にしても、それが現在だけの楽しみというか、その場だけの楽しみじゃなくて、やはり未来に対する、将来への準備というか、そういった意味のあるものでなければ、本当の楽しみにならない、そういう意味でしょうね。夫婦の問題に少し焦点を合せすぎたように思いますから、ここで話をもどしましょう。

家庭婦人には、男性にも、職業婦人にもできない子どもを育てるといふ重要な仕事があるのですが、この育児という面からの障害、いまの自由時間の問題とも結びつけて、何かご意見ありませんか。

猿渡 やはり子どもを立派に育てて社会に送り出すことが、家庭婦人の一番大きな勤めだということになるでしょうね。

小池 私子どもの立場として……。子どもは母親が立派に育てる育てるとおっしゃいますが、子どもはやはり父を通して、母を通して育ち、将来家庭に入った場合は、自分

の父や母の影響が大きいと思います。ですから子どものほうからいえば、まず父や母が、いま生きている世界で立派に生活していただきたいわけです。

国分 ただいまの小池さんのご意見と同感です。父母がしっかり自分というものをもって、そしてその中で伸びようとしてゐる姿を子どもがつかんでくれたならばいいでしょう。よい環境において放任できるということが私の持論です。

末広 さきほど私は、お母さんの勉強というものは、乳飲児が大きくなってからでは間に合わないということをしりました。というのは子どもが大きくなって時代に取り残されない若々しい母、話せる母になってももらいたいということです。だからそのためにも、育児をしながらも自由時間をもって、教養のために、趣味のために、そういった広い豊かなお母さんになってもらいたいです。

大本 さきほど家事労働などを主人にしわよせしないとおっしゃいましたけれど、私のように小さい子どもがたくさんおりますと、どうしても夫の協力なくしてはとても自分の時間なんか生み出せないんです。協力してもらっていいと思うんです。そして自分自身が伸びていて、自分が老いた時にも、ちゃんと自分のシンを持っていることができるようになるれば、現在の小さな犠牲はある程度目をつむっていいんじゃないかと思えます。

古谷 夫の協力ということですが、例えばグループなんかに出たいと思って、子どもに「あんたこれ、手伝ってちょうだいな」というと「男の子にそんなことさせるんじゃない、それは女の仕事だ」という前近代的な主人もいらっしゃると思うんです。ですから、男性のそういった古い考え方を啓もうする必要があると思います。

神 だいぶ私の発言が問題になっているらしいんですけど結局は自由時間の使い方とか、自由時間の定義とか、そういうものはその人々によって、その家庭の環境によって、それぞれ違っていいと思います。いちばん大事なことは、それを使ったり考えたりする場合に、音楽的に申しますと、リズムとハーモニーとのバランスがとれるように工夫するということがいちばん大事であって、夫にやらせるとかやらせないとかが問題じゃないと思います。

みんなの力で自由時間を

那須 夫の障害、子どもの障害、いろいろでました。そのほか、外部の障害として、日本人はよく働く人間だ、勤勉だということが、非常に美德といわれ、そのことがかえって主婦などの場合、いつも働いていなければ、なまけものの主婦だというふうにとられ、自由時間というものがなくなってきたという点。もう一つは、いろいろな施設

がないために、自由時間がどうしてもとれないということ、またおたがい訪問時間を考えない時間ドロボウが多いということなど、あるわけですが。それでは、そういう障害のために外にも出られない、あるいは自分の家の中でも、自由時間を持ってない人たちのためには、一体どうすればいいのでしょうか。そういう意識さえもない人たちに対して、どうすれば持たすことができるでしょうか。

小池 自由時間があるというのは、ある程度その人はその家庭の中で自己が確立している人じゃないかと思えます。ですから私たち外部からの働きかけというものも必要ですけれど、まず家庭の中での話し合いをして、その中でお互いの生活を反省したりしてゆくようなことから始めていけば、自然に家庭の中で一人の妻として、母として娘としての自己が確立されるのではないかと思えます。

末広 これは私の父兄の方の入っている会のことですけれど、ある家のおしゅうとさんが、お嫁さんを出さない。外に出したら自分の悪口いうからグループの中には入れないということを開いたので、その会の人たちが、それではその××さんの所で会場を持たしてもらおう、おしゅうとさんに聞いてもらおうというわけで、会をその家に持ったのです。この解決方法のぜひはともかく、外部からの働きかけということの一例によると思います。

中沢 集会のための回覧板を回してもおしゅうとさんが回覧板をみて、お嫁さんにいわないような場合がある。それで私たちは大きな声で「さあ行かんかい」と声をかけるんです。そうすると、あすこの嫁も行ったから、家だけ出さないわけにはいかん、行っていいというわけで、しぶしぶ出してくださる。それから勉強の会というとしりごみする方もいらっしやいますから「今日は雨降ったから、学校の体操場に行って、バレーボールやらんかな」という調子で誘うと勉強のほうはいやでも、そんなことは昔を思いだしてやりたくなるという方もあり、自然に勉強のほうにも入ってきます。初めは勉強、勉強というよりも、楽しいふん囲気で誘い出すことも一つの方法だと思います。

山崎 私のほうの地方には、村念仏といって、毎月一回宿は順回りで、朝の十時頃からお線香を立てまして、大きな珠数を回しながら念仏を唱えて、そのあと雑談をするという行事があります。その雑談がお昼過ぎまで続くのですが、その行事は義理ですから、そういう会合には家に病人があっても、どんなに忙しくても出て行きます。しかし、グループ活動しましょうなんていうと、暇があっても出ていらっしやらないわけです。ですから、私はそのお念仏のあとの雑談の時間を、みんなの話し合いのグループに活用したらいいと思ひまして、その時間に教育映画などを借り

たりして、話し合いのふん囲気をつくり、自由時間のことやら生活のことやらを徐々にその話の場に持ちこむことに成功しております。

田村 貧しくて出られない方もいらっしやいますけれど、私たちのほうは婦人会がありまして、職員住宅の奥さんが四百名ほど会員になっておりますが、札幌あたりから先生がいらして、講習会を開きまして、二十人も集まればいいほうです。そういうことに全然関心がないんですね。自由時間はないわけじゃないんです。お手伝いさんなんかも使っているし、そういう方をどういうふうに会合に引き張り出すかということが問題じゃないかと思っています。

谷津 自由時間のない人に与えるということより、ありながらそれを無意味に過ごしているという人のほうがむずかしいと思います。

那須 ここで、きょうの特別オブザーバーの方に、この会合のいままでの討議について、何かご助言をいただきましたと思います。有権者同盟の小池さんひとつ……。

小池(有権者同盟) いままで皆さんのご発言を伺っておりますので、どれもこれも私が歩んでまいりました道ばかりですので深い感銘を受けました。私は家庭環境は恵まれております。自分が自由時間を持ちたいと思えば、いくらでも持ってたわけです。子どもが小さいうちは自分の時間の

やりくりの工夫をしなければなりませんでしたが、子どもが大きくなりましたして、PTA活動ということに自分と社会とのつながりを見出したわけです。このことについては、今度は外の障害が出たわけです。単純な好奇心やら、中傷などもありましたが、私はこれに対しては実行をもって当るうと思っただけです。家の中は、いつもお客様がいらしても笑われないようにキチンと整理をし、いつも子どもが下着を出したいと思っても出せるように、主人が注服ダンスをあけてもキチンと整理がされているように、食事は自分が帰ってきて、すぐできるように、出かける前に材料を洗っておくとか、いうふうに行いました。そして克服できました。

そうしておりますうちに自由時間が勉強の場から、今度是一種の職業になってしまったわけです。そうなりますと、今度は道などで知っている方に話しかけられましても、時間に拘束されていますから、ゆっくりお相手できません。そんなことが重なるうちに小池というやつはどうも冷たいという評判が出てきたわけです。私はこういう障害をどうして乗り越えようかと考えたのですが、これは結局自分の実行力と実績で、誤解をともなうより仕方がないと思うのです。私のあとに続いてくださるたくさんの方々が社会にでて下さるためには、やはりそういう

ものをぶちこわしてゆかなければならないと思って、じつところえて、一生懸命実行の面でつき破るようにいたしております。

奥(主婦連) 私小さい子どもを持っておりますので、さきほどからのお子さんをお持ちの方の話が、いちいち身に応えるのですけれど、私も好きが高じて仕事になりました、婦人団体の事務局のほうに常勤で出ております。さきほど気がねという問題をおっしゃった方があったのですが、私も勤めていると申しましても、好きで婦人団体のほうに出ているものですから、家のものに非常に気がねをして、日曜日になると、朝から一人で働いて、あれもして、これもしてということばかり考えて、あくせく働くことばかり考えております。お手伝いさんに対する気がねもあるわけです。そういう生活をしておりますが、このころになって、自分は気がねして、大いにやっているつもりでも、家族のものが、それで満足しているかということに疑いをもったわけです。子どもにすれば、やはりふだん家にいないのだから日曜日くらい一緒に楽しんでほしいとか、遊んでほしいという気持があるわけ、ですから、このころは多少のことは目をつぶっても、みんなが一緒に遊びに行こうという時は一緒に外に出ます。

それからもう一つ、私が婦人団体に頭をつっ込んでおり

ますせいでしょうか、今日のお話をうかがっておりますと、自由時間の問題でもいろいろな問題でも、個人の問題をずいぶん皆さん考えていらっしゃるけれど、やはりどなたかおっしゃいましたが、一人では解決できない問題も、まとまって考えれば解決できる問題がたくさんあるのじゃないかというご発言に非常に共感するんです。主婦連合会という団体ができました時の私たちのスローガンが「ブツブツと一人グチ、シワがふえ、グチをいうより主婦の会」というようなことで、最後が「ドンとぶつかり主婦の勝ち」というのですけれど、一人でブツブツグチをいう時間に、ちょっとでも集まってお話し合いをすれば案外いい知恵もわいてくるし、いい考え方も生まれて、家の中でそれを生かすことから、ひいては社会にも広めてゆくこともできると思うのです。自由時間を持たない方もあるし、お子さんをかかえて出られない方もあるし、託児所の問題から、学校の教育の問題など、いろいろな問題を皆さんの結集した力で、ドンとぶつかり主婦の勝ちですから、勝ちとつてゆかれるようにお願いしたいのです。そういうことをもう少し明日の集まりの時にでも、お話し合いをもたれたらと思います。

小森(友の会) 私も皆さんのお話をたいへん感銘深く興味深くうかがっております。私も、二十前後の子どもが

四人いますが、十年前、十五年前は本当に忙しい主婦でした。私も子どもが小さくてもどんなに忙しくても、やはり家の中だけに閉じ込められていることは残念だと思います。私は少しの時間でも、大勢のお友だちの中に入って暮らしたい。やはり自分のためではなくて、世の中のため

に、お役に立つことができるようにというような、そういう気持をずっと持っております。たとえば小さい赤ん坊の時はやはり同じような気持をもっていらっしゃる方に、子どもを預かっていただいて喜び喜んで二時間、三時間を、なんてうれしい時間だろうと思って会合にでかけたようなこともありますし、反対にほかのお子さんをお預かりして、その方を出してあげたということもありました。志を同じくする、意欲をもつ女の人がだんだんふえてくれば、お互いに一人では解決できないことが解決してゆくことができるのです。自由時間の使い方にしても、その障害に対する考え方にしても、やはりそれぞれの環境とか、それまでの考え方の育ちぐあいというようなことによって、いま一様にどうすればよいとはいえないことはできないと思いますが、やはり私たちの気持の持ち方というものが、だんだん高められてゆくにつれて、その時間というものの使い方、実行の方法もだんだんよいものになってくるのだと思います。この婦人週間の標語にもあります「自分のため

に、またみんなの幸せのために」という言葉通り、自己の確立とよい社会を目指して、少しの力でもささげたいという気持が両々相まって、だんだん育ってゆくところに、本当に自由時間のよい使い方が生まれると思います。

(第一日閉会)

人の意見をよく聞こう

那須 昨日四つの班にわかれて、いろんな施設を見学しました懇談会などをしたわけですが、それにつきまして、東京班から順番に感想を述べていただきましたでしょうか。

田村 初めに三鷹の市役所に行きまして、市長さんのご説明で市の保育所施設の見学にまいりました。完備した保育所でほんとうにうらやましいと思って帰ってまいりました。保母さんには、未婚の方を採用しているそうです。一日に六千円ほどかかるそうですが、最高千五百円までが父兄負担になり、あとは市と国から補助が出ているそうです。生後二ヵ月から三才ぐらいまでの赤ちゃんが、朝早くから夜はおそいときで九時ぐらゐまで、衛生的な環境の中に預けられていました。幼児期の、母親の愛情のいちばん必要な時に、そうして離されていることに何か疑問を感じましたが、その他の点ではたいへんうらやましいと思いました。

次に横河電機へまいりました。ここで驚かされたのは、女子の衛生管理ということが立派に完備されていることでした。

次は協同乳業へまいりましたが、オートメーションのために人員がとて少なく、あれではまずまず就職がむずかしくなるんじゃないかと感じました。それから緑町団地へ行きました。そこはよい意味での個人主義の生活をしたくて入って来る方が多いのですが、いざ住んでみると家庭の内部の生活にまで干渉が多すぎて、前に住んでいた町より、かえって生活が繁雑になって困っている方もあるというお話しでした。それから農林省の生活改善技術館へ行きました。生活改良の普及員という方たちが各地方に散らばっていて、受け持ちの地方で何か問題が起きた場合にはその問題をそこへ持ってきて、どういうふうに改良したらいちばんよくなるかという、それをみんなで研究して、解決がつけばそれを地方に持って帰り、それでもまだ解決できないような問題は、専門技術員という方を交えて解決するといったような研究所です。

那須 次に神奈川へいらっしゃった班の方にひとつ。

大本 三菱重工横浜造船所の社宅の主婦の方たちと話し合いましたが、その主婦の方は、生活も保証されていて経済的に恵まれているためか、あんがい時間にたいして意識

が低調なので驚きました。自由時間というのがあるんですかというふうなことを、反対に向こうから聞かれて、びっくりしたようなわけです。また婦人会とか、いろいろなグループができていますが、ぜんぜん横の連絡がないんですね。ですから、集まっても、何を話したらいいんでしょうというような工合でテーマが見つからない、自分たちにたいして自己の目ざめがないように見受けられました。

山崎 神奈川県の勤労婦人会館も見学しました。働く婦人のために休養といこいの施設として建てられた百五十人ほどの収容能力を持つりっぱな会館です。そこで勤労大学という講座を開いているそうですが、希望者が少なく、十二、三名ほどこしか集まらないそうです。せっかくよい施設を作り、いろんなことをどんどんやって婦人の向上に務めようと思ってもこれではなんにもならないと思いました。

那須 埼玉班どなたでもどうぞ。

奥宮 埼玉班は、初めに川口の内燃機の鑄物の工場へまいりました。ここで残念だと思いましたが、ここでは労使の関係がうまくいっているので労働組合を作っていないということです。うまくいっていても、そういうものはあったほうがいいんじゃないかと思いました。そこを出ましてから美園村の大門の生活改善クラブの方、婦人会の方とお話し合いをいたしました。生活改善クラブの方は大体

三十戸のうち半分、十六戸ぐらい加入していて、年間の事業計画を立ててやるそうです。その計画の中にはほんとうに自分たちの生活に直結したこと、料理の研究、ワラぶとの作り方、メートル法の講習、染色とか、一年の行事で盆踊りとか新年宴会ということも入っております。ずいぶんこれはいい会だと思いました。私はそのの方々のお話を聞いていて感じたことは、ここは東京に近いせいもあって、とても意識とか文化とかいう面では、そうとう程度が高いいんじゃないかと思いました。考え方もずいぶん深いしなさることもほんとうに地についていて、上すべりの感じがあります。そうしていちばん最後に、農家のお嫁に来る人がない、そういう問題はこういうふうにしたらいいいでしょうかと悩みを訴えられていました。

その次は盆栽村へまいりました。私は生活に時間割をといて、一分もむだにすまいというような時間割を立ててみたりして、生活してきたんですけれども、ここで何百年もかかったという盆栽を見まして、何か自分たちの考えていたことがとてもこせこせしていたような感じを受けて、長い長い年代の大きな世界というものを見なおすような感じがいたしました。それから、次に片倉の靴下の工場に行きました。全くオートメーション化されていて、工場の中は清潔ですし、厚生設備も行き届いていますし、何とい

うか、すばらしくて、ほんとうにうらやましいような気がいたしました。

小池 生活改善クラブのほうの農家の方たちとお話して私が住んでいる中都市の生活と比較して強く感じましたことは、生活改善クラブの皆さんが手をつないで、特に生活改善に効果をあげた理由は、自分たちに間接的なものよりも、まず直接的な効果をあげるもの、特に農村の場合は食生活をとり上げたということだと思います。それからもう一つ、都市と農村と比べた場合に、農村の方が割合に生活改善とかいふような婦人の結集とかに、抵抗がたぐさんという原因は、それは生活構造が似ているという点にあるんじゃないかと思います。都市の場合は、サラリーマンもあり商家もありというふうで、生活構造がそれぞれに違いますから、それだけにサークルなどを作る場合には、どういふところから結びついたらいいかということが大きな壁になっています。それをぜひこの婦人会議の中で話し合っていたきたいのです。

古谷 私、美園村の改善クラブの会誌の最初にあった信条が私の心に残ったんです。それは「不平や不満はだれだってある。しかしながら新しい心構え、身をもって職責に準ずるところに発達と進歩の楽しみがある。人の意見を

よく聞いて、よいところを取り入れてみな一人一人が発表する機会を持つ」という信条です。

那須 それでは最後に千葉班の方どなたでも。

国分 まず千葉火力発電所にまいりました。一日の出力が六十万キロワットという大きな火力発電所ですが、オートメーションによって、従業員が三十人か四十人ぐらいですんでしまうということで、日本の就職難ということを考へさせられました。

次に登戸（ノブト）の生活協同組合の方とお話し合いをしました。まず会を始めた動機としまして、戦後の物資不足、物価高を、お台所をあずかる主婦の立場として何とかしたいということから始まって、非常にむずかしい商売の経営であるのに、女の手で非常な難関を突破して今日まで続いているそうです。需要状況を見ますと、今組合員は六百人ぐらいになっていて、月額千円ぐらい、多い方は五千円も六千円も買っている方もあります。次の農業技術研究所というところでは牛、馬、綿羊などの人工受精ということについて、説明を聞きました。

土屋 生協の経営のことですが、組合長さんが月に四千円、幹事が二千五百円、理事の方が一年を通して二千円の報酬で、一日おきに半日ずつ奉仕なすっていらっしゃるそうです。この組合員の奉仕の上に経営が成り立っていると

いうことは、もっともよく考えなきゃいけないことだと思います。

自由時間と暮しの相違

那須 見学の感想はこのくらいにしまして、一昨日のテーマを、もう少し発展させていきましょう。それじゃあ復習の意味で一昨日問題になった点や意見をまとめてみます。

自由時間に対する考え方は、いろいろ述べられたのですが、その中で大きく分かれた意見がありました。一つは自分一人で持つ時間として自由時間を考えていかなきゃいけない。自分を反省するといいますが、自分自身を向上させていくという、そういう時間を作るべきだ、それが自由時間の本来の意味だ。こういう考え方です。それから集団の中で、いろんな会合の中で自分の自由時間を作っていく、それを生かしていく、そのほうが——集団の中で作っていくほうが、ほんとうの自由時間の作り方だ。こういう二つの考え方がありまして、それについていろいろ意見がかわされました。

それから二番目には、自由時間をどうして作ったかというところ。これについては、皆さんは生活技術のほうでいろいろすばらしい知恵を出してくださいましたが、その生活

技術を生かすためには、これまでの既成概念を捨てて、できるだけ計画性をもたすこととか、家族との協力態勢を作ることが強調されていました。たとえば夫には話し合いを通じて子どもには自主性を養うようにしむけ、老人には自由時間の楽しみを教えてあげる。そういうふうなことから家族の協力を得て、自由時間を獲得することだったと思います。また、前後しましたが、計画性の点では、自由時間の天引きですね。最初からきめておいて、そうしてその時間をとるようにする。それから生活の中で自分の目標を立ててやらなければならぬ。その日暮らしてない生活から、おのずから自由時間が生まれてくるんだという、こういう意見です。また、自由時間を作る工夫にはご近所との交際、おつき合いがあるという注目すべき発言がありました。あまり立ち話とか噂話というようなもので時間を費やさないようにして、簡素化していかなければならないということでした。これは次の三番目の問題と関連いたしますが、現在の主婦の境遇のなかで自由時間を作るうえに何がいちばん障害となっているかという問題です。まず最初に世間の思わくがあります。ひまを作ると世間の人は、あの人は働かない怠け者だという。おしゃべりを早く切り上げると、あの人は冷たい人間だというように、世間が自由時間を拘束しているんです。その次に意見ですが、育児は非

常に時間をとるので、育児時間をできるだけ合理化して、自由時間を作っていくかなければならない。その次は、主婦の独立した部屋がないこと。自分で自由時間をもとうとしても、独立した部屋がないから、どうしても妨害されてしまう。それから次に来客ですね。お客様がしょっちゅう見えるので、他人のために自分の時間をどろぼうされる。次が、しゅうとさんと一緒に住んでいる家庭では、どうしてもしゅうとさんに対する遠慮、気がねがあるから、それができるだけなくする工夫をしなければならぬ。最後に団体の仕事の過重、これはいくつもの団体にたくさん役を持たされ、重複して、自由時間がなくなってくる。団体に参加するということは自由時間のようだけれども、幾つもの団体に自分が関係していくと、今度は拘束されてしまう。まあ大体以上のようなことが、問題として出され、考えられたわけですが、何といっても家庭にいる主婦は自由時間に恵まれておりますから、どうしてもその自由時間をいかに有効に使うかというの方が、やはり大切なテーマになると思いますので、それを一つ皆さんで討議したいと思います。いかがです……。

小池 家庭の主婦が、自由時間というものに対しての意識を、どの程度持っているかという問題だろうと思うのです。だからその点について、なぜ意識を持たないのか、そ

の辺の、家庭内でのもっと複雑な問題が——生活時間、自由時間を考える場合の問題がまだあると思うのですが。

那須 それではなぜ主婦が自由時間を自覚できないのかという問題から入りましょう。

末広 私のグループが発足したときは、自分は本を読んだことがないし、字も書いたことがない、だから集まって何かいうとバカだということがすぐわかる。だから集まって話をするのはいやだというので、なかなか集まらなかったわけです。劣等感といいますが、無意味な劣等意識の問題です。

土屋 婦人週間のテーマになってから、はじめて皆さんもこのことを考えたんじゃないかと思うんですけれども、その前に生活時間なんてことを考えておられたでしょう。忙しさになれてしまって、こういうものだ、これが当りまえだというふうに思い込んで疑わなかったんじゃないかと思うのですけれども。

田村 私の場合、結婚後十三年になりますけれども、ほとんど十一年ぐらいは忙しい忙しいで過ごしていたんです。一昨年でしたでしょうか、ちょっと故障がありましたので、お母さんのからだがいちばん大事だ、みんなでこれから協力して楽にさせてやらないかという話し合いになりました、それから私にも自分という観念が出てくるように

なりました。ですから生活時間というものの意識が出はじめたのは、今から二年ぐらい前なんです。

大本 意識のない方をどういうふうにしたらよいかということは、馬を水ぎわに連れて行っても飲まないのはどうしようもないのと同じで、どうしようもないと思います。

奥宮 子供の教育ということから、相当たくさんの方が意識を持ち始めてきています。子供が学校に上がるようになってから、PTAとかに出てみて、自分というものがいかに視野が狭いかわかってくる。それからそういう時間を生み出してないということに疑問を持ち出して考え始めます。

末広 ある婦人会議で意識の問題は経済が先だというふうなことが問題になりました。農村では、ぎりぎり最低の暮らしをしているから、自由時間なんてとんでもない、もっと豊かになれば、自由時間というものも持てるんじゃないかという意見と、日本中の貧しい暮らしをしている者が豊かになるまで待っていたら、とても間に合わない、だからぎりぎりの暮らしの中にも、何とか自由時間は自分の心がけしだいで作れるはずだというふうな意見と出ました。

弾力のある自由時間

那須 自由時間の意識の問題、これは非常に重要な問題

ですけれども、それだけだと抽象的になるから、使い方と結びつけながら考えていきましよう。それから経済の問題も重要な問題だと思ふのです。私、皆さんに、自分のためにだけ使うお金が、月にどのくらいあるかと思つて聞いてみたんですが、六百円ぐらいの人が非常に多いです。一ヵ月六百円で何ができますか？主婦が、せっかく自由時間を作り出しても、自分の六百円ベースでは何もできない。結局編物をしたりしても、お金をとるための拘束された時間になりかねない。ほんとうの自由時間の使い方というところをよく考えていただきたいと思ひますけれども、現在、皆さんどういふふうにお使いになっているか、それをお聞かせ願ひましようか。

福島 私は一昨日もお話ししましたように主人と主人の母との三人暮らしでございますから、主人が出勤いたしましたあとは、ぜんぜんしゅうとと二人暮らしで、一時は切実に自由時間がほしいと願ひました。そして、しゅうとに気がねなく自由時間を持つために、しゅうとの趣味と歩調を合わせることに努めました。そして、それに自分も興味をもてるようになりましてから、今はしゅうとと一緒に楽しく有効に時間を使っています。

小池 家庭から解放された違ったふん囲気の中で自分というものを見つめるということ——結局それはサークルに

なるんですけれども、娘時代でなければ学ぶことのできないものがサークルの中にはたくさんあるんじゃないかと思ふのです。そういったことを学ぶために、私は自由時間はサークルに出て行つて視野を広げていく、そのサークルに出るための勉強、それは読書になるんですけれども、そういうものを自由時間に当てたいと思ひます。

松尾 私自分一人での自由時間というのは、もっぱら読書でして、集団の中での自由時間は、月一回のグループの例会と、公民館講座というので習ひ覚えしました騰写技術を生かしまして、文化団体の騰写印刷やら、娘たち同級生の文集の編集発行を楽しくやっております。

末広 私自由時間をどうするかということとは、初めに話しましたが、主に読書とものを書くということに使っております。

大本 私自由時間といっても子どもが小さいものですが、とにかく本を読んだり書いたり、考えたりというようなことは子どもが寝しずまってからの九時以後にやり、昼間の三時間の自由時間は、子どもが成長した後、豊富にありあまる自由時間が得られるときのことを考えて洋裁の勉強を続けております。

那須 家庭のそとの会合はどういう種類の会合に出られますか。

大本 私のほうに新生活グループという、会社の組織の従業員の主婦が手をつなぐという大きなグループがありますから、その会合と、それから仏教に入ってますので、月二回の仏教の会に出かけます。

柳 私は自由時間は合計三時間半持っております。そのうち一時間半は読書、二時間を詩を作ることをやっております。二時間の詩を作る時間には、少しがんばって詩集でも出したいという念願をもっておりますものですから、いい詩を少しでもよけい作ろうと思って、現在進行中です。会合のほうには婦人のグループと近代詩のグループに出席するのですけれども、それは自由時間には入っておりません。

猿渡 私午前中の一時間は新聞を読みます。午後は三時間ありますが、そのうちの一時間は夕食のあとの一家の団らんの時間で、あと二時間は雑誌と単行本を読んでいます。会合は月一回のグループ会に出ます。

中沢 私は自由時間を子どもも主人も入らない昼間一人だけの楽しむ時間ということで、読書やら、歌やら、オルガンやらいろんなことをいたします。

奥宮 私一週間のうちで必ずしていることというのは、グループに属してお役をいただいているので、そのために一日半ぐらい。それに子ども会、託児ですけれども、それに一日。お天気がよければテニスを一時間か二時間し

ます。それが大体一週間のうちでまわっていることです。

古谷 私の自由時間はお昼から三時までの三時間です。一カ月の会合をメモしてありますから、PTAとか集会のないときはゆっくりラジオを聞きながら、縫いものをしたり読書したりしています。それから、投書婦人みたいですが、自分の意見を投書したり、自分がどこまでも自分の意思を示せるかということを勉強しております。

土屋 私は長女がオルガンとピアノに行ってますので、一人分の月謝で二人習おうというわけで、一緒に行ってます。そして帰って来て、娘と練習したり、楽しんでおります。また近所の人たちと、週に一度の集まりを持ちまして、手芸を持ち寄りしています。それからひまな顔をしていますと、六年生の子どもが相撲をしようといえますから、相撲をやっております。(笑声)

山崎 私の場合は子ども一人東京に出して勉強させていますので、経済的余裕もないものですから、なるべくお金のかからない勉強の方法としまして、この前もお話ししましたように、自分の聞きたいラジオは、テキストを予約で買いつけて、継続的にそれを聞いています。本も回覧して読んでいます。

国分 いちばんだらしない生活しているのが私ではないかと思えます。ぜんぜん無計画で、行き当たりばったりで

ございます。第一に約束が非常に多いことでございます。私の場合、ほんとうに一日の時間の計画が出せません。外での時間はPTAとか公民館の婦人会、それが役員しておりますので、自由時間というよりも、ある程度押しつけられている時間になるわけですが……。それから個人としては、教養として県社会教育学会というのに出て勉強しています。そのほか週に一度謡曲を習っております。

谷津 私、幼児を抱えておりますが、自分の自由時間として、昨年から三時間ほどもっています。自分の楽しみのためには、読書とか、それからめい想、というとおかしいのですが、蔵王が見えますので、そこに椅子を持ち出して、引っくりかえって蔵王を眺めながらいろいろ考えたり、ノートに書きつづっておいたり、そういうことに使っています。グループというのは現在ないんですけれども、私の家に近所の方に週に一回ぐらい集まっていたいて、皆さんのぐちを聞いたり、たまには私の読んだ本の感想などもお話ししたりいたします。それからお天気の良いときはパドミントンなどもいたします。

田村 私は主人が四交代勤務のために、皆さんのようにきちんとした自由時間がきまりませんが、主人の勤務のために夜中でもちょこちょこ起きなければならぬものですから、疲労を回復するためには、昼間二十分でも三十分で

も横になってます。そのほか、ものを作ることが好きなものですから、洋裁をしたり手芸をしたり、読書をしたりです。土曜日には小学校の母親学級がありますので、午後一時からそれに出席いたします。それから夜主人が家におりますのが一カ月のうちで一週間だけです。そのときは夜の仕事はやめまして、テレビを見たり子どもたちと木琴で合奏したりして楽しく過ごしております。そのほか飼っている、犬の散歩にかけ回ったり私の自由時間はいろいろなことに使っています。

(休憩)

家に閉じこもらずに……

那須 それでは引き続き、討論に入りたいと思います。午前中から聞いておられたオプザーバーの方々に、何か問題があるか聞かせていただきますよう。

小池(有権者同盟) 一昨日から続いて今日の午前中の皆さんの発言をうかがっておりますけれども、全般的にいつて他の社会とのつながりということ、あんまりお考えになっていらっしやらないかと思うのです。この自由時間を何らかの形で社会をよくすること、自分の村づくり、町づくり、国づくりのために役立てていきたいのだという事です。そういう面の建設的な意見を、一つ午後は

うかがわせていただきたいと思ひます。

奥(主婦連) 私も同じことを考えていました。今度のテーマの中に、みんなのしあわせのために、という言葉がありますし、相当の自由時間をお持ちになつていらっしゃる、少しはそういうほうにその時間をさいていただいて、またそういうことをお考えいただいて、またそういうことをお考えいただくようなふん囲氣を、持つて帰つていただきたいと思ひました。

那須 今のご意見は、自分のことや自分の家族のことだけしか考えていないような印象を受けたということだと思ふのですが、それについて、どうでしょうか、もっとほかのグループ活動といひますか、外の社会的な活動と、自分の自由時間とを、どういふふうに結びつけてお使いになろうと考へているのか、こういうことだろうと思ふのですけれど。

福島 オブザーバーの方のお話を聞いて、ほんとうに申しわけないと思ひます。私は現在、大へん自由時間に恵まれておりますが、これといひて社会のための仕事をしておりません。しかし先ころ近所の奥さんと相談いたしまして、農繁期の託児所を開くことを是非実現したいと思ひています。

猿渡 私は外へ出て働くための基礎を家庭においてつち

かつてから、外で活動したいといふふうに思ひます。人がそういうからついでいこうといふのでなく、その判断を自分で持つための勉強をしっかりと、それからもっと外に出たいと思つております。

谷津 さきほども申し上げましたが、社会のためにやりたいことは老人の問題なんですけれども、現在幼児を抱えておりますので、家を外にすることはできません。しかし、これは一例ですが、このあいだ肢体不自由児週間というものがありましたので、そのときラジオや新聞などに投書しましたところ、それを取り上げていただきました。各地のお母さん方からも反響を受けたのです。家にあつてもそういうふうな点で、微力を尽すことができるのだと考へます。

古谷 社会活動といふんですか、間接に私も働いてゐると思ふことは、信仰を通しての問題です。私は教会に行きまして十年になりますけれども、ほんとうに信仰をお持ちくださる方十二、三人で伝導して、とてもいい集まりを作つてゐます。そんなことも私は社会に貢献してゐるんじゃないかと思ひます。

奥宮 社会活動は家庭で基礎を作つてからといふことについてちょっと……。私はうちの中で基礎を作つていくといふことも賛成ですけれども、それだけの一方交通でなく

自分からも外へ出て行つて勉強するというふうにしなれば、進歩がないように思います。自由時間もまたそういうふうに使つてこそいいと思います。

田村 私の場合は、二年ほど前に地域母の会という會員組織の婦人団体の総務をおおせつかりました。そして、ガリ版切りはしなければならぬ、原稿は考えなければならぬで、とても忙しい思いをしました。原稿を書くにはやっぱり勉強しなければならぬ、今から考えますと、それが生活をととても合理化して、少しでも自分の生活時間を生み出すものになったのです。それで今度から会の役員をかわりばんこに、一年ごとに他の方がすることになりました。

土屋 外へ出て社会の役に立つとおっしゃいましたけれども、具体的に申しまして、どんなことが、はたしてほんとうに役に立つことかというのが私にわからない。もっと具体的に、こういうふうな役に立つてほしい、こういうことのほうが役に立つということが、ちょっとわからないのです。

小池 私が母と一緒にやっているお母さん方八人の子どもを守る会というサークルも、初めは自分たちの問題だけを解決するということで始めました。けれども、やっているうちに、自分の子どもさえよければよい、自分の家庭さえ

よければ、というのではいけないということになりました。去年の夏休みでしたが、各家で自分の読んでしまった本などを持ち寄つて、子どもを守る会図書館を作りました。そしてその圖書を、自分たちのサークルだけでなくそれに入っていないうちの子どもさんにも見せようじゃないかというので、週番で図書当番を作つて一週間おきにグループの會員の家の廊下を借りておいてやりました。そうしますと、そんなこともするのかというので、今まであまり関心のなかったお母さんも、子どもを通じてつながりをもつ機会をもったわけです。それからもう一つは、いつもふところナイフをかくしているような警察でも目をつけられている不良少年がいたんです。それで、その子を含めでおしていこうじゃないかということになりました。その子どもはお母さんがいない家庭でしたので、會員の人たちで方ばうへ一緒に連れて行つたりして、そんなことから今出発しております。そういうことも、自分の身近かな小さいことですけれども、社会に少しでも役立てるというような一つの意義のある仕事じゃないかと、私は思っているのです。

国分 私土屋さんにお答えしたいのですが、個人的に意義あることと思ひますのは、こうやってラジオを聞いたり新聞を読んだり、本を読んだりする、そして自分の意見と

か考えていることをたしかめるのもいいんですけども、グループで話し合って、自分の意見を聞きながらたしかめるということが、非常に大切なことじゃないかと思ひます。

那須 子どもを通じての集まり、子どもを通じての地域の結びつきということ、これが婦人の場合に、割合入りやすいということなんです。

中沢 私も子どもを通じてですけども、いなかにいるものだから保育園をやったりなんかして親しくなりまして、お母さん方でバレーボールを始めました。そうしますと、それが面白くて、赤ちゃん抱いてでも、会のある日は皆さん出てきました。そうしたら、いつも子どもがあるからといってどこへも出られないお母さんが、子ども連れてでも気がねなく出られるグループができたからと、とても楽しんでくださるわけです。自分だけの勉強もいいですが、村の人も喜んで一緒に集まり合えるそんな活動も、少しは社会に尽しているのかなあと思っているんです。

榊 私は直接社会に出て働くとか、そういうことは、今のところ時間がないものですからやってないんですけども、詩を作るということにおいて、主に社会の矛盾だとか、政治に対する批判、よい社会にするためのじやまになっているもの、そういうものに目をつけて、それを少しでも

も発表して一人にでも多く訴えたいという気持ちなんです。

山崎 自分が幸福になるためには、やはり私が住んでいる地域全体がよくならないければ、自分も幸福になれないわけですから、私のグループでは、自分たちの教養のためばかりでなく、住んでいる地域の困っている問題を見つけて、その問題に対して、みんなでいろいろ勉強したり、考えあったり、話し合ったりして、それを解決していく方向にもっていくように考えております。

那須 それぞれの地域にはいろいろ問題があるわけですが、それが直接間接に自分の家庭生活に影響があるという自覚がありませんと、なかなか外に出て積極的な活動は期待できないわけですね。

末広 私は、私たちが正しい判断と批判力を身につけることが、ひいてはよい社会を作り、子どものしあわせにもなることだと思います。だからあらゆる機会をとらえて、正しい判断力、批判力というものを身につける勉強をするべきだと思います。

積極的に将来を設計しよう

那須 それでは、主婦としてこれからどういうふうに自由時間を使っていきたいかということをも具体的にお話していただきたいと思います。たとえば主婦にも収入を与

えよ、といった作文もありましたけれど、そういうふうな
ことについてはどうですか。また一日ぐらい家事から完全
に解決され、そうして家族から解放される日を設けてくれ
というふうな声があったし、家族デーを一日よこせという
ふうな声も応募作文の中にありました。そういったことも
ある程度具体的な問題としては、考えられることの一つじ
やないでしょうか。

谷津 自由時間があっても、結局外に出られない絶対的
な第一の条件に経済的な理由があると思うのです。他の問
題は解決の方策もあるでしょうけれども、経済的な問題と
なりますと、お隣り同士では解決できないんですね。婦人
の多くが社会とのつながりを持ってない一つの大きな原因
は、経済的な問題にあると思いますが、いかがでしょう
か。

那須 私のお家庭の話を上上げるのは、なんですけれど
も、家内から二、三回いわれたことがあるんですが、もし
私がいなくなつて、家政婦を雇ったとき、どれだけかかる
かというんです。なるほど、一カ月の費用を考えますと、
これは大へんなことで、普段は主婦というものは収入とい
うものがないから、とかく大切にされないところがあつた
と思うんです。そして、経済的にもゆとりができて自由時
間というものを持てるようになって、それを自分のため

に十分に使えないということ。つまり自由時間をせっかく
作つても、子どものために使っている人が多いですね。非
常に美徳かもしれませぬけれども、そういう傾向が非常に
強いような気がする。主婦の方が、自分が死ぬまでの間の
生活というものを、一応描きまして、それを計画的に考え
ておやりになったことがあるかどうか、これは一度お聞き
したいと思つていたんです。私は老人研究をやっているん
ですけれども、その調査に、養老院を訪ねたんです。そし
ていちばん意外に思つたことは、そこでいちばん生きがい
のなさそうな感じの気の毒な婦人の中で——そこに入つて
いる人はそれだけで不幸ですけれども——その中でもとて
も不幸なように思われる人というのは、前に良妻賢母だつ
た人のほうが多いということです。これは非常に考えさせ
られました。それで私は過去の良妻賢母は、これから変わ
つていなければならぬんじゃないかという印象を強くし
たんですが、こういうふうに、一生の生活設計を考えたと
きに、ことに婦人の場合は、寿命と結婚年令からいえば、
夫よりは後に残るので平均八年から九年ぐらい未亡人暮らし
になるわけです。その意味でも自由時間の使い方をもっと
積極的に考えたいと思うのです。

土屋 経済的に独立できるようになること、年寄りにな
らないうちに、何か一つ打ち込めるものを持つたらいいん

じゃないかと思ひます。

中沢 私は、自由時間を、自分のためにも、人のためにも何かしなければという気持ちで、保母の資格をとり保育所を季節的にやっています。

猿渡 私グループ活動の面に生きがいを見つけているかと思ひます。

榊 私なんか、いつでも新しいことをいいながら、古いカラもあって、その二つが同居していると、自分でも矛盾を感じているんですけれども、生産という時間を作りまして。家族の一月の被服費が、収入から割り出して天引きしてある中から、今日自分で仕立てるのは買えばどれくらいするかという計算をしまして、その差額をとって、それだけ私の修養費に当てています。それで今やっている刺しゅうが月謝千円で、生花が五百円かかるんです。その千五百円はどうしても月謝としていますが、それは自分で洋裁などでかせいだお金ですから、主人にも何の遠慮もしないで習に行けると思ひます。満足してやっています。

末広 榊さんは新しい奥さんだと思ひます。私は収入を得ている立場から申しますと、私の母もそうなんですが、何でも遠慮しいしいやっていて、自分のことには使わない。父の収入は母が全部まかせられながらも、自分では映画会にもよう使わないんです。皆さんのように若い奥さ

んで、いろいろやって勉強してなさる方の、そういう新しい割り切り方といひますか、それはけっこうだと思ひます。

谷津 私は家事労働をいたします。それで夫とよく申しますけれども、うちの仕事を全部するのは、結局そういうふうな榊さんのようにお金をとるためでなくて、食費とか何かの別な経済生活を豊かにするために、結局私が働くんです。理論的には、非常にそういうお金をとることは女のためにはいいことですけれども……。そうありたいけれどもできないというのが、現状だと思ひます。

榊 リーダーの課題が、老後の問題をどう考えるか、どう設計しているかということでしたので、刺しゅう、生け花を習っておけば女に一番手近かでいけばんぶん困気もつかめると思ひ、それをしたいと思ひ、踏み切ったわけなんです。

古谷 私、こちらに出席しますときにつくづく思ひましたことは、ちょうどそのとき、うちの子どもが絶対安静の病氣してしまひ、だれかにお頼みしなければいけないと思ひ、家政婦会に頼みしたら、食べて三百五十円払わなければならぬということ、簡単に來てくれるような人がほしいなあと思ひました。そして、そういう施設があつたらどんなにいいかしらと思ひ、私今ちょっ

と考えているんですが、家政婦会という大きい組織じゃなくて、私のところに本拠を置いて、簡単に人を登録しておいて、会議などに行きたいというような人を助けてやる、登録した方のほうも便宜をはかって上げる、私は管理をする仕事、そういうような仕事を実行に移したいと思っています。

那須 これはイギリスの例なんですけれども、ホーム・ヘルパー・サービスというシステムができておりまして、家庭婦人でひまのある方が、パートタイムで働くのです。そうしてたとえばおばあさんとか、お子さんを一日お守りして上げるといような仕事をします。それが国の社会福祉事業の一つなんです。ですから安いし、仕事する人たちは国家から保障されているわけです。日本では、まだ全然ないんです。

山崎 子どもが大きくなりますと自由時間が大分ありあまってきますけれども、家庭婦人の場合は外に職業を持つということとは大へんむずかしい。それで年とってからできる方法として、娘時代に皆さんお嫁入りの修業としていろんなものをおやりになりますね。そのうちの一つのものを深く突っ込んでしっかり勉強しておけば、一つちゃんとした腕を持っておりますと、ひまができた場合に、家庭で近所の奥さん方、お子さんなど呼んで指導することもできて

内職として好都合だと思うんです。

国分 私たちと六年間一緒にやってきました婦人会の會長さんがこの三月にやめられました。そうしたらこの方は自由時間がありあまって困っているわけです。子どもさんは大学を出てほとんど手がかからない。家庭は不動産もありまして、全然心配することがないんです。この方をみても、私は私も、これまでPTAとか婦人会にばかり出て行っていましたけれども、この際できれば経済面のほうも心掛けたいと思います。私主人のすねかじりしてますから、全然自分の自由にする金がないんですね。自分だけの金、自分で好きなことする金がありません。それである目的を持ちながら、それに経済が伴うような仕事を望んでいるわけです。それからもう一つ老後のことですが、社会保障的なものでなく、私たちでお金を積み立てて、老人ホームというものを作って、気持の合う人がそこで老後を楽しんだらどうだろうということも一方法と思うのですが。

那須 小池さん、娘さんの立場でどうですか。

小池 私の家でも弟にしてみると、長男という立場で、非常に将来の心配をするんです。ぼくもお父さん、お母さんを見たいけれども、自分の奥さんになる人がかわいそうだから、やっぱり別居してるほうがしあわせだと思ってしまうんですね。父も母もだいぶ考え出してきて、それじゃあ

養老院に行こうか（笑声）、ということとで双方了解のもとで、納得の上で五年前から養老年金に入ってもらうことにしました。

那須 松尾さんは最年長者ですか、何か……。

松尾 実は私、点字のこと考えているんです。私目がひどいんです。それで自分がもしメクラになったときに、自分から読書を抜かしたらほんとうにさびしいと思うのです。点字で読めたらいいですから、そういうことも考えているんです。私の周囲に、点字のグループがありますから、経済的な余裕ができましたら、自由時間をその方に使いたいと願っています。

現状 打開の道

那須 皆さん方は自己反省が強すぎて要求するところが少ないように見受けられます。比較的恵まれている方が多くて、反省力が強く教養のおありになることは結構ですけれども、職業婦人に対する要求なり、あるいは内職婦人、漁村、農村の婦人に対して、家庭婦人の立場からひとつこうあってほしい、こうあったほうがいい、自分たちとしてはこういうことを要求したいというようなご意見でも聞かしてください。

田村 私何かの本で見たことがあるんですけど、子

どもを育てる間は女性は職場を離れて家庭に帰ってきて、ある程度子供を育て上げてしまったら、また職場にもどって若い方と交代する。昔先生をした経験があって、今ひまがあっても、ふさがっていてなかなか職場へはいれないという方がいらっしやいますね。そうじゃなくて、交代したらいかがでしょうか。

奥宮 私外へ出たいと思って、半年勉強して、あっちこっち職を探したのですが、大体主人が定収入があって三人子どもがいると、あなたはうちにいて子を見ていたほうがいいでしょう、という理由で断わられてしまいます。私もここまできて、やっぱり自分の本意でない仕事はしたくない、するんだったら自分で満足する仕事をしたいと思うんですけど、時期を持っているわけです。保育所なんかをたくさん建てれば、そこに人が必要でしょう。そういうところにとんどん出て行かれるというようなものがほしいと思います。

小池 主婦でない者が発言するのはおかしいのですけれども、私も以前勤めていたとき、同じ同僚にともかぜぎの人がいて、お互いにいろいろ悩みを聞いたことがあるんですけれども、お勤めのある主婦は家庭に帰りますと、外とのつながりを持つ十分な時間がないんです。まずお勤めしている主婦と家庭の主婦との間につながりをもって、お互

いの気持がよく理解し合つてこそ、いろいろな問題も解決していけるんじゃないかと、私は思うのですけれども。

大本　そういうつながりを持つためには、私は個々の婦人ではどうにもならないのであつて、市とかもつというんな団体で側面援助をされて、そうして家庭の主婦の奉仕したいという気持と、それから勤労婦人の助けを得たい気持とをつなげるような接点を、市とか地域団体で一つ作つてほしいというのが、私たちの部会の希望じゃないかと思うのです。

猿渡　内職をなさる方に申し上げたいのですが、困きゅうからのがれるため内職するのは、社会保障が貧しい日本ではしょうがないと思いますけれども、今のうちにいろいろな便利なものが出てくると、暮らしの中の何かがほしいから内職するという方もあるわけでしょう。お金さえ取れば何でも解決するという考え方はやめなければいけないと思います。

山崎　私のグループでは自由時間をみんなで出し合つて、その時間で何か内職でも、社会的な仕事でも、子どもを預かる仕事でもと話し合ふんですけれども、実際やる場合にいろんな障害が出てくるんですね。個人個人ではいろんな問題が起きると思いますから、それをどういう方法で進めていっていいか、内職する場合にも、私の地方では仕

事が全然ありません。何かいいことがあったら教えていたきたいたいんですが。

那須　オブザーバーの方どうですか、そういったこと団体で実際に解決している例はありませんか。

奥(主婦連)　内職とは違うけれども、グループ活動で、趣味と実益を生かすようなことをやってみてうまくいっている例はあります。たとえばお料理の勉強に通い出した方がグループでもって料理を作つて、それを実費ならば手数料も入れて分けてあげる。そうするとそのとき夕御飯の仕度に頭を使わないで外出できる、ごはんだけ炊いておけばよいというわけです。手芸的な趣味を生かしてアブリケをするとか、鎌倉彫を習つた方はそれを生かして、すぐグループの中でやるとか、そういう趣味と実益を生かしたものが、その地元地元合つたものが出てくると思うのですけれども。

山崎　何か習いたいと思つても足代がかかり、不便なところで習う機会がないし、また勉強の機関がないんです。何かあつてほしいところも、してくださる方もおりませんので、どんな方法で進めていってよいか、暗中模索ですけれども。

小池(有権者同盟)　習いたくても習う方法がないというお話ですけれども、そういう主婦の声を流して、町でも

市でも動かしていった、青年学級なり婦人学級なりをなさって、ご自分たちの望む学科を入れてもらったらいいかでしょう。

山崎 二年前からやりましたが、なかなか実行に移されななんです。

小池（有権者同盟） なぜ実行に移さないかという追求を県の人を呼んで話し合って、今はこういう障害があるが、何年先にはこうなるからということ、トコトンまで筋を通して追求する必要があると思うのです。団体の力、組織の力を使って、みなさんで何か一つの力の盛り上げをお作りになって、絶えず追求、要求をしていったらいいかですか。

中沢 主婦が低調だとは思いますが、さき程の移動会議の報告の中で、三鷹保育所の保母さんは独身の方に限って採用するということがありました。私がっかりしたんです。都立の保育所は三十才以下だとか申しますし、私が自由時間を一生懸命生み出して、骨折って勉強して免状とっても通用しないわけです。これでは免状なんかいただかないほうがいいと思うのです。だからやっぱり主婦というの足も出ない、低調にされちゃうんじゃないかと思うのです。それで勤労関係の方が結婚しても職場を離れられないのは、結局私みたいに家庭をもってしまふと

再び出られないからでしょう。そういう方のために私も子どもさんを預かって、十分に職場で働けるように、役立てたいという気持はあるんですけども……。

末広 私よくいわれることがあるんですよ。末広お前は教師として立つんだったらママさん先生になれ、ママさん先生になってこそ女の先生はほんとうの先生だといわれる。女の先生は熱心でいいといわれますが、私もしみじみ考えました。妻として母として子どもを育てた経験で子どもを教育するのが、いちばん本ものの子どもの教育ができるんじゃないかと。私もあの三鷹の保育所の方針は不賛成です。女はやっぱり自分の子どもを育てたときに、子どもに対する愛情がわいてくるものだと思うのです。

那須 私三鷹保育所を拝見しましたが、市長の方針は今申し上げたように、あそこの保育所は、保母は経験のない人、つまり家庭の経験のない人というんです。その理由は、一度子ども産んだ人は、とかく自分の経験に頼りたがって、自分の経験が一番いいように思っていて科学的にいいとも聞いてくれない。だから、それならば学校出たての若い人、これからという人によってもらったほうがやりやすいということが一つの理由、それからあそこを利用して人々が全部ともかせぎの人です。そしてそれも非常にたくさん応募者がいる中から選ばれているのだということ

すが、年令は零才から三才までですから、ほんとうに小さな赤ちゃんを預かっているわけです。あそこの三鷹市というのはベッド・タウンというか、昼は東京のまん中に通勤して行き、夜、ねぐらとして帰るだけで、地域に対する関心はまずまずないというところです。共かせぎの人は自分たちの必要上要求しているけれど、主婦そのものはあまり関心がないんですね。そういう地域ですから、市長としては、主婦も非常に関心が薄いのならば、むしろ経験のない人がいいんじゃないか、と考えたんじゃないかと思うのです。もう一つは主婦がやっぱり従来の考え方からいくと何か家へ入ってしまうと職業にほんとうに徹し切れないという懸念が一般にあるということ、これはやはり反省しなければならぬ問題だと思います。

しかし、若い結婚前の保母さんが科学的な栄養を与えたり、環境衛生に気をつけさえすればいいというだけでは実はあまり科学的ではありません。つまり母親のこまかいところに配慮の行き届いた情緒的なものが必要なわけです。目に見えないようにすけれども、そういう愛情の与え方というの、これは若い人にはなかなかできないわけです。子どもを育てた経験が全然なくて、学校で習っただけではなかなか出てこないということもあります。それから保育所のあり方として、何でもかんでも保育所を作るという行

き方については、もう少し考える必要があります。保育所にかわるものを主婦の間で考えていかなければならないことがありはしないかと思うのです。たとえば科学的な知識を持っていらっしゃる方が、逆に家庭に安く出張してきてくれるような組織がほしいわけです。また国によっては育児補助費が出るところがあるでしょう。社会にかわって主婦が子どもを育てているんだから、国はとうぜんそれのために労力報酬を支払うというのです。そのくらい子どもを育てるといことは、母の大へんな生産事業です。ですから、もっと社会的に声を大きくして叫んでいいんじゃないかと私感じたのです。

田村 福井のほうでは、普通の家庭の主婦が家庭において三人までは子どもを預かることができる。その場合市が半分補助してくれて、あとは親が補助する。その地方は勤労婦人が非常に多いので、市が補助してそういうふうに行っているというのを聞きましたが、全国各市にも広げてもいいんじゃないかと思うのです。

小池 さきほどわたしたちの部会は低調だというようなことをおっしゃられたそうですけれども、意識を持ってない方たちに気づかせるのは、私たちに課せられた仕事だと思ふのです。ですから、いろいろの機会を逃さずに、家庭の主婦に対して自由時間というものが与えられなかった

ら、生活時間が設計されない。そういう根本的なことさえ気づかないものに気づかせるためには、何らかの形で、発表する機関を通じて発表する、それによって皆さんに気づいてもらう方法があるんじゃないか。私問題が非常にうわすべりに流れていて、それが低調さの原因になっていると思うのです。

家事労働の再認識

那須 働いている婦人から、よくこんなことを聞くんです。家事なんてのはだれでもできますよ、ところが、仕事はできないでしょう、こういうのです。自分で一生職業持っていてやっていけるような人から、そういう発言があるんです。主婦に対して一種のべつ視感をもっている婦人が、職業婦人の中にあるんです。これは大いに皆さんから反ばくあつてしかるべきだと思うのです。

谷津 主婦の仕事は非常に単調ですけれど、それだけでは評価されないと思うのですよ。家計のやりくりもありますし、子どもの問題等の仕事はビジネスではない。ビジネスは与えられた仕事をすればそれでいいけれども、主婦は自分のやり方いかんによっては、子どもの問題など末々まで長く響いていくんじゃないかと思うのです。

奥宮 主婦の仕事だけを考えるべきじゃないと思うので

す。職業婦人が主婦をべつ視するというのは、主婦には、家事業のほかに、自分の仕事と勉強があるべきなのに、それがなからと思うんです。それをちゃんと持っていていれ、それだけ自負を持っていいたいと思います。

古谷 たとえば料理にしましても、勤労者の方が作るのめんどうだからコロッケにするとところを、私たちが家でじっくり自由時間を使って、どういうふうにしたら、おいしい栄養的なものができるかと考える、それは一家の健康管理にもなる。そのようなことが家庭の主婦にはあります。それから子どもを育てる面では、りっぱな日本国民として社会の役に立つ人に育てるということは、ほんとうに大きな力だと思えますから、そこを見ていただいて、それを評価していただきたいと思えます。

末広 職業婦人の私の立場から申しましたら、家事のほかのことはだれでもできる、子どもを育てることは母親として与えられた一番大事なことじゃないかと思うのです。だから私はそれをべつ視するというような、そんなのはだれだってできるというような職業婦人だったら、人間として女として、落第生だと思えます。

山崎 なぜ家庭の主婦の仕事というのは、お料理とか、洗濯というようなことだけでなく、それよりも家庭のつながりというか、子どもを育てる間に、夫と妻と子どもの間

の目に見えない人間関係を育てているんじゃないかと思うのです。それで私は勤労婦人が、あんなことはだれでもできるという、けれども、そういう目に見えない効果があるというのを、もっともっと主婦の方が、十分自負を持っていいんじゃないかと私は思います。

榊 家事労働というものに対して、もっともっと日本人が、大切なものである、りっぱな職業であるという意識をもちたいと思います。家事労働をべっ視したり、それが軽い仕事のように思ってもらいたくないんです。

谷津 私団地に住んでおりますが、私の隣りの奥さんとも三才になる子どもさんを月三千円で預かっています。育児ということはお金ではかえられない問題があります。預かりましたお母さんは毎日お世話していれば、その子に対して愛情もわきますが、そのことの苦勞を買ってくれない。勤労婦人の方はあまりにも金銭的に割り切って考えるばかりでなく、その愛情の点も考えていただきたいと思うのです。

榊 もう一つ勤労婦人に反発するんですけれども、人間としてよほどのばかりでない限り、何でもさあやろうと思えば、だれでもやれると思うのです。だから、初めは、それはなれなければ能率が上がらないのは当然ですが、勤労婦人のやっていることは私らでもやれると思います。

末広 ともかせぎのだんなを見た場合ですが、そのだん

なさまの多くは奥さんの給料に甘えてというか、お酒を飲んだり、パチンコをするとか、そういうったほうにずいぶんお金を使ってしまうのです。それであんがい家庭がうまくいったないのが多いので、私はともかせぎに内心疑問を持っています。そういう点を考えると、勤労婦人のほうもよく反省しなければと思います。

那須 だいぶ勤労婦人に対する反ばくが出ましたが、次に自由時間を生み出すばあいには、グループや職業のような家庭の外で使う時間を作るのに、どういうものが障害になっているか、一般の主婦の立場になってもう一度考えてみたらどうか。

松尾 私自身はおしゅうとさんの問題であまり苦勞しておりませんが、ここにこない方で、しゅうとさんの関係でずいぶん苦勞している方がいらっしやると思うのです。そういう例をあげていただいて、考えてみたらどうかと思います。

小池 今しゅうとさんの問題が出たんですけれども、私たちのサークルで生活時間の問題を話し合ったとき、しゅうとさんのいる家庭の方たちはしゅうとさんがいないときは非常に家事のはかどりが早いというんです。家にいるときは、何となく背中のおしゅうとさんの目が光っているような感じで、仕事のはかどらない、という声が出た

んです。それならおしゅうとさんが若いときに、やっぱり自由時間を欲しくなかったかといえ、そうじゃないと思う。それなのに、それをしゅうとさんが若いときに得られなかったから、次の世代、若いお嫁さんに対しても持たせる必要はないとあやまって考えているのじゃないかと思うんです。

那須 つまりおしゅうとさん方を見ていると、自分が最初に結婚してきた当時の経験では、自由時間を求めているんだけれども、結局はあきらめてきたわけですね。そういう生活のスタイルを、今度は次のお嫁さんにも求めるという伝統的な時間の使い方の問題でしようね。それだけでなくて、もっとほかにもあるんじゃないでしょうか。つまり主婦の時間を支配したり、拘束したりするものがほかにあるんじゃないでしょうか。

榊 私は、しゅうとを抱えてないもんですから、そういう問題はないですけど、昨日美園村の生活改善クラブを見まして感じましたけれども、横のつながりが欠けている、どうして自由時間の集団性、社会性を考えないのかと考えました。あれだけしつかりつかめるようになりませんでした、やはり自由時間を社会的、集団的に手をつないでやろうということにしたら、嫁たちはだいぶ解放されると思います。

小池 榊さんの意見とは、私反対に感じていたんです。あれだけ食生活につながりをもってやるようになるまでには、相当抵抗があつたと思うんです。それをそこまで続けてきたというのは、いろいろな抵抗に対して、ガッチリとした横のつながりがあったものと思います。きつと新しい問題にもぶつかっても、社会に目を向けるような方向にもっていかれると思うのです。対しゅうとの問題も、夫に対しての問題も、ただいままでのような争いだったら、ほんとうにお互いに傷つけるだけです。生活を高めるための争い、しあわせのための争いだったら、あえて抵抗はすべきだろうと思います。

田村 私、しゅうとを持てているんですけれども、結婚十三年で、自由時間を持てるようになったのは十一年目くらいからやっとです。自分の時間を持つためには、少し神経を太くもってね、おしゅうとさんの気持をくんだりしないで、自分も自由に生きようという意識を持たなければならぬんじゃないかと思うのです。

榊 オブザーバーの方にぜひお願いしたいのは、さきほどから出てますが、主婦がだんだん余暇が出てまいりましたので勤めたいんです。自由時間を社会的な面でつながりを持ちたいと希望があるようですけれども、その場合になんとか学歴が問題になってしまつてうまくゆかない。せ

っかくの自由時間が自分を高めるということにならないのです。そういう話し合える具体的なコースがありましたら、パートタイム制の託児所、家政婦会というものを早く作っていただいて、採用はまず主婦の余暇のある方を、年令とか学歴に関係なしに使っていただきたいということをお願いしたいと思います。

小池(オブザーバー) 今の要求よくわかりました。私も一生懸命努力いたします。しかし、その前に皆さん方もぜひ職業について話し合いをされて、だれかがしてくれるだろうというようなことではだめなんで、それが皆さんが伸びていく壁になっているらうと思います。自分がいろいろラジオを聞いたり、本を読んで勉強して、疑問ができたらご自分でやるんです。こんなこといったら笑われやしないかという遠慮はいらないと思うのです。どこへでも出て行って、こういう問題はどうしたらよいか、方法はどうしたらよいかとお聞きになってもいいじゃないかと思いません。勤労婦人との間の話し合いも、その土地の婦人少年室に出かけていってぜひ話し合いをしたいから、それをいうにはどうしたらいいかと、相談をお持ちになって、積極的にしていただきたいと思えます。消極的になっておきますと、また婦人が家庭の中に閉じ込めるというようなことにもなりかねないと思えます。ぜひ皆さん方勉強なさっ

て、積極的にやっていたいて疑問はどんどん出していただきたいのです。解決の道はだれかがしてくれるというのではなく、自分たちが手をつないで、力を大きくして解決していくんだというように一つお願いしたいと思えます。

那須 大へん長い間熱心に討議していただきましたことをリーダーとしてお礼申し上げます。

(第一部会終り)

第二部会

出席者

特別
オブ
ザ
バー
ー

青森 岩手 山形 千葉 東京 石川 福岡 静岡 大坂 岡山 香川 高知 長崎 熊本 鹿児島

リーダー

[illegible]

各々の職場の中で

西 まず職業と自己紹介をお願いします。

黒滝 私は中学の教師をしております。主人は公務員で、三才半の女の子がひとりあります。

山本 私は電話交換手です。

井上 電話機の部品を作っている工場に勤務しています。

関口 東京のYWCAの中の、働いている女の子たちが、グループ活動をしてありますが、そのグループのお世話をしております。

新里 東京都労働局に勤めております。仕事の内容は働いている方々、特に労働組合に属している方たちを相手にして、私たちが働く上での職業意識の向上とか勤労意欲、そういう意識の問題について、非常に基礎的な労働法規の啓発的な仕事をしております。

田中 専売公社に勤めておりまして、仕事の内容は一般のタイピストと、それから専売公社の金沢支局の事務、文書を一切取り扱っております。組合としては副婦人部長をやっております。

高間 千人ほど従業員がおります織物会社の寄宿舎の舎監を兼ねて、裁縫の教師と若い方の生活指導に当たっております。

ります。

大野木 日清紡績の島田工場に勤めております。仕事の内容は肉体的な仕事ではなくて、ある程度監督的な立場です。

野口 大阪の府立図書館の司書をしております。仕事の内容は、リファレンス・ライブラリアンという参考事務の仕事にあたっております。

北波 県生活改良普及員をしております。主人も同じように官庁職員でありまして、子どもはおられません。

三野 高松高等裁判所人事課任用係、組合の婦人部のお世話をしております。戦争未亡人です。

山崎 中学校の教員をやっております。子どもがないので、高校二年生の弟を養子にしております。

角田 幼稚園に勤めておりまして、毎日楽しく遊んでおります。

上村 職員組合の書記ということで、先端をいくと思われる職場で働いておりますが、いろいろと矛盾もあります。渡辺 現在は福祉事務所の仕事をしております。子どもは大学二年の子どもが一人おります。十八年前に戦争未亡人になりました。

西 これで皆さんの自己紹介が終ったんですが、お聞きの通りいろいろの方が集まっていच्छしやるわけです。

かし働いていらっしゃるということでは皆さん同じこと
で、どうぞそういうご自分のご職業とか年令とか環境とか
にあまりこだわらないで、広い立場で勤労婦人の問題、特
に今回のテーマである時間の問題というのをこれからお
話し合いたいと思います。この部会は勤労婦
人の部会ですから、その勤労という問題について、時間と
いう角度から見てどういう勤務をしていらっしゃるかとい
うことをちょっとかがってみましょうか。

野口 図書館は朝の九時から夜の九時まで開いているの
で、二交代で夜勤があります。夜勤と普通勤務とは違っ
てくるんじゃないかと思いますが、夜勤をやっているとい
やる方の自由時間をお聞きしたいと思います。

山本 私は交換手をしておりますが、年中無休で一分も
休めないわけです。八交代で、いちばん早いのは七時、いち
ばんおそいのは四時出勤、その場合は次の朝八時までとい
う宿直です。それが八日にいっぺんあるんです。私たちの
労働条件という問題に入りますと、七時間のときもありま
すし、また九時間働かなければならないときもあるわけ
です。休憩時間は二時間につき十五分ということになってい
ますが、宿直の場合ですと、四時から出勤して、だいたい
五時から七時までの間に夕食三十分とります。そうして着
台しますと寝るまで休憩時間がない。二時に休む人は八時

間ぶっ通しで着くことになります。休まなかった時間を睡
眠時間としてとるわけです。

田中 私は八時間勤務でとても正常で、残業請求なんか
きちんと取れますし、いい条件です。

西 学校の先生の場合なんかどうでしょう。

山崎 皆さんのお仕事は機械がとまれば休憩ですが、私
なんかの場合ですと、四六時中、肉体的な労働でなくて精
神的な労働がいつも頭の中にあるわけです。サボればいく
らでもサボれます。やろうと思えばいくらやっても切りが
ありません。それを自分から進んでどんどんやる人がある。
しかし同じ職場の中で乳児をつれている人などやれない人
もいるわけで、そのところで問題になるわけです。です
から下の低いほうを引き上げる努力ですね。そういうこと
をこの会でうんと話してもらいたいと思うんです。

上村 私は職員組合ですが、組合の仕事というのは突発
的に起きることがしばしばです。勤務時間は八時半から五
時までですが、五時ぐらいになってから事件が起きると、残
らねばなりません。そういう突発的な事件によって、自分の
生活の自由時間がこわされるということがたびたびです。

それからもうひとつ、だいたい二人か三人ぐらいの少人
数の職場の場合、私の職場には三人いますが、三人とも共
かせぎなんです。そのうち二人ともたまたま同じころにお

産して、私は一人残ったんです。お産のときは臨時の人を一人雇うんですが、それでも、労働過剰は必然的にくるわけです。その後も、育児時間とかで、それが二人一緒だものですから、私は一人残って、お昼休み中どこにも出られないんです。人数の少ないところのそういう労働条件ですね。これらを皆さんと一緒に考えていただきたいと思ひます。

北波 生活改良普及員の場合は、逆に休んでいる日曜とか土曜に人の訪問を受けるんです。そのほか夜間勤務じゃないんですが、やはり一人で三千戸以上持っていますと、どうしても各町村から普及所へ負担金もいただいていますし、夜座談会することも多くて、どうしても労働時間が不規則になりがちです。しかし今は話し合ひまして、五時に一応打ち切ることにしています。

角田 私は幼稚園の子どもたちの愛情に引きずられて十二時間労働をやっています。それは、夏はいかの時期で、いか干しで忙しいんです。船も早く入ってくるので、六時ごろになるし子どもたちは幼稚園に追ひやられてしまう。私もせっかく園児が大ぜい来ているのに出てやらなきやかわいそうだ。戸をあけて、積木でも出してやろうというので、愛情にひかされて六時に出るんです。夕方夏五時というのはまだ早いでしょう。だから、みんな忙しくして

いるのに早く帰ると、なんとなく体裁が悪いんです。しかし、私の子どもが私の帰宅の遅いということと関連して問題を起しかけたので、人の子どもも大事だけれど、まず自分の子どもを立派に育てなくてはならないと思って、極力早く帰宅するよう努めています。

山崎 私の妹は保母でちょうど角田さんと同じですが、二人で話すんですが働く婦人が協同して助け合わなきゃならないのに、そのしわ寄せを保母にもっていくということでは、やっぱり考えなきゃいけないことだ……。

黒滝 今年は中学三年生を受け持っているんで、表向きはしないことになっているんですが、高校の受験準備が放課後あるんです。それは三時半から六時ごろまでやるものですから、多いときは十時間勤務ぐらいになりました。

西 井上さんのところはオートメーション化された機械の作業のようですが、きちんと時間で終えて、あとは自由時間というふうに簡単にいきますか。

井上 現在はあんまり忙しくないけれども、去年の十二月ごろ、すごく忙しかったんです。休みが二回ぐらいしかなく、一日二時間ぐらい残業があったんです。そういうときはうちへ帰って寝るだけの生活でした。忙しくないときは、きちんと八時間勤務です。

野口 私は図書館へ来るまでは府の社会教育課で仕事を

してたんです。仕事をかかえているときですと日曜、祭日、土曜の午後は全部つぶれるんです。そのかわり代休をとればいいんですが、そのときの仕事とか跡始末が残ってなかなかとれない状態です。これではからだもだめになるし、自分自身もだめになるので、図書館のほうへかわったんです。

高間 私のほうは中小企業関係のお仕事なものですから、とっても問題がたくさんあります。これはその一つですが、勤務時間は、朝五時から午後一時四十五分までの早出と、午後一時四十五分から晩の十時半までの午後出の二部交代になっております。織物会社ですから、家庭持ちと独身者が半々ぐらいです。それで、家庭持ちの人は早出のときは五時から一時半までうちを留守にするわけです。遅出の時は晩は十時半まで仕事して、それからおふろに入って、うちに帰るのがどんなに早くても十一時過ぎになるんですね。夜おそいのはこたえるから、食事時間四十五分を、三十分でたくさんだ、それだけ早く帰りたいというので、三年ほど前から私たちの会社だけ食事時間を三十分にして、夜十時におしまいにしてたんです。そうしたら再々基準局からしかられまして、食事時間はどうしても四十五分とらなきゃいけないというので、また十時半におしまいということになったんです。食事のあと十五分休むこと

は法規の点においていいかもしれませんが、夜の時間がいちばんこたえるから、なんとかして十時のおしまいしてくれないかと声をそろえていつていますが、基準局がやましいからそれができない。なんとかできないものかしらと思うんです。

大野木 私は実際に現場に働く一人として、高間さんの意見がピンピンと自分の胸にひびくんです。私は十年間紡績で二交替制でやってきておりますが、事務をやっている人のように、疲れたからといって自分のからだをかばって大事にするなんてことはできないですね。幼稚園の保母さんなんか人間を扱う仕事だから、精神はすごく使うことはわかりますが、私たちは一歩間違えば生命を落とす場合もある。また、寮生活には家庭の持つ暖かさが少ないというところもあります。

労働時間にかまえる問題

西 関口さんは都会の銀行や会社へお勤めになっている人たちのケーズを知っていると思いますが、労働時間の問題とか、そういったことについて何かお聞きになったことはありませんか。

関口 中小企業のほうでは、八時間労働で六時には帰れることになっていても、課長さんが帰らないと帰れないと

か、人間関係で問題をすぐく持っています。労働時間とあわせてそういう日本人の考え方、人間関係を変えていかなきゃならない。

山崎 私の教え子がたくさん就職しておりますが、私たちのほうの子どもで中小企業ではあってもキリの方の中小の企業へいった教え子の話を聞きますと、相当ひどい様子です。子守りとか、洗濯とか、とにかく自分の自由時間が全然ないんです。そういう労働条件の底辺における問題を取り上げていただきたい。

新里 底辺の問題でなくて悪いんですけど、私自身は労働保護法規をなるべく守るようにしようという、啓発的な仕事をやっているわけです。仕事をやる上に、自主的にいくら仕事をやってもいいわけです。そうしますと、私たちの労働条件としては、自主的にやる仕事までの保障ということはもちろんないわけですから、私がその仕事をやる場合には、かなり自分の犠牲によってやるということが当然要求されてくる。勤労者を相手にする仕事ですから、仕事のあとの時間でいろんな勉強をするとか、職場の問題を話し合うとか、どうしても夜の時間がおそくなって、そういうことを積極的にやれば私自身の労働条件が悪くなる。また、すぐ「女はだめだ」などといわれるのですが、これは男の偏見であるとしても、やはりこの言葉を実行の面で、

はね返していきたいと思うんです。私と接触している中小企業の労働組合の人たちはそういう意欲もありますが、私たちが相手にしたいのは、意欲のない、何のために働いているかわからないほど酷使されている人たちに働きかけたわけです。ですから、全然意欲のない人たちの間に入っていきたいという仕事を持っているだけに、のれんに腕押し的なこともあり、自分自身で労働条件を悪くしていくということがあるわけです。

北波 調査によりますと職場の労働条件ということを知ろうとしない女性が多に多いということがわかりました。いつになったら自分の月給が上がるのか、生理休暇がどういうふうに取れるのか、知ろうとしない人がずいぶんある。まず私たち自身の学習をやらないで、労働条件労働条件と叫んでも片手落ちだという気がして悩んでおります。特にお金の問題なんかですと、使ってもらっているだけでも有りがたい、お金の問題をいったら恥ずかしいとか、職場の封建性が私たち勤めを持つ女性の仕事を押えているという感じがするんです。

西 いままで、特に時間という問題の角度から見た、それぞれ職場の現状、並びに皆さん以外の職場の実態というようなことを話していただきましたが、それについて私感じましたことは、だいたい十五人の方たちが持ってい

つしやる問題を分けてみたときに、いわゆるプロフェッショナルな専門職、すなわち公務員、学校の先生とか、保母さんとか、図書館の司書さんとか、寮母さんとか、そういう専門職の方と、全くそうでない事務系統、あるいは現場関係の方と、二つに分かれています。それで、おのづから労働条件の問題も、違った考え方があると思う。たとえば新里さんのおっしゃった、われわれは確かに労働条件、特に時間の問題で労働基準法を守りたいと思うけれども、しかし自分の仕事の目的からすればそれもある程度やむを得ないじゃないかというような疑問と矛盾にであってられる。早くいえば人さんのためになる仕事である、比較的自分の才能を使わなければならない仕事であるために、当然課せられた八時間とか九時間とかいわないで、十時間になるかもしれない。それは仕方ないことではないだろうかとということ、しかし仕方ないといってしまうといいだらうかということとのこの両面の問題。それからもっと深刻な問題としては経済的な問題があって、どうしても自分が他のしわ寄せを引き受けなきゃならない。ほかの働くお母さんたちの貧しさのために、自分が保母さんをして子どもさんをあずかってあげなきゃならないという社会的な大きな問題が未解決だということ。これは非常に大きな問題で時間の問題では解決できないかと思いますが、それを

お出しになっていらっしゃる。それから一方いわゆる現場とか、事務系統の人は、たとえばもっと職場の中のおゆるる古い人間関係——上役に気がおずるとか、自分自身が卑屈になって、おのづから労働時間を延長しているという問題、これをどう解決していったらいいか。もう一つは、紡績とかあるいは電話の交換というものが二交代、三交代というときには深夜業をやる、こういう労働条件の中で基準法で定められた労働時間を確保し、その中で自分たちが健康を維持しているんじゃないあわせを求めていくことが可能かどうかという問題。だいたいこれくらいの問題が出されたわけですが、ここで少し具体的なことについておうかがいしたいのは、有給休暇の問題です。これもやはりたいへん自由時間というものに関連が深いので、いったい有給休暇というようなものが、どうなっているのかということ、その使い方とか、いろいろ問題があると思いますけれども。

画餅にしたいくない有給休暇

高間 私たちのような中小企業に勤める婦人たちは有給休暇なんか使用している人は半数にも満たないと思うんです。そういう点いつも矛盾を感じて、声を大きくして叫んできましたけれども、弱い女の人たちばかりなものですから、とても大工場のようなわけにはいきません。

新里 有給休暇ですが、私たちの場合も、とっている人の場合よりもとらない人のほうが多いのが事実です。それから私が仕事で接している中小企業の労働者の方々についても同じようなことがいえるんです。なぜとらないかという、それはいざというときのために、不時のできごとがあった場合のためにとっておく、それでとらないというんです。私はそういう場合は、別に方法を考えるべきだと思ふんですが、そういうことでとっておかなければ現在の非常にか、酷な労働条件の中で、フリーに休む日をとることができないから、そういった不時の災害のためにとっておくという考え方が強いということをちょっといいたいんです。

井上 私たちの会社は正規に入った人の場合は、最初一年間は四日、二年目は二日ふえて、あとは一日だけ毎年ふえていくんです。しかし、その休暇を使っている人はあまりない。あまり使うとボーナスのときなんか影響するといふんですが……。

黒滝 教員の場合は、公務員並みに二十日間有給休暇があるんですが、私の方の学校でもほとんど利用されてない。どちらかといえば、家事とか育児という突発的な事件で、女の先生が有給休暇を利用しますが、それも二十日のうちせいぜい一週間とればいいというような現状です。ま

た、産前産後の休暇は、産前六週間、産後六週間になっているようですが、私の経験からして産後六週間で教壇に立つのは無理だと思うのです。あと一週間か二週間延ばしていただきたいと思います。

山崎 補足いたします。いまお話が出ましたが、教員でも産前産後八週間とっているとところは、東京ともう一県あるはずですが。農村なんかへいくと、先生は日のあるうちに帰っていいな、しかも夏休みも冬休みもある、ちいさいばっばいっておいて、休みがあつて先生っていい仕事だ（笑声）といわれるんですが、ずいぶんひどいと思うんです。特に子どもの教育というのは、普通の仕事とは内容が違ふということをおわけていただきたいんです。

北波 私の友だちに変なケースがあつたんです。それは産前四十二日間の休暇をとっておりましたが、四十二日たつても生れなかつたんです。おなかは大きいし、いつ生まれるかわからんような状態で延びた。それでどうしたらいいかと相談したところが、上司が有給休暇を使ってくさい、二十日も全部、といったのだそうです。二十日以上とると昇給に係るんです。ところが職組でその話を調べたら、当然そういうのは有給休暇でなくて産前の休暇でとつていいということがわかりました。そういう間違つたことで黙っていれば、そのまま昇給までストップするとい

うような問題があったわけですから。

西 大きなところで、有給休暇をとろうとするまいと、ボーナスにも関係ない。それがちゃんと保障されているわけですが、実際の場合にそれが非常にでたらめになってきつたあるという現状があるので、そうになると、当然の権利が破壊されるので、ちょっとその現状について、一通りお聞きしたわけです。今日は一通りとにかく問題を出していただきます。先ほどまで一応労働条件の中のさまざまな問題を出しあいましたが、それが自由時間をいかに圧迫しているかということが、ほぼおわかりになったと思うんです。今度は勤務から一応解かれたあとの生活時間がどういうふうになっているか、それは最後に討議いたします。そしてそれにちょっと触れていただきます。どうか、家事、育児というふうな具体的な問題になってきますが、どうでしょうか。

関口 私の仕事は特殊なもので、ある意味では一般にあてはまらないんですが、昼間働いて、夜私たちのグループ活動に参加しているわけですから、どうしてもグループが六時から九時ごろまでになるわけです。それを終ってから私は帰りますので、私の場合十時とか十一時近くになる。そうしますと、家で女の子がおそく帰るといふことはたいへんいけないということで、毎日毎日母が迎えにくるわけ

です。私は自分の仕事がおもしろいし、すごく意義があると思つて、やればやるほど母のそういう自由時間を犯すわけなんです。それと同じように、そういうグループ活動で自分が勉強したり、会社のサークルに入つて勉強したりして、自分自身はいいかもしれないけれども、家庭とか、そういう人たちの生活時間を圧迫しているのじゃないか、そういう問題があるんじゃないかと思ひます。

渡辺 私の娘は高校時代に自治会の役員をしていて、演劇をやっていたんです。そのために授業が終りまして、夜のけいこがあると、娘ですから「母ちゃん迎えにきてね」といつて出かけます。そのとき子どもを迎えにくことが私の時間を阻害されるというふうには私は思わなかった。子どもはそうして伸びていくし、私が迎えにくるということとで安心しておいこができるわけですね。そういうことを私が援助するということで、子どもを通してやはり社会活動をしているのだという気持でした。

勤務と、家事と、グループと

西 いま渡辺さんの解釈と関口さんの疑問とずれちやつたところがあるんですが、関口さんのおっしゃるのは娘が勤務時間以外に、家事ではない、何かグループ活動とかをする、それが自分いがいの人々の自由時間を圧迫するという

心配があるということが出されたわけですが、それは同時に身分をも何かの形で圧迫されてくるというふうな、自由時間がそこで阻害されるという問題にも発展してくるわけですね。そういう娘の立場でもひとつの問題がある。

黒滝 私は、夫との自由時間のことを申し上げたいと思います。私は帰りますと、子どもが小さいものですから、とにかく子どもと一時間半ぐらい、多いときは二時間ぐらい本を読んだり積木をしたりして遊ぶわけです。その間夕食があります、夕食後私の夫は二十分か三十分テレビを見たり、新聞を読んだりして書斎に引込んでしまうわけです。もっと私たち三人で一緒にその日のお話をしたり、なんかしたいらしいんですが、目標を持って勉強しているものですから、十二時までには書斎に入ります。私は私で、ある同人雑誌に関係しているものですから、その原稿を書いたりするのに時間が必要なわけです。そうすると私は締め切りが迫る、主人はそっと本を読みたいというので、子どもがいつまでも遊んでいるとどうしたらいいかというようなことにぶっかることがしばしばあるんです。そこで、最近はお父さんの目的を先にやってしまおう、それから私の番にしよう、それはいつになるかわかりませんが、とにかく順番をきめましようというところで落ちつきました。結婚して七、八年になったところですが、そういう状態で

す。

山本 私たちの職場は一週間のうち夜勤めるのが三日ぐらいです。遠くから来ている人などは、勤務時間や交通機関の関係で、三日も四日も宿直室に泊りこみということもあるんです。家事はだんなさままかせとか、お子さんのいらっしゃる方なんか、とっても心配で仕事してられないというんですね。それから勤務が毎日違うものですから、勤務時間後にいろんな活動をしたいと思って呼びかけても、帰っている方もいますし、休みの方もいますしまだ勤めている方もいる。七十名も八十名いても、会があるとき十名ぐらいしか集まらない現状です。仕事以外の時間は全くばらばらだというわけです。

北波 私は結婚する前、ひとつだけ条件を出したんです。もちろん経済的な面もあるんですが、職業を持たして欲しいという条件を私は出したんです。そうしましたら、今度は往復四時間もかかるところへ転勤になったんです。朝、夫の寝顔を見て、食膳を用意して、大急ぎで汽車の中で口紅引いたりすることがたびたびですし、帰りもおそくなる。よそでは夕飯をすませて団らんをしているときに買物かこをぶらさげて歩く始末で、家庭生活というよりも合宿舎ですね。私が疲れて帰ってきてみると、夫も帰っていない、すべて私の肩にしてお寄せられる、そういうこと

で自由時間どころじゃなかったんです。そういった問題で、非常に大きな夢を持っていったのが結婚してすぐこわされてしまいました。

山崎 私はいま主人と二人ですが、たいへん恵まれていると思っております。その前はしゅうと、しゅうとめ、中風のおじいさん、弟、妹、嫁にいった妹、そういう大家族でたいへんだった。しかも職場ではよい職業婦人となりたし、家庭ではよき母であり、よき妻であり、よき嫁でありたい、そういうことを、無理なんです。が欲ばってがんばっていたんです。辛いこともありました。今は二人きりです。私、元気でやっていますか」というときがあるんです。帰りがおそいし、先に出ていってしまうというふうな、すれ違いですね、そういうこともあります。私は結婚十年目ですが、できるときにものごくサービスして愛情を惜しみなく注ぎます。それ以外のときは主婦として、妻としてのぎりぎりの線のところまでしかやらないんです。それから労働協約じやありませんが、主人と協約を結ぶ。それも事務的な結びじやなくて、また男だから女だからというんじやなくて、私も主人の立場を思うし、主人も私の立場を思ってお互いにかばい合うという話し合いでやっています。

新里 私も共かせぎをしていて、二人とも十一時ごろま

で帰らないというようなことがあるわけですね。そうしますと私のうちは父親と子どもと家事のお手伝いさんがいるわけですが、それぞればらばらの状態で私たちの帰りを待っているわけです。仕事のあるときには、ほとんど食事は外でしますから、年よりと子どもとお手伝いと三人で食べるわけですね、そうすると好みも違うし、統制をとる人がいないので家庭というふん囲気なんかない、たいへんさびしい食事をするらしいんです。私は帰ってきて「お帰りなさい」という言葉を聞くまで、一日の家庭でのふん囲気に対しての心配がとけないわけです。夫もやはりたいへん疲れて帰ってくるので、今日のできごとを話をすることもできません。私自身そういうことでいろいろ満たされないわけです。いくら夫を教育しても最低どうしても必要なレクリエーションの時間まではく奪して、そうして「私に協力しなさい」ということはいえない、そういうぎりぎりのところにあるんです。

田中 しゅうとの話ですが、私に母がおりましたころは自由時間がなかった。とっても潔癖な母で、掃除一つにしても非常にうるさかったんです。丁寧に丁寧にやらなきゃだめなんです。私は子どもができてからはだいたい子どもにかまけて、できないところはできないといいますが、それでもやはり昔の考え方というのは、一朝一夕になおらな

いですね。自分は新しいことをしたいと思うけれども、できないばかりに時間をものすごく浪費するという話があります。

角田 私は全く悪い嫁で、嫁にきて十五年になります。一度もお針仕事をしたことがない、全部母がやりま。お金がないのですから、五円とか十円とかわずかなお金で、上手におばあちゃんを操縦しております。夫の操縦法というのは皆さんご存じだけでも、おしゅうとさんの操縦法になると不勉強じゃないかしらと考えております。もう少し若い人がユーモアをもってやっていったら、そんな問題は解決するんじゃないでしょうか。それから、私は子どもの問題で悩んでいます。子どものPTAにいてやれないんです。小さい子はともて来てもらいたがりますですが、いってやれないのですから、通知をもらって「今日はPTAだけでも、どうせ来られないものね」と先にあきらめを持ってしま。なんとなく劣等感を持っています。ですね。私はそれをどうしようかしら、とそれが悩みです。できるならば私はお勤めをやめたいと思いますが、それがいまのところできない。どうしたら子どもをほんとに抱きしめて、自分の愛している愛情を示すことができるだろうか……どうして家庭に母がいらないというさびしさを補ってやるのかと、そんな悩みでいっぱいなんです。

大野木 角田さんに対して、ぜひ子どもの立場でいいと思います。私は母が勤めております。父は中学のとき亡くなって、経済的にはすごく苦労しました。母が仕事を持っていた、子どもを愛する時間がないと思うのは観念的な考え方、気持ちがありさえすれば、子どもというのはお母さんの生き方を見ていれば、絶対に今後間違った道を進むことはないと思います。私の母は洋裁や和裁ができませんから、日雇い夫をやりながら私たち四人を育ててくれました。母のためならどんなことでもしよう、母が生きている限り私たちは間違った道を歩んじやいけない、という考え方がこびりついています。

子どもは欲しいが……

西 実際自分自身のために自由時間を自主的に設計しようと思っても、家事、育児の問題、ことに育児の問題が非常に出ておりますが、どれくらい自分を圧迫しているか、という実情をお話いたしたいと思っています。

野口 私の場合特殊な仕事ですから自分で勉強しないと仕事についていけない。特に男の人についていけないという性質上、やはり家へ帰って家事ばかりに追われていないで、勉強したいんです。それで、私の場合、家事というものを一週間に集中してやる方法をとっております。一週間

分の食料を一度に買い込み、一週間ごとの献立表を作って台所にぶらさげておきます。市場へいく時間がはぶけるし考える時間もはぶけて、三時間程自分の好きなものを読んでいられる時間が生まれました。

北波 私も献立表を作って、家事の時間をけじめをつけております。もうひとつの考え方の点で私もそうですが、遊んでいるときは仕事のことを考えて、仕事をしているときには遊ぶことを考える矛盾が主婦には多い。それを外人のように節度をもって、遊ぶときは一生懸命遊べるような主婦になりたいし、仕事をするときには仕事をするようになりきるといふ節度のある生活が、私たちの生活を高めていくのではないかと思うのですが……。

上村 私はいま読書会に入ってグループ活動をやっていますが、それに行く時間がいまのところは、夫の理解もあって非常にスムーズにしております。それでいいまいちばん悩んでいるのは子どもができてからもこういうグループ活動はできていくかということです。私がグループ活動をしておりますのは、共かせぎをしておりますと、自分で作り出す余暇時間がどうしても限度があるわけです。それで限度のある余暇時間を最も有効に使うには、グループの中での話し合いに一人のひとが問題を一つもっていけば、六人集まれば六つの問題が体験できるわけで、私は余暇時間

の使い方というのは、グループ活動を通して非常に有意義じゃないかというので、グループ活動はどんなことがあってもやっていきたいと思っています。子どもができたら昼間はどうかお手伝いを雇ってできるとしても、夜の時間は主人に子守をさせてまていくのは他人の余暇時間を束縛するという点で悩んで、子どもを生めなくなっているんです。

西 共かせぎの方も大ぜいいらっしゃいますが、子どもはほしいけれども作れないという、たいへん深刻な問題が出ているわけですが、子どもをお持ちになっていらっしゃる方たちの中にも、もうまるっきり十分な解決方法を持っているとは限らなくて、問題があるわけです。そういう中での問題点の解決はまた後ほど話し合うことにしまして、ちょっとそういったヒントみたいなことがおありならば……

新里 これは勤労婦人の大切な問題として、ぜひ考えていただきたいと思うんですが、私たちが職場で、女の人には大事な仕事を与えられない、女はだめだといわれるひとつの大切なポイントが、女はいつやめるかわからないということだと思ふんです。そして、そのことの大きな要因になっているのが、育児の問題だと思ふんです。この問題が社会的に解決されれば、私は一生働いていても悔いなしと思ふんです。今後子どもを持ちたいと思ふ方も、いま持って

いらっしゃる方も、その問題を積極的に考えていったら、婦人労働者の地位は確保できるんじゃないかと思えます。

田中 私のグループでデパートにお勤の方の話なんです。が、一つの職場を五人で受け持っている。そのうちの二人は子どもがいてその人たちは時間がくるとお乳をのませにいく。すると職場は残された三人がやらなければならぬ。したがって手うすになる。そこでやはり万引きなんかがかなりあるそうです。そうすると結局あの人がお乳を飲ましているから、そこまで目が届かなかったと、なんというか、女同士でなすり合いをして、自分たちで職場を狭くしている。結局その人たちは育児時間は与えられています。が、高いお金を出して近所に預けたりして、自分のお乳が出て飲ませにいく時間がないので、お乳をとめて職場についているというような状態です。

自由時間の設計

西 それでは次に、睡眠時間を含めての自由時間がどれくらいあるか……、皆さんのそういう青写真を少し出してくださいませんか。

北波 私は睡眠時間は六時間から七時間は必ずとるよう努力しております。自由時間は主人と一緒に楽しめるレクエーションということで、暮を家庭の中に取り入れてお

りますが、多いときで三時間ぐらいです。

野口 私は睡眠時間は六時間半以上とったことがありません。家事はほとんどご飯こしらえしかいたしませんから、八時から十二時までを自由時間として自分の時間にしていきます。そして土曜が半どんのときには、土曜の午後はグループ活動、組合活動に当てていますし、日曜日は勉強なものにもいたしませんで、好きな音楽を聞いたりして教養の時間として費やしています。

井上 私は勤務終了後六時から八時半まで洋裁にしております。そして、睡眠時間はだいたい十二時から七時まで、朝の支度はあまり手伝いません。洋裁から帰ってきてそれから新聞を見たり、ちょっと本を読んだりするとすぐ十二時になります。

大野木 私は全然自分の時間がなくて、朝起きて寝るだけだったという例を申し上げます。早番の場合は四時二十分起床、仕事は五時から始まって一時半に終わるんです。その間七時半から八時十五分まで四十五分間朝食、それ以後一時半まで全然休憩がないんです。一時半に終わってからお昼のご飯をいただく。終わりましたら自分の部屋へ帰って、八人が一せいにお部屋の掃除をする。それから学校が五時から七時までありますから、その掃除のあと五時までの二時間ぐらいが束縛されない時間になるわけです。私

はその間に自分の好きなことをやっております。しかし、この間に組合の会合などもあって、それに出席している自分のやろうと思っていた事もできなくなるとい様なことが、過去においてしばしばありました。集団生活においては、極端にいうと自分の時間がなくなってしまう場合が往々にしてあります。

新里 女の人が集団の生活でもって自由時間を失うということで、東京の会議のときに話題になって注目を浴びたんです。たまたまある人が会社の組合の役員に選ばれた、ところが行動力もあり一生懸命仕事をやるからということ、その人がまた上の役員に選挙され、上部団体にも出されるというようなことで、あらゆる時間が組合活動のために奪われる。そんなことで自由時間が全くなくなってしまう。しまいには自分が何のためにやっているのかわからない。何か自分自身の生活を見出したい、自分の時間をつかんで教養のためにやりたい、と思っても、仕事の忙しさに流されて、しまいには流されっぱなしになっているというような悩みを訴えた方があります。

渡辺 自由時間を阻害されるということですが、私たち家庭に帰って、計画を立ててなにかしようと考えるけれども、不時の客のために、せっかく自分の計画した時間が阻害されるということがあるんです。

三野 私は留守は母がしてくれておりますので、家事は全部やってもらっています。私はほかの会にも関係しておりますので、役所から帰りましても、それをしばらくやりまして、休みますのが十時、朝は六時起床です。

山本 私の睡眠時間は不規則で、あるときは十時間、あるときは五時間、そしてまた朝から晩まで寝るときもあります。というのは夜寝ないで勤めて帰った日は一日中睡眠時間です。その睡眠時間はあるいは自分の自由時間の一つにもなるわけです。平均しますと、私たちの場合、八時間以上寝ているんじゃないかと思えます。また、自由時間というのもたくさんあるんです。勤務の時間によって全く一日あったり、二日続けてあったりするわけです。ですからいままで自由時間なんてことを、改めて考えてみたことがないんです。私たちって自由時間があり過ぎるためにかえって何してきたかわからないというのが結論みたいに出たんです。

田中 私は、親子三人で家にかぎをかけて出かけるんですが、家事はいいさい私がしなきゃならないので、一週間でどういうふうにするか、二年前から計画を立ててきめて、重点的に仕事をするにしています。睡眠時間は、八時間とるように心がけています。八時間とれない場合は七時間ぐらいです。大体、一週間に四時間は自分の自由時

間になります。日曜日はすべて子ども本位の日ですからオミットしてあるんですが。

上村 私は普通の土、日が休みですので、一週間の計画を立てて、土曜日に一週間の家事万端を一応やってしまいい、日曜日は昼寝したり、音楽を聞いたりします。普通の日には、帰りましてから夜九時までは夫との共有時間にして、話し合いとか、ラジオを聞いたりしますが、九時から先はそれぞれの自由時間です。私の睡眠時間は大体六時間から七時間です。

関口 私は恵まれていますので、自由時間は十時間ぐらいです。私は住み込みのいわゆる女中さんの会を持っていますので、その人たちの自由時間について申し上げます。その人たちが、使われているうちの奥さんは、ひまなときは休んでいいとおっしゃって下さるけれど、仕事を見つけて働いたほうが奥さんの氣に入るからというので、一日中ほとんど自由時間がないというんです。それでは、どういうふうにして自由時間を見つけているかといいますと、お使いにいった時、十分ぐらいで終わらして、あと十分ぐらいブラブラして帰ってくる、それが自分の自由時間だというんです。そういう人たちがいるということは考えさせられると思うんです。

西 いろいろ問題が出ましたが、ちょうど特別オプザー

バーの方が見えていらっしゃいますので、とりあえずきょうお聞きになりました範囲で、何かお言葉をいただきましたかと思ひますが。

多田(全労) 私は全労ということではありましたが、全労同盟のほうの専従書記をしており、主として繊維のほうの仕事をしておりますので、そういうところに焦点を置いて、いまうかがったお話の感想を申し上げてみたいと思います。

やはり繊維の場合は、中小企業と大企業では相当大きな開きがあるわけです。大企業の場合は寄宿生活というようなことで、非常に集団生活に伴う制約がありますから、私どものほうで、特に寄宿舎対策部というものを設けて、大企業の寄宿舎生活をしている人たちの集団生活をどうするか、というようなこと、特に自由な時間をとるということについての対策を練っております。寄宿舎集団生活に伴う自由時間の制約というようなことを考えてみると、やっぱり寄宿舎生活の建物の構造というようなことが、非常に大きな影響になるんじゃないか。ご存じのように大企業の場合は、最近ではデラックス寄宿舎なんているのがぼつぼつ出てきていますが、それはごく一部で、戦前の寄宿舎がだいぶ残っていて、そういうところで十五畳に十人も生活しているというのが普通ですね。そういうところから非常に私

たちの婦人の生活というものに対する考え方というか、日本人全般が、やっぱり自分の個人の生活というものに対する考え方が、ちゃんとしたものになっていないんじゃないか。特に紡績の場合ですと、昔ながらの雑居生活というのが、紡績では当然のことになされているところにひとつの問題があると思うんです。そういうふうな生活環境を変えるということから、やはり個人の生活時間の中からできるだけたくさん自由な時間を確保していくということが、ひとつ解決策として考えられるわけです。

大野(総評) 途中でまいりまして恐縮ですが、皆さんのお話を聞いて、私たち労働組合を受け持っている立場で考えられるのは、やはり働く婦人の問題は、いまの資本主義の社会ではどんなにがんばってみても、一人の力では解決できない問題がたくさん出てくると思うんです。そういう問題に対して、やはり集団的な対策というものが考えられない限りは、個人の努力でどうしようもないというのがひとつ出てくると思います。先ほども出しました母性保護——生理休暇とか、産前産後の休暇とかいろいろの問題についても、いまの日本の社会では、時の力関係によって、私たちの働く母性というものが押しつぶされたり、それから守られたりということが出てくると思うんです。そういう点現在の情勢は、非常に働く婦人にとってはかんばしくない

状態が出ているということが、いろいろの統計で現われているわけです。総評は十月、十一月ごろに母体保護月間というのを設けまして、総評加盟の婦人部中心で、そういう働く婦人の母性の問題について浸透する努力をしています。が、やはりなんといっても婦人の力が弱いので、なかなかそこまでいかないということがいえると思います。

西 どうもありがとうございます。今日はほとんど職場の中の時間の問題、それから家庭生活の中の時間、特に育児、家事に費やされる時間の問題、それから家庭だけでなく、独身の方の寄宿舎の中の問題、あるいは勤務時間からはなされた職場の自由時間の中で制約の問題、いろいろ出たわけです。それからそれらを阻害している問題がどういうことであるかということも、自分自身の問題もありまじょうし、それから社会の中に残っているいろんな古いしきたりの問題もありまじょうし、経営者のほうからの利潤追求の問題もありまじょうし、労働基準法の不備というような問題もありまじょうし、いろんな問題が出てきております。十五日にはそういう問題を、少しでもよくしていきたいということに重点を置いて、何らかの解決への道というものにお話し合いを進めていきたいと思っています。

(第一日閉会)

勤労婦人の生きがい

西　きのうは移動会議で、それぞれのところによってだ
いぶニュアンスも違うし、ふん囲気も違っていたと思うん
ですが、これからのお話し合いの何か参考になると思いま
すので、特にお感じになったことがあったら二言、三言お
っしゃっていただけませんか。

高間　私、東京の団地を見ましたが、想像していた以上
にお粗末だったんですが経済的に恵まれているためか、よ
ほど空気を感しました。私たちは経済的に恵まれてない
から、こうして働いているんですが、そのほうが生きがい
があります。

山崎　千葉の登戸生協のことですが、最初犠牲から始ま
ったことが、現在は経済的な裏づけ、正当な労働に対する
報酬を持つべきだという考え方に立っている、それが家庭
婦人ばかりでやられたということに尊敬しました。

西　そういう問題が日本では人情的に解決されていたの
が、もっと合理性をもってきたということね。

三野　労働奉仕からいま一つの企業だということに踏み
切りまして、もちろん家庭を犠牲にした面もありますの
で、理事さん方は手当とか、そういう面できちんと労働に
対する裏づけというものをいま進めているらしいんです。

そういう点ははっきりしてよろしかったと思います。

井上　私たちは東京でしたけれども、いやなことばかり
で、私は結婚したら団地に行きたくないと思いました。

大野木　私は埼玉班に行きましたが、すごくよかったと
思っただけでした。

田中　同じ埼玉なんです、その農村で皆さんがいち
ばん悩むのはいなかへお嫁さんの来てがなというん
です。それを聞いてほんとうに気の毒だと思ったんです。

渡辺　やはり埼玉で、生活改善クラブの方の発言がとて
もきれいごとなんです。お嫁さんが妊娠したとき野良に出
るのは重労働じゃないかという質問が出たんです。

そうしたらおしゅうとめさんが理解を持ってくれるから
というようなことをおっしゃった、ところが私のうしろの
一般の婦人の中からすぐ、それはうそだ、そんなことは許
されないと声が出ました。ほんとうのことは聞かれ
なかったんじゃないかと思えます。

新里　東京のいいところだけ一つ発表したいと思いま

す。三鷹の保育所ですね。私は東京にいてこういうお話は
よく聞いていたんですが、見るチャンスがなかったんで
す。市長さんに会ってその説明を伺ったときに、社会保障
としてこの施設を作ったのではなく、あくまでも勤労婦人
が男子と同等の立場で働けるように作ったのだということ

でほんとうにすばらしいと思っただけです。

西　いろいろと皆さんそれぞれの立場でご感想を得たわけですが、そういう収獲されたものを大事にして、何かの機会に生かしてくださるように、これからの討議の中にもそういったことが参考になると思います。では今日の討議に入る前に、一昨日の問題を整理してみましよう。今年の婦人週間のテーマは「自主的な生活時間の設計のために」ということなんですが、重要なことは、自主的な生活時間を設計するために、はたして自分には自由になる時間がうみ出せているかどうかという問題だともいえます。そこで自分たちの生活の実態はどうであるかということを見つめてみるために、皆さん方にいろいろとおはなしをしていただいたわけです。それによりますと、だいたい次のような問題が出されたとおもいます。一つは勤務時間の問題で、仕事の性質によって、勤務時間が長くなることを余儀なくされているという問題。この仕事の特殊性というのは、特に専門職——学校の先生とか保育さんとかは事務的に割り切れない、そういう専門職が、持っている仕事に対して情熱を感じれば感ずるほど、そしてその意義を十分に果たそうと思えば思うほど、時間というものを事務的に割り切ることができない。これをどうしたらいいだろうかということ。それから次にはいわゆる上役とか同僚との関係、ある

いは世間の目というような関係で、よく思われないというふうな気持が働く、それがまた成績の問題にもつながっていくという職場の中のひとつの空気、あるいは人間関係がどうしても勤務時間を合理的にさせないひとつの問題を出している。それから次に不規則な時間というものがあるんですが、二交替とか三交替とか夜おそくまで働かなきゃならないという、そういうところからくる時間の問題の悩みというものが出ている。それからその次には、経済的な問題として超過勤務というものが割合労働時間を不規則にしている。こういうことが労働時間の問題に関して出た問題点だと思えます。

次に有給休暇の問題ですね。労働協約その他で一応きめられている有給休暇ですが、これはすなわち自由時間として考えていい問題ですね、ほとんどの人が有給休暇を理想的な形においてとっている人がいない。なぜ有給休暇を理想的な形でとらないかというと、一つは有給休暇をとればボーナスに関係する、出勤状態がよくない、とおかしなことでゆがめられている。また自分が病気をしたり、不時の場合使うためにプールしてあるわけですね。だから自由時間のために有給休暇をとることはあまり考えられない。そのつぎ産前産後の休暇。これも自由時間ではないけれども、働く婦人の母性保護という問題、それがやはり十分に

とられていないという実態があげられたと思うんです。

以上のことが、いわゆる自分の労働条件の中で、時間というものがどんなふうに使われているかという点で、皆さん方から出された問題だと思うんです。

次に勤務以外の時間、つまりうちへ帰ってからの時間はどうか、ということについておうかがいしましたところ、まず第一に家事労働の問題ですが、家事労働をどれくらい皆さんがふだんしていらっしゃるかということでは、ここにおいでになる方々は幸いにも、経済的裏づけによる電化ということで、生活の合理化をはかっていらっして、相当解決していらっしてやる。あるいはもっと計画的に一週間の献立を作ったり、いろんなことで解決していらっしてやる。それから次に家族の協力、つまりだんなさまとか子どもさんの協力で家事労働はなんとかいまのところそれほど大問題になっていないらしいというふうなことが見られました。

ところが問題は育児ですが、ここで皆さん方が出されましたのは、育児に時間をとられるということよりも、むしろ育児に十分なものが自分として与えられないという悩みが出てくるわけです。この育児の問題は自由時間との関連で考えられるのか、あるいはもう少し深いところで考えられるのか、ちょっと私は大きな問題だと思ったんです。そ

れから未婚者の立場では勤務以外の時間はどうかといえますと、家事などに圧迫されることはあまりないようです。むしろ親子のあいだの心の干渉というように、自由時間の十分な活用をさまたげているということですね。それから、これは娘さん、既婚者とも共通にあると思います。それけれども、勤務以外の時間の中で組合活動ですね。さういう特別な仕事のために自分の個人の時間がなかなか得られないという問題、それからケースとしては少ないけれども、寄宿舎というような集団生活の中で、建物の問題とか、あるいは同じ部屋にいる人たちの人柄の問題とか、いろんなことで自分の自由時間にいろんなわずらわしいものを投げ込まれるということがある。それから勤務を終えて帰った主婦としていちばん悩むのは、来客とか習慣が非常に自分の自由時間を阻害するという、勤務以外の時間の中での問題点、こういったことがあげられていたと思うんです。

それから皆さんがどれくらい睡眠時間をとっているか聞きましたら、だいたい共かせぎをしていらっしてやる方は六時間という数字が出ていますね。睡眠時間は八時間がいいといわれていますが、さうしますと六時間では二時間足りないわけです。

私は最初皆さんにおうかがいしたいんですが、いまあげ

ましたように皆さん方の中に出た問題を整理して、この中でいちばん基本的に考えられることは、日本人の労働時間に対する観念というものはこれでいいんだろうかということなんですね、どうでしょう。それから、今年のテーマはくれぐれも申し上げましたように余暇時間の善用というような、ひとつの運動みたいなものではなくて、あくまでそれ以前の問題、つまり自分たちには自由時間が与えられることが必要なんだ、それはなぜか、ということですね。考えをできるだけそこへ集中して討論していただきたいと思います。

労働時間の観念

新里 その考え方で、自分たちの職場でいつも感じていることですが、何か机の前で仕事をしていないと仕事をしているということにはならない、という評価の仕方があるわけです。ですからものを考えたり、その参考資料を読んだりなんかしていると、それが仕事じゃなくて遊んでいることになる。それは能率に対する考え方だと思いますが、そういう科学的な、能率についての考え方が全然統一されていないんじゃないかということを感じます。

西 先日、山崎さんが学校の教師の仕事はすれば切りがない、しかもはし折ってやろうと思ったならそれもできるん

だとおっしゃったのですが、その点で山崎さんはどこへ線をお引きになりますか。

山崎 私その限界でいたいへん悩んでいるわけです。どこまでが教師の領分なのか……。とにかく毎時間毎時間充実すればいいのだから、授業だけ完璧にやればほかは何もやる必要ないと割り切る方がありますが、それではだめだと私は感じているんです。

西 黒滝さんいかがですか、同じ先生の問題で……。

黒滝 私の場合極端な考え方もしませんが、仕事は仕事、家庭は家庭というように割り切ってます。それで、家庭持ちの先生方と手をつないで、男の先生たちがいようとまいと、私たちは大ていにして帰りましよう、と、さっさと帰ってしまいます。

渡辺 山崎先生は、授業時間を充実して与えればいいということだけには、悩みを持つとおっしゃった。いまは「子どものしつけは家庭で」ということがよくいわれるわけですが、しつけのできるような家庭の環境ばかりじゃなくて、逆に働いて子どもも見られないから、人格の点までも先生にお願いしたいという父兄もあるわけです。そういうときにこれをどう解決するか、ということもあります。が……。

黒滝 たとえば欠席児童があった場合、学校ごとに規律

部の生徒がいて、一日休んだら係がみて、次の日に教師に報告するようになっていきます。生徒だけで解決しない場合にはやはり、私がじかに行くなり、電話かけるなりそこまではするわけです。しかし、そういうことは一カ月に二、三回で、あとは大い生徒が行っただけで解決できるんです。問題児もクラス平均一、二人いますが、そういうのはやはり私個人としてももちろんそうです。生活指導部の方、学年主任、校長という方と手をつなぎ合って解決するようにしています。

西 教師の限界とおっしゃいましたが、これは大きな問題だと思ふんです。その他のいわゆる専門職の方たちの問題ですが、その限界をやっぱりどこかで引かなければ、いつまでも自分一人が背負っていかなきゃならないという問題が出てくるんじゃないかと思ふんです。使命感だけでやっていますと、やっぱどこかでいつかは緊張が切れちゃうわけですね。それをどう合理的に解決していったらいいかということも多少考えておかなければ、ただ好きだから、義務だからやっているというだけでは、その善意が最後まで通っていかないんじゃないか、という心配があるんです。どうしたらいいでしょう。

北波 私の場合、生活改良普及員の目的は、楽しい豊かな生活をしましようにという暮らしの陰役者です。その暮らし

の陰役者が楽しい生活がでなかったのでは、口先だけのから回りだと思ふんです。ですから普及員を志望したときに、普及員自体の生活も楽しい豊かな生活ができるようにしなくちゃいけないと思って努力しました。たとえば、夜の会合を頼まれますね、農家の婦人は夜が集まりやすいので集まってくださいというわけです。初めは新米ですから、「はい」といっていました。しかし、それでは相手の計画の時間を無視してしまう結果になるんです。しかも夜居眠りしながら大切な話をして、昼の農作業には疲れたからで出るよりも、大切な時間の中ですが、日中にその時間を持てるようにすれば、私の夜の時間も十分に使えますし、相手の夜の不規則な農村の節度のなさも追放できるんじゃないか、と考えたわけです。

西 たいへんいい話が出たんです。これはいいかえてみますと、自分の仕事を自分だけで考えないで、仕事の対象も引き入れて、そうして自分の生活時間も考える、相手の生活のことも考えるという、そういう相手をも含めて仕事を進めていくという、ひとつのたいへん合理的な解決策をお出しくださったですが、そういう意味でどうでしょう、新里さんの場合もそうだし、山崎さん、黒滝さんの場合もそうだと思いますが、なんかそういうことであなたの生活も生かされ、相手の生活もそれによって生かされるという

ふうなやり方は、どこかでないでしょうか。

新里 私は少しやっているんです。それは勤労婦人の余暇時間を利用して教養の向上とか、組合意識の向上というようなことについて話し合い、勉強をするんですが、それは私自身の勉強でもあるし、皆さんの望んでいるところでもあるわけです。いまの方のようによりよくしたいというので、勤務時間中にその仕事ができれば私はなおいと思うんですが、相手が労働組合の方たちですから、組合の勉強をするために時間中にやるということは、会社に対して不利な場合が多い。これは一つの障害です。

渡辺 私のところは母子相談員がいるんですが、その人たちのところへ相談を持ってこられるのはたいい夜なんです。お母さんたちが働いていますから、昼相談にくると、それだけ日給がもらえないんです。私たちは職場にきてくださいと、呼びかけるのですが、現実問題として、休めば百八十円もらえませんかというんです。そうなってくる母子相談員の善意でしょうが、家にきてもらえばいいんだからというので解決できない。子どもさんの保育園の問題にしても、子どもさんをお母さんが迎えにこないこと、保母さんは時間がきても帰るわけにいかないということになるんです。生活が困っている人にはなかなか理想的にいかないんですね。

生活時間合理化の手がかり

西 北波さんの場合は幸いにして非常に努力されて、夜の座談会だけは断わろうということで、両方ともひとつの合理化に踏み切られて、それができた。渡辺さんの場合は、それがどうにもいまのところはできないほど相手が貧困だという問題で釘づけになっている。それをここで、じゃあすべてが北波さんのようにできるかどうかということになれば、それは絶対にやりましようというふうには持っていけないかもしれないけれども、それじゃこのままでもいいかということになれば、どこに問題があり、どこを手がかりとして少しでも理想に近づけるようにするかということになりますか……。

北波 婦人参政権も年月を重ねて叫んで生まれたので、私たちも初めから集まれる会合にはならなかったんですが、いまの農業経営はこういう危機にさらされている、その重大な問題を話し合うのだから遊び事じゃない、仕事と同じようなものだから昼間討議してもいい問題だ、ということを重ねて話をしたんです。

角田 三年前に私は婦人会として家庭を新生活運動で回ったんですが、どこに抵抗があるかという、大ていおしゅうとめさん側に抵抗がある。おしゅうとめさんというのは

もうここに坐っていて、考え方もきまってしまっていて、いくらゆすつてもゆすつてもゆさぶり切れないんです。

野口 私たちには労働時間を短縮するというよりも、延長のほうが、生活態度として正しいという考え方が植えつけられていると思うんです。私もそれで非常に職場で人数が少なくて仕事がオーバーだったときに、なんとかしなければというので、研究会を持って機械化するなどして、仕事の性質をすっかり変える工夫をしました。労働時間を延長するとか、人をふやすということの前に、自分の仕事をもう一ぺん考えなおして、能率の上がるようにならないかということ、を考えてみる必要があるかと思ひます。

西 つまり定員増の問題とか、機械化の問題以前に、いったい労働時間はこれでいいのかという考え方があると思うんです。ただ一般の人たちに野口さんのおっしゃったような、これでいいのかという考え方を、もう少し合理性を持って徹底したらいいんじゃないかと私は考えてみたかったです。その点でどうでしょう若い方たちのほうから……

山本 私のほうは人が足りない足りないということをよくいうんです。交換手の場合は、加入者がいくつあるから一日の呼びは何べんと、公社側は基準を出していますが、

実際は二倍も働かなきゃならない現状です。私たちが時間短縮とか、人をふやしてくれというのと、そんなにいうならば合理化すると出てくるんです。自動化してしまえば問題がない。そうしますと反対に人間が余ってきます。ですから一方で合理化の反対ということを叫び、その反面時間を短縮してくれ、人をふやしてくれという。考えてみると矛盾だらけなんです。

大野木 時間短縮というものを労働組合の問題として取り上げて、現実には歩み出していかねばならない。全織でストライキまでやって、十五分の時間短縮をやって八時間から七時十五分になったんです。それまでには女の人の意識が低い、「なにさ十五分ばかり」という觀念がみんなにあるんです。それをどういうふうにしてみんなに浸透させるか、ということが問題で、労働組合の問題にしても現実には歩み出さなきゃいけないと私は思います。

角田 時間短縮を私たち考えてできないかというのと、できるんです。できたんです。最初は女はおかしなもので、勤務時間なのにべちゃくちゃやる時間はあったんです。(笑声)これを自分で意識しなかったまでのことです。女は隣の人が仕事をしていると、自分もその仕事をしないと都合悪いというような自主性のなさがあるので、その自主性のなさで労働時間が短縮されない。まず自分の職場の中を

もう一べん整理する必要があると思っています。

野口 一般の働く人の中には自分たちがいくらストライキなんかやって、最低賃金を上げようと思っても、どうせ上げてくれないから時間でかせごうじゃないかという言葉があるんです。

高間 いま最低賃金の問題が出たんですが、これもとても矛盾のある話なんです。というのは全体の能率を上げなければならぬ、そこで能力のない人をどうするか、という問題です。会社側もやはり八千円の最低賃金を払うならば、それだけの能力のある人間しかいてもえないうのです。もう一つの問題は、これは私自身の生活になるんですが、私の場合は、舎監といっても生活指導の部面を持ちますと、先生といわれる立場におかれておりますし、一日八時間労働を楽しくするように、意欲を持たせるのが私の使命だと思って喜んで仕事に当たっているんです。ところが若い娘さんたち二百二十人もいる中で一人留守番しているものですから、朝から寝るまでずると、全然学校の先生どころじゃないんです。私は午後三時には帰っていいことになって、夜七時から九時半まで事務所の留守番をしてくれということになっている。八時になると寮生を全部寝かせます。そのあと九時半まで留守番をしているんです。が、その間退屈なので、読書や編物をしているんです。と

ころがその編物をしているというのを寮生がいやがるんですね。与えられた八時間労働の間に自分の仕事をしているというのです。それから問題になりました、それじゃあんだちと組合の人、会社側との四者で話し合って、私をまな板の上にのせて、どういう仕事か私の大切な部分か協議してくださいといったんです。それでいろいろ話し合ったところが意外なほうへ発展して、会社側では夜の時間は高間先生に解放してあげようというんです。ほんとうに願ったりなかったりのお話で、とにかく五時までは全責任を負う、あとは自由にしないということになった。そうした問題が持ち上がったことが私にいい解決方法を与えてくれたんです。

上村 皆さんのお話は聞いていて勉強になることばかりなんです。高間さんのお話、最低賃金をきめたために経営者のほうが、何かそれだけの能力がないからとても困るというお話ですね。私はそれは経営者の考え方にあると思うんです。経営者は企業の発展だけを考えてやっていることですね。それを働いている人が、食べていけないということを考えたら、能率とか、そういう問題を度外視して、最低の賃金は上げなきゃならないという考え方を経営者がしなきゃ解決しないと思うんです。

家事労働の問題点

西 いま出ました問題は勤労婦人の問題として、あらゆる問題が出たわけです。合理化をしてほしいという方もあるし、合理化されれば困るという話もあるし、それから最低賃金と労働時間の問題、職場の中の自分自身のおおのものの考え方ということも、もっと整理する必要があるんじゃないかというようなこと。いろいろ時間ということから考えてみても、今日、日本の勤労婦人が当面している問題が出てきたわけです。こういう大問題をここで二日議論しても、三日議論しても、すぐ、じゃそれひとつやれば解決するという問題は私はないと思うんです。同時にまだこれからでも手をつけていかなきゃならない問題ばかりではないだろうか、それだけははっきりしたわけですね。そこで残りの時間を勤務以外の時間についてどう考えたいか、どうしたらいいかということと話し合ってみたいと思います。たとえば家事労働というのは、どこまでやっても切れない。皆さん家事労働をどの程度で切り上げようとしていらっしゃるか、私なんかよけいなことまでしちゃって、そんなこと何べんしても同じだとあとで損したような気がするところがあるんですが、どうでしょう。

新里 具体的なことで、食事までの時間がたいへん長く

かかるということで、だんだん料理の仕方が単純になってしまふ。できるだけ安い切り身を買って焼いて食べるとか、せいぜいごちそうといえはお汁をつけるとかいうようなことで、栄養ということでは気にかかるんですけれども、まず時間をなんとか浮かして休みたいですから、食器を洗う手間がなかったら、どんなにいいかと思うんです。

田中 私は、食事のことは絶対厳密にやることにしています。けれども半製品を使って時間を短縮するようにしています。お掃除なんかはルーズなやり方で、使うところだけは毎朝やって、あとは一週間に分割しています。

北波 私は献立表はこまかく立てると、かえってそのために時間がいるので、献立の組み合わせだけを考えているんです。カレーライスのときには何を組み合わせたらいいかというだけで、簡単な組み合わせカードを作っています。

野口 私の場合、一時カン詰めを使っていたんですが、カン詰めでは財政がとてもし持たないので、一切カン詰めを使わずに一週間の献立を立てて、計画的に日曜日に買ってきます。

角田 計画的にやるというのは、恵まれたところに住んでいらっしゃるからできるので、私どもは朝十時ぐらいになると、お野菜なんかかきついで売りになるんです。漁があるときはお魚もたくさんありますが、お肉なんかないんで

すね。その日その日で計画を立てていても違ってくるわけ
です。

大野木 家事労働を合理化するについて家庭の人の協力がなければできない。電化しろといっても貧乏で電化どころじゃない、おかげもおかしいものを買えないと思うんです。ですから家事労働を合理化する場合に、家庭の人たちの協力、主婦の立場を理解してもらうことが、とても重要なことだと思います。

西 この中でお手伝いさんのいる方は……。

(新里、黒滝氏挙手)

西 あなたのところはお手伝いさんを求めることは、そうむずかしくありませんか。

黒滝 わりにむずかしいですね。若い方にはほとんどなり手がないんです。私の場合は、前の方がやめる二、三ヵ月前に床屋さんに頼んでいて、その方からまた聞きして向うから直接……。

新里 私は、母の郷里の遠い親せきになっている方をお願いしたんです。

西 男性の協力の前に、お手伝いさんの問題は社会的な問題ですから、お手伝いさんをおきたい方も出てくる。子どもが生れたような場合、保育者を入れなきゃならない、そういう場合に、床屋さんに頼まなきゃならないとか、八

百屋さんに頼まなきゃならない、それだけで解決ができるかどうかということですね、どうでしょう。

山崎 私はお手伝いさんは頼んでおりませんが、お手伝いさんを頼んでいる方の話によると、このごろたくさん出まわっている電気器具などを十分に使いこなせないという問題があるようです。それで電気器具の使い方などの勉強を三週間くらいやった人たちを、お手伝いさんとしてお世話なさるといふ話を婦人少年室で聞きましたが……。それからお手伝いさんがなかなかないという話ですが、内職も安いからパートタイムでやりたいという方があるんです。そういうのをやっていただきたい。

野口 大阪は婦人少年室が非常に力を入れていただいて、働く婦人の代表と、家庭婦人の代表と懇談会をやって、その話し合いの中で家庭婦人と勤労婦人が手をつないでやっていこう、そしてもっと市の協力を得なきゃだめだというので、民政局に働きかけて、民政局でこの問題を取り上げております。

渡辺 だいたいどれくらいお手伝いさんに差し上げていますか、給料を聞きたいんですが。

野口 大阪の場合、家事サービスセンターがあつて、一定の訓練を受けてきた方で六千円か七千円、これは通勤の場合ですね。このほかに通勤費が出るわけです。商売をし

ている場合は、労働時間が長いので一万円ぐらい出しているところもあります。

西 私 は、東京の家事サービス補導所のお手伝いさんの養成機関の委員をしているんですが、住み込み三食付きでだいたい最低四千円、通勤で一日三百円、交通費は使用者持ちで昼食付きです。これは最低線です。これに赤ちゃんのめんどろを見なきゃならないとか、お年寄りがあるとか、家庭の仕事の内容によって相談をして、これ以上になっっています。

上村 いま通勤三百円昼食つきというお話ですが、若い人の共かせぎは、二人合わせて二万円ぐらいですから、お手伝いさんに一万円も払ったら自分の給料以上払うことになるんです。

新里 私は上村さんのおっしゃったそういうことでほんとうに悩んでいます。ときどき私は、お手伝いさんのために働いているんじゃないかという疑問さえ感じて、たいへん苦しめられることもあるんです。

田中 私の地方は城下町だから人の使い方に対する觀念でも、割り合いに古いんです。ですから中学を出た女中さんが、定時制の高校に入れてあげるといふ条件でいくんですが、朝早くから起こされて、奥さんは朝九時ごろから子どもなどそっちのけで遊んで歩いて、それで学校へ行きな

さいとはおっしゃってくださるけれども、一日の疲れて学校どころではない、自分のほうからやむを得ず行かれないという状況がたくさんあるんです。

西 少し結論めきますが、経済と自分の仕事とアンバランスだったときに、何のために仕事をしてるかわからないというような話がありました。これはまた個人差の問題であって、自分の給料を注ぎ込んでも仕事がおもしろければやっていく自由があるし、経済的につまらないと思えばやめる自由もあるのだし、その半分ぐらいでやれる方法はないかと思ったら、主婦のパートタイマーを当てにすることもできる、そこいらに柔軟性が持てると思うんです。それでは、午後に育児の問題と、自由時間の活用の問題に入ることにして、午前はこの辺で……。

(休憩)

家庭での夫の協力

西 午後の話し合いに入る前に、高間さんのほうから出ました例の労働基準法にきめられた四十五分のお休みはとらなきゃならないが、二交代で働くとき十時半になってしまふ、あとの時間がたいへん苦しいから休憩時間を短縮する方法はないかということ調べてみましたら、やっぱり八時間働く人は四十五分の休憩をとらなければならないとい

う基準法があつて、三十分の休憩でいい場合は六時間の勤務に對してだということだ。もしもこの基準法に触れないで、そして皆さんが少し楽をしたいのだったら、労働時間をなんとか短縮する以外に法を犯さないで働くということはできないらしいですね。そうなると、やっぱり時間短縮の問題ということになってきまして、それはどう解決なさるか、組合運動とかその他の地域の問題とかで、これからまた話し合つていただきたいと思ひます。それだけちょっと申し上げておきます。

午前中に家事の問題とお手伝いさんの問題にまで入つていったんですが、大野木さんからだんなさまの協力はどうかという話が出たんですが、これはどうなんでしょう。簡単はどう考えるかという考え方だけおっしゃつてくださいませんか。

北波 私の場合は、私が職業を持つというの、私が持たしてくれという条件で持つております關係で、とても苦しいんですが、やはり昔から男は台所に立つのはあまりよくないように見られた社会環境に育つておりますと、周囲への気がねもあり、なかなか思うように手伝つてもらえないんです。

山本 私たち「あおう会」という結婚前のグループを作つたんです。その中で、共かせぎは是非かという討議を

やりまして、男の方から共かせぎについて、どのような考え方があるかがつたんです。その時に男の意見として女の方はどしどし社会に出てやつてほしい、男というものはどうしても妻がうちで働いてると、おれが食わせてやつてゐるんだからという氣持が出てくるというんですね。女は女でやっぱり経済的なことにながれば、自分が食べさせてもらつてゐるというのが出てきますから、いいいこともいえないというんです。男のほうも社会的に見ても自分の奥さんが、人より下でゐるよりも自分と同じ、みんなと同じで社会知識も豊富だということは、自慢になるというんです。

上村 これはうちの主人の場合だけかもしれませんが、大いに協力したいとは申しますが、うちのことは主婦にやつてもらいたい、ということも非常に希望してゐるわけですね。家庭においては全部奥さんにまかせてゐるというのは自分が安心して働けるということもあるし、それは反面から見たら主婦の權利が確立されてゐる、というような見方ですね。

三野 これは高校の教師の方がおっしゃつていたんですが、私は主人にはたいへん失望したから、子どもは小さいうちから男性、女性の区別なしにお針とか、いろんなことをやらせてゐる。次の世代を教育するのは女の人なかなんぞく

お母さんになったときの責任だ、というふうなことを申されておりました。これはいへん必要だと思えます。

高間　きのう拝見した三菱重工業の社宅での話ですが、その中に若い方が共かせぎをしていらっしゃるんです。ところが便所掃除なんか共同でやるんだそうですが、奥さんがお勤めに出たあと、だんなさんが便所掃除に出てきた。それで近所の方がびっくりして、いくら共かせぎをしているからといって、だんなさんが便所掃除に出てきてもらうのは心苦しいというんですね。ところがその後しばらくそのご夫婦の様子をみていると、そういうことは実に割り切っていてやっている。これは中年以上の私たちの考えが間違っていたというのを自覚したとおっしゃんですが、非常に感激しました。

西　ご主人に家事労働をどんなふうに協力してもらうかということについても、自分自身で頭のかえをしなきゃならない問題もあるし、それから男の人自身がどう変わってくれるかということもあるしそれからいわゆる世間の目ですね、それとも戦っていかねければならない。それから男の人が台所へ入ってもおかしくないふん囲気を作ること、も大事なことだと思います。心がまえだけではできない。さっき上村さんがだんなさまはすべて奥さんにまかせている、そこで主婦権の確立をしているということがだんなさ

まにとっても安心だという、そういう考え方があるんじゃないか、とおっしゃったんですが、それはどう考えますか。

新里　実際にそういうことだと思えます。ですけど、男の人はうちへ帰ったら仕事のことを考えないでもいいような状態に、いまの社会はなっていないし、共かせぎの女もそういう状態で帰ってくる。そういう場合に一応家庭の中で主婦権が確立されていて、夫から家庭のことは君の責任であるとかまかされている妻の現状、そういう二重な仕事を持っているということは絶対的にあると思います。自分も疲れているけれども、おしりをはたいてやってもらえないという感じがするんです。

託児所問題の周辺

西　次に子どもさんの問題に移っていただきましょうか。一応託児所の問題に触れていただきたいと思います。が、子どもは託児所ができれば安心して働けるようなものですが、託児所があっても託児所から帰ってきた子どもを、また家庭で受けとめて教育をしていかねきゃならない、見てやらねきゃならない。それが自分をまた押しひしうふうなことですね。働いていらっしゃる皆さんとして育児の問題は……。

田中 これは私が子どもを育てたときに思ったんです
が、私は子どもが生まれてすぐ、役所の託児所に三年ほど
つれていったんですが、託児所といえども乳児から数
えの五才まで四十八人いまして、保育さんが二人だったん
です。そうすると結局一人で二十五人ぐらい受け持つこと
になり、子どもの教育ということが全然なされない。上の
ほうの子のひとりが泣きますと、寝ている小さな子が起き
るんですね。そうするとしかって、なるべく泣かないよう
にさせる。そうすると子どもはそういう圧力に押されてい
るので家に帰ると親にひっつくんです。四つぐらいになり
ますと、親の顔色を見て、忙がしそうだといとりで積木を
したりして遊んでいますが、一つ半か二つぐらいはひどい
んです。台所にいくにも泣いてついてくる。自由時間なん
て全然ないんです。はたしてそういうふうにした子どもが
いいほうに成長するかどうか疑問です。その点皆さんどう
でしょうか。

黒滝 私の場合、お手伝いさんをお願いしますが、ど
うしても甘やかす、しかってくれないということが私のい
ちばんの悩みになっているんです。

渡辺 託児所は子どもの教育をするところでなくて、お
守りをするところでしょう。いま教育のことが出たんです
が、お守りをする人が少ないと、おむつを当てたまま十二

時までにはうってある。そういう子どもが幼稚園に入りま
すと、四つぐらいになるまでおしっこをするんです。それか
ら親の顔色を見るといふのは事実です。保育所なんかたく
さん子どもを入れてますと、確かに顔色を見て、すなおな子
どもができない、と保育所の先生自身が悩んでるんです。

田中 私の子だけかもしれないませんが、消極的な子どもが
できる。そういうことをなくしようと思うから、家に帰っ
てなるべく一日の押しつぶされた気持ちをほぐしてやろうと
いう気持で、それがちやほやするということになる。

角田 しかるということが出ましたが、私は幼稚園では
絶対しからないようにしてるんです。女というものは特に
感情でもってしかることが多いんですよ。私は特に感情家
ですから感情を出してしかるというのはいちばんいけない
ことだと思っって一生懸命制御している。しかるということ
と、きびしくするということとは違うんですね。逆戻りし
て悪いんですが、さっき黒滝さんは、自分の十五分間の休
みを労働時間を短かくするために使うとおっしゃたでしょ
う。私が子どもを出した場合に、母親として考えること
は、先生は休み時間にもすみませんけれども子どもと遊ん
でくださいといいたい。子どもの心を掌握することは、授
業時間だけではなくて、そういうところにもあるんじゃない
かしらと思うんです。

山崎 私は託児所のよい点をお話したいと思います。私の妹は託児所に勤めています。託児所にいる子供は人の顔色を見るといいますが、反面非常に早くから自分のことは自分でできるんです。それから託児所のしつけですけれども、どうしても人間としての最低限度やらなければならぬ。両便とか、生命の安全とか、そういうしつけというのは託児所はしつけていると思うんです。

高間 私のほうでは会社で犠牲的に見て上げる。でも問題はあります。そのときは母親のほうから、こういう点是不合理だからという問題を出して、組合が中に入って解決している。私は自分の子どもをやはり中から育ててきたものですから、こういう環境にある子どもをどういうふうにしたらいいか、その弊害というものは自分一人ではとても除くことができない。自分の愛情のあり方を変えることによって子どもを育てていきたいと考えたんです。

西 託児所といっても完璧の託児所もあるでしょうし、そうでないところもありますが、しかし働く女性のために社会の施設として、どうしてもほしいというところに異論がないと思います。その運営の仕方とか、保母さんがもっといらっしやればいいのか、お部屋もたくさんあればいいとかいような問題が出てきます。これは地方地方の行政にお願いしなきゃならないし、組合の力とか地域のお母さんた

ちの力とか、いろんなもので改善していけると思うんです。子どもさんも託児所で愛情をもってめんどろを見てくれるかもしれないが、もう少し母親の気持を補ってくれるような、そういう子どもの扱い方がないものだろうかということについて、何か方法はありますか。

渡辺 これは私のほうの貯金局の人たちの話ですが、あすこはとても共かせぎが多いところです。それで個人的な契約をして、朝、門のところでもその方に赤ちゃんを頼んで、預った人はお母さん代りに一日見て上げる。そしてお母さんが帰るときに預けた方から赤ちゃんを受け取って帰るんです。このやり方に私自身は非常に賛成しています。

高間 私の町の施設は保健所の所長さんが顧問になっていて、保母さんが全般にいろいろな講習を受けてやっており、やっていけると思いますが、各自の母親が利口になってしつけていくよりしやうがないと思うんです。

西 その問題について東京でひとつ今度実施されようとしている問題があるんです。それは東京都の民政局で、家庭福祉員というものを作るんです。これは託児所を作るには非常にお金がかかるし基準がある。そんなことをいっているうちに困っているお母さんが多くあつてしやうがない。東京でも個人契約で子どもを預かっているケースもた

くさんあるので、ここに手をつけて、どなたでも手のあいている人は預かりなさいというのも、あまりに行政庁としては能のない話だから、ここでひとつ家庭福祉員という肩書をつけて、まず官庁が一応監督をし、それから認可するという立場をとって、たとえば保健婦さんの経験のある人とか、産婆さんの経験のある人、学校の先生をした経験のある人、またお医者さんでもけっこう、それから家庭の婦人でも、お子さんを何人か育てて、十分自信のある方、それから保母さんの経験のある方とか、資格を持った方たちを募集して、それを各福祉事務所で資格審査をして認可を与える。そして何人かプールしておいて多少教育もして、その近くの預けたいお母さんたちを募集して、一人が最高三人までは預けることができるという方法をいま計画中です。料金のほうも一人三千二百円です。ですから高間さんがおっしゃったように、絶対的に百%お母さんの代りをするということはできないけれども、託児所よりもなにかその人によっては、お母さん代りになれるんじゃないだろうか、そういう新しい方法がとられかけていますので、ひとつご参考になるんじゃないかと思います。

それからこれは今日の問題ではないんですが、育児の問題で、託児所とか個人に預けるということで解決する面もあるんですが、愛情の問題でお母さんが悩むのだったら、

お母さんはその間子どもが小さいうちは一応うちにいたほうがいいんじゃないか、というふうな意見も出ているんですが、これは考え迷っていらっしやる方もあると思うので、少し問題にしていたかもしれません。

角田 私はほんとうにこの間も申しましたように、自分の子どもが悪くなりかけましたので、その悩みを持っているものですから、子どもが高校に行くぐらいになるまでうちにいてやりたい。ところが、それまでうちにいたら、その次の就職口がないので、それができないという苦しみがあるんです。

山崎 私はこういうことをやってもらいたい。母体保護の産前産後休暇と一緒に育児休暇を作って、その間でできれば俸給をもらいたい。大まかにまけて俸給の三分の一ぐらいの児童手当を要求するんです。そして子どもが大きくなったら必ず復職できるという約束をする。

野口 私は組合なんかで母体保護運動を進めたときに、いろいろ育児のことで行き詰ったんですが、結局母体保護とか、育児とか、いうことは社会保障制度でやるというふうにもっていかないと、解決できないと思うので、飛躍するようですが、私たちの日々の活動を通じて世の中の仕組みを変えるようにもっていかないと、だめじゃないかと思っただけです。

新里 子どもが生まれてから育児期間は家庭に入るべき

だという意見が出たときに、ちょっと反発を感じたんですが、いまお話をうかがって、そういうふうな問題を無理じゃないような方法にもっていくことが、望めば可能じゃないかという光みたいのが出てきたんです。休暇をまとめるととか、社会保障で保険なんか出してもらって、安心して休んでいられるような状態とか、そういう方向へもっていくならいいと思うんです。そうじゃなくて、なんでもかんでも家庭に帰って休んでいろうことでは男性の、あるいは経営者の方々に利用される危険があると思うんです。

自由時間の工夫

西 いい意見が出ましたね。これから皆さん方が、これをどういうふうに具体化していくかというのは、日常生活の中で実らしていただきたいんですが、ひとつの手がかりとして考えていただきたいと思います。

自由時間というものをとるためにさまざまな問題をお話しくださったんですが、皆さん方どれくらい自由時間があるか、カルテみたいなのを示していただくといいんですが、午前中にも報告したように、ぎりぎりいっぱい勘定しても、一日二時間あればいいほうで、ぎりぎりのところと

るのが、なかなかむずかしいというのが皆さん方の実感ではないかと思えますけれども、かといって、まるっきり自由時間はこれ以上とれないのかというと、とれないとはいえないような気持もしてるんです。どこかでとる工夫をもう少しすればとれるんじゃないか、その点どうでしょうか。

井上 未婚の立場からお話します。私たちの場合は、勤務八時間というものが終ると自由時間なんです。自由時間の過ごし方に問題があると思うんです。私たちの会社の場合は中学卒が多く、流れ作業をしているので、他の人と接触する機会もなく、知識を吸収する機会も少ない。彼女たちの自由時間の過ごし方を見ますと、昼の時間は洗濯したりレース編みしたり雑談したりして過ごし、勤務終了後は洋裁とか和裁とかに通っているんです。全然教養の時間が少ないです。このような人たちがもし結婚した場合子どもの教育がほんとうにうまくできるかと考えると、自由時間の過ごし方にほんとうに問題があると思うんです。

西 もっぱら生け花とかお茶とかいうふうな花嫁修業になってしまうことが心外だとおっしゃるのね。

大野木 私は十大紡ですから、自由時間は比較的恵まれています。教養の面でも、学校へ行かなくても自分を高めるといふ時間を持てると思うんですが、集団生活の中にお

いて、どれだけ自分が拘束されているかについて悩みを持っているんです。八人から十人の人が一つの部屋に入っていると、全部私生活を見られているわけです。自分一人きりになってものを考えるときか、思索にふけるという時間が作れないんです。睡眠時間をさいてもないと、なかなかないんです。

田中 自由時間というものの考え方についてですが、社会的家庭的に拘束されない時間が自由時間だと一応考えていますが、井上さんのおっしゃったお裁縫とかお茶とかを習っている、それも考え方によっては自由時間を利用して：ということじゃないかと思うんですが、これについて：

西 自由時間というものの基本的な考え方ですが、ちょっとむずかしくなりますが、どうでしょうか。

山崎 自分の要求でやることは、私は自由時間だと考えているんです。人から強制されたものは、よそから見たら遊んでいることであっても自由時間ではない。よその人から見たらたいへんだなと思って、自分から進んでやっているのは自由時間だと思っています。

新里 自分から進んでしているということになると、私たちは全部自由時間みたいになっちゃう。いろんな定義の仕方があると思うんですが、生活する上に必要な時間を除

いてしまった時間で、しかもその時間は自分の考えていることのために自由に使える時間、というふうに一般的に考えていいと思うんです。

角田 私は自由時間が少ないほうですけども、私の自由時間の考え方はちょっと変わっているんです。昼の時間は遊ばないで、一生懸命お掃除をする。全部で二時間もかかるのだけれども、それを自由時間と考えながらやっています。掃除は、しなきゃならないことで、自由時間ではないけれども、三人で楽しくおしゃべりしながらやっている。

なんとかこれをもっと早くする方法はないかしらと、おもしろ半分に話しながらしている間は自由時間と考えているんです。けれども、そういうことが当たり前になって労働時間の短縮ということがいわれなくなると、反論されそうですが、そうなるかと私は迷ってしまっています。

野口 私の場合は非常に忙しかったんですが、自分でこういうことをしたいという目的を持ったんです。そのために生活の合理化というか、生活の簡素化、建て直しをやってみたんです。そうしたら案外時間が浮いてくる。職場でも仕事の簡素化というか、質を変えるように、皆さんとやるようにしました。

北波 角田さんの場合は自由時間じゃないんじゃないかと思うんです。それが自由時間だったら生活改良普及員の

私なんか全部自由時間になる。

高間 掃除はどうしてもしなきゃならないことで、いくら楽しみながらもそれは束縛された時間だと思っています。

角田 それはわかるんですけど、お昼の時間は自由時間です。その時間に楽しみながらやると自由時間にならないのかな、ということですね。融通性があってもいいんじゃないでしょうか。

田中 角田さんによく似てるんですが、私たちがたとえば講演会なんかに出るとき、こういう講演会があるから出てくさいといわれて、自分はいやだけれども出たというのは自由時間じゃない。けれどもそのとき自分が出たいという場合がある、そういうときに参加するのは、自由時間か、自由時間でないかということについて疑問があるんです。

山本 一昨日から役員の問題が出ていますが、職場にいと若いものに役員が回ってくるんです。それで役員をやっていると自分の仕事ができない、だから自由時間がないということが出ましたが、私はそう考えないんです。なぜかといえ、やってくれないかときた場合に、それを受けるのも受けないのも自分の意思です。いやだったら断ればいいんです。私は入社してから一、二年は断わっていたんですが、三年、四年ぐらいになって、意欲がわいてき

たとき、やりましようと思ひ受けました。ところが母にいわせると、毎晩毎晩、今日はなんの会だとおそくなる、女としての仕事をいつやるのだといわれるんですが、私はこれも自分の時間だということです。自分が好きで、やらなきゃならないという気持ちと、それからやりたいという興味と、そういうのでいくのだから人の時間ではないということです。役員になることも私は自由時間に入れています。そうして年とってから昔を振り返ってみて、何してきたんだろうと思うより、あのときはあれもしたこれもしたと思って、年とってからそれに意義を感じたらそれでいいと思うんです。

三野 私の場合は、問題が職場と家庭ということで、休養時間とそれから自由時間とこんがらがった使い方になって、共通の問題を話し合うとか、コーラス部を作って金曜日を練習日にして習ったりしています。みんな割り合いによく出てくれて、何かひとつ問題をもってきたり、それから次はお料理の講習がしたいとか、そういう希望をもってきたり、そんなことで割り合いこの時間の利用について、いまのところ順調にいつているんじゃないかと思っています。

高間 私は、自分たちはお勤めをしている人間ですから、お勤先から勤務時間として与えられた以外の時間は、

自由時間と解釈していたんです。

渡辺 生きていくために使わなきゃならない時間を差し引いたものが自由時間という、これが学問的な定義だそうです。生きていく時間は何かと聞きましたら、睡眠したり、食べるために働かなきゃならない時間だときき、これは納得したんです。公けのためにサービスする時間は自由時間と解釈していますが、学問をするのも芸術をするのもすべて自由時間であって、自由時間があってこそ私たちは向上するんじゃないかな、というふうに解釈しておりますが、どんなものでしょうか。

西 それでいいじゃないかと思えます。その時間を生み出すために、より私たち婦人の社会的地位の向上ということが、婦人解放の条件だけれども、それがあまりにも無視されてきたという現状、あまりにも自分たちが認識していなかったというふうな実情を見つめましょう、というのが今日の会議のテーマなんですから、それで皆さんいいんじゃないでしょうか。——どう使っても結局はいいことになるんですが、それでも野放図に使っていいものでもないし、一応の社会生活をしており、また家庭生活も営みしておりますから、その中でよりよきあり方という、ものの使い方の問題というものも、多少反省もしなければならぬところがあるんじゃないかと思えます。具体的な内容の問

題に入っていくてみたいと思います。若い方たちが花嫁修業ばかりに閉じ込められていることは、おとなから見ればたいへんいい娘だけれども、娘の立場から見るともの足りないという話も出ましたが、どうですか。そういう使い方について考えていらっしゃるような考え方でいいのか、あるいはもっとそれを柔軟性を持たせていいのかということがありますね。

渡辺 私は小さいときから母に、ご飯など家事のことはほかでも女であればできるが、思索する時間、いわゆる学問は家庭に入ると時間が少なくなるから娘のうちに学んでおくべきだ。そうして本を読んでも、読むだけではなく、それを理解する力を養うべきだといわれ、自分の娘にもそういうようにすすめております。

関口 いわゆる洋裁とかお花であっても、将来の大きな目的につながっている、そういう意識をもってやっているのは単なる花嫁修業ではないと思うんです。そうじゃなくて、一般的に若い人は、これとこれを習わなくちゃお嫁にいかれないという、世間の習慣みたいなものにどうしても染まりがちで、その意味の花嫁修業は意味がないと思うんです。

北波 この問題は個性の問題で、こうあるべきだ、あああるべきだということじゃないと思うんです。将来を考え

たらそれぞれ必要があればやるだろうし、職業婦人を通そうと思ったらハカマの作り方なんか習っても仕方ない。

西 井上さんの作文に、花嫁修業と一般にいわれている、いけ花とか料理とかをするのに、自主性をもってしていないということが指摘されていて、おもしろいと思ってんです。結局人にいわれるからしている、みんながやるからしようとか、いわゆる流行ですね。なんのためにこれをするか、好きだからやるというだけでもいいですよ。それでもやっぱり自主性だと思っんです。そのあたりのところがはっきりしていれば、お茶をやるうとお花をやるうと長唄をやるうとけっこうじゃないかと思っんです。

井上 私の場合、習いごともしたいし、学問もしたい、どっちをしていいかわからないんです。私たちの会社の場合、三十になったら定年です、もし三十になったときに結婚といういい就職ができればいいんですが(笑声)、もしできなかった場合、自分で生きていかなきゃいけないでしょう。ですからそのときのためにと思って編みものと洋裁を習っているんですけども、教養という面もやりたいんですが、その時間がないんです。

多田(全労) 繊維産業の場合、都会に残って生活するといふのはほんとうにひと握りの人で、農村へ帰って結婚する人が大部分です。農村の人たちの考え方が非常にそこに

ずれがあつて、やっぱり、和裁、洋裁、お花、お茶までできなくても、お裁縫ぐらいできなければ嫁入りの資格がないという考え方が常識になつてゐる。その壁を突き破るといふことが、一人一人の自覚だといふふうなことをいっています、まだなかなか時間がかかるんじゃないかと思ひます。

高間 このごろのお嫁さんですと、ミシンから編みものの機械から洗濯機から全部持つていくんですが、せっかく持つて行つても自分でできないことがけつこうあるんですね。おしゅうとさんが、それだけのものを持つてきたから縫えるかと思つて縫わしたら、私は寄宿舎にいてそんなもの習いにいったんじゃない、働きにいったので、洋裁やら和裁を仕込みにいったんじゃないというんです。それで私どもではやっぱりある程度、自分のふだん着や、子どもの洋服ぐらいは縫えるぐらいにしてあげたいと思っんです。それで、二十ぐらいまではうんと遊びなさい、そうして役員もやつてもらい、組合の用事もしてもらう、そのかわり二十一ぐらいから一、二年かかつてみっちりそういうものを習いなさい、といふことで、いまやつています。

家族の中の個人の場

西 それでは次に、わずかの自由時間というものを、も

し生み出したとするならば、どういふことをしたいと思っているか、現在どういふことをしてらっしゃるか、それがどういふ目的だということのようなことを聞かせていただかせんか。

高間 私は俳句をやっております。いままでそんなことは考えてもみなかったんですが、私の子どもがいま大学にいらっておりますが、息子が結婚したとき、いいおしゅうとさんになるには趣味を広く持って、太らかに若い人々を理解してあげる母親になりたいと思って、俳句の句会とか、信仰的な部門に入って、そのほうで忙しくらいです。

西 ただ単に俳句をやっているというふうな、ひとつの趣味だけでなくて、あなたご自身の息子さんから独立した後のあり方として、それを心がけていらっしゃるということですね。ひとつの人生設計の目的を持っていらっしゃるのね。

上村 私は余暇時間を使うのにグループ活動を通して自分の余暇時間をもっとふくらませたいという気持があるのですが、余暇時間は主にグループ活動に使っています。いまやっている読書会は、隔週一回夜六時から九時半ごろまでやっております。特に近代史をやっていますが、そのグループ活動のために自分で作り出す余暇はいまのところ二時間ぐらいしかないのです、読書会にいくための勉強を、夜の時

間を使っているんです。

新里 自分の仕事を通して作った会を利用してその中にサークルを作って、その中に自由に入っていくことをしています。組合の中の活動を通して、自分の時間も広げていくような、運動と一緒にその中のサークル活動で自分を高めていくようなことを併行してやっているので、仕事で自分自身のためにもなっております。

黒滝 私は一日の自由時間は、一時半から二時間ぐらいしかない。その中で自分の職務に係のあるための読書、それから一月一回の集まりに出るくらいで、いまのところは自分自身の生活でぎりぎりいっぱいです。

北波 私は家庭の話し合いということを重要視して、夫と妻を打ちながらかきょうあったこと、ああしたい、こうしたいということ話を話す時間を持っております。それから学習活動は、職員組合のサークル活動を通じて、第二土曜日の午後から、時事問題とか一般教養、コーラスをやっています。

田中 私は日曜日は家庭的に遊ぶことにしていますが、水曜日は将来のために、それから自分の趣味を生かすためにいけ花を習っています。本を読むのは、勤めのお昼の一時間を読むことにしています。

野口 私は学習活動とはちょっと違いますが、自分の仕

事のために勉強してゐるんです。男の人に負けないように、自分の仕事のことではやはりエキスパートになりたいという氣持を持っているので、ウィークデーの自由時間を全部つぶしております。

大野木 完全自由時間は消燈過ぎの日記を書く十五分か三十分です。これはだれにも侵されない自分のための時間です。日曜日はハイキングや、サークルのコーラスをやったりしておりますが、自分を向上をさせるための時間は、日記を書く時間と、お休み時間の五分間でも十分間でも詩や歌を書く、その時間が私の完全なる自由時間です。

山本 私は何曜日には何をするとか、何時から何をするというふうな時間が持てませんので、大体一月の勤務がきまるわけですから、計画を立てるときは一ヵ月で立てなきゃならない。それで私たいへん歌をうたうことが好きなものですから、コーラスに二つ入っております。それから読書をする時間とか、新聞を読む時間も、勤務時間に左右されて日によって違うんです。しかし、この前もお話したように、土地がなかなか家族のものに気兼ねして、とれないというのが現状です。

西 大きく分けてみますと、自分の余暇時間を使うのに全く個人的なものに使っていらっしゃる方と、それから集団ですね。グループという形の中で、自分の時間を自分の

ために使っていらっしゃる方と二通りあるわけです。まずうかがいたいのは、家族の協力で一応自由時間を生み出すときの努力とか解決というものはあったとしても、全く自分一人のために使っている場合、たとえば孤立した独身の方ですと、自分の部屋で一人になることもできるけれども、家族と一緒に暮らしている場合に、どうして自分だけの時間、自分だけの座というものをそこで作っていらっしゃるか、その次に読書をしている姿勢だとか、自分で勉強している態度とか、そういったことに家庭の中で何か抵抗みたいなものがありますか。

山崎 私の場合は、自分の仕事のための読書を生み出すのによく利用するのは図書館です。それからもう一つ夫の宿直の夜です。

田中 私の場合は、子どもの寝たあとがだいたい自由時間です。主人とは二階と下に分かれてお互いに相手に無関心で自分のしたいことをする、という工合にやっております。

関口 私のうちは人がたくさんくるんです。兄とか私の友だちがきて、私たちは楽しいんですが、母がそれで自由時間が束縛されるものですから、私たちは金曜日を訪問の日にきめて、その日以外は友だちがきても、きょうは訪問日じゃないということで徹底して、玄関のところで話をし

て帰す、という様に工夫をしています。

西 相当割り切った何かをしなければ、せっかく得た自由時間を活用することもできないというわけですね。家族集団の中で自分の自由時間をどういうふうな形で生かしていくということが無理でなく、ひとつの合理性というものを身につけることができるか。自分の机だけ持ってきて、二畳でも三畳でも閉じこもっていれば、自由時間を活用したということになるんですが、やっぱりそこには夫もいますし、子どももいる。そういう家族集団の中で自分の自由時間を使う苦労があるわけですね。

北波 私はアパートなので部屋が分けたくても分けられないんです。それで、私の場合、就寝前の一時間はどちらも読書することにしたきめ、話すことがあったらその前にすましてしまう。習慣になると一時間ぐらい黙っていることが、同じ部屋でもできます。そういうふうにしておりま

す。

西 今度のスローガンの中にも、自分のしあわせのために、またひとのしあわせのために、ということがあるんですね。自由時間の活用にしても、自分の教養も大事だし、自分という個人の確立ということも大事だけれども、同時に自分以外の人をかかえていかなきゃならない、それを考

えながら自由時間の活用も考えなきゃならないんじゃないか。たいへん皆さんはご勉強がお好きでずい分いろんな勉強をなさったり、読書をなさったりしているんですが、それ以外のレクリエーション的なことを、どんなふうに心がけていらっしゃいますか。

山崎 私は疲れて帰ってきて、ものをいうのもおっくうのときがある。そういうことが続きますと、お互いに気まぐずくなりますね。それで土曜の夜だけは大事にする。自分のやりたいことがあってもゆずり合って、その日に集中的に楽しむわけです。

北波 紺屋の白ばかまといいますが、生活改良普及員を奥さんに持てば、たいしたごちそうが食べれるだろうと主人なんかいわれるそうです(笑声)。けれどもそうそう時間がない。生活改良普及員の奥さんを持っている特典が発揮されるのは日曜日です。日曜日は二時間ほど朝寝をする、それから何がほしいかということをおもむろに聞くわけです。私も楽しみながら作りますし、手伝ってもいただきます。

上村 私のうちは休日が全然違うので、一緒に楽しむというのとは全く晚だけしかないんです。それで夕飯を兼ねて九時までを二人の共有の時間にしております。

西 なにをなさるについても、自分だけの生活でないの

ある。その人間関係を調整しながら、自分の自由時間を活用していくという計画性とか、合理性とかまた技術的な問題を皆さん方よくおやりになっていらっしゃる。それから高間さんは自分の長い人生設計のために、長期的に余暇の時間をなにか計画していらっしゃるということですが、これなんかも考え方としては、たいへん大事じゃないかと思えます。

田中 私はいけ花の先生をするつもりでもうお免状をとっているんです。つとめをやめたら副業にして楽しめるともにやろうと思っています。

大野木 私は自分が会社をやめたらはつきりいって経済能力はないんです。ですから私はいままでしてきた経験をもとにして、生意気なようですが何かを書きたいと思っています。

渡辺 私は旅行が好きなので、昭和二十三年から毎年やっているんですが、それをもとにして紀行文というものを作りたいと思っています。それからこれは四年間の計画なんです、今年の初めから子どもと話し合って、四年後の東京オリンピックを見にくるための経費を補うため、アルバイトに通訳でもやろうと今のうちから勉強しています。四年後に話せるかどうかはちょっと自信がないんですが、計画いたしております。

角田 私は勤務から帰ってきて、一日を楽しく過ごすということを一生懸命努力しているんです。そして毎日、ほがらかに過ごしているんですけれども、途中でやり切れないものが出てくるんです。ときどきぼかんとしたい時間が出てくる。そういうときに二分でもいいからぼかんとしている時間があつたら、私はそれで自由時間として満足しているんです。

西 それはどういう方法で時間をお埋めになろうと、その人その人のおかれた生活の条件でお考えになったらいいます。たとえ二分間でも、ほんとうにぼかんとする時間をできるだけ作るということも大きな意味では、非常にいい精神のレクリエーションにもなるし、肉体のレクリエーションにもなるし、いいことだと思います。それがなんのためにそういうことをしているのか、ということさえちゃんとつかまれておれば、どういうことをなさろうと私は自由だと思うんです。

北波 私いつも思うんですが、自由時間の使い方は、いい意味の子どもにもなり切れるし、おばあさんにもなり切れるし、鬼にもなれるし、淑女にもなれる。あらゆる節度をもって切り換えのできるお母さんになるために、計画を立てるべきだと思うんです。子どもが大きくなった時につまらないお母さんというふうになかにされないために、余

暇時間の使い方を、根本的に目的を持たなければいけないと思っています。

西 グループとか集団の中で自由な時間を使っていらっしやる例として、そういう集団活動で、どういうことをしていらっしやるですか。

上村 私のほうの読書会では、何かひとつのことについて計画をたてて、長いことかかってグループで研究しようじゃないかと話し合っています。

井上 私の場合は書くことが好きな人が集まって「カレント」という雑誌を作っています。

関口 宣伝になってしまいうのですが、私がしている仕事はYWCAの中で、都会に働いている女の人たちが一週間に一度集まっていくつかのグループに分かれて、テーマごとにサークル活動をしております。

大野木 私のほうでもサークル活動を始めて三年ぐらいになったんですが、三年ぐらいになると下火になるんですね。みんなが集まってこないでリーダーだけが踊っているような形になる。それで、一年に一回、サークル発表会を持つというふうにしたんです。

地域の婦人と手をつないで……

西 私のほうから質問を出したいんですが、皆さん方は

働いている婦人ですが、うちへ帰ればその地域の居住人ですね。そうしますと現在住んでいらっしやる場所の問題、それを生活時間の中で、どう考えていらっしやるんですか。

野口 私は鉄筋のアパートの、いわゆる団地族というんですが、人間関係のうるさいところに住んでいるんです。

私のところは自治活動というものがあって、水道料金の値上げ反対運動をしてから、奥さんたちが手をつながないとだめだということになって、家庭の奥さんから働きかけ、私たちも入れていただいて話し合いをする会ができております。私たち働いているものは、普通の日に話しかけられると困るので、日曜の午前中は一緒に草取りをする時間が一時間きまっているので、そのときとか、緊急な場合は招集がかかりますから、階段の下で井戸端会議のようなものを作るわけです。いまのところ私も住宅の奥さんたちと話し合う会を作ってやっております。

西 その場合、あなたが奥さんたちの中へお入りになっていらしたんですか、それともあちらからの呼びかけですか。

野口 作ったのは私と学校の先生と、もう一人奥さんと三人が中心になったんですが、やはり働いているものが中心になって引っぱっていくのは、会の運営上非常にまずいものですから、中心になるのは家庭の奥さんというふうには

おぜん立てをしていったら、家庭の奥さんたちがよく動いてくださる。私たちが、招集日なんか前もって希望をいっておきますが、家庭の奥さんが日曜の九時から十時とおっしゃれば、その日は少々の事があってもやはり出ていて、一緒に草むしりをしながら話すというようにしております。

西 私がかがたいのは、いま野口さんから非常にいい経験をうかがったんですが、私は働いています、私は職業婦人だからとうっかりしていると地域から取り残されてしまう。地域から浮き上ってしまうわけです。けれどどんなに働いていても、何していても、自分はあくまで地域の住民であるということから抜けることはできない。どこかで積極的になにかなさなきゃならない問題があるんじゃないだろうか、ということです。そこで団地の話なんです。が、階段の掃除がいつでも問題なんです。ひとつの階段では共稼ぎの奥さんがいらっしゃるが、全然階段の掃除をやらない。そうするとたいへんな文句が出る。もう一つの方の階段は日曜日ごとに共かせぎの奥さんが掃除する。そうするとせっかくの日曜日のお休みにそんなにお働きにならなくてもいいからというので、家庭の奥さんが同情して私たちがしますからといってくださった。これは階段ということ具体的な一例ですが、やっぱり地域社会の問題ということ

は、非常に大事だと思うんです。基本的には自分がその地域の住人であるということで、ひとつの責任も義務もあるわけですね。それをどうやって解決していくか、始末していくかという問題ですね。

渡辺 これは私自身のことじゃないんですが、ある奥さんがお花の先生で、常会があってもその奥さんが出てこない。すると皆さんいわく、あの奥さんは忙がしい忙がしいというけれども、自分は金もうけをしてるんじゃないか、というんです。私の義理の姉は共かせぎの先生で、勤め場所とは二時間ぐらいかかるところにやらされた。そうすると常会なんか全然出られないもんですから、姉自身も苦しみまして、常会なんかのお茶菓子とか、そういうものは全部自分に負担させてくださいということ、いくらか責任を逃がれているような感じです。

田中 私の場合も勤めているので近所の人は、向う三軒両隣りぐらいしか顔を知らない。月当番なんか何も知らされてないで、いままで隣りに月当番の札がさがっていたのが、私のところをとばして移っていく。私はそれを町内に聞きにいったんです。そうしたらあなたは勤めていて子どもさんもあるからと思って抜かしたというんですね。でも私とすれば、私がいまに楽になったら当番をしてもらうからという了解のもとでならいいけれども、そうでなく飛

ばされたらさびしい、のけものみたいだから相談してくださいといったんです。そうしたら皆さんの中にも内職をしている人がいて、私たちも変だ変だと思っていた、外に出ている人ばかりを抜かして、不公平だと思っていたというんです。話し合ってみると、あなた方のこともわかるし、いまにやるという約束があれば抜かしてあげるということになって、私は勤めをやめたら順番にするという約束で、いまの場合は皆さんがいい工合にしてくださいなんです。

角田 いつも協力しないから知らせないでおこう、そうするときはびしくなって、入れてくださいというだろうという。私はどうかというと、ものすごく忙がしいのでいかないこともあるんですが、いかれるときは二分でも三分でもくつをはいたままのり出して、そのあとは時間がないからあとから聞くからということにして、一応は出ていくんです。道掃除なんかでも出られないから、お金でも出しますといいますが、あなたは勤めているんだからいいんですよ、といってやってくださるんです。

新里 地域の方と手をつなぎたいということをとでも思っているんですが、私のところにはそういうサークルもあるらしいんですが、まわりの方を見ておりまして、個人の生活を妨害するような人もいない、他に干渉しない方のほうが多いんです。けれども私なんか働いていてお手伝い

さんがいなくて困ったとき、たいへん親身になって考えてくださるんですね。井戸端会議的な無駄話じゃなくて非常に要領よくお世話くださるんです。そんな感じの方が多い。そういう方たちと、なにか手をつないでいったらいいんじゃないかというのですが、その方たちは、あまり外に出たがらない。干渉されたくないし、しないしということ、話し合いの理解はあるけれども余計なことには出ないというわけです。ですからサークルというのを作ろうと思っても、できないんじゃないかしらというふん囲気を感じています。

大野木 私の母は、朝六時半からつとめに出かけるんです。帰ってくるのが午後七時過ぎです。母は婦人会の会議などのぞくひまもない。母は地域の人たちと話し合ったりおしゃべりする時間を持っているか疑問なんです。

西 それはほんとうに自由時間を持ってないという長時間労働の方もたくさんいらっしゃるのです、どの人もこの人もひっくり返して話をするわけにいきませんが。私が聞きたいのは、往々にして、私は働いている婦人だからといって働いていることが特権みたいに考えているというふうな批判もあるわけで、自分は職業婦人であると同時に地域の住人であるということをお忘れないうちに考えていかなきゃならないですね。余暇時間を、ああしたい、こうしたいというふ

うないろんな欲求があるならば、その一部に自分は地域の住人であるということを考えて、どうすればいいかということは、それぞれの地域にもよるし、住み方にもよるし、その方の持っている職業にもよると思います。そのことを最後に忘れないで生きていくことも大事なんじゃないかということ。私は聞いてみたわけです。幸いにして皆さんはもちろんそれをお感じになっただけで、心強い限りです。

そろそろ時間のようですが、一昨日からきょう、朝から晩まで話し合って、まだ話も足りないところがいっぱいあると思います。くれぐれも申しましたように、ここへなにかひとつきめていかなきゃならないということは何もないので、いろんな話の中で自分自分で、これだあれだというふうにおつかみくださるのがいちばん大事なことで、じゃないかと思ひます。

予定の時間がこれで終るんですが、皆さん一日半、はたしてどういふ感想をお持ちになったかわかりませんが、残された問題もあります。たとえばどの問題にも共通なことは経済の問題というものが解決しなければ自由時間を活用するためにも、自由時間どころじゃない。せい一ぱい生きてゆくために毎日毎日働いている方たちも世の中にはたくさんいるわけです。ですからまず時間を自主的に設計す

るためには、生きていけるだけの経済的な基盤とか背景がなければなかなかそういうことはできない。また自由時間を生み出したとしても、その自由時間を活用するためにはレクリエーションにも金がいる、本を読むにも本を買わなきゃならない。子どもと一緒に楽しむためにはテレビも買わなきゃならない。家事の合理化をはかるにしても何をやるにも、経済問題が大きく入ってくるということは忘れてはならないと思うんです。しかしその問題を、どうしてみんながそういう経済的裏づけを持つことができるかということになれば、これは、一応政治の問題ということになります。それを今後少しずつでも解決していかなければ、われわれの問題はどうていどうにもならないのだと思うんです。

しかしここで特に強調し、お互いに考えていきたいことは、あくまでも時間という問題を角度にして、私たちの生活がいったいどうなっているのかということ。いままで、あまりにも考えないで暮らしてき過ぎたんじゃないだろうかということ。この自分の生活の青写真というものを作ってみることがまず第一であり、それができたら、どういふふうにかこれを合理的に設計していくか。その結果自分の生活がどういふふうに変化していくだろうか、また自分たちはそこでさらに何をしなければならないか、という問題

を考えていただくことができたならば、それだけでたくさんだと思います。日本の社会の中にある時間というものに對するいろいろな不合理な、あいまいな考え方を訂正して、まず、ある程度の合理性というものを身につける。いまままであまりにもなさすぎた合理性というものを改めて身につけて、そこから自分たちのおかれた諸条件を改善していくという、その一点を、どうぞ皆さん方お帰りになってさらにお考えいただき、またさまざまな具体的な解決方策のための運動のあり方というものを、それぞれ工夫していただきたいと思います。

長い間ご協力くださいまして、ありがとうございます。

第三部会

出席者

宮城 茨城 神奈川 福岡 岐阜 静岡 愛知 三重 兵庫 奈良 山口 香川 熊本 大分 リーダー 特別オブザーバー

三浦	古川	森川	蟹本	近藤	大橋	佐橋	荒井	岡田	水谷	安倍	鈴木	橋本	富永	塚本	石井	佐藤	下山
ミチ	カチ	満枝	久江	美智	いね	八春	春サ	アサ	靖美	喜美	清子	ふえ	美津	本哲	あや	光子	金子
(無職)	(無職)	(旅館経営)	(無職)	(無職)	(無職)	(行商)	(無職)	(商業)	(商業)	(洋裁店主)	(無職)	(商業)	(無職)	(東洋大学教授)	(婦人民主クラブ)	(YWCA)	(全国地域婦人団体連絡協議会)

社会的な与論を盛り上げる

塚本 「生活時間の自主的な設計」ということですが、今日西さんがちょっと指摘されましたように、あくまで問題は自主的な時間という基本的な課題について考えてみることで、単に時間割をどう設計するかということばかりではなく、一つの哲学ともいえるべき根本について勉強しなければならぬと思うのですが。そういうことを腹におきながらできるだけ具体的なことを今日話し合っていきたいと思っています。

鈴木 私昭和二十年から農村へ疎開しましたが、農村に住んでおりますと、冠婚葬祭のお手伝いとか神社の清掃奉仕とか病人代参とか、そういう用事がたくさん飛び込んできます。それで、それらのない日を一日大体自分の仕事のやりやすいようにと思って計画を立ててやっているのです。それを簡単に申し上げます。朝は大体五時四十分起床します。六時三十分ごろまで身仕度とか洗面とか炊事、にわたりの世話、七時ごろまでに朝食をすまし、七時半ごろまでに食器洗い、あと片づけをし、八時までに簡単な用事をします。大体四十分ごろまで洗濯します。九時二十分ごろまで約四十分くらい自由時間を割り込ませて、九時二十分くらいまでは新聞を見ます。九時半ごろから主に洋裁

の仕事にかかるわけですが、十一時ごろ八百屋、魚屋が来ますから、それ以外の買物は主人が会社の購買部から買って来たり、子どもが自転車で隣の町から買って来たりして、私が買物に走るということはありません。十二時に二十分ほど食事にして、ちょっと休んでまた仕事にかかります。この間に洗濯を取り込み、アイロンかけという仕事があります。大体五時二十分くらいまで仕事をしまして、夕食の仕度にかかり、それが六時三十分ごろにすむわけですから。七時ごろから約一時間くらい食事のあとの団らん、それから八時半までがあと片づけ、九時に入浴となりますけれども、入浴のない日は自由時間に入ります。九時から十時半まで一時間半の間は解放された、なにをしてもいい私の時間になるわけです。お花を生けたり読書したり、手紙を書いたり、文集のように文章を作って書いてみたり、勝手なことをしているわけです。内職の話ですが、造花などを作っておられる方は授産所に行きましても機械を使っているのですが、家庭に帰ってする方は手作業になるために夜まで一生懸命やってやっと二千円程度にしかならない。そういう方は、自由時間を持ちたいからといって自由時間どころでなく自分のからだを休む間もない。子どもさえも見えてやれない。そういう中でどうしたら自由時間を

持てるかということになったのですが、社会的な与論を盛り上げて、仕事も楽にできるように、はたの方もまたその方々も同じ境遇の方と話し合って、自分たちが少しでも楽になるようにしたらいいという話が出ました。

家事の合理化

塚本 目安ですね……。それじゃ四国がすんだのですから北へ飛んで宮城県の三浦さん。

三浦 私どもの地域の中年の婦人が九人でグループを作っております。月の第二金曜日に持ち回りで会をしております。身近かないろいろな生活問題とか、子どもの教育の問題時事問題という話し合いをしたり、それからときには作文を書いてみるという小さな会なのです。それが婦人会議のテーマが出ましたものですから、二月に集まったときに、私たちも生活時間や自由時間のことについて話し合いをしてみましたということになりましたが、家庭生活では、家庭婦人の時間と申しますものは、うっかりすると十二時間労働にもなりかねない。それにはどうすればいいか、結局は家事を整理して合理化するより仕方がないじゃないかということになります。

自由時間ということを社会的なことに結びつけて、社会奉仕をすることはもちろん大切ですが、私ども婦人

が自分の楽しみということ、精神のよりどころになることがなくちゃいけないのじゃないか、それがあつたために家庭生活が明るくなるといふ面も多いのじゃないか、という気がいたします。

なつとくできる暮らし

富永 私は洋裁の内職をしております。朝から晩までミシンに取りついていとお金の方はもうかると思いますが、それでも、それじゃどうも私にとってはもの足らないといひますか、第一仕事の情熱がわいてまいりません。いちばんウエイトをおくのは子どもの教育のこと。次に一日のうちでなにをいちばん先にしなければならぬかということ、私のところは母子家庭ですから、その経済的なことからどうしても仕事にたくさんさんの時間をとらなければいけないということですね。第三番目には私がいろいろの楽しみ、趣味を持っていくことです。大体一日に十二時間くらい洋裁していると思います。読書もほとんど毎日しておりますけれども、それはやすむ前にすることもあつたし、それからラジオで娯楽番組を私あまり聞かない方ですので、婦人の時間の終つたあとでちょっと本を読むということがあります。こういう女の暮らし方があるといふ一つの見本だと思つて皆さんに見ていただきたいと思うのです。

内職グループをつくる

古川 私の方は、婦人会の中の婦人学級の中でもって、生活のいろいろな暮らし方のお話し合いをした結果、内職グループができましたので、それについてのお話を申し上げますと思います。幸いに、私の方の県庁の中に内職職業補導所というのがありますので、そこでいろいろな職業、内職を幹旋して下さるといふパンフレットがまいましたのでそれをきっかけに、内職の幹旋を願いました結果、子どもの雑誌の付録を作るようになりました。その子どもの雑誌の付録を作る労働日数というのが、ちょうど一ヵ月のうちの二十日間になっております。十日間は結局自分の自由な日数でもって家庭整理の時間にあてるといっても条件がいいように思いました。その二十日間、労働日数を十分生かしていくためにどういう時間をとった方がいいかというので、お互いで話し合いました結果、一日に八時間は内職の時間にあてようということになりました。寝る前の三十分から四十分の時間に洗濯をしてしまう。つくろいもののようなものはあいている十日間のうちに整理してしまおう。とかく内職しておりますと、でき合いのものを買って来てはこれで間に合せようということで、偏食に陥りましては結局家庭の生活の破壊になりはしないかというので、

それには簡単なそうざい料理をお互いに工夫しようというわけで、一品料理の研究に入ったわけです。掃除などは家庭全員でもって責任分担しましょう。こういう内職をやってまいりますとかく子どものしつけがなおざりになりますので、そういう点に特に気をつけます。八ヵ月間ずっとやり通したのですけれども、まずよかったと思うことは、グループが月に一回ずつ集まってまいりますので、お互いがほんとうに親密になっていったことです。

塚本 収入はどのくらいになりますか。

古川 大体最高が月に三千五百円くらいですね。

岡田 ただいまの方の話ですけれども、子どもの雑誌の付録を編集なさるお手伝いとすれば、相当ものをお書きになるとかそういうグループでなければできないお仕事ではありませんか。

古川 私たちが構想するのではなくて、雑誌の付録の見本が雑誌社からきますので、それを組み立てていくという仕事なのです。

鈴木 香川で謄写印刷の内職をしておられる方は、忙しいときにはものすごく忙しいのに、切れたときにはぶつんとひまになって困るという声がありました、そういうことがありませんか。

古川 付録が年度がわりとか四月の増刊号のときには山

のように来まして、現在のようなときには冬枯れで、ほとんど手があいてしまうのです。グループが二十日働けるものが、五日か一週間ですんでしまう場合がある。そういう時のつなぎと思ひまして別の仕事をいただいて今やろうとしているのですか、そうすると東京からの仕事と違ひので、仕事の賃金がうんと違ひてくるのです、東京はブがいのです。

森 私、二つばかりききたい事項があるのですが、一つはお仕事をしている場所は一カ所でいるかどうか、もう一つはお互いに健康に留意して、食の生活について一品料理を作り上げる、そのことは近所でどういうふうにやっていますのか。

古川 仕事は私が責任者になっておりますから、私のところに一度にどおと持ってくるのです。そうするとグループが二十人ほどおりますから、五人づつのグループが四つに分かれる、その中に責任者がおりますから、仕事が来たらその四人のところに通知して、その四人の人がグループの人に通知して、みんなが取りに来て各人の家でやっております。

食べもののほうは、たとえばこういうものをしましゅうねといひましても結局は各自のふところの台所だと思ひますので、のぞきに行くわけにいきませんが、そういうこと

を頭において気安くやりましようといひことで、それを実施しているかどうかといひことはわかりません。

年寄りと若い者と

橋本 私のうちは商売が魚屋ですので、主人の兄弟が五人と自分の子ども三人それにしゅうと、使っている人が四、五人おる大家族なんです。その中で私は結婚して十年くらいになりますけれども、その時分のことを申し上げますとちゅうどサマータイムがある時分でしたから、朝起きるのが五時で、今でいうならば四時に起きていたわけなのです。そうして四時に起きてご飯をたきます。主人がそれを食べて市場に行きます。主人の理解さえあれば大がいのことはやっていけると思ひて結婚したわけなのです。ところが、家族制度の中に板狭みになって、夫の愛情なんといひうものは手も足も出ないようになるわけなのです。仕方がないから主人と二人実家の母のうちで二年ばかりくらしました。主人の父がなくなりましたので、今の家にもどりました。二年も別居しておりました関係でしゅうとの方もし折れるようになり、どうにか円満にいつておりましたけれどもとにかく年寄りと若い者といひうものはどうしても溶け合ひないところがあります。二年前から附近の奥さんたちが集まって夜一カ月に一回の会合を持つようになりまし

た。市の社会教育課から少し補助がありますから、そこに頼んで講師を呼んだり、自分たちだけで子どものことと自身の回りのこととか話し合いました。今までなんでもこらえて風波が立たないようにして来たということが、結局は間違ひではなからうかと思ひ始めたわけなのです。それでしゅうとに今までただはいはいといっていたのが、ときどきは反ばくの一つもいうようになりましたのも、その会合のおかげだったろうと思います。グループの集まりによって、自分の意見をいうような習慣が家庭にも持ち込まれて、自由にものがいえるようになったために、ちょっとそこにトラブルが起こったりしましたけれども、かえってそのあとにはお互いに年寄りも反省するし、若い者も、母はそんな気持ちでいったのだなということを感じたりすることがあったりして、そのために円満になりました。

塚本 なにかお聞きしたいことがありますか。大へん勇敢に自分自身というものを考えるになって、非常にいいと思うのです。

橋本 それから時間の問題ですが、結局商家も農家も同じで、ひまがあってもそのひまを自分のものにする自由さがない、ということがとても損なのです。新聞を読みたいと思っても、新聞を広げて読むというと「新聞読むひまがあったらちょっとはわき掃除なとするとよかたい」といわ

れたりしますから新聞などは、食事するときくらいしか読めないわけです。

従業員と主婦

森 観光地ですので、婦人会の会員と申しますと、旅館をしている人、みやげもの屋さん等がかなりあります。毎年冬になりますと婦人学級をするという習慣があります。三月の声を聞くと忙しくなり、十月、十一月まではとてもいろんな婦人会の活動などいうことは持てないので。婦人学級を一カ月に一回しますのに一日三時間ずつ一週間に二回時間を生み出さなければならぬ。大体お客様が平均して十時くらいからいらっしゃいますから、朝の食事の時間を九時まで片づけてしまう。そうすれば生活に区切りがつくということです。夜の時間は大体六時くらいにはお客様が途絶えて少なくなつてまいりますから、それから食事、家族の団らんということで、大体九時までには夜の時間も終つて、九時から以後は、主婦の時間としてなにか自由の時間が共通に考えてとれやしないだろうか、朝は九時ごろまでに片づける、夜も九時までに片づけるということで、この婦人学級を進めるについて私たちは「九時まで運動」という標語のもとにこの冬を過ごしたわけです。

岡田 家族と従業員が同じ屋根の下での生活ですと、そういうところでどんなになるかしらというのが悩みの種の一つなのですが、なかなか従業員との間がむずかしいでしょうね。

森 三つあると思うのです。私の申し上げる立場が自分の主婦としての立場とお客さまに対して商売としての立場とそれから使っております者の立場と、それを分けて考えました場合に、私どもが婦人会で話し合った限りでは、主婦の立場としての、まず自分たちの家庭生活を商売の生活と一応ダブらせないような形に持っていこうという意味において、九時までに整理しようというわけです。

安倍 私、子どもはおりませんが、夫婦で小さい洋裁店を経営しておりますから職業婦人でもあるわけです。まず職業労働時間をどうやって縮めようか、お休みをどうやってとろうか、使用している人たちにどのような自由な時間を与えようか、ということです。いぶん考えておりますが、私どものような商売は家族の者が協力してくれませんか、なかなかできないわけです。今のところ仕事の時間中はラジオの読書の時間、婦人の時間とかを聞きながら、みんな一緒に仕事をします。夜は一応六時までに仕事を切り上げて、使っている人は帰ってしまうものだから、自分の時間が持て、映画にも行けますしいろいろできるようなに

りました。

塚本 ここらで半分終りましたので、出席くださいました特別オブザーバーの方にちょっとご感想をうかがいたいと思います。まず最初に婦人民主クラブの石井さんから。

家族の協力

石井(婦人民主クラブ) 私は女の方が時間を生み出す場合には、やはり家族の協力がなければできないということ、お子さまご主人さまの考え方をどういうふうに変える教育をしているか、ということがお話の中に出て来てもいいと思います。先ほどお掃除分担というお話がありました。が、お掃除やお皿洗いは女自身の中にもあります。男の考え方の中にも相当抵抗があります。それを覚えていかなければなかなか実現できないので、その点お話が進みませんでしたことを残念に思います。

塚本 今お話しいただきましたことは大へん大事なことです。が、十五日の討議の時間にどうすればいいか、どういうふうはこの男性飼育法を試みていられるか、その点をひとつ皆さんで討議したいと思います。

蟹本 さきほど橋本さんのおっしゃったように両親を持ちますと、家族関係の中では誠意だけでは通じないということに身にしみて十年苦勞してまいりましたし、家族の協

力がなければということとは毎日毎日それを痛感してまいりました。私は結婚して十五年、三人の子どもがおります。新聞を読むひまがあったらといわれるのは農村や商家だけじゃないのです。今になってふり返れば、腹も立ちません、おばあちゃんのいうことはやっぱり無理がないということがわかるのですけれども、それが非常につらいのです。子どもを育てていまずときには私もひまがあるわけがないですね。家庭菜園などもしてありましたし、明け暮れ忙しくすごしていると、本を読んでのんきにしているひまはないのです。けれども、その中のたとえ五分でも十分でも本を読んでおりますと、そういうことをすべきじゃないというふうにもものすごく罪惡に思っているのです(笑)。それを自分の犠牲によって円満に保っていかうということまでどこまでも続けてまいりますと浮ぶ瀬がないのです。子どもが大きくなって学校にもまいります。私も子どもを自主的に生活できるように教育しているつもりですけども、それがほんとうに願ひ通りの自主的な子どもになったときに、私にはなにが残るかしらと思います。おばあちゃんが昔からのしきたりの中で主婦としてせいっぱいに過ぎして来て、おばあちゃんになに残っているか、年寄りと一緒におりますとほんとうに拘束されることもあるし、自分がなんと無意味に送って来たかということを考えます

が、その反面自分の人生設計をもとに考えることがあります。二、三年前に私大決心をしました。自分さへ犠牲になつていればいいということを、少し変えようと思ひました。今本を読んでいます。何時になつたら仕事しますからね、といって、私自身の修養のためにも時間をとるようにしました。私は手袋の毛糸刺繡の仕事をしておりました。その仕事にとりかかってみましたら、何度もお話に出ましたように、内職のいろゐるなむずかしい面が出てくるのです。内職の仕事が一週間でしたら、三日ほどは内職に昼間七、八時間を当てることにして、あとの三日ほどは家事のしわが家族に寄らないようにしてきました。お昼休み一時間は必ず休ましていただきます。鍵をかけて昼寝します。本を読みたいときは鍵をかけて一時までは好きな本を読んでもります。うちの年寄りは八十近い年寄りですから、本を読みますとなんたることかと思うのです(笑)。けれどもそういうことに負けないだけの氣持を作らなければと思つて、強引にやって来たのです。このごろなんともいいません。そうしているうちに、市役所の調査員の仕事を分けていただくことができました。パートタイムの仕事ですが、自分自身のためには思いやり始めました。月に一回は短歌の会に出かけますし、PTAの仕事も、役を持ってくればどんどん出かけてまいります。本もどんどん読むようにな

りました。子どもが成長したあとで脱け殻にならないためには、いったいなにが必要なのか、そういうふうなことを教えていただきたい。社会のために仕事をしたいと思ひ点訳をしたいと思っています。それには習いにも行かなければならないし、ある程度の時間をかけなければいけません。これをやるために無理をせずに入っていくには、どういうふうに調節していったらいいかと考えております。

岡田 おしゅうとさんがやかましいようですけれども、やはり一つの誇りを持っていらっしゃるから、奥さまのそれが実行できると思うのです。

鈴木 私の地方でお話が出ました場合に、若い娘さんが電気洗濯機なんかいらぬ。洗濯機を持っていったためにほかのお仕事に追いまくられる。なんかやって働いているという体裁を作らないと、怠けているようにとられるらしいのです。古いしきたりのために、どうにもならないという場合がずいぶんあるのです。

塚本 それが十五日の討論の問題に出ると思いますけれども、どうにもならないぎりぎりにおいてめられた意識のなかから、それを越えて少しずつ変えていこうという、そこに自主性の問題が生まれてくると思います。

水谷 私たちの町は、五十軒を中心にして、そのまた両わきに三十軒ずつの商店街のずらっと並んだ小売業者は

かりの通りに住んでおりますので、主婦は忙しい忙しいの連発で、自由時間というのを申し上げてもそれがどういう時間であるか、そんな時間がわれわれの身近にあるのか、もう一度胸に手を当てて考えるくらいの生活をしております。晩の閉店まで、心の緊張のゆるむ折がないという現状で、小売業ですからお客さまがいつみえるかもわかりません。お客さま相手の仕事ですから、規則正しく時間割りきめて、臨時に変更、また突発的な用事ができるということは毎日のことです。主人の協力とか、家族の協力、特に主人の協力がなければ自由時間というものとは絶対に生み出せません。午前中に主人が会合に出る場合には、主婦はその時間にうちの片づけをしてしまつて、店番をする。昼は店員の食事と、その後の休憩時間を含めて一時間ほどはどうしても店番をしなければなりませんし、午後またまた子どもの教育などで学校の会合の時間と主人の会合の時間がちがった場合には、主人と十分な協力の上に、どちらかが辛抱をして店番をするとか、二人とも外出する場合には、店員によくいつけて出るといふふうに、みんなのよい話し合いがあつての上でなければうまくいかないような状態です。日曜、祭日など、人の遊ぶときこそ商家は忙しくつて、お金もうけの大事なときなのです。欲にはきりがなくて、おおよそそれだけすれば自分のから

だに無理をしないで、健康のこと、家族のこと、店員のことに、困らんのことを考えて見切りをつけてやるのが大事じゃないかということは、わかっているのですけれども、やはり商人としての本質で、すぐもうける方に走ってしまうのです。商店街独特の主婦の立場として、営業時間を短縮するという問題を今後運動に移して行ってほしい、という希望が切実に出ましたので、それを町の男の役員方に話しましたところが、ちょっとでも早く開けて遅くまで商売をするというのなら賛成だが、営業時間の短縮とはなにごとだといわんばかりでした。ただ時間を長くしたらと店を開けていても成績は上がらないと思いますから、去年から実施された毎月一回の定休日をきめられたときと同じように、もう一度よく研究していただきたいと、熱心にいました。そのときつくづく、他の職業に比べて商店の方の考え方は封建的な面が多分に残っているように思ったのです。営業時間の短縮という問題は非常にいろんな問題とからんでおりますので、先生方に教えていただいて、今後あまり摩擦なくうまく進めていただく方法をご協力願いたいと思います。

塚本 皆さんで話し合いましょう。

森 私の方も同じような状態です。私たちはとにかく忙しい忙しいと二言目にはいいいますが、時間調査をしてみる

と案外そうじゃないのですね、四時間くらいは自分たちの時間があるようです。その時間をどういうふうに過ごしているかというところに、商家の主婦の問題があると思うのです。だからその時間の使い方をもう一ぺん考えてみる必要があります。それに商売を一時間短縮する、あるいは定休日をどうするという問題もからんでくると思います。商売に使う午前十時から午後四時の六時間は一応労働時間として除けるわけです。睡眠時間と労働時間、家事の時間を、二十四時間から除いて広義の自由時間が四時間以上あるわけです。

塚本 いろいろ条件が違うのですね。たとえば店の番をする、いわゆる労働者の形態で人のいる場合と、それから奥さん自身が労働者でもあり主婦でもありしなければならぬ場合と、条件がそれぞれ違うと思いますから、この問題ももっと話し合いたいと思います。これからあとまだ五人残っていられるので、その発表をしていただきたいと思うのですが、その前に地域婦人団体連絡協議会の下山田さんから、ご感想なりお教えをいただきたいと思います。

主人と別居の場合

下山田(地婦連) 私は東京都と申しても、墨田区の零細業者の集まりのところに住んでおりますから、今日の話を

聞いて私にびったりしているような気がいたしました。しかし私たちよりも皆さんのほうがしあわせなのかと思います。三百二十世帯の中の三分の二は家庭工業、小売業者、そのほかのお勤めの家庭はやはり内職をしております。先ほど石川さんも三浦さんも、内職をなさる時間を五時間なり八時間ときめていらっしゃいますが、私の地区などの内職の状況を見ますと、そんなわけにまいません。お金がほしいということよりも、やはり仕事を出すところのおうちでそれだけの理解をしていただけません。この仕事は何時までというので日限を制限されますので、夜十一時までも十二時までもしなければならぬときがあるようです。私も家内工業を、ことに輸出の仕事をしておりますので、自由時間を作るということは今の社会環境では非常にむずかしいと思います。私も婦人会の方と話し合って、人のうちを訪問する問題を取り上げて考えてみました。週に二回くらいときめてもなかなか実行できません。昨年あたりは、午前中は人のうちを訪問することをやめて午後からにしようということにいたしました、これは効果があつたと思います。それもやはりいろいろの用事があって、自然とお流れになったような状態です。なかなか洗濯機も求められない、電気釜も買えないという状態で、やはり家事労働に非常に皆さん追いまわられている状態です。皆さんから

いろいろ自由時間を作る問題についてのお話し合いを聞かされて、オブザーバーという立場でなくて、非常に参考になったというところで感謝している次第です。

塚本 どうもありがとうございます。引き続きまして岐阜の近藤さんをお願いいたします。

近藤 私は教師の妻で、主人が転勤することになりましたので子どもの教育のこともありますので、いろいろ相談の結果、主人と別居してくらすことに踏み切り、四月、五月はなんだか夢中ですんでしまったわけです。二ヶ月過ぎてみますとやっぱり二重生活ですからすぐ赤字になってしまいました。そこで私は編物が好きで、編物機械を持っていたものですから、とにかく赤字を埋めなければならぬというので、くる日もくる日も編物一点張りです。二ヶ月過ぎますので、やっぱり十二時くらいまで続くことがありますが、からだもこわしてしまいましたし子どもたちにもいろいろ無理をいったりしますもので、うちの中の空気が変なふうになってしまふ。具体的に申しますと五千円くらいはどうしても足りませんので、そうしますと一日六時間から七時間編物をしなければそれだけの収入は得られないわけです。睡眠時間を減らすことも考えものだと思ひまして、八時間はどうしてもやすむ、いくら少なくとも七時間はやすまなければいけない。洗濯とか掃除とか食事の仕

度、そういうことなどもなるたけ子どもたちに相談しますと子どもたちはそれじゃこんなこと僕がやってみよう、私がやってみようといういろいろ出してきて、食事の仕度なども子どもたちが、一週間ずつ交替で簡単な夕食などは作ってくれます。そんなふうにして、自分の自由になる時間が、三時間から三時半くらい出てきたわけです。市の連合婦人会の中に「映画友の会」というのがありますので、映画の鑑賞をしたり、婦人学級に行くとか本を読んだり、夜は子どもたちと一緒に日記をつけたり、子どもたちが大へん作文が好きなのですから文集みたいなものを作ったりして案外自分の時間というものがなくなる場合がありますので、そういう場合には、編物のちょっとした靴下とか手袋とか簡単にできるようなものを作っておいて、やりながらお話し合いました。

一週間の月曜日はお洗濯をしたり掃除もていねいにするようにしております。火曜日は洗濯、つくりもの、アイロンかけ等を昼前の二時間でやっています。水曜日はやはり洗濯をして木曜日は家の中の整理ガラス拭き、金曜日は買物などのために外出したりしております。ないときには自分の時間にしております。土曜日は大抵主人が帰ってきますので、夕方からはなんにもしないで主人と話をした

り、本を読んだり子どもと一緒に輪読会のようなことをやって楽しくするようにしております。日曜日は午前中はうち中で分担して掃除をして、午後はどこかへ出かけるとか、主人がいるから、そのときはなにもしないようにみんなどで楽しくするようにしております。

塚本 今度は岡田さんのお話をうかがうことにいたしますようか。

小売店の主婦の場合

岡田 私が学校へ勤めたり、主人がサラリーマンだった、失業などにも会いました、いろんな事情で小売業者になって、現在バター、ミルクそんなものの店をいたしております。ちょうど満九年ほど前のことでして、五十に手が届くくらいになってから私の人生、生活のやり直しを始めたわけです。商売を始めたため、いちばん問題になりましたことは子どもの勉強をみてやれなくなったことです。それから大きい子どもは、数人の従業員と一緒に生活をして、いるために、自分たちの家庭は家庭でなくて合宿所だというふうに考えて、私にぶつかってくるというようなこともありますし、主人は性格上仕事をやり出したら時間もなにもありません。そういうことで、家族的生活がすっかりこわされたような感じになりましたが、商売のために家庭と

いうものにひびを入れないうに苦心をいたしました。農村出身の青年を幾人が預かっていますが、青年たちが都会の悪い風潮にしみやすくなるのをどういうふうにしたらいいか、また預かった青年の将来の問題などどうしたらいいかという問題があります。わずかの退職金と、株とで始めたお店なのに、五十万円の損失をこしらえて資本金にくだんで実に辛い思いをしました。しかし小売店の主婦の立場からしますといちばんの問題は、営業時間ということですね。朝六時に起きて七時から八時まではいろいろ準備があつて、八時から店に出て夕方五時まで働きます。あとは家事と自由時間というふうに、大体しています。眠る前と朝目が覚めて六時から七時までの一時間だけを本を読んだり、ものを書いたりする、そういう勝手な時間にしました。

自転車の上の自由時間

大橋 私には昭和三十年から和裁の内職をいたしておられます。四年前内職をはじめから一年して、どうも夜なべがからだに影響するのじゃないかといつも感じていました。私のほかにも二人ばかり内職しておりましたけれども、町の八百屋さんなどで行き会うといつも青い顔をしておりますので、私のことだけでなくその人たちのことも非常に心

配になり、機会あることに道などで話し合い夜なべをやめましょうというお話にだんだん進んでまいりました。呉服屋さんの方でも私たちが需要にに応じてこしらえれば多く売れるわけですから、私たちにいつまでも長続きしてもらいたために私たちを大事にしてくれることがわかったのです。なるべく夜業をやめたいということを話したのです。その主婦の方も年輩が私たちと同じなものですから、お話ししたらわかったわけで、今までより少しづつを増してもらったわけです。成功の結果として、そこに自由時間が生み出されたわけですけれども、そのために一人の方は去年一年は婦人会の役員をいたしましたし、もう一人の方はお針子さんをおけるようになっていきます。

佐橋 私は行商いたしております。終戦から十年ばかり私が経済的にはほとんど全部背負っております。現在もその半分以上背負って家庭をやりくりしております。私の家は、戦争前、毛メリヤスの製造卸をしていましたから被災してからも運よく疎開しておいた五ダースばかりのメリヤスをお米とかえたりするうちに行商という生活手段をおぼえていったわけです。行商ですから天気の良い限り、朝から晩まで自転車で乗って外を飛び歩く、途中で皆さんが休む時間が私にはかき入れです。一日二十キロから二十五キロ走破します。自転車の上が自由時間なのです。いろいろ

なことを計画したり、歌のことを考えたり。終戦のごたごたの最中に婦人会長の役をもってこられました。会員の方に自覚がない、婦人会というのは会費を納めるだけで勉強するのでもなんでもない、こんないい組織を盛り立ててやっていかなければいけない立場にありながら、無関心だということに気がついて、一生懸命商売がてら夜全部婦人会のことをやったわけです。そうして疎開者としての孤立化からつながりができてグループ活動に進展していったわけです。現在も自由時間でグループ活動しておりますけれども、グループ活動に熱中していること自体、子供の教育に非常にプラスになります。商売を放ったらかしてグループ活動をやっても気持が悪いのですが、商売を得心がいくまでやってグループ活動をやったときにはとても気持がいいものです。

蟹本 今のお話をうかがいまして、やることを十分やってから自分のことをするとほんとうにいい気持だとおっしゃった、あれは一つの解決だと思ったので非常にいいことだと思えます。

塚本 ただからだの問題、私も健康なので、少しむちゃをするのです。それはほんとうの健康に通ずるニーアンスかどうかということはもう一ぺん考えなければいけない、どうぞ自重してからだを大切に。

共同浴場で本当の意見

荒井 皆さんの話を聞いていてずいぶんうら淋しくなっていて、自分自身のことや周囲のことを眺めるとなんか全然違った私たちの地域の状態のように思ったのです。それは皆さんが割り合いに経済的に恵まれてみえるし、周囲の方も経済的に恵まれていらっしゃるのですけれども、私たちのところは昔から、私の父や祖父の時代から、地区全体の生活水準が低いのです。今でも農家が二パーセント以外は公務員とか団体役員、会社員、店員というような固定した収入がある人というのは全部で九パーセントちょっとという程度で、あとは雑役、労務、失対、内職にひとしい仕事、それから物品小売とか行商、修理業です。主人の収入が少ないから女も日雇い労働者に出たり、内職にひとしい家内産業に出ています。それで、ものを考えるとか子どもの教育のためにみんなが集まって話し合う機会がありませんでした。それで一昨年の秋から小学校へ通っている子どもの母親だけでグループを作りました。毎月班別で集会を持って教育の問題、生活の問題について話し合っているのです、今度の生活時間のことについても少しの人で集まって話し合いをしました。私自身は主人が小さな鉄工所の工員ですので、私も家事労働以外の時間は内職しております。

なんとかしなければいけないといつて作った母の会やグループの活動は夜しているのですけれども、会員の連絡はほとんど共同浴場で顔をあわしたときに連絡することになっています。お風呂だと案外ほとんどの意見が聞かれるので、それが楽しみでお風呂に行くような状態です。自分たちと与えられた自由時間というのは、グループの活動のことに飛び回って、なるべくみんなが自分の時間というものを考えるようにしていくようにやっていったらいいんじゃないかなと思います。

塚本 なにか関連してお聞きになりたいことがありますか。最後にYWCAの佐藤さんから今日の会議のようをご覧になって感想をいただきたいと思いますが。

一つの目標を持つ

佐藤(YWCA) 長い時間だったのですけれど、皆さんの一生懸命、せいっぱい生きているご様子をとてもよくわかって、大いに反省したり励まされたりしたわけです。私も瀬田最寄会というグループを持っております。その最寄会がいろいろ今まで計画して来たことなどをひっくり返してみても、そうなのだと思いますが、その私の経験を、自分に経験がなければ皆さん方のお話をうけたまわることできないのですけれども、自分が自主的であるということは言葉通

り自分が主人になることで、自分が思った通り自分の時間でも自分のお金でも使うということになります。結局は自分が自分を大事にし、家族も周囲の人も尊重していくという考え方で生きていくことであって、それがお金の使い方、職業の選び方、結婚することについても同じことがいえると思うのです。

私ついでに申しますと家庭裁判所の調停委員もしておりますから、家族関係がすぐに頭にひびいてしまつて、家族との関係はどうなるだろうかということを考えるを得ないのです。それで私は頭に霜をいただくまであせつてみたり怒つてみたりしながらやって来たのですけれども、四十くらいになるまで自分のしたいと思うことを自分で判断するよりほかないと思うのです。同時に自分は自分、人は人で、結局どんな立派な例を引いても人のことなので、自分は自分のペースで歩いていくより仕方がないと思う。一人の一生でも一生の間にいろんなところを通っていくかなければならないと思う、若いときには大きな際限のない未来を夢見て来たのですが、結婚することでもいい意味でも悪い意味でも一つの制約を受けるわけです。結婚して子どもが生まれると子どもが生まれたことによって、自分は死んでしまったというふうに考える人もあるので、このごろ二十代の人が離婚するとき、子どもがほしくないという奥さん

が実に多いのです。そんなときには夫も子どもはほしくないのである人が多く、赤ん坊は実にかわいそうですが、それはずいぶんおかしいと思う。やはり家庭を持ったときには、それに責任ある態度を持たなければならぬ。そうならば由由時間を考える場合にも家族、子どもを育てるということを含めて自由時間を考えると思います。その間は私は育児ということに夢中になって暮らしたので。いろいろ育児の本も見たり自分で書いてみたり外国のものを読んでみたり、楽しくやって来たわけです。そのうちに子どもの手が離れましたので立教大学の大学院に入学しましたら、一年経たないうちに調停委員に任命されたので、大学院の方はやめたのですけれども、私自身の気持では若いときに学校で勉強したことを今でも続けたいと思っているのです。続けられないけれども一生を通して自分に一つの目標を持っているのです。ですから十年も中断していても決して、それであきらめることもないし、捨てたと思うこともない、形が変わっていると思うだけなのです。ただその中にはまり込むと、自分で自主的に判断していくより仕方がないわけです。

私の持っているグループが四十ほどありますが、それを育てるということは、私のYWCAにおける任務の、地域社会に奉仕するということなのです。地域社会に奉仕する

ということも十年前に奉仕したと現在では全然形が違います。十年前には子どもに遊び場もなかったし、子どもたちが林間学校もなかったので私たちは夏期学校を二度続けてしまして、百人ばかりの子どもたちをいろんな先生にお願いして、私のうちを解放したときも近所のうちを解放していただいたときもありますが、もうそんなことは必要なくなりました。また先ほど育児のことに熱中したと申しましたが、私の次男は戦後最高の出生率のときの子どもで、なるほどあのとき育児のことを研究したのは無理もないと思います。またずっとあとになりましてここ四年ほどは、私の住んでいる上野毛商店街に集団就職の少年少女たちが入って来たので、その仕事をしております。月に一回主婦が八時から十時までにその子どもさんたちと一緒に遊んだり、月の一回の定休日に来まることもありましたが、あまり私たちがお世話する必要もなくなったので旧正月のころに「お餅食べほうだい」ということをうちでしまして、八十人ほど店員さんが来て小豆を煮たりお餅をついて貰ったりということを行いました。

一方私は世田ヶ谷区立西小学校の千七百くらいの子どもの会長になることになりました。それも地域への大きな繋がりだと思っております。その前にPTAの規約を改正する委員になりました、その地域の父兄をいくつか

の班に分けたのです。そのために班での活動が非常に活発になり、小学校の中でも班のつながりがPTAの中でしゃかりでできたわけです。そのとき六才の少年が竹槍で突かれるという事件が起こったために、考えなければならぬ犯罪の問題にどうしても地域として取組まなければならぬということになりました。班も、私たちの持っているグループも、私のやっている家庭裁判所の少年審判部も、一緒にやってその問題をやっております。

結局目標がなかったら自由時間なんかあってもなくてもいいと思います。結局私たちはなんのために生きているのか、一生は一つしかないのですから、この一生をどう生きていくのか、それが途中で倒れるかもしれないけれども、なにか生きがいのある生き方をしていくためにお金もひまもいるので、そのためにはそれぞれの工夫の仕方があるけれども、その使い方がわからなければ意味がないと思うのです。今日のこの会には職業を持っていらいっしやる方、家庭で仕事をしている方、商売をしている方なので、消費者の立場から申したいのです。私たちが買物をきまった日にしないから営業時間が長くなるので、実は私二十二日の定休日を含める運動をしたのですけれども、ずいぶん裁判所に行っていて、あんたろくでもない運動するから二十二日に買物に行けなくて困るじゃないかといわれたのです。そうい

われてもかまわないのですけれども、これは社会の啓発に一方的に努力なさっても損するばかりで、婦人が手を取り合って努力すれば休日もふやすことができると思っています。

塚本 皆さんの大へんいいお話をうかがいまして、それぞれ収穫を得られたことと思うのです。それではこれで終りたいと思います。

(第一回閉会)

うらやましい保育園

塚本 きのは移動会議に四班に分かれてそれぞれ参加されたのですが、皆さんの移動会議においでになりました。ご感想を印象の新しいうちにちょっとうかがって、それから会議に入りたいと思っています。どなたからでも。

佐橋 三鷹の保育園に行きましたときに、市長さんのおっしゃった言葉が非常に印象的で、それが心に残りました。婦人に経済の裏づけがなくては男女同権ということはあり得ない。だからこの保育所をやっているのはなにも困った方を助ける意味のものではなくて、男女同権というものの女子の権利を、男性と平等に発揮させるために、やっているのだとおっしゃった、そのことです。それから、女子の方で、赤ちゃんがまだお腹にあるうちから、すでに働

こうという意欲を持ってその保育所に申し込みをされるということをおっしゃったことも、印象に残りました。

蟹本 立派な保育所を見せていただいて、あんなことが全国どこにでもできるようにならざいいだろうと思います。働く婦人の方とわれわれみたいな商売人の子どもも、商売をしておりますとなかなか子どもを理想的に育てるということができないために、手の足りない分を人を雇うことによって解決しているわけなのですが、それが正しい保育知識を持たない人に頼むためにとても悪いなと思うのです。それであんな保育所が小さい町にでもできるようになったらいいと思いました。

それにつきましては結局は予算の問題があると思います。あそこの場合は、個人負担が千五百円となっておりまして、あとは市とか都から出しているのです。けれども、理解のある市議会議員がいらっしゃる場合にはそのような保育所が建つ可能性がありますが、市に予算がない場合もあるし、その予算をほかに回したりして、そういった保育所なんかには予算が回ってこないならば、いつまでもそれは建たないでしょう。個人負担が千五百円に限られているというところに少し矛盾があると思いました。それは法律で定まっているのだそうですけれども、家庭では子ども一人に二千円、三千円すぐかかると思いますから、個人負担を二

千円か三千円に上げるようにしたら、もっとどこにでも保育所が建つ可能性がでけると思います。

塚本 橋本さんのおいでになったのは三鷹の保育園ですね。

森 同じく三鷹の保育所で大へん感心しましたが、特に私も考えなければいけないと思いましたのは、三千五百円を三鷹市で負担可能ということはどういうことだろうかという疑問がありました。それで婦人少年室長さんにうかがいましたら、市長が選挙に立候補なさったときにそれを公約として立候補なさったのだそうです。その立候補のバックには三鷹市の婦人が全部あの先生を推したというような関係がありまして、一人について三千五百円、百二十人の子どもそれに付帯する経費が相当年間にかかるわけですが、その経費を市会で承認するということにはそれだけの裏づけがあったと思います。ことに私たち婦人の立場から考えさせられることは、三鷹市の婦人が先生を推したというところを、ほかの市でも学ばなければいけないと思います。

岡田 私も三鷹の保育所で非常に感激を持ちました。ただいまのお話のように私たちが選挙だけでなしに政治にもっと関心を持てば、政府の力を動かす原動力を私どもは握っているのだということを痛感いたしました。

もう一つ生活改善技術館をみまして、あそこに私の生活に遠いものでしたけれども、二段ベットがありました。私のうちで実行しておりますけれども、あそこのはちょっとズラしてあった。これは帰ってさっそくまねて私のうちの従業員の部屋の一部分だけでもそれに着手しようと思っていい勉強になりました。

科学センターについて

荒井　きのうは神奈川班に参加し、神奈川の三菱重工業の社宅の方々と話し合いをしました。初めにみんな生活に非常にゆとりのある方々のように見受けました。私たちのように生活にあくせくしている者とは、自由時間の本質というようなものの考え方が全然違うように感じてきました。

大橋　私は、千葉班に加わりましたけれども、最初に東京電力千葉発電所にまいりましたときに、実際雑誌なんかで見ますよりも百聞一見にしかずですべてにおどろきました。停電のときには中部電力とか、あるいはその他の大きな電力会社と提携して東京で送電できない場合には、ほかの電力会社がすぐに送電できるような施設になっていることを知って、すべての社会機構がそういったもので成り立っているということを感じました。

水谷　きのうの三菱重工の社宅の方とお話ししたときにあとで感じたことですけれども、実情をもっとよく、お話しをするまでに私たち知識を得ておけばお話し合いができたのに、その間くい違いがあったことを大へん残念に思いました。

安倍　三菱の工場の方たちの奥さんの懇談では、水谷さんのおっしゃったようなことがありまして、社宅の立派な奥さんたちはずいぶん豊かな暮らしをしていらっしゃると思っただけです。ところが、内職をして夫の収入をもう少し豊かにするために、生活のある程度のを助けているというお話も出たので、案外私たちと同じくらいな生活をしているのじゃないかと考えました。それとは別に、日本石油化学と旭ダウという工場を見学いたしましたときに感じたのですか、科学センターというのですが、あの辺一帯にあれだけのものができますと働いていらっしゃる方はほとんどいません。産業がどんどん機械化されていくということになると、働いていらっしゃる方はいったいどうなるだろうかということに隣の方々とお話したのです。そういうことに対しては国の政治と直接つながる問題でしようけれども。

近藤　私安倍さんと同じように神奈川班に行きました。大師橋というのを過ぎると川崎市ですが、そこに入

るととたんに工場がずっと並んでありまして、ほんとうに科学センターに入ったという感じを受けました。石油化学の方はそういうふうな発展しているのに、九州の地方で暮らしていらっしゃる方々の争議の話を聞いたりすると、大分差があるような気がして、そういう点をもっと上の方にも考えていただきたいと思いました。新しい文化のしわ寄せがされていく。ちょうど横浜の港の上から見ますと、はしけで生活していらっしゃる方があったのですが、しわ寄せされた人たちのこともやっぱりもっと考えてみなければならぬのじゃないかと考えたのです。

婦人の力で協同組合

古川 私 は美園村の生活改善クラブの方々と懇談いたしましたときに、ほんとうにうらやましく感じましたことは奥さん方の一年間の現金収入が一年間にバランスがとれるように計画されていることでした。米麦の生産の現金収入の入れないときには、あの辺の市場に苗木を出すやら、あるいは生花を出す、あるいは青果物を出すやらして、バランスをとりながらお互いにクラブのいろいろな運動に当たっていらっしゃるということを知りて、奥さん方の意気込みに大へん感服してまいりました。

三浦 農村の主婦の方の少数の集まりでしたけれども、

その会を持ったためにおしゅうとさんの抵抗というものが、初めにあったらしいのですが、そのお年寄りの方たちの会も持つような運動をして、その会を持つことによってお嫁さんたちも自由に出来るようになったという、それは大へんいいことだと思いました。

富永 千葉では登戸生活協同組合を見学しましたが、そこは大体において俸給生活者の奥さんたちが、婦人の力だけで協同組合を設立し、今なかなか立派にやっています。やるので、全くその努力に感心しました。設立当時は終戦後の物のない時代で、たしかに必要でしたし、またそのためにこそ発展して行っただけですが、今のようない時代になりますと果たしてこれの存続の意義があるだろうかということ、それからもうこれがある限界まで来ているのじゃないかということもちょっと考えました。それからもう一つ千葉にあります農業技術研究所にいきましたが、そこは十萬坪ほどもある広い山あり丘あり谷ありという、緑の樹木の中の大へん環境のよいところで、そこで牛馬や鶏について研究をしているのですが、私がおもしろいと思いましたのは、人工授精の研究でして、これは私ども理論的にはかなりよく知っていますけれども、直接いろいろな器具とか写真とか、研究していらっしゃる先生からくわしくお話をうかがって大へんおもしろく思いました。

鈴木 私も埼玉にまいりました。片倉ハドソンで感じたのですが、昔の女工哀史にくらべますと厚生施設なども寄宿舎の生活、工場の生活も合理化されて、色彩も非常にきれいにされていて、ああいうところで今働いている方はほんとうにしあわせだと思いました。

蟹本 さっきお話が出ました工場などの高度のオートメ化の問題についてです。横河電機でお話が出たのですが、オートメが進めば進むほど技術の専門化が起こってきている。ですから結局女の人も技術を身につけていないと、いつまでも下にはばかり働かされるということになって、立ち上っていけないのじゃないかということです。会社の統計をみますと、二、三年前にくらべてずっと既婚者の割合がふえているのですね。その一方お休みが男の方にくらべて非常に多い。まして既婚者は未婚の婦人よりもまた多い。家庭的な負担がかなり女の人の手にかかっているということになると、それを解釈するためにも、三鷹の場合のような乳児院の問題に、問題がもどってくると思うのです。

三鷹の乳児院でつくづく感じたことは、一票を私が持っているということも少し考えるということです。そうしてきめられた予算の使い方、庁舎を改築するとか自動車を購入するということをしないで、保育所につき込んでいくという考え方のほうに市長さんに立っていただけるとい

ところに女の力があつたということです。私ども一票の選挙をもう少し考えなければならぬということを考えさせられました。

塚本 皆さん大体発言していただきましたのですが、今のお話をまとめてみますと、これは自由時間の問題にも間接的に触れる問題ですが、自由時間を女性がとるためにはやはり社会的な手当というものが必要なんだ、従って大きくいうならば社会体制とかあるいは政治の問題にまでつながっていくのだということを勉強なさいました。

それから非常に機械化されオートメーション化されていった場合に、いったい人がいらなくなるのじゃないか、そういう人たちをどういうふうにしたらいいか、ここには今度経済構造の問題が出てきました。いろいろ考え方がありましょうが、人間がむやみに長い間時間をかけて働けばいいということではなくて、やっぱりそこに適当な労働の配分というようなものがなくちゃならない。しかもそうして所得を分け合つて楽しい明るい生活をしていく。そういう日本を築くということになりますと、社会保障の問題にもからんでくる問題である、そういう点をいろいろ勉強なさいましたね。

それから、まあ細かくは技術的な生活の面もご覧なつたわけです。私は午後だけ東京班の方にうかがいました。皆

さんの態度を講評的に申しますと、非常に謙虚な非常に立派な態度であったということを申し添えておきたいと思えます。

これからいよいよ本論に入って一昨日の続きをやりましょう。

自主的な自由時間というものをどういうふうに解するか、それについてすこし話し合つてあとの問題に入りたいと思います。

自主的な時間とは

水谷 私は自主的な時間というのは、自分がこうするのがいちばんいいと、自分自身の判断のもとに使う時間を自主的と見ております。自分で考えていいと思つたことならば自主的な時間、自主的に行動した時間と解釈しているのです。

塚本 いかがですか、今の意見は。

三浦 そういうふうに広義に考えれば割合たくさん時間はとれますけれども、純粹に考えたならば他人に制約されないで自分自身生み出すことのできる時間、自分のことに使える時間というふうに考えて、家事労働などは一応排除したいと思うのです。

荒井 その人の生活環境によって、誰からも制約されな

い時間というのを自由時間というふうに考える人もあるし、生活に追われて内職なんかであくせくしている人でしたら、せめて一時間でもPTAの会合に出たり、いろいろなグループ活動に出ることが自由時間だというふうに思う人と、二通りあると思うのです。

塚本 具体的にはたしかにそういうことだと思えますけれども、今ここで求めているのは、自由時間というのをどういうふうに考えますかというのですけれども。

佐橋 仕事時間に対する思き抜きの時間、というふうに考えればいちばん簡明に受けつけられるように思っております。

森 二十四時間の設計という問題だと思えますが、一応私たちがどうしてもとらなければならない睡眠とか、家事のための時間、労働時間、この三つのものを除外してあとの時間を自由時間という考え方が一つあると思います。それからもう一つ、私たちが意識を持って私の自由時間をこういうふうに設計しようということ、あるいはこの時間は自分の自由時間にしようという意識を持った時間、そういう時間がほんとうの意味でここで議題になる意味の自由時間じゃないかと思えます。

余暇があるから自由時間があるというふうに考えられないので、いくら余暇があってもそれを自分の自由時間とし

て活用しなければ、それは自由時間といえません。

塚本 意識の問題を先に確立して、それによって自由時間というものの考え方をどのようにでも持てるのじゃないか、こういうご意見ですが、それに対して意見がありますか。

古川 収入の面から見て労働に対する報酬を得る時間は結局自由時間でない。ですから自分のやることに對しての報酬を得られない時間を自由時間と私は考えております。

鈴木 その人自身がその時間を有効に使うという意欲がなければ、いくら時間があっても自由時間といえないのじゃないかと思ひます。

岡田 経済的な問題にとらわれないことと、意識した時間、それだけではないと思うのです。無意識にだらだらしている時間も自由時間であり得ることがあると思うのです。

塚本 今おっしゃったことを大体まとめてみますとこういうふうに理解していいかどうか、これは皆さんにおはかりするのですよ。自主的な自由時間と今度のテーマとしてゐるのは、日常生活の中において自分の自由な意思によって使用される時間、そういう意味であつて、しかもその内容は自分自身にも意義がある。同時にまた対人関係においてもあるいは社会関係においても意義を持つて、好ましい

方向に関連している時間である。したがって小さくいうならば家庭環境、地域環境、大きくいうならば社会全体の問題、それから先ほど話に出ました経済の問題、政治の問題、あるいは福祉の問題にも深い関連性を持つ。そういう発展性を持つというか、その根幹となるものは自分の自由な意思によって時間というものを理解し、どういうふうにそれを使っていくかという意義ある見方をすることが自主的な自由時間ということの真の意味ではないか。そういう基盤の上にたつてそれでは日常の具体的にどういうふうな時間を処理し整理していったらいいか、これは各々の業態やら環境やらで違つてくるのですけれども、とにかく皆さんのおっしゃったことをしほつてみると、共通の問題としてこのようにいえるのではないか、いかがでしょうか。

水谷 その自由な意思というのが問題ですね。

塚本 自由な意思というのは自分自身で考えだした時間なんです。そこでこう考えたから間違ひだとか、こう考えたから正しいということではなくて、自分自身の自覚によつて考えたものというふうに広い解釈をしておかないと、共通の広場ができないわけですね。そこで家を建てる例からいえば一応地突きがすんで土台をおいたということになるのです。そしてこれからその上にどういうふうな柱を立てていくかという場面になると思うのですが。

鈴木 自由時間を確保するためには自分の意思がありましても社会の環境から後退する場合がずいぶんありますから、その問題を解決する必要があると思います。

塚本 社会環境の制約を排除しなければならぬということですね。

荒井 主婦のものの考え方がいつの場合でも受身であるということが、自主的に自由時間を生み出すことの壁になっているのじゃないかと思います。

岡田 いろんな理由があると思いますが、政治力を借りないとしてそれが達せられないと私の立場から感じております。

安倍 私は経済的な貧しさを解決しなければならぬということを提案いたしたいと思います。

橋本 社会も家庭も封建的なものの考え方をなくす、ということが大事だと思います。

鈴木 各人がどういう立場にありましても、自由時間を生み出そうという意欲を持つことが大切だと思います。

水谷 周囲の協力も必要だと思います。

富永 私は結局求めているものは幸福というものだと思います。そうしますと自分にとって幸福というのはなんであるかということをよく考えたい。

三浦 ただいま皆さんがおっしゃいましたことは、自由

時間を作り出すための技術とか方法、やり方というようなお話だったと思いますけれども、その見出して作り出した自由時間をどういうふうに使うかということが一つの柱になると思います。

塚本 大へん大切なことです。

荒井 自由時間というものを全然考えられない人々の問題を私たちは日常考えてみる必要があると思います。

塚本 大へん大事なことです。どうしても絶対に生活の上で自由時間どころじゃないという方の問題を考えるということ。一応いままでのところを整理してみますと、先ほど第一番に自由時間というものをどう考えるかという、時間を作るために家族との協力関係をどうしたらいいか、そのために家庭生活をできるだけ簡素化して整頓して、仕事を進めていくのにむだのないようにどんどん進めていくような手順を考えたらどうか。第三の問題として家庭で収入を得るために働かなければならない、そういう家庭で収入を得る仕事に従事した場合にはどのように自由時間をその中から生み出していくかという問題。第四番目には自主的な時間を持つためには環境の改善ということが必要なのだ。これは特に観光地なんかのご意見をききますと自分のうちだけではどうにもならない。小売商の場合も買う方の

人の考え方でどうにもならない。自由時間というものはこのようにいろいろの角度から考えられるのですが、第五番目の柱として、それでは自主的に生み出した時間をどのように使ったらいいかということ、そういう大体五つくらいな柱にまとまっていくなじないかと思っています。

そこで第一番にもどって、自主的な時間を作るために家族との協力関係をどうしたらいいかということ、これについて真剣な議論をしてみたいと思います。

家族との協力関係

鈴木 家族との協力につきましては、生活時間の設計を立てる前に家族と共に話し合って、家族の人にも適当な、それぞれの立場に合う程度の仕事をそれぞれにふり当ててお互いに分担し合っているように思います。

塚本 具体的にお願いしますとどういうことですか。鈴木 生活設計を立てますときに大体家族と一緒に話し合うのです。そうして子どもには、あなたはどの程度だったらできると思うからこれをして下さい。主人はいつの間がわりあいひまだから、お庭の掃除程度でしたら願えるでしょうか、というふうな具合に前もってきめておくことだと思っています。

古川 家族の協力を求めて、できるだけ主人はこういう

ことをしていただきたい、お掃除のほうの拭き掃除くらいは男の子でできるからやってもらいたい、子どもたちにはいろいろなお使いをしてもらいたいというような分担はして協力は得ますけれども、内職をやりましたら、いくらくらいは子どもたちに分配してあげるといふ経済的な裏づけがないとうまく協力はできないかと思っています。

鈴木 それがあまり進みますと子どもが打算的になりはしないかと思うのです。私のところでは、子どもが自分から進んでしようとしないうです。ですからちゃんとしなければならぬようにふり当てるような形で、朝のおふとんは全部上げずにおきますと、仕方がないから全部上げてくれます。

塚本 今おっしゃったように、いやいやながらするのを命令でさせようというのですが、私がするのだったらいやだと思えますね(笑)。自然的にやるような方法です。

鈴木 朝のおふとんなのですか、子どもは自発的にやってくれないのです、逃げようとするのです。

塚本 私逃げようとするかもしれないですね。

荒井 自発的な協力ということで一面子どものしつけの面に入るかもしれませんが、小学校に上がっていい小さい女の子があるのですが、その子なりにできる用事などをしてくれるのですけれども、庭掃きとかそういうと

きに非常に喜んでやるのです。あんたのおかげでほんとうに助かったわというふうになね。

塚本 おだてるほうですね。

荒井 子どものやったことにほんとうに満足するようにいってやると、案外自主的にやってくれます。

塚本 今問題が出ておることを一つ取り上げてみますと働くときに経済的な裏づけをしてやらなければいけない、ただ働かせるばかりじゃみんな喜ばないというのですが、子どもや年寄りに働いてもらったときに、報酬をあげる。ただどうもありがとう、よくやってくれたとおだてただけではいけないことになるのですが、その限界をどうしたらいいでしょうか。

荒井 抽象的な意見になるかもしれませんが、報酬よりも私は家族全体に勤労の喜びというのですか、労働の大切だということを植えつけていくということが必要だと思えます。

三浦 家族の者のものの考え方、意識と申しますか、どうも明治生まれの男性はそういう傾向があるわけなのですけれども、こういう家事向きことは、男がやるとなにか世間体も悪いし權威にかかわるというふうな考えを少しずつでもくずしていかなければと思うのです。また親が率先垂範ということ。

塚本 痛いですね。(笑)

古川 先ほど私のいいました経済的裏づけというのが、報酬のなんだか具体的に現実化しているようにうかがいますが、私のグループは家族全体で子どもも父親もおばあちゃんもおじいちゃんもできるような仕事をしておりますから、それに対する報酬を経済的な裏づけというふうに、ただ、ある一人の働きに対してするのはないのですから、お含みいただきたいと思えます。

塚本 皆さんのお話をうかがって、私も勉強させていただきましたが、こちらあたりで次に移らなければならぬので、私の意見をちょっとのべさせていただきます。子どものときから、なんでもさせるといふ習慣をつけることはいいことで、実は、四月号の「親と子」という雑誌に一つ入れたのですが、近所にニコヨンのお母さんと子どもがいるのです。これはいろいろないきさつがあつて、おじいさんのところに預けられていたのが、お母さんのところへ行きたくて子どもの意思でお母さんのところに帰って来たのです。それで婚家とは絶縁してお母さんがニコヨンをしなから子どもを育てているわけです。このお母さんが非常に聡明で、子どもの生活に全然干渉しない。その子どもがまた非常にいい子で、自分でご飯を炊いたりお洗濯をする。初めは母親の目から見るとアカなんか落ちていません。そ

れがだんだん自分の練習で短時間に洗濯がうまくなる。そのうちにお母さんが働いているのだからというので、自分も自主的に新聞配達をはじめました。ところへ前に申し込んであった都営住宅が当って独立の家をもつことになり、今度はそこでおそうざい屋を始めました。子どもが配達をするのですが、それには自転車がほしいのです。すると前に勤めていた新聞屋の主人が非常に感心して、その子の独立の記念のためにとても安全で、しかも月賦で自転車を売ってやった。このケースについて結論から見ますと、お母さんが子どもの生活に干渉しない。従って子どもに対する信頼感を持っているということなのです。こうした母の態度のもとで子どもはすくすく伸び、新聞やおそうざいの配達しながらクラスの中でずっと一番を通してゐる、ということです。

私の友だちのある家庭では、屋根にごみがたまつたのを掃くとか庭の草をとるとか、いわば家として共同生活の場面に關する限り、子どもの年令に応じて仕事をさせますけれど報酬は全然やらない。ところが特にお使いに隣り村まで行ってもらうときには、若干の報酬をやる。報酬をやる仕事とやらない仕事の限界を持ってやっている。

以上は例をお話ししたわけですが、自分自身自主的な時間を持つと同時に、家族全部にも各々に自主的な楽しい時

間を持つ配慮が必要じゃないかというふうに私は思うのです。そして自由時間を持ったためには家庭の生活を簡素化し、家を整頓して夜手さぐりでも物があるところがわかるというふうに、すると、時間が有効に使えるのじゃないか、そういう点でご経験を語り合っていたきたい。

家庭生活の簡素化

安倍 私なんかなく捨てるのがもったいないような気がして、包み紙とか箱とかをとっておくのです。そうすると主人は片端から整理して捨てていってしまうのです。そのときもったいないと思うのですけれども、結局取っておいてもあと少しも使わないのです。衣類でもいらなくなつたものを捨てるのがもったいないからと思つて取っておくのです。主人は誰かにあげた方がいいといつてどんどんあげてしまうのです。それは非常にいいことだと最近思っております。

蟹本

なかなか捨てられないのですね。からっぽの空き箱ばかり積んであるのですけれども、女は自分では処理できないのです。子どもの学校でバザーがありまして、子どもがお世話になっているからなにか出さなければならぬというのにきまって、始めたのですけれども、人さまに物をさし上げるというのは好意がなかなかそのまま受け

取っていただけなのですが、不用品交換会というのは自身役に立ったようなことが多かったので、非常にいいと思います。

大橋 取っておくのもあげるのもよいのですが、包み紙だったら、これはあの本のカバーにして処理してしまえばいいと思ったら、すぐその場でカバーにしてしまう。そのとき考えが浮ばなかったら捨てることです。古着がありますね。ちよっと出したときにこれは誰れさんにいいなと思ったら飛んでいってさし上げれば、それはそのときに処理されてしまうわけです。

近藤 仕事に計画性を持つことが大事だと思います。たとえば洗濯は毎日やるうと思えばあるのですけれども、一日おきにするとか、毎日同じことをだらだらとやらないように。そういうことが時間を生み出すためにいいことだと思います。

佐橋 今のお話に関して地方会議でも出たのですけれども、一日の家庭処理の時間を考えずに、一週の間を考慮して家庭処理をするとは非常に合理的にできるといふことです。

三浦 ある計画性を持って物を買うなり整えるなりするということによって、いらぬものが出るという点を防ぐことができると思います。

塚本 私も女の方の生活を見えますと、箆簞の中に平常着ない着物がたくさん入っているのにおどろくことがあります。といっても全然ないと淋しいでしようし、なにか生活にうるおいがない。そこらあたりをどういうふうに合理化していらっしゃるのですか、皆さんは。

水谷 私たちの土地は空襲にもあわず、ともかくのんびり暮らせる土地だったものですから、何月になればあわせ、何月になればひとえもの、冬はウールのひとえだったらかおしいというふうな考えがつい先ほどまで残っておりました。そういう過去の着物に対する考え方を一度すっかり捨て去ってほんとうに自分にいちばん便利なものと考えて、どういう場合にはどれを着ていかなければならないというのに対して自分独自で判断して、人の考えをあまり気にしないというふうにやっていくべきだと思います。

橋本 大部分の人は恥ずかしくない程度の着物を着たいという気持ちがありますから、それを申し合せによって簡単な着物でいく、ふだん着でいくということを申し合せによってきめていくようにしております。

鈴木 家庭の中をなるべくお金をかけずに住みよく住めるように、テーブルセンター、椅子カバーをよく作るのです。刺しゅうをしたり安い生地で柄の変ったものを取りかえて、捨てても惜しくないような見た感じのいいものをこ

しられます。感じが新しくなつて、おく場所や、向ける方向を少しかえたりしますと、同じ家の中でも感じが變つて新しい感じを受けるのです。そういうように工夫をしております。

塚本 自分の意思によつてやつていく、それには私はやつぱり自分自身が相当教養を高めていかなければならない、今のように環境をときどき變化させて新鮮な感覺を持つというお話がありました、それからではでになつて困らないような仕組にして一定のものを作る。不用なものを作らない、これにもやつぱり一つの限度があつて、私たち男から見ますと、どの顔を見てもどの奥さんを見てもみんなおんなじように見えるというようでは、うるおいが感じられない。この点はどうなんでしょうか。やつぱり自分の個性に合つた美しさというものを、簡素の中から、にじみ出させるということができないものでしょうか。

富永 できます。私はそのほうをとります。制服はきらいです。

塚本 皆さんから大へんいいお話を聞きましたが、これはべつだんにまとまりをつける問題でないで、こちらでオブザーバの方から意見をうかがいたいと思うのですが、YWCAの佐藤さんからおねがいします。

職場の民主化

佐藤(YWCA) あどの方が印象に残っておりますから、そのほうを先に申し上げます。自分がいいと思つたことを行なうのはずいぶん勇氣のいることだと思ひます。先ほどどなたがおっしゃつたように、ここにいらつしやるような方は信念の人という言葉が当たるところで、きつとおたくの方でもなかなかシンのかたい方だろつと思ひます。しかしそういうふうになるまでにはずいぶん努力がいったでしょうし、その態度をこれからもとる場合にはずいぶん努力がいると思ひますので、孤立してそういうことをするのはむずかしいことなので、うちにお歸りになつても仲間の方と一緒になさること、そういう生活の仕方を広めていくことができるのじゃないでしょうか。先ほどの衣類の話ですが、私は皆さんと同じ立場ですけれども、実際に自分の時間をはぶいたり、持ち物にとられる自分の氣持をはぶくためにしておりますのは、新しいものを一つ作るとその前のものはすぐ手離すということを機械的にやっております。子どもたちの雑誌なども付録がたくさんあるので、二年が三年になれば二年のときの参考書もいらなくなるので、学年の終りにどんどん整理させまして、近くの母子寮にさし上げることにしてあります。それを機械的に

運ぶために大きな箱をおいておいてそこにに入れておく。そうして電話をかけて母子寮のほうで取りに見えるのです。相当ボロでもお使いになるというので、母子寮の方にさし上げるということで解決をつけております。いろいろなものをもらっても誰もうれしくないのですから、まだそれが使える状態でさし上げるか、あるいはほんとうに廃品にしてしまうかということも考えに入れることが、どうも生活の中では大事ではないかと思ひます。

先ほどから出ました自分自身の個性ということと、自主的な判断ということとはあくまでも大事だと思ひます。家族との協力関係のお話が先ほど出てありましたが、まあ塚本先生が大へんいい締めくくりをなさいましたのでべつに申し上げることもありませんが、年令によって、環境によって子どもにしろ夫にしろ、その人たちが今専心考えているということはやはり先にくるので、ときどき考えますのは、あんまり家持ち上手になるとつまらないと思うのです。そればかり考えてその工夫で終始してしまう。常にそっちに頭が働いていますから、家持ちの専門家みたいになつて、自分が生きている部分はどこにもない感じがしてくるのでやはり私たちは自分の全体ということを考えていきたいと思ひます。

私の子どもの場合などは、下の女の子とはよく話し合う

機会を持ちますけれども、中学にいった男の子や高校の男の子はなるべく引き離して眺めることが必要な感じがいたしますので、やはりそれはその子どもどもによつて違ふし、夫なりおじいさん、おばあさん、みんなその立場立場を重んじていくことが必要じゃないでしょうか、そんなことを考えながらうかがいましたが、あまりご参考にもならないかと思ひます。

石井(婦人民主クラブ) 佐藤さんがおっしゃいましたので申し上げることもないのですが、うかがつておりまして家族の方の協力がない自由時間はなかなかできないということ、その問題でまたいろんな壁があるのではないかと思ひます。家庭の民主化ができませんと職場の民主化もできないのです。自分のことは自分でさせるような教育ということは大へん大事なことで、働く婦人の集会でも、お茶汲みの問題、お掃除の問題が必ず出てまいります。そのことも家庭の中で男の人がやっても決してこけんにかかわることでないという教育ができておれば、職場の民主化もできるのじゃないかと思ひまして、そういう点から大事な問題ですから、もうちょっと深めていただきたいと思ひます。それから、いろいろ今後官庁の問題が出てくると思ひますが、そのときにやっぱり政治との関係もやはり含めてお話しをしていただきますようお願いいたします。

塚本 大へんいいご忠告をいただきました。下山田さんにひとつ。

下山田(地婦連) もう一つお願いしたいのは、どなたか自由時間を持ってない方の問題をお出しになったと思います。私自身が家庭工業をしておりますのと、私の地域の方々はそういう方が多いものですから、家庭時間を持つてない人というよりか家庭時間を持つてことを知らない人と申し上げた方が適切な言葉かと思ひます。そういう問題に触れまして、もう少しそういう方のために深い掘り下げた意見をうかがいたいと思ひます。

塚本 三人のオブザーバーから大へん適切なご意見をうかがいました。

それでは次の問題の柱に移りまして、今発言のありましたような自分の自由時間を絶対に持てない方もありますし、持つことを知らない方もおありになるといふような問題も含めて、家庭で収入を得るために働かなければならない場合に、どういふふうにして自由時間を得るか、どういふふうにしてそれを合理化していращるか、切実な意見をうけたまわりたいと思ひますが。

自由時間の合理化

安倍 私家で洋裁しておりますけれども、何時間働いた

ら必要な収入が得られるようになるかということが、いちばん大きな問題だと思います。ですから値段、それから値段をきめてくる基礎ですね。そういうことを一応よく考えてみたいと思ひます。

塚本 あなたはどういふふうになさっていращいいますか。

安倍 大体標準があるわけなのです。私の場合は都会と地方とで値段が非常に違うわけなのです。都会で千円いただいているものでしたら地方では五百円しかいただけません。今のところは地方の今までのお値段の大体の標準と、私たちが大体ほしいお値段の最低とのバランスをとって、今まで千円だったものでしたら千二百円にしたいといふふうに、洋裁店の仲間でもう少しずつ上げていただく。上げたならば上げただけの手は入れるといふことを協議しながら少しずつやっております。

塚本 千円では安くて千二百円当然いるのだと思ふといふふうにおっしゃる場合、その場合に、その賃金の基準といふなものとはどこから出るべきだと思いますか。

安倍 私はやっぱり働いた時間によってきめられるのがほんとうだと思います。だから一着のスーツを仕上げるのに、もし三日間かかったならば、三日分自分たちが生活していけるほどのお値段をいただきたいと思ひます。

塚本 なにかほかに意見はありませんか。

大橋 三日でも上手な方と手の遅い方との差がありますから、お話し合いでその平均をとることが必要じゃないですか、時間を出すために。

佐橋 今の自由時間の持てない方持ち方を知らない方への協力というのは、たとえばグループの協力で、家族の方を協力の線に持っていくということがいちばんいいのじゃないかと思います。

橋本 私の店は魚屋をやっておりますけれども、一つの店にあまりにもおんなじ魚が多いわけなのです。それでいきおい商店同士で競争するために利益が薄くなると思いますが、人数の割に労働が強いられるわけです。主婦を始め主人も店員の人たちも皆収入の割に労働が多くて、もう少し競争しないで、自分の労働に対する適当な収入があれば、もっと人数をふやすことなどによってもっと主婦の時間も生み出せるし、それぞれの時間も生み出せると思います。

安倍 私は一日働いて一日生活できるお金がほしいというふうに申しましたけれども、一日の全部を働いて収入を得るのじゃなくて、一日のうちで八時間くらい働いた時間の、労働時間に対して大体生活できるだけの値段をいただきたいというふうに思っております。

塚本 その問題で、大体商品というものはそのでき上が

ったものの価格がきまる場合は、その中に含まれている労働の量乃至は労働の時間がどれだけ含まれているか、もう一つはそれにかかった機械が、どれくらい磨滅しているか、そこに一つの均衡な割合が保たれる、ということが商品の価格というものを決定する原則でなければならぬ。それが、途中で機械をもった方面に利じゅんがより多く吸収されたりすると、労働賃金が下ってくる勘定になる。これは皆さんも同様にお考えになると思うのですが、この点を考えてまいりますと、最低賃金法というものが去年できましたが、それは一体どういう仕組みになっているか、個人の考えから申しますと非常に半端な最低賃金法だと思うのです。何時間働けばどれだけの賃金が適当だという根本的なものがきまっていらないように思えるのです。

大橋 私たちの内職は和裁ですから、どうやら最低の賃金くらいは獲得できますけれども、袋をはっている方などは、同じような精力を使って働いていても同じ賃金は得られないですから、そういうときには政治的なものとか福祉的なことがそこに加わってくるのじゃないかと思えます。

水谷 私たち小売商人の場合は、主人と店員と協力してやっていく場合であって、からだは楽をしておいても、店番という大事な用事があり、相手はお客さままでいつなんど

きこられるかわかりませんから、生活時間の設計もなにも成り立たないといえます。

私の地区の場合は五十軒も七十軒も一つの町に小売商店ばかりの町並ですから、営業時間の短縮を思いついて、それを今後の問題として運動していきたいと思ひますけれども、それにはなかなかの抵抗があるのです。

塚本 どういう抵抗ですか。

水谷 商人として営業時間を長くするということは積極的だから賛成できるけれども、短縮ということはなにごとだという声がもうすでに出てます。

塚本 最も抵抗の強いのは男の商店主の側ですか。

水谷 まずそうです。

塚本 なにかそういうことで一軒でも時間を合理化しますと、非常な圧力が出るわけです。

水谷 自分のところだけ早く閉めれば、おとくいをよそへとられる心配があります。

安倍 私としてはたとえ能力は少なくても、それに応じて一生懸命努力して一日働いていらっしゃる方は、最低賃金を保障していただけるようなまわりの考え方は、それを裏づけるだけの社会の状態を作っていたいただきたい。

塚本 作っていただきたいというよりもわれわれで作らなければならぬ。

佐橋 ある程度資本をおろすことも工賃を高める一つの原因であると思ひます。グループを作つて中間さく取をなくす努力をしなければいけないと思ひます。

古川 私の方は、業者を中間におかないで、直接内職をいただいておるのですけれども、その量が毎日毎日異つておりますので、内職の賃金が不安定なんです。そういう解決はどうしたらいいか、それで悩んでおります。

塚本 賃金の安い切実な方があるし、それから安倍さんのおっしゃつたように、一生懸命働いているけれども、働いている人の技術が未熟で、しかもそれで食つていかなければ生活が成り立たない人もあるし、そういう場合に締めくくりの問題としていったいどう処置すべきかということですが。

森 結局貧乏な日本の予算、国費の中から、あまりにも重点が国防費に注がれているということがいちばんの根本問題で、社会福祉とか民生の安定の方面にもっと重点をかけていただきたい、それはみんなの願いだと思ひますが。

大橋 上から考えたところではそうですねけれども、根本問題は自主的に時間を見出して話し合い、小さいグループから次第に大きい団体の力に行つたらいいじゃないかと思ひます。

蟹本 職にしてもいろいろな種類があつて、団結なさ

るという型、もう一つは人頼みなんですが、果に幹旋所を作ってお世話願うといった方法、私の仕事もそこでいたっています。

塚本 今までのところをちょっと締めくくりますと、結局は自由時間を持ってないほど働かなければならない。これを大きくいうならば、一国の政治の問題につながると同時に日本の宿命的な生産面の二重構造に関係する。大企業では比較的安定して働け、厚生施設などもととのっている。ところが日本の九〇パーセントは中小企業であり、中小企業というものは下請であるか、しからずんば同業者の競争がはげしいので、輸出のものにしても非常に値段を叩かれてしまう。そこでそのしわ寄せが働いている者に来ているということ、この二重の生産構造の問題を合理化していかなければならぬ。

小さくいうならば、働いている者が自主的な組織を持つということ、たとえば内職をしている方々が相当の組織を持って、組織の問題でものをいって、一步一步自分たちの主張の方に近寄せていく。これは自主的な時間という問題からもともと発展した問題であるけれども、自主的自由時間の獲得という意識の問題から入っていくことも必要である。観光地などの場合には、環境ぐるみの時間の合理化を考えていかなければならないという点であったと思います。

す。

(休憩)

塚本 これから午後の部に移るわけですが、先ほどに引き続き続いて深く掘り下げた問題を皆さんで話し合っていきたいと思います。今までのところは一応皆さんが実質的にいろいろ苦労しながらやっていくうちに、大きな壁に突き当たる、そしてその壁の解決を問題にしなければならぬ。しかし一方においては、自分たちの身近かに組織を作るとか、あるいは一步一步なんらかの形で自由時間を生み出すようにすること。あるいは賃金についても、結局時間の問題は賃金と関連してくる、そこでそういう基本的な問題を解決していかなければならないということなどお話し合いになったわけです。外に出て働かなければならない家庭の主婦の方もあると思うのです。そんな場合、皆さん自身の経験とかあるいは皆さんのグループの中にある問題についてひとつ話し合ってみたいと思うのですが、いかがでしょう。佐橋さんは身をもってそういうことをやっていられるようですが、あなたの苦心談をひとつ発表していただきたいと思うのですけれども。

佐橋 私はグループを一つ作っておりますが、自分自身が内職をやっているわけではありません。行商ですから、一日の収入というものをきちんとあげてからでなければ、こ

ういうグループ活動とかいろいろなものがおもしろく気持ちよくやれないということに帰着します。こちらから積極的に出ていく商売ですから、調子のいい悪いに影響します。皆さんの休んでいる時間は私がいちばん働かねばならないときで、朝早くと中間の休みのときと夕方ということになります。

塚本 あなた自身が外へ出て働くわけですね。品物を持ち出して、その苦心談があると思うのですが、どういうふうにしてうちを片づけたり、仕入れのことで歩いたりしていられるかを少し聞かせていただきたいと思うのですが。

佐橋 朝早く出なければ、ならないので、新聞なんかご飯たべながら読むのです。どこでも一日中緊張の時間ではなくて、自転車に乗っているときが自由時間になります。疎開中のための生活がそのまま生活手段になって、行商をはじめたものですから、どこかほんとうの行商人とは違うのでしょうか。商売の話から知らないうちにグループ活動の話になったりしてしまします。

塚本 家族の朝の食事なんかどうなさいますか。

佐橋 炊事はどうしても私がやります。長時間調理を要するということは全然やらないのです。栄養不足を補うためにビタミン剤と生卵は常時気をつけて補給しています。

自由時間以前の問題

岡田 私は直接自分で、これを問題にするようなことにぶつかっておりませんけれども、私がこちらにくるときに三の宮の駅まで追っかけて来て、この数項を書いて持ってきてくださった方があったので、兵庫県のお願いの一つを皆さんに訴えたいと思うのです。これをお出しになった方の近所は、皆さん昼間出かけて行くのですね、父親も母親も。子どもたちはある年令まで託児所に預けていきますが、小学校の三、四年から中学までの、自分のはっきりした意見なりそれを実行する力なりを十分持たない子どもたち、そういう子どもをなんとかして救う道を開いていただけける方法を聞いて来てほしい、今年の正月に小学校の五年生の男の子がガス自殺をした事件が近所にあって、そんな子どもだったらもっと夜でも尋ねて行ってやったのにと自分の責任のように感じておられる。こういう問題をなんとかしてもらえないだろうかということを書きまとめて見えた方がありますから、この機会になんとかいい方法を一緒に考え出したいと思っています。

塚本 自由時間以前の問題として働かなければ食っていけないし、そのためには学童の問題、保育園からもっと上にいった子ども、一人遊びのできる自主性のない子どもは

どうしたらいいか。これは人権にも関連する重要な問題だ
と思うのですが、皆さんでひとつ話し合いをして下さいま
せんか、どうしたらいいか。

近藤 どうしてガス自殺なんかなさったのですか。

岡田 それをこの方に聞き返しましたら、両親がないの
です。工場に中学もろくに出ないで通っている兄さんと生
活をしている。くわしいほんとうのところはわからないの
ですけれども、兄弟げんかでもしたのでしょう。自分には
あたたかい家庭もないし、周囲はみんな働きに出ているう
ちが多いものですから、相談にいくところが全然ない。そ
んなことからガス自殺をしたということだそうです。

塚本 欠損家庭の問題なのですけれども、どういうふう
にしたらいいでしょうか。

荒井 同じような問題なのですが、三重県の県の婦人会
議のときにも出ましたが、内職に追われている主婦が子ど
もの面倒を見られないというところから、青少年の不良化
の問題が出てきまして、子どもの面倒をなんとかグループ
で見てやろうじゃないかというふうに話を進んでいるので
すけれども、現実には実施されていないということなので
す。ですから、もう少しその問題で話し合ってほしいと思
います。

鈴木 そういう問題は私の方の地方会議でも似たような

ケースが出まして、香川県では小豆島でお父さんは校長先
生、お母さんは小学校の先生で、どちらもとても立派な教
育者で、はたのどなたが見ても非のうちどころがない方
のお子さんが、学校で同級生をなぐり殺すという問題が起こ
ったのですけれど、そういう場合やっぱり親がそばにいな
いから子どもが精神的に淋しくて、なにか心にわだかま
りのようなものを持っているのじゃないかという話が出
ました。ちょっとした時間でも子どもに接する機会を多くし
て、子どもとあたたかい話し合いを五分でも十分でもした
らいいのじゃないかという話が出ました。

富永 門司で小学校の先生が五年か六年の女生徒を妊娠
させたということがありまして、先生すら信頼できないと
いうことと、両親がいらないのです。お二人とも工
場に出ていらっしゃるそうで、お母さんが妊娠五カ月にな
るまで全然気がつかなかった。それが非常にこわいと思
いまして、外で働いていてもできるだけ子どもを見てやろう
という気持が大事だと思っています。

蟹本 私若いとき幼稚園に勤めておりましたが、お母さ
んがいらいしやらない子を見るとなにか問題があると思
います。それで子どもができれば一応うちに入ることを条件
にして結婚したのですが、子どもの手が抜けませんという
いろの欲が出てまいりまして、手芸の仕事をしてみました

が、内職にはいろいろな限界があります。現在パートタイムの仕事をしています、子どもを持っている母親だという立場を忘れないためには、パートのお仕事はやっぱり望ましい一つの形じやないかと思うのです。

安倍 昨日移動会議のときにちょっとお話が出たのですけれども、勝山市で、その都市は大体織物が盛んで、家庭の女の人がほとんど職場を持っている。女の人が子どもを育てる時間がないので、そういう地域の特殊な事情から、未亡人の仕事として、子どもさんを三人以上預けられる。市からの補助が八百円、個人の親からも八百円くらい出して、その一人の方に三人くらいの方を見ていただいでやっているというお話をちょっと聞きました。これは特殊な地域の場合であるし、一つの職業にまともっていらっしゃるといふことと、小さい者の場合ですけれども、こういうことがさっきの学童の場合でもなんらかの形で、できないものか提案したいと思います。

岡田 私自身が前に宗教団体におりましたから、それを感じますけれども、宗教団体にはある程度集会の場所や、小さいグラウンドがあるととても大分あります。そういう方たちが自分の信者を訪問して、宗派の信者の拡張よりも、そのまわりにある、特に両親の外へ出ていって見放されている子どもたちにもっと目を向けてくださったらと思います。

ます。場所をあまり無用に使っているような感じがいたしますが、いかがでしょうか。

佐橋 家事手伝人、ホーム・ヘルパーと申しますか、内職者などがグループ作りをしっかりとしまして、その中で話し合っていてそういうものを作り、場合によっては家政婦会とか何とかというものの用に向けるという方に進んでいったらと思います。

古川 私のところで最近まだそれほどの実績はあがっておりませんけれども、子ども会に五、六人づつの班を作りまして、その班員同士でいろいろなことを友だちの間がらにおいてやっておりまして、不良化防止の一つにしております。

鈴木 私の方では子どもと親が寄りまして、親子会というものを開くのです。子どものいいことをなんでも親に対する希望とか、遊び場がほしいとかいろいろ意見が子どもから出るのですけれども、そういう機会を作って子どもの気持を推しはかるようにしております。

塚本 今まで皆さんのおっしゃったことをとりまとめ申しますと、きりきり内職をしなければならぬ、あるいは外に出て働かなければならない、そこで家庭が一種の欠損家庭のようになって来ている。子どもたちが保育園に預けられる場合はいいけれども、仮に保育園があると仮定

しても、下級の学童の問題をどうするか、そういうレジスタンスから自殺した例までであるというお話で、この問題も切実な問題としてとり上げなければならぬし、政治の問題としても、そういうことに感覚のうすい政治は国家を不幸にする。このような面に皆さまが着眼しておられることは非常に敬服するのですが、これを手近かな問題としてどう解決するか、焦点が絞られなければならない。そこで一つの問題としては地域の活動が盛り上って来て、ボランティアの人たちが、報酬を要求するのでもない、恩恵的でもない、自分の余った自由時間を生み出したもので、ほんとうに地域にサービスする。日本人のサービスは外国の場合とちがっていて、なにかそれに報酬を求める、恩恵的な優越感をもつ。受ける方もそれを受けることによって恩恵をうけた気持ちになる。そうではなくて、自分が奉仕したいというやむにやまれぬ立場から、手助けをするという運動が進んでいくことも必要である。

第二の問題は、そういう方もなくて、ほんとうに周辺が働かなければならないようなばかりであった場合にどうするかという問題。これに対しては、その中にいられる未亡人の方などにお金を払って子どもを見てもらう。あるいは交替で何日かはずして子どもを見て、その代りその人の労働賃金はみんなの働いたうちから分けてあげるといふ自

主的な問題。

第三点はその地域の資源をできるだけ活用する。お寺であるうが、地域の資源として活用するようなこと。これも地域の自主的な声としてできるようなことで、皆さんがそれぞれのグループで勇氣を持っておやりになればできると思う。ここでまた自由時間の問題とグループの問題とが大きくクローズアップされる。皆さんの意見をまとめる以上になると思います。

その次にやっぱり労働の密度というものを考えてみたい。朝から晩まで忙しい忙しいといながら、きのうも移動会議で聞きましたように、忙しい忙しいといながら二時間も三時間も立ち話をしているということ。それから仕事をする場合にしたら、働く。農家なども、忙しい忙しいといながら朝早くから出て夜遅くまで働くことがいいことだと働くわけですが、案外お茶を飲んだりむだ話している時間もかなりある。そういうものをもっと制約して、働く場合の労働の密度を深めていって、それによって自由時間を見出すという方向もあるのじゃないかと思うのですが、そういう問題についてひとつお話し合いを願いたいと思います。

労働の密度

鈴木 収入の低い仕事ほど労働時間が長くて、収入の高いほど労働時間が短いという結果になっていると思うのです。これは、当事者だけでは解決がつかない問題です。

私は農村に住んでおりますので、農村では、とかく仕事よりもからだを忙しそうに動かしていればよく働いているという観念があるものです。能率をどんどん上げてそのあとは昼寝をしようと遊ぼうとその方がいいのだ、というように社会の気持を変えていくようにしなければいけないと思います。

森 労働の密度を上げていくことは、大へん結構ですけれども、商売の場合にはお客さま本位で、上げたくてもお客さまがいらっしやらなければだめです。結局拘束をされておりました、自由時間にはなり得ない。それじゃ一定の店番していながらできる仕事があれば、活用することとは結構ですけれども、わりにひまそうदैて自由時間を見出し得ない商売の立場というのは、非常に私たちとしてはどっちつかずです。

塚本 地理的条件とか、商売の業態とかいうことで、一概にその問題を平均化して話し合うことはできませんが、商売は商売というふうになにかいい方法があったら、話し合っていた方がいいと思います。

佐橋 私のように行商しておりますときは、やっぱり自

分の商売のことですから、密度の点に関して非常に考えるのです。たとえば、炭鉱地帯に行くときには炭鉱の方が上がるときに、農家に行くときには昼の休みの時間におじやまにあがるようにする。あるいは朝早くですね。そういうことを重点的に自身で考えてすれば、非常に能率が上がると思います。

蟹本 今の佐橋さんの意見のように、自身で自主的になされる方はいいですけれども、森さんのおっしゃったような問題に対しては、週休とか営業時間の短縮とかいうことで、お互いが少しでも助け合う方法に持っていけば、ある程度解決になっていくのじゃないでしょうか。

荒井 ただいまの蟹本さんのお話で思い出しましたのですが、県の婦人会議でパーマの仕事をしていらっしやる方が、週休制を問題にして、週休制を勝ち取ったのですけれども、中にはお休みときまでも商売をしたり、お休みの日にでも来るお客さまがあったりして、人の自由時間をあまり犯さないようにしてほしいという意見があったのです。

近藤 私どもの方は陶器を作っておりますので、家内工業のような小さい工場で作っている方が多いものですから、夜を昼についでやるような仕事ぶりですが、そういうことではいけないというので皆さんが話し合われまして、週休

に当たったその日は必ずみんなが休むように町ぐるみになったのです。八百屋さんなんかでも一斉に市内全部休んでしまわれます。最初のときは消費者も大へん困りましたが、今では皆さんに認識されまして、あすは休みだからというので土曜日に買うようにして、みんなの力で解決されていくと思います。

水谷 営業時間の短縮の問題ですが、観光都市ですから夜分を早く閉めることは困難なものですから、朝一時間遅く店を開けるという方法を考え、町の役員方に話をしてみましても、いろんな議論が出るだけのことです。実際問題として朝八時に開けたときと九時に開けたときの一時間のお客さまについて記録をとったのですが、みんなが本気になるほど、お客さまは事実こないから、それなら、その一時間を主婦たちの自由時間とした方がどんなに店のためにも自分たちの健康のためになるかを訴えて、そういう営業時間の短縮を話し合おうかとふと思ったのです。

塚本 ではこのへんで話をしめくります。労働の密度の問題に触れてきたと思うのですが、家庭の時間の密度を詰める、つまり休むときにははっきり休むということなのです。ここでいちばん問題になるのは、ヨーロッパには十九世紀の終りから三分法というのができておりまして、八時間寝て八時間休養して、八時間働くということが守られ

ている。日本ではだらだらといわゆる刻苦精励している姿が非常に尊いという習慣的なものが残っている。しかもある代議士などのヨーロッパを見てきた印象として、ヨーロッパの国民は日本人のように精励していない、怠け者だ、ああいう国はだんだん滅んでいくだろうとおっしゃる。働くときには働き、休養するときには休養し、寝るときには寝て、しかもそれで立つような生活の面が考えられなければならない。そうするとやっぱりこれもわれわれの手近かな生活の問題として考えると同時に、大きくは社会保障体制にもつながりをもつ問題である。先進国は大金持と食うに困る国民との間隔が次第にせばまりつつある、つまり、貧富の差が縮まる傾向にあるのです。それは国民の所得の再分配を意味する社会保障制度が完備しているからです。一国の経済政策の中に、当然社会保障政策が入らなければならないというのが近代的な主張です。

次に、自主的時間を持つために環境をどのように整理したらいいかという問題について、具体的な問題をお話したきたいと思います。

自主的時間を持つための環境

三浦 私の場合は小規模の医院です。日中は割合無関心でいらっしゃって、夜分になってから医者の門を叩くとい

う方があまりにも多いのです。きのうからせきが出ていた、朝から熱が出ていたというのに夜の十二時ころに来るケースが非常に多いので、そういう点、人の自由時間を尊重するという意味からも、また病気は軽いうちに医者にかかれは早くなおるといふ常識からも、皆さんの認識をお願いしたいと思います。(笑)

塚本 まことにごもっともです。

森 私どもにも労働基準法というのは適用になっておりまして、実働九時間の範囲内で労働するということを基本にしているわけです。ところが実際はなかなかそうはいきませんので、拘束時間が十五時間あるわけなのです。十五時間の中の実働九時間をどういうふうにしてやっていくかという問題もあります。商業に労働基準法を適用すること自体に無理がある。その無理のある労働基準法は精神は生かすべきであっても、そのものを強化して適用するということについては、考慮の余地があると思います。

塚本 どういう点ですか。

森 実働九時間といって何時から何時までと工場のような労働密度で客商売ができるわけじゃないのです。ある時間は忙しいけれどもある時間はひまで、結局拘束時間は長いわけなのです。そういうところを九時間で打ち切るためには、適用上の例外というか、極端に言えば抜け道を作っ

てかろうじて労働基準法を適用している。抜け道を作って適用すること自体それに適正した法律ではないのじゃないかという問題があると思うのです。

塚本 業態別の配慮がないということですね。

橋本 私たちの小さな町にも同業者間に組合を作り、月に一回の休みがありますが、それがなかなか実行されておられません。それといいますが、それがなかなか実行されてお関係上、それを一日寝かすということができません。鮮度が落ちますから、休みでも売ってしまわなくちゃという気が業者にもあるわけなのです。

それともう一つは、お客さまから考えてみて、あすこの店は休んでいるのにこっちの店はやっているから、あすこはサービスがいいという評価が下るものですから、いきおい休みを休まないような結果になります。そこで鮮魚店の店舗改造とか、冷蔵庫を作る場合に補助金を貸すようなことを考えていただきたいと思います。

定休日の問題ですけれども、業者間の協定とか、話し合いですといっても、なかなかそれは実行不可能なことが多いわけです。ある程度法律化していただいたほうが。

塚本 それは新聞でもご存知のように、毎月休日を作ろう。日曜のほかは毎月一日を休むようにしたらどうか、平均化して今までの日曜のほかの休みを作ろうという議員立

法で出ていますし、そういうことは工場に勤めている人もいいしわれわれも希望するのですが、奈良の水谷さんのような場合には、休みの日にはよけい押しかけてくると思うのですが、それをどうしたらいいか。

岡田 商売の方はほかの日に休めばいいわけですから。

私の子どもが大学を出たころ、しばらく川崎の製鉄所で働いたことがあります。臨時雇の者は祝祭日に休みますと有給ではありません。ある種の人は有給で休みが多くなり、ある者は日給のために休みが少なくなる。内職の方は下請しておりますために、大きい会社の内職ができなくなるし、いよいよ貧富の差が開いてくると思うのです。祝祭日を一面で喜びながら、一面喜んでいいかということ、私の家庭で話し合っていました。

塚本 大へんいいことですね、対立する矛盾があるわけですね。

佐橋 そういうふうにきめた休日が日給者でも臨時であっても、全部有給にして初めて意義があるのですから、そういうふうにするように私たちみんなで努力したいと思えます。

塚本 立法化の問題も気持はわかるのですが、僕の考えじゃ日本ではあまりに法律が多過ぎるのではないか、なるべく法律を作らずに自主的な段階できめていくようにしたい

と思います。

森 いわゆるサービス業にたずさわっている者の心得として、今まであるところでは十点サービスしていたものなら、それは八点のサービスに下げるということ、そうして家族のほうにサービスをします。そういうふうに考えたらという話が地方会議で出ました。

大橋 公けと自分を区別したらいいかがでしょうか。時間は短縮しないで家族のうちで時間的な自分の自由な時間もとるし、その話し合いで交替制にしたら。

岡田 私のところでは二年ほど前までは私のところだけでなく、近隣もみんな月一回の公休日でした。それを週休制に近づけるために昨年からは二回にいたしました。大へんこれはよくなりました。全店が一斉に閉めます。ために今年から私の店だけは四回、週一回の休みにいたしましたけれども、二回は全部閉めます。あとの二回は当人と話し合います。

塚本 従業員をたくさん使っていらっしやるところは交替制もできるでしょうが、家族でやっているようなところでは奥さんの方にしわ寄せがくるという問題、これを皆さんの方でもう少し工夫していただきたいのですが。

橋本 それはある程度家庭内の話し合いで解決すると思います。

塚本 観光地へいきますと、お店で売っているものはどこでも大概同じようなものです。ああいうところを通るときにいつも思うのですが、先ほどお話のありましたように、お客さまがなくてもそろって店を開けていなければならぬ。そこを輪番制で、今日は甲のうちが開けるそうしてほかの店は休んでいる。あしたは乙の店が開けるという特殊な業態による工夫のようなものも多少してみたらという気もするのですが、いかがでしょうか。

森 大へん結構なご意見で、それが実行できればいいのですが、輪番制で開けますと、お客さまが大へんいらっしゃったときの番にあたった店は喜びましょうけれども、必ず毎日同じような程度にお客がないということから、結局なかなか実行がむずかしいのです。

塚本 長い目で見れば大体ならされていくわけでしょうけれどもね。

森 ですからその理解が皆さんにできればいいと思います。

塚本 そういうこともやっぱり話し合いで説得なさっていかねばならないということ。もう一つ大きな問題は消費者の方に呼びかけるということが大事じゃないでしょうか。買いにくる時間をきめてくれということをマス・コミで働きかける手はありませんでしょうか。

岡田 神戸では元町というところがいちばんにぎやかなところですが、その元町で週休制が全然なかったところを、月二回にして、お客さまの方にも新聞を通して知らせました。今それを週休制にしたいとか、開店を遅くしたいということをしつつあるのです。

塚本 消費者の側からいいますと、大売り出しというビラはしょっちゅうくるのですが、何日と何日は休日だというビラはちっともこないのです、その点商店街も時代に沿って考えて、休日は休みだということが徹底するようにしていただいたいと思います。

もう一つ考えなければならぬことは、農村などにいきますと、農休日というのがこのごろ大分できてきた。農休日だからうどんを打てとか、ぼたもち作れということ、主婦の方はかえて忙しいということがある。休日をどのようにに休養し、どのようにに自由時間をとっていくかという工夫、ここにも問題があると思うのです。

農休日など

安倍 山口の地方婦人会議で農休日の話がでましたんですが、農休日に主婦が休んでないのですね。生活改善普及員が調べましたら、主婦がほとんど休んでないらしいのです。封建的な考えでの嫁さんは労働力だから、農休

日に休むということはおしゅうとさんの手前まづいという
ようなことが非常に問題になって、私の自由時間以前の問題が農村にあるということを知りました。

三浦 私のところは仙台ですが、仙台ではまだ医者が全面的な週休制にするか協議中です。大きな病院では週休制が実施されておりまして、不便なものですから、一般の方々が、どうしても小企業の開業医のところに休日でもくるケースが多いものですから、私のうちは日曜日は午前中ということにいたしております。日曜日の午後が主人の休養の時間になっていきます。うちにいればどうしてもお客さまがきますので、必ず外へ出るということにしています。そうしますと主婦の私がまた留守番ということになり、ふだん手の届かないところのお掃除など、ついやってしまっています。それで、月に二回程度、私がひまを全面的にもらう日をきめていて、それでこっちがいきをつくということにしております。

鈴木 私のほうでは農休日には男の方はほとんど朝から休みますが、女の方はせっかくのお休みだからなにか変わったものを作ってくれとか、それ以外に主婦自身にしても平せいできないことをゆっくりこの日にしてとか、洗濯もしてなどということで、そういう気持ちから抜け出さなければいけないと思うのですが、なかなかできません。平せいに

しても自分が自由時間を工夫してやれば、二時間くらいはとれないことはないと思うのですが、昼間はどうしても休めないし、結局仕事にだらだらと埋めてしまう形でいるようになるのです。

塚本 村の封建制といいますか、それに抵抗してちよう戦してやっていかなければならない田舎で、私の知っている長野県のある市の郊外、純農村ですけれども、私は昭和二十七年に毎日開く老人クラブを日本最初に作ったのですが、その呼びかけにこたえて老人クラブができたのです。お寺の和尚さんが非常に頭のすぐれた方で、老人クラブを作ってお年寄りがここにくれば、昔の地主も小作もないすっ裸の人間として、後いくばくもない人生を有意義に過ごそうと指導をされました。老人たちは喜んで賛成したのです。自分たちは今まで近所隣りと仲良くつき合ったといいながら、隣りに蔵が建つとねたましい気持ちでした、隣りに不幸があると全く他人のことのような気持ちで表面的につきあってきたのじゃなかったか、これではほんとうに仲良くしたのではなかった、ということを反省をしたのです。私はNHKの方と一緒にまいりまして全国放送がされました。そのときのクラブで和尚の話題が世界の情勢なんです。実に驚いちゃったのですが、とにかくお年寄が反省して、百姓は今まであまりむちゃに働き過ぎたのじゃ

ないかわれわれも生身だから休養が必要だ、そこで月々一回農休日をつくろうと老人の方からいい出した。若い人たちの反対するわけはありません。大賛成、おばあさんたちも老人クラブにこられるのは嫁が弁当を作ってよくしてくれるのだから、今度は嫁の日を作ろうといい出して、今度は嫁の日ができました。お嫁さんというのは、大体農村では財布を渡されない限り四十才になっても嫁なんです。そこで子どもを連れてお寺にあつまる。公民館の先生が来て子どもたちにお遊戯をさせたり歌をうたわせたりして遊ぶ。その間にお母さんたちは老人向きの料理の講習会を受けたり、自分たちもうったり踊りをなったりする。大へん楽しそうにやっていたりしゃる。老人で中風などで動けない人がいる、そういう人たちに二万円くらいするのだそうですが、リヤカーのもっと高級なようなものを作って、元気な老人がみんなに乗せてたんぼ道を歩いて植つけ工合とか稲のみのり工合などを話し合っている。こうして村全体が明るくなっている。そのような工夫、説得など重要なことですが、それは皆さんが中心になって周辺に共鳴者を一人でも多くし、意識を持った人のつながりをお作りになる。そして不可能を可能にすることは困難だとしても、やれば可能なことはやるといふ線に持っていくというやり方がいいのじゃないか。今は可能なことでも必ず壁があっ

てできないということ、あきらめを持っていてのですけれども、勇気を持ってぶつかっていった、できるだけ志を同じゅうする人たちでやってみたらどうでしょう。商店、小売商人、観光地の問題など相当重要な問題で、何百年つちかわれた一つの伝統がありますから、なかなか大きな壁があると思いますが、しかし、やっぱり勇気をもって体当たりをしていってみる、ということがいいのじゃないか。

店員たちにせっかく休みができて、遊びに行けば小遣がある。だからその人たちが休みの日や仕事を終ってからの自由時間にゆっくり手足を伸ばせる屋根を作ってあげる。将棋をさしたり碁をうったり、ねっころがってゆっくり休めるような福祉的な施設を考えてあげたらどうか、ということを感じたわけです。

次にどなたかが作文にお書きになっておりましたが、来客などが不意にあってたりして無計画に時間をとられては困けれど、普通の来客などが無制限にこられる。日曜などもめったにうちにおりませんが、今日は自由時間だ、本でもゆっくり読もうと思うとどやどやとお客さまがいらっしゃる。私気が弱いものですから居留守をつかうということは絶対できないので、日曜もついやしてしまうのですが、そういう問題をどうしたらよろしいでしょうか。

お互いの時間を犯さない

安倍 個人個人としては、やっぱり自分も犯されたくないから他人のところにもあんまり勝手な時間に押しつけて、勝手な時間をついやさない心がけも必要ですが、訪問される方としては、いらっしやった場合に、自分は忙しい用事がこれくらいある、何時くらいまではひまがとれますから、ということをはっきりいうようにならなければいけないと思います。私の場合は仕事をしておりますから、今日はとても忙しい用事があって、何時までにしなければならぬから、お仕事をしまったらお会いするわというのです。ですからこちらの条件を相手の方に悪くとられないように、初めにお知らせすることは必要じゃないかと思っています。

塚本 私など何分だけ今日は時間がありますからお会いしますとしておりますが、つい私も話が好きなものから。勇気を持ってもう時間が来ましたということ、べルでも押ししたりした方がいいかもしれませんね。

水谷 私はつき合っている方も大へん忙しい方が多いですから、大ていの場合には、お尋ねするときも来ていただくときも電話で都合聞いた上でないとうがらないことにしております。またお会いする時間も今日はゆっくりさせていただきたいとか、今日は短時間ですませる用事です、とお

互いにとりかわした上でなければ会わないことにしております。

鈴木 理解を求める場合には若い方はわかっていただけるのですけれども、お年寄の方々は一時間でも二時間でも際限がありませんから、自分より年上ですと、どういうふうに切ったらいいかいらいる場合があります。

塚本 農村で有線放送ができているところでは、今まで自転車で行って半日かかったところを、有線放送で簡単に話が解決できるようになった、そういう社会的な手当も合せて考えなければならぬ。習慣を破りながら。

鈴木 私の方では讃岐時間といいますが、八時と書いてあったから九時ごろ行けばちょうどいいということになっております。私なんか役をしておりますときは、どなたもないときでも自分は最初に行かなければならないと思って、時間にちゃんと出ているのですけれども、ときによると開会が二時間後ということになるので、それも他人の時間をとるということになるので、集会は時間通り集まるという心がけを持っていただきたい。

塚本 それは非常に大事なのでしてね。東京にもやっぱり東京時間がありまして、講演を一時なら一時にしてくれと頼まれる。大体五分前にきちっと行くようにしているのですが、一時間くらい待たされる。初めから来ている人に

は大へんな時間のむだをさせることになる。ですから時間を守るといふことは大切ですし、また集会の時間中もむだ話の時間をつくらぬようにする反省が必要じゃないか。

近藤 今度私のほうの多治見市の連合婦人会で、時間励行推進の会というのができてまして、どうしても集まる時間を守るように、という申し合せができたわけです。それがずっと各種の団体の方にも呼びかけられてまして、始まる時間が守られるようになり、何時に終るといふことなども、会合の開かれる場合に連絡されますから、大へん有効に、お互いに時間を犯されないようになって来て、町の人たちも喜んでおります。

塚本 自主的な時間を持つために環境の改善をどうするか、という問題では小売店、観光地の場合の問題、それから来客、相互訪問の場合の問題、集会時間の問題などが取り上げられました。もう少し問題についていいたいことは冠婚葬祭ですね。こういうものにかなりむだな時間があるのじゃないか、それらのことを実際当面する問題として話し合ってみたいと思いますがいかがでしょうか。

冠婚葬祭についてやす時間

鈴木 若い方の中には、主婦にしましても、簡素に改善していきたいという気持は持っておりましても、お年寄り

の方に気がねで、そういうことだけはいい出しにくい状態なのです。

古川 私のほうはできるだけ時間的に簡素化を計ろうというので、公民館で式をあげるのです。親たちも納得してむすこさんたちを擁護して式場に迎えてあげるのですが、そのあと今度はそのむすこさんたちのグループが二次会、三次会というふうになってしまいますと、親がああいう簡単なことをするから、僕たちにこういいうしわ寄せがくるといふようなまだ気分が残っております。

塚本 私昭和二十七年に生活館で結婚式を始めますときに、意識の問題を中心に取り扱わなければならないと考え、憲法二十五条の両性の合意によって結ばれるものであること、結ばれるならば何人といえどもこれに干渉することとはできないものであること、男女平等の立場で結ばれること、これをはっきり結婚式のときに当人同士も誓ってもらいたい、それから居る両親、親せきの人にもそれを承認してもらいたいということではじめたのです。

もう一つは結婚は合意であると同時に法律的の行為ですから、その場で署名する。事実上の結婚と法律上の結婚を同時にすますという意識の問題を宣伝してきました。その結果当然結婚式の冗費やむだな時間をかけるということとはばかばかしいという考え方が出てまいります。次第に全国

的にその風潮が広まったのです。合理的な風習なり、合理的な時間の利用ということは、冠婚葬祭の面においても意識の問題から出発しなければ、長続きがしないということになるのじゃないかと思うのですが、いかがでしょうか。

近藤 聞いた話ですけれども、若い方でコーラスに入っていられっしゃる方なのです。ご両親もある方ですが、コーラスの人たちは皆さん会費制で結婚式の披露をしたそうです。親たちは立派な結婚式を望んでいて、なかなかトラブルがあって困られたようですけれども、おむこさん、お嫁さんがしっかりしていて結局コーラスで結婚なさったといういい例があります。

塚本 われわれ、ものの本質を考えるとということをお忘れで、どうも末端だけを考えやすい。本質というものをもう少しつぎ詰める習慣をつけるようにし、それからまた皆さんの周辺にそういう同志を作っていたいて、それがだんだん大きくなっていくというふうにすべきじゃないかと思えます。いよいよ最後の柱ですが、今まで議論しましたことによって自主的な時間がここに生み出されたと仮定して、そうした場合にその時間をどういうふうに使えばいいかという問題について、これから話し合いをしたいと思います。

自立的時間の使い方

鈴木 自分を高めるとか、自分の生活を少しでも向上させていくために使うことが第一で、その上で社会のためとか、周りがみんな手を繋ぎ合って、みんな一緒に向上していく方法をなんとかこれからしたいと思っています。

佐橋 自分を深めるのはもちろんですが、自分一人がとび出して走るといことはきらいですので、その方面をグループ活動に使っているわけです。そのグループ活動というものもやっぱり農村、都市で地域婦人会というものが浮き上っている。地域社会に溶け込んだグループ活動でなければならぬということで、全部地域婦人会というものに全面協力の線で作っております。ですからよく婦人会の行事と重なったことをやります。少年院の慰問をしたりいろいろなことをしておりますが、地域婦人会と全部摩擦しないように溶け込んだやり方をしております。

そのほかに名古屋のほうに行って、自分自身を深めるグループを持っております。名古屋のほうに行ったときのグループも自分一人です。のじゃなくて、グループでも、いいと思ったら、すぐ地域の仲間とやろうという方針をとっております。

安倍 ふだん忙しく働いておりますから、夫や子どもと楽しく過ごす、自分自身楽しく過ごすことにより多く使いたいと思います。

大橋 大体考える時間に使っております。そうしてなるべくうちの中を楽しくして、三人のグループですが、その人たちとまじわりたいと思います。

荒井 地域全体の人が仕事に追われて意識が低い面がありますから、なんとか生み出した自由時間はグループ活動の方に利用したいと思っております。

塚本 共同浴場でいろいろの会合を持っていらっしゃるというお話を。

荒井 共同浴場がありますので、そこへ寄ってくるお母さんというのは地域の人たちばかりですから、会合の連絡とか次の会の持ち方というものはほとんど銭湯でお話します。そういうところだと意外と案外みんな気分的になごやかになっていくから、ほんとうの意見が出てくるのです。それがまた楽しみなんです。

塚本 からだのあかと心のあかと両方洗い落すわけで、一挙兩得ですね。

鈴木 平せい仕事をしておりますと、子どもとの接触ということが家庭にいながらともすれば薄れがちになりますので、たまには子どもとゆっくり行楽に出るとか、むだ話でも心の触れるような時間もほしいと思います。

僅かな自由時間を

塚本 皆さんどういふふうにお使いになっていらっしゃいますか。

岡田 私のほんとうの自由時間というのは、皆さんがおよすみになった十一時から十二時までの間と、朝六時から七時までの間です。この間にみんなに迷惑をかけないように静かに本を読みます。それからときには主人が、このラジオのこのニュースだけはぜひ聞いておけとか、申し上げますときは読むのをやめて聞きますし、子どもが勉強していても放っておいて私はやすむことにしております。朝も六時前に目をさしますが、子どもや主人の邪魔をしないために寢床の中でスタンドに風呂敷をかぶせて、少し読んでいます。そのうちにいろいろな聞きたいラジオがあればききますというふうにしております。

塚本 お医者さんの意見を聞きますと、ヨーロッパでやっているような三分法をやっている、年寄りになると八時間は眠れない、朝早く目が開くのだそうです。この間その問題でその方面の専門のお医者さんに聞きましたら、目がさめてもふとんの中で八時間は眠ったと同じ状態にいたことがからだのためにいいということをおっしゃられました。今のように読書をなさるとかラジオをお聞きになるのはいいことだと思いますが、睡眠時間をけずって自由時間を作るといふことは無理があると思うのですが。

富永 私は植物採集をやっております。ご存知でしょうけれども植物学者はいつに長生きをすると申します。野外に出て歩きますから健康にいいことは当然ですけれども、お医者さんのおっしゃる言葉では、散歩といって目的なしにぶらぶらと歩くよりも、一つの目的を持って歩くことが非常にいいのだそうです。それから、方言の調査をして、ノートをとっております。そのほかに星の世界のことが好きですから、近所の方の望遠鏡をみせていただいて同好の人たち話し合ったりしています。

三浦 私はふだんの生活の中からは自由時間としてはつきりと作り出すことができませんので、月に二回自分の自由に使える日を設けて、短歌の会に出たり、グループの会に出たり、ということに使っております。

佐橋 私は商売しておりますから、自転車に乗って歩く、その自転車に乗って走り歩く時間が自由時間だと自分で勝手に呼んでいるのですけれども、自転車に乗っていない道をのんびりグループのことを考えたり、公開の場で話さなければならぬときには演説のおけいこに集中したり、このごろコーラスのグループに入っておりますと習った歌を歌います。

橋本 私は花が好きなものですから、花を作ることにしています。常にお客さまと接してしゃべっていなければなら

ない商売ですから、静かに自分一人になって花を作っている、孤独になりたいのですね。それから音楽を開きたいと思いますので、ステレオも買って一人静かに音楽を聞きたいのですが、それはとてもぜいたくなことでかなえられそうにもありませんけれども、希望だけは持っております。

近藤 私たちの婦人会の中に「映画友の会」というのがあります。それは役員の方が、一月に映画の大体公表される映画の中からいいのを選んで、鑑賞をするわけです。年に一回か二回かのことですが、映画をみたあと、みんなで食事をしながら感想など話し合っておりますが、大へんみんなが喜んで、いいことだと思えます。

安倍 大切な自由時間を有効に使おうということばかりに気を使うと疲れます。生活技術の習得をするグループに出るとか、楽しみなことをするとかいうような計画がある程度作るといっても非常にいいことだと思えますけれども、それと一緒に計画のない自由な時間というものがあってもいいのじゃないかと思えます。

塚本 皆さん平ぜい疲れているからぼんやり休養することはいいいことだと思います。娯楽、映画の問題なども出ておりますが、娯楽というものを皆さんどういうふうにお考えになつていらっしゃるか、またどういうふうにご利用していらっしゃるか。

娯楽の利用

橋本 映画を見たり娯楽をすることによって疲れをなおすことと、明日への希望がとてもわいてきますから、そういうふうにご利用しております。

岡田 仕事のことからうちのことからいろんなことから解放されて、なにもかも忘れたという瞬間がいちばんいい娯楽じゃないかと思うのです。そういう意味での旅行も年に一回や二回いたします。

塚本 映画や芝居を見るということもたしかに娯楽ですけれども、たとえば岡田さんのおやりになっているように一時間店の者と一緒に茶を飲みながらダベるということも娯楽だと私は思います。生理的に申しまして気分転換をする。私のように常にものをいったり書いたりしている者が疲れますと、あてもなくステッキを持って二十分ぐらい歩きますと、ずっと新鮮な感覚になる。娯楽というものをあまり固定して考えないで、娯楽は生活のどこかにあって、手近かに見つかるということも考えていいのじゃないかと思いますが。

蟹本 私は、楽しみ、娯楽というふうなものは生活の中にスポンと穴をあけちゃうことじゃないかと思えます。俸給生活者でお金の余裕があるわけではないのですが、夏休み

におばあちゃんとは別むねになっておりますので私のほうに鍵をかけて海水浴に行ってしまうのです。共済組合を利用して四日なり五日なりスカッとあけてしまうのです。帰れば赤字の家計が待っていることはわかりきっているし、そのほかのときに割に不自由していることもありませうけれども、あの五千元あれば、あの八千元あればと思うときもあります。私としてはとても娯楽になるのです。

塚本 ここで特別オプザバーの方からご意見をうかがうことにして、最初下山田さんから。

みんなの力で大きな壁をやぶる

下山田(地婦連) それぞれの技術面からそれぞれのやり方をなさって自由の時間をお持ちになるということ、非常にそれは尊いことだと思ふのです。しかしまだまだほんとうに皆さんのような自由の時間を持たないという人、そういう人の問題も数多くは出ませんけれども、そういう問題を解決しますにはやはりどうしても先ほど皆さんのおっしゃったように、法律の問題にしても賃金の問題にしましても政治力が必要だと思ひます。政治力によって経済というものがうるおうならば、割り合いにたやすくできるのじゃないかと考えたわけです。ですから皆さんの持っている一票がほんとうに大切なことだと思ひます。

佐藤(YWCA) いろんなことを感じながらうかがいました。一昨日と今日の話し合いの中で強く感ずることは、十五年、二十年前にはこういう話し合いはできなかっただろうということ、いまはこれだけ皆さんが話し合えるようになった、失礼な申しようですが、自分の考えることを人にわかってもらえるように話せるようになり、人の考えを受け入れることによって自分の考えが豊富になるということを考えれば、いいことはいつか実現するのじゃないか。ここで考えたことでいちばん根本になっておりますことは、皆さんが自分の生活を大事にする、自分を大事にすることから発しているなことを追って来ているのじゃないかと思ひますが、自分の時間を作り楽しみを持つ。どういうふうにそれを使おうか、その考え方というものはすべて自分が自主的に自分の命を処理していくことで、お金にしても自分が好きなように使うと同じような意味だと思ひます。どうも私たち今まで自分を犠牲にして、これだけが非常にすう高な生き方で、楽しみを持たないで苦しんでいくということの方がはかりにかけて価値が多いという考え方から抜け切れないじゃないでしょうか。ですから一生懸命生活していても、九分通りそこにいくのですけれども、やはりそこに自分たちをうしろに引きとめておくものがあるのは私だけじゃないと思ひますが、楽しみということ

も大事なことなのだ、自分が命の洗濯をすることは本質的に大事なのだということがわかれば、自由時間を持つという問題が真剣に考えられて来て、やっぱり金もうけのほうにより大事なのだという考えがどこかにあれば、そちらを選ぶことになりましようから、先ほどからお話うかがった中で共通した考え方をお持ちの方があるので、ほんとうにうれしいと思ひましたが、子どもが一人前になるまでは家族ぐるみの喜びというのが相当大きな場所をとらなければならぬと思ひます。自分を失いたくない。自分がひとりぼっちになったときに、カスミたいになることはつまらないことだと思ひます。自分の生き方がその間に一本切れないで続いていきたいと思うので、それが勉強であるのか趣味であるのか、他人にも意をおまほすのかわかりませんけれども、そういういき方がやはり大事なのじゃないでしょうか。私自身は夫と一緒にものを考えたり楽しむということは、相当時間を使っていきたいと思ひますので、夜の時間なんかずいぶん話し合うのです。そういういい方をするとずいぶん生意気に聞こえるかもしれないけれど、うちにおりますと子どもがおります、昼間は家政婦が来ておりますので、よく主人と外で会うのです。ランデブーみたいなんですけれども、町の中で会いますと気分が變るのですね。よく話をするし、けんかもするのですが子どもは夫

婦というのはそういうものだと思うのです。やっぱり夫婦というものは、親子で生きていくよりも長く生きていかなければならないのですから、子ども子どもといひますけれども、夫婦は自分の生活を大事にしていかなければならない。自分の生活を大事にしていくためには、共通の話題と共通の時間を持たなければならぬ、と感じましたので、ちょっとご参考までに。

石井（婦人民主クラブ） 皆さんのご経験からの言葉を尊く、うけたまわっております。話し合いというものはなっているものだろうかと思つたのです。ところで自由時間を作るのに、きいておりますとずいぶん無理があるのですね。その無理がやはり個人の力ではどうしても解決がつかないで、社会機構、経済機構、政治機構にしばられているところが非常に問題で、またそれを打ち破るのが大へん問題でありますので、私が大へん手腕のある政治家だったらと思ひました。ことに佐橋さんのお話をうけたまわっておりますときに、苦しい自転車の上が自由な時間でいらっしゃるということを書きました時、それを楽しんでいらっしゃるのですから内政干渉してはいけないと思うのですけれども、やっぱりからだに障りになりはしないかと思つて胸苦しくなりましたし、八時に夜食をなさるといふことをうかがつて、子どもさんがその間どんなに召し上りたいだ

ろう。それをどういうふうに通じていらっしゃるか、そこに疑問もあるわけです。その一つ一つが、私どもの力ではなかなかすばすば割り切つて解決がでないところに、今日のお話し合いの最後のところがあると思ひます。お話し合いが深まりましたのでやっぱり最後の心をそろえ力を合わせていけば打ち破ることができるといふ期待ができるわけです。ですからいいグループ活動をしていただいて、大きな力で大きな壁を皆さんで打ち破っていけばいいと考えたわけです。

塚本 大へんいい助言をいただきまして、ありがとうございます。生み出した時間をどのように使用すればいいかという問題で、共通した問題としては休養をとらなければいけない。そうしてその休養のとおり方というのは、生活の中にボカンと穴をあけるような、ほんとうに自主的な休養をとったほうがいいという意見もありましたし皆さんも同感のようでした。娯楽といひますか楽しみという問題ですけれども、これもやっぱり生活の中に楽しみを見出す。家族ぐるみの楽しみを見出すといふことも非常に大切なことだといふ意見でした。ことに助言いただきました中に、主婦が楽しむといふ時間を作る、これも私の実験なんです。夫婦の仲が非常にいいという家庭からはあまり不良少年が出ないのです。大分子どもも大きくなりましてお

たでなく、そこに自主性の問題というものがあるのじゃないかというふうに、皆さんの実感のこもった発言で強く感じさせていただいたわけです。

父さんとお母さんで今日は映画に行くからという、ああ、やっているやっていると調子で、子どもたちの干渉される世界からむしろ解放されるというふうな点もありまして、そういうこともやはり大事なものではないか。団らんしながら楽しみ、また相談やらいろいろ教育をなさっている方もありますけれども、家庭の奥さん自身が楽しむことを知らない方は、店員とか家族を楽しませることを知らない人なのでして、自分がどうして自由時間を取り、自分がどうして楽しむかということを知った方は、そういう人たちに対しても楽しませ喜ばせるということもできるのであります。この点が非常に大事なことである。もちろん教養を高めるということも大事なことですけれども、それから趣味に生きるというか、植物の採集を目的に持った自由時間をお持ちになるというようなことも大へん結構なことです。家庭全体が明るくなるということは地域、環境を明るくすることにもなる。そういう志を同じうする方々がグループをお作りになるのは当然でしょう。そして侵さず侵されずという生活の仕方、そこでお互いに理解を持つことも大へん大事なことじゃないか。時間をどう使うかという計画をなさることも必要だけれども、といってその計画の時間にあまりに神経をとがらして、時間ノイローゼになって、かえってその時間にこちらがとられるといういきか

出席者

北海道 岩手 秋田 茨城 新潟 富山 山梨 長野 滋賀 京都 和歌山 鳥取 島根 広島 徳島 佐賀 リーダー 特別オブザヤー

池 団 弥 前 花 斎 土 永 高 山 萩 海 片 小 渡 堀 清 小
田 野 富 川 岡 藤 井 井 見 中 原 野 口 林 辺 水 泉
リ 信 育 豊 チ 田 八 紀 も 道 幸 伸 芳 範 セ 和
ゆ 夫 子 子 子 子 子 子 子 と 子 子 子 子 子 子 信 イ 子
う 夫 子 子 子 子 子 子 子 と 子 子 子 子 子 子 信 イ 子

(農業) (農業) (公務員) (農業) (無職) (農業) (無職) (農業) (無職) (漁業) (農業) (無職) (無職) (評論家) (全國漁業協同組合)
婦人部連絡協議会)

自分の言葉で真実を

団野 今から私が司会させていただきますけれども、ひとつ気楽な気持ちでやっていただきたいと思います。まず最初に私の、リーダーとしてつとめさせていただく気持ちを少し話させていただきます。

今度の婦人会議は、生活時間の自主的な設計、また自由時間をどうしてつくり、どうして利用するかということが主な課題なのです。私たちの生活時間、あるいは自由時間に対して私はこういうふうに考えているのです。人それぞれにめいめいの人生というものがあって、毎日毎日の生活を積み上げて、一生がつくられてゆくその間に結婚もし、家庭もち、子どももつくり、子どもも育てるということで一生終るわけなのです。これが人間の運命です。その毎日毎日の二十四時間をどのように生きるか、その積み上げ方にある問題があると思うのです。二十四時間ただぼんやり生きた人もあるし、二十四時間、わたしはほんとうに人生を生きたのだという自覚をもって生きる人もあるでしょう。そういうものの積み上げで、その人の送った人生の値打と申しますか、それが非常に違ってくるのではないかと思うのです。

人間誰しも、生まれて死んでしまえばそれまでですけれ

ども、その一生をどういう意味をもって送るかということが、問題のいちばん根本じゃないでしょうか。そうしたものの考え方の中から、生活時間あるいは自由時間というふうな言葉も出てくるのだらうと思いますが、その場合に、言葉だけが頭の中でから回りしているのじゃ、あまり意味がない。人間は社会という機構の中で横にも広がり、また縦にも、先祖から自分の代、子ども、孫というふうにつながり合っており、そのつながりの結び目として自分がいるわけですから、そういうつながりの中の生活時間、自由時間という問題だというふうに考えていきたいと思うのです。

今度、みなさんの作文も、そういう角度から拝見したわけなのです。文章として立派だ、作品としてよくできているというものもたくさんありますけれども、私の審査した立場は、むしろ作文は下手であっても、その中に自分が生きて、ほんとうの人生を渡っているのだという真実感が流れている文章、いきいきとした現実が感じられる文章を選んだわけなのです。

ここに選ばれたみなさんは、北から南までいろいろな地域の人の集まりであるということ。いま一つは、ちがった年代の人たちの集まりであるということも配慮しているわけなのです。集まられた十六人の方々のそういう地域的な差や、それから年代の相違、さらにもう一つ付け加えます

と、それぞれの生活、あるいは仕事の内容の違いというものから当然生じてくる、ものの見方、考え方の違いというものをお話し合い願えれば結構だと思います。そこからお互いに必ず得るものがあるはずです。

次に、三日間の話し合いのやり方ですが、私は、こういうふうに進めていただいだいかと思うっております。

まず第一は、これは意見のコンクールではない、あの人はいい意見をいったという競争の場ではなくて、一つのよりよい結論を出すための協力の場だということです。いい結論を出すためにみんなが力を合わせるのだ、というふうに考えていただきたい。そこから当然出てくることですけれども、自分の意見なりものの考え方はどんどん話していただき、同時にほかの方の話していらっしゃることもよく聞いていただく、そしてその中からさらに充実した自分のものの考え方を引き出すということが非常に重要だということです。

第三には、いうまでもないことですけれども、真実を語っていただきたい。真実の中には、自分は気付かなくとも、非常に重要なこともたくさんあるわけです。そういうことをほかの方に気付いてもらうということも必要です。それから、恥ずかしがらずに遠慮なくほんとうのことを話してもらいたい。

第四には、言葉はみなさんのおくのに言葉で結構だと思います。むずかしい言葉、本に書いてあるようなえらそうな言葉を使ってもらわなくてもいいわけで、自分の言葉で自分の考えやものの見方を話すということが大事だと思います。要するに気楽にやってもらうということです。

それでは、今からお話ししていただくことにして、いちばん最初に申しましたこの会議のテーマを頭に置きながら、それに別にこだわる必要はありませんけれども、自分の村のことだとか自分のものの考え方だとか、ざっくりばらんに話していただきますように。

農村の種々相

小泉 わたしの部落は町から八キロも入っている、ほんとうに辺ぴな開拓地なのです。一日とっていいのか、一年中、主婦の座というのが忘れられていたのです。忘れられていたというのは開拓地ばかりではないでしょうが、農家に入ったら一生懸命、ただ身体を使って働くばかりが主婦だ、というふうにとられていたのです。私どもの開拓部落では、家にお客さまの応待をすとか、子どもものめんどろを見るという時間がなかった。それで自分から主婦の座などは考えたことがない。ただ身体を一日いっぱい、一年いっぱい、日のあるうちは働いていたというに過ぎな

かったのです。しかし、これじゃあ一生面白くない……。

すこし自分の主婦の座を考えて、自由時間をつくることができれば人生楽しいのではないかと考えて、二年ぐらい前から時間割をつくってみたのです。一日のうち昼前二時間、夜一時間の自由時間をとりまして、一週間交替で夜の一時間は主人と夜学へ通っていたわけですから、そしてそれを徹底的に実行した。自分としては、自分の家庭内ではとても楽しい人生を過ごしているのです。最初はまわりから、あの方は主人が養子だから、旦那さんを尻に敷く、自分の母親だから、兄弟だからあの方は実行できるが、わたしたちはとても実行できないとよくいわれた。しかし、家族の者の理解と協力を得ることは、そんなにむずかしいことではないと思うのです。夕食後にみんなで話し合うとか何とかいろいろ方法はあると思うのです。

清水 私の農村は何百年も前からの農村で、封建的といえますか、古い因習とか慣習に捉われて、どうすればよくなるかということがわかっていながら、なかなかやれないところですよ。農村はただ働く働く、ほんとうに暗いうちから、暗くなるまで働く。そうすると訪問の時間なんか早く行かなければ仕事に出てしまうからその前に行こうというので、暗いうちからよその家にくる。ゆうべおそかったから、今日はすこしゆっくり休んでいこうというつもり

が、結局起こされてしまう。それから家族制度が、お嫁さんとかしゅうとさんの関係はずいぶんよくはなっています。が、やっぱりまだお嫁さんに悩みがあるのです。旦那さんが威張っていて、奥さんが何か買うにも、旦那さんからお金をもらって行くのです。だから女の人たちで、何かの集まりに出ましようといっても、お金さえあつたらなあ、とすぐいう。自由時間や生活時間に結びつけて、何かをやるうとしても自分で経済をやってないと、集まりに出るという気持やら、何かを習うという気持にもなれないのです。

小泉 そういうところのお嫁さんはかわいそうね。自由時間を生み出すといっても、理解がなくちゃ全然できないでしょう。旦那さん一人が家計切り廻しているといったら、ほんとうに自由時間なんかお嫁さんにはないですね。

土井 でもそれが、農村の実態だと思います。

小泉 おしゅうとさんがいつてくれなかったら、憎まれでも、お嫁さんや若い方から切り出して、家庭の話し合いというものをつくったならなごやかに話せるのではないかと考えるのです。その機会をつかんで、若い人が生み出す力を考えなくちゃならないと思うのです。一生おしゅうとさんと暮らすんですから。

土井 心の中では絶えずぶつかっているし、今の若い人はほとんど打ち破るように努力して、わたしたちの若い時に比べるとよくなっているのですが、まだまだ破りきれないものはある。でもそれを破ろう破ろうと努力しつつあるというのが現状じゃないでしょうか。

花岡 わたしは、家庭での話し合いがいちばんじゃないかと思う。話し合いすることによって向こうの心もほぐされてきますし、自分のいいこともいえます。そうすれば、やっぱりあれも思っているか、わたしもああしてやらなければ、ということが出てくるのじゃないかと思うのですがね。

団野 いまのお話、家族関係、あるいはまわりの関係ですね、それに非常に大きな壁がある。それはなかなか破れないものだが、若い人が根強くやれば破れるという意見も出ました。それじゃ、次にまいりましょう。

堀 ただいま清水さんがおっしゃったように、わたしのほうも、因習にとらわれる古い農家だけの部落です。それで参政権は得たでも、わたしたちはなかなか男の方と同等で話してできるところまではいってないのです。社会性が乏しい、自己批判がないとよくいわれる。つまりわたしたちはもっと勉強しなければならぬということです。

忙しくて、勉強できないと家の中で話をしましたら、忙

しい忙しいというけれども、計画性がないからじゃないかといわれたのです。それで婦人会の会合に出たときに、計画を立てて仕事をしていったらどんなものかと話してみたら、みんな「百姓のくせに、天気相手の商売でそんなことできない」といわれたんです。けれども百姓は天気相手の仕事だけれども、主婦にとっては家庭のことなどいろいろなことがあるから、月曜には何をする、火曜には何をするというふうに、計画を立てていくと、農作業のほかのことが順々に運ばれていくような気がしたのです。それで小さいわたしの部落のなかだけで、話し合ってみたのです。こんなに機械化が進歩していて、土地改良なんかも相当進んでいるのに、どうしてわたしたちがこんなに時間がないのかと、そうしましたら、機械化はされたけれども、経済とバランスがとれないような機械の購入の仕方をしているので、それを補うために副業に時間をもっていかれるんです。それから、あくまでも自分ということを考えてやればいいでしょうけれども、いま清水さんがおっしゃったように、なかなか部落の因習にとらわれがちで、どうしても自分個人ではできないことがかざったので、農休日を決めてもらうことをまず最初に部落でやったのです。ずっと昔から、比較的好いとみなさんからいわれているのです。農繁期を除いた以外です。田植とかは日曜でも休まないが、

それ以外は休んでおります。明日雨になりそうだという時は、前刈りをして、明日の分を今日働きましょうとやっていたが、日曜でも一日休むのでなく、午前十時頃までは草刈でも何でも働く、そうすると、わたしはいいが、若いお嫁さん方でしたら四分の一働いて帰ってきて、作業衣を脱いで洗濯をして、お部屋の片付けをしたらおひるまでにできない。結局は半日のお休みになる。それでは困るというので、わたしたちが、農協の婦人部と青年部の合同の座談会を開いて、どうかしてヨシゴト（四分の一働らくのをヨシゴトという）を廃止してもらいたい、という意見が通り、公民館のほうから部落の主人方が集まる会合にもち込んでもらいました。

それじゃあ朝一時間ぐらい早く起きて、仕事をよけいにしたらいいでしょうと、何百年も続いているヨシゴトが廃止になりました。自由時間といっても、みなさんそれぞれ目的があると思います。それで、何とか勉強するためには修養日を設定したいものだなとみんなで話し合いました。修養日の設定は、農協の婦人部にお願ひして、毎月五日は、修養日に設定されております、――農繁期を除いて――。

次に、どのくらいわたしたちが雑用に追われているかというところで、グループで時間も調べてみたことがあります。二月中の一週間をとってみた。そうして衣食住の時間

全部引いて調べたら、雑用時間というのが約六時間ぐらいでした。それをどういうふうに使うかということは今検討中ですけれども、わたし、日課表をつくる場合に、一週間の栄養の献立をつくります。栄養の献立といっても、カロリーなんか出すことはわからないから、有色野菜は青とか、動物性は赤とか、色別に書いてある。うちのほうでは肉が嫌いな人が多い。経済も考えると、週に何回も食べられない。それで、肉食デーを水曜に決めてある。

そのようにしてやってみますと、何となく気持が、楽なような感じがしまして、農家ですから、わたしたちグループは時期に分けて計画を立てることにして、特に冬分は、農繁期に備えてのびん詰とか、衣服の修理とか、お休みに話し合ってやっています。

山中 今、一週間の仕事の時間をグループでつくるようにしたら、とおっしゃったが、一週間の仕事の時間割ができたのですか？

堀 時間割じゃないんです。ただ日課表をつけてみる。はっきり何時間という正確な時間なんか出してみても、できないです。

（日課表を示して）こんなふうにして、たとえば日曜は戸だなの整理、火曜はお手洗いの掃除などをしていて。明日は残物整理とか、家畜のワラかいとか、風呂たく日はいつ

になるか、ざっとこんな計画です。

でも、雨が降ると、家にいる時間があるんです。木曜は家において家事……食べ物を整える時間にとっておきます。けれども雨が降った場合には、それを入れ替りにして、そんなにきちんとはいかないんです。家族会議はないんですが、冬でしたら、ストーブを開みながら、息子夫婦たちに、どんな計画を立てているか、一応話してみても、明日こういうことやりたいと思うがあなたのほうで借りられないかしら、あんた明日なにやる？ と聞くんです。

萩原 お財布は誰が持っているのですか？

堀 家計費はわたしが持って、生産は息子が持っています。主人は公租公課のほうをやっています。小さい財布です。たかが二万円ぐらいの財布でやるんです。

萩原 嫁の小遣いは？

堀 今はわたしが出しております。今度養鶏グループをつくることにしています。生産と経済を結ぶグループでなければいけないというので、農協の方へわたしたち六人で、養鶏の融資をもち込んでいます。養鶏を嫁にさせてもらって、嫁はわたしから直接小遣いを出さないように、生産でもって小遣いを得るようというので、話し中なのです。

団野 いまのお話は、要するに自分の生活だけでなく、

生産と結びつけて解決点を見つけようとするわけですね。

渡辺 私は直接農業に従事していないので、ここに出る資格がないような気がして聞いていたのです。

わたしはいまは茨城ですけれども、私は新潟の蒲原平野の真ん中の農村に育ちました。父はなく、母が二町歩の水田、三反の畑をしておりましたので、小さい時から農業のお手伝いをして過ごしました。農村にお嫁に行く積りで農業学校の農業科を卒業して、一生懸命農村に生きることを自分でいいことだと肯定しながら生きてきましたが、母の生活なんか見ていますと、父の兄弟がいるところに母が嫁いできて、ものすごく苦労しています。またまわりの人たちを見ても同じで、いちばんあわれでみじめなのは農村のお母さんだと思いました。そこから抜け出すためにどうすればいいかを勉強しようと思いました。それで、農業経済とか農村の実情を、各地をまわったりして勉強している間に、みなさんの前でこういっちゃ悪いのですが、農業は劣性産業だという考え方が芽生えて来ました。こうやったらいい、こうやったら仕合せができるというふうに考えてやることはいいのですか、その前に大きな力といいますか、今まで遅れていた家族制度とか、経済的な鎖から抜け切るためには、一人ではなかなかだめだ、という考え方がだんだん芽生えてきたのです。家にいた時には、母の生活を見て

ほんとうにみじめだ、あわれだと思いましたし、自分のものを持って生きていけない。そのことから母に協力して、自分のものを持つように仕向けて、いいお母さんになるように、いつもいろいろな面で協力したんです。たとえば婦人会の会議なんかでも、おえら方ばかり出る。しかし、みなさんのように目覚めた改革に至っていらっしゃる方には問題ないですけれども、まだそこまで至らない多くの人たちに、目覚めてもらい、考えていただくようにしむけてゆくべきだと思うのです。

小林 私のほうは一日と五日は完全に農休日です。よそよりも休みがいっぱいみたいですが、二十九年、三十年に耕地整理して、三十年に大水害を受けまして、経済面で行き詰まった。その時に、嫁である自分に、貧乏しよわせてもらいたいというので、たまごあきない始めました。一と五のつく日を完全な休みにして、自分の現金収入を得るようにしたわけです。

団野 あなたは、午前五時から午後十時までの間をきちんと分けていらっしゃいますね。その通りできますか。

小林 農繁期は朝五時に起きて、六時半ころ掃除を終って朝食、二十分ぐらいで食べ終り、十分ぐらい休んで、四人の子どもを学校へ出す。七時二十五分ぐらいから十分ぐらい新聞を見ます。それから水田に行つて、十一時半の役

場のサイレンで上がってきまして、昼食です。夜も五時ころのサイレンで上がってきまして、屋敷を片付けたり、洗濯を取り入れたりしています。

山中 小林さんのところは一日と五日が完全な農休日といわれましたが、どんなふうにしてあなたの村でつくられたのですか？

小林 一、五、十五、その日に仕事していると、田植しているところ荒らす、そういうことが昔からあったらしいですね。

片口 富山市から電車で大体三十分ぐらい行つたところで、半農半商の、ちょっと町がかったところでした、すぐ近所に、ラジオの部分品をつくる工場があります。それで農閑期になると、女の人でもそこへたくさん働きに行つて、わりあいに経済的には楽だと思います。自由時間の問題ですけれども、一般に時間はあるのですが、その時間を工場のほうに行つて、少しでもお金をかせいで、自分のほしい着物なり洋服をかうという状態で、公民館の婦人部のほうで、料理と裁縫、読書グループ、レクリエーションと四つに分けて、グループ式にやっているので、出てくる人が意欲がないというか、世話人だけが出てくるというような有様です。

海野 山梨の一の宮町といいますと、桃の有名なところ

で、桃とぶどうが少しばかりあるのが普通一般の家庭です。私のところは二反歩ぐらいのぶどうだけの小さな経営ですが、小さな経営だけに、兼業の農家としての特色があると思うのです。

私欲張りかもしれないですが、よい嫁でもありたい、よい妻でもありたい、よい母でもありたいと四つも五つも欲望をもっているし、兼業農家という大きなものを頭の中に維然とつぎ込んでいて、重荷になっていました。私と同じような悩みをもったグループ員もいまして、昨年が一番忙しい時にアンケートをとりました。四十五名のグループ員ですが、「誰にもおかされることのない時間がありますか」という問に対して、全然自由時間を農繁期にもつことのできない者が二四%もあった。そうして「ある」という方も、せいぜい一日に五十分、やっとみついているというお話。それに比べて、今年の一月、農閑期にアンケートをとってみましたら、主婦の自由時間はみなさんが平均二時間ぐらいいはもっていらっしゃるという結果が出ました。つまり農業経営をしている者にとって、農繁期と農閑期の差がありすぎることです。一年間の差を、いいあんばいにバランスをとって労力の分配ができるような生活にすれば、きつと自由時間は農繁期でも農閑期でもたやすくみつげられることができるのじゃないかしら、ということをや

グループ員で話し合っているようなわけです。それには一年間の生活記録とか、作業こよみとか、家事こよみとか、いろいろな生活の記録がなかったら完成することもできないし、次の発展段階にも進むことができないので、今年のグループの目標として、何か一種でもいいから作業こよみをつくることにしようでしよう、地域の社会の方たちと話し合いをしているわけです。

萩原 私、ここに入れていただいたのは、自分が百姓していないのですが、みなさんの声を聞いて勉強してこいということだと思えます。

わたしは結婚するまでは都市生活をしていたのですけれども、結婚して農村に入りました。まわりが農家なので、そこに入ってから農村の悪いことが目について困った。集会という、時間が一時間か二時間遅れる。終るのが十二時、真夜中です。そしてせわかく出て行っても、女の方は全然発言なさらない。こういうのをなおすには新しく入って、何をいわれても平気な人が発言しなければ、因習の打破といえますか、そういうことができないと思い、私が発言したのです。「始める時間は守りましょう」。そうしたら、女が何かいったというのでみんなびっくりしてしました。近所の奥さんたちが、そういうことをわたしたちもいいたいと思っていたが、ここに昔から住んでいるのでやれ

なかった、後押ししますからやってゆきましょうというわけ、グループができました。私自身も全然百姓をやらないので、そういう人たちの仲間入りができないので、農繁期になるとそういう方たちの家に手伝いに行っております。

初めは自分の家のことなどの話し合いでしたが、もの足りないというので、政治のこととかいろいろやりだしました。けれど、やっぱり農家なので雨の日でないと出てこれないという人が多くてむずかしい。どうしましょうといいながらそれでも続けていきましたが、NHKの婦人学級があつてそれに出ましようということになり、一時から始めて二時に終り、そのあと一時間しゃべり合う。それで一週間に二時間ずつ割り出すという方法を考えた。ラジオですからピタリ始まります。そこで時間の観念というものが植えつけられたようです。

それからいろいろやっておりますうちに、わたしとしては、行き過ぎというところがあるわけですが、そういうことがあれば、グループの方たちだけは、親身になって注意してください。しかし、このグループに入っていられっしやらない方から、非難みたいなものをいただくわけですね。だから、自分たちだけで何かやってゆくということにはむずかしいなあと思っております。

小泉 どういう方が集まるのですか。

萩原 兼業農家の主婦とか、お嫁さんたちです。その時間にすぐ飛んでこれないから、田に行くふりをして、くわ持って、途中で飛んで来る。

土井 自由時間は何時間ぐらい？

萩原 田に出て行く時も一日五時間の自由時間がある。

夜七時から十時まで三時間。それから朝食のあと子どもさんたちが出て行ってから少し……平均して五時間あるわけです。田植の時は一時間といっていました。農閑期になりますと、八時間自由時間があるというひともあります。

団野 萩原さんのお話は、グループ活動に非農家の人が参加した場合に、あるいはそれが障害にならないように、どうすればいいのか。また萩原さんの場合は、自由時間をつんともっているから、それで地域のために、萩原さんのような立場にいる人が時間を出すというふうな問題もあるわけですね。

山中 私は百姓に生まれて百姓に育って百姓の嫁になつて、清水さんがお話しになったように、百姓は働かなければあかん。朝は暗い中から、晩は暗くなるまで、とにかく百姓は働いたらいいといわれてきたんです。

子どもが高校に行き、弟が大学に進むようになってから、女というのはどうしてこんなに働かなければならんのか

だろう、百姓の嫁はどうして働かなければならんのだろう、自分で自分をこんなにまで殺さなければならぬのかとつくづく自分が情なくなりました。

一日の暮らしが無計画やさかいに、もっと巧く暮らしていったらもっと自分が若々しくなり、もっと明るい表情でもっと明るい生き方ができるのではないかと思ってもみましたが、農家というものは何百年続いた慣習というものがあり、家族で働かなければ食っていけないのが農家の経済の構成ですから、暮らしを切り替えようと思っても、そんなら明日からというわけにはとてもいかない。しかし、何とかしてもっと仕事を楽しみ、自分の生活を楽しむといういき方にもっていきたいと思っていました。

それで家の者に、こんなに働いてばかりいないで、せめて夕方一時間ぐらい仕事を早く切り上げ、夕食も楽しく食べて、子どもと一緒にゆっくり話し合い、自分もゆっくり休み、ラジオもゆっくり聞くようにしような、といったら、うちの父やら母が、そんな、百姓が一時間も仕事を早く切り上げて、お日いさんが高いうちに家に帰ってきたらもったいない。第一、人さんに笑われる、と反対した。わたしはそれを考えたのが、三十九才の時で、八年前だったけれども、根気よく両親を説き伏せて、やっと二年ほど前から家族の一人一人が自分のほんとうの自由時間をもつことが

できるようになりました。八年ほどの努力が実を結んだわけですけど、周囲の婦人会グループにそのことをすすめてみても、やっぱり、百姓は働かなければいかん、働いていたらいいのだ、家にいたらおこられるさかいに、という。

いま萩原さんがお話になったように、百姓の妻は自由時間は十分にあるのです。八時間あるといわれてみなさんびっくりしていなさったけれども、ほんとうに計画的にやっていたら、八時間十分もっている。けれどもその自由時間を無駄にしすぎるがために、ほんとうに自分を豊かにして、家族の楽しい時間をもつことを知らんという気がします。

土井　こだわるようですが、八時間の自由時間というものをどの時間におとりになるのですか。それはおしゅうとさんの場合ならとれるかもしれないが、少なくとも嫁さんだったら、とても無理だと思います。

団野　山中さんがお嫁にきて、その時は時間がなくて働いていた、しかしそのうちにお嫁さんがきて、そのころからあなたが自由時間の問題を思いついて、自然にあなたのところに時間の余力ができてきた、そういうことはないですか。

山中　私の家は違います。田が八反、畠が五反、果樹園

六反七畝、子どもたちは学校に行っていますから、ほんとうに働くのは主人とわたしと二人です。嫁はおられません。忙しい時には人を入れますけれども、主人と二人で——まあ今日は着物を着ていますが、着物を着るのは正月一日ぐらいで、モンペを着て働いています。

高見 京都といったら、たいへんいいところから来ているように思われるかもしれないけれども、わたしは福知山からまだ二十キロほど奥に入った、ほんとうの僻地に住んでいます。わたしの家は兼業農家で、主人は小学校の教師をしています。田畑あわせて五反ほどですが、まだ上等のほうで一般的には、どうにか食べて働いていけばよいというところなのです。百姓したことがなかったわたしには、たいへん辛い毎日でしたが、よい嫁になるうと思って、一心に働けるだけ働いたわけです。子どもが二人できました時に、子どもの世話と百姓との無理がたたりまして、とうとう病気になるしました。その時にこんなことではだめだと思ひまして、生活こよみというものをつけ始めました。そしてわかったのですが、大体仕事というものは、農繁期農閑期に分けて、わりに差がない。田だけでない、山がありますので、百姓の田畑の仕事の暇な時は山にまいます。夏も冬も、お天気でさえあれば差がないものです。それで、そういうことも含めまして、家事というものを、わり

に田畑の忙しくない時に片付けて行くことが大事だということを考えまして計画的にやりはじめました。わたくしの場合男仕事でも何でも一手に引き受けてやり遂げたので、こういう計画的なこともできたのですが、わたしのまわりの農家の嫁といえは、親から、これだけの仕事をしなさいといわれれば、それを片付けんことには帰ってこれないわけです。遅かったら、なまけていたのじゃないかというわけで、絶対自分の自由時間というものが、嫁の間はできないわけです。二反ぐらいの田をつくっていて、お米をかう百姓もあるのですが、そういった人は自分のところの仕事はあっさり片付けておいて、炭焼をしたり……今年なんか水害の工事に、女も男も出かけてお金をもうけるわけです。これではほとんど、自由時間のもてる人がないわけです。そういったわけで、わたしの場合は、ただわたし一人がそう考えていただけで、人と呼びかけても、村ではそういうことのできる方は指折り数えるほどしかないのです。

団野 農業はただ働いておればいいのだ、というふうな昔から農村にこびりついたものを、どうしてときほぐしていくか。山中さんのおっしゃっていた、一時間早く帰るといふ話、それだつて非常にむずかしいことですし、それから高見さんの目下一人だけ楽しんでる、これもなかなか問題があります。それをどうしてもっと広く広げるか。広

げる手段、ほかの家庭をどうして説得してあげるかという問題が残っているわけです。

永井 私の村は戸数約四十戸ばかりの純農村です。私の家は水田が八反ぐらいです。それに柑橘が一町五反ぐらいあります。ほんとうに朝から晩まで働きずくめです。そういうところですから、とても封建制というのが強かったです。

わたしのしゅうと、しゅうとめは六十四才に五十七才です。まだまだ働き盛りで、家庭としては戸主権をもっていたい時です。それに、主人が三十七才ですから、もう一人前の戸主権をもちたいわけです。やっぱり家の中に二人の船頭があつては、いつも波乱が起きる。衝突ばかりする。ですからわたしは、今から三、四年ほど前にみんなで話をして、家の生活設計を切りかえました。

自由時間に少し離れるかもしれませんが、生活に自主性をもつということがいちばんほしかったのです。親のいうことを聞けば、主人が気にいらんし、主人のいうことをきけば親が気にいらんというのでは、自分の性格もゆがめられるし、自分の主張がなかなか通らないので、それを切り替えました。

どういうふうに切り替えたかという、親のものとわたしたちのものと、それからいま二十五才になる、分家をする

る男の子がある。この子がやっぱり自分の意見もありますし、自分の自主性というものをもちたい、……というわけで、家の中のやり方を五つに分けた。収入の面を分けたわけです。

萩原 うちの中を切り替え、収入の面を五つに分けたとおっしゃったが、どういう分け方をなさったのですか。

永井 わたしのところは、水田とウメとミカンがあります。それで、水田は長男がもっている。ウメは年寄りがもっている。ミカンは二つに分け半分は、長男がもち、半分は次男がもち……というように分けたわけです。

団野 それは新しいやり方ですね。財布をだれが握るかはっきりさせて、そこから一人一人の自主性というか、人権が生まれてくるんですね。そこへもってくるのに、生活上の演技というか……これは重要だと思います。

土井 私は町に育ちまして全然百姓をしなかった。最初田舎にお嫁に行ったのですが、行った当時は地主階級だったものですから、百姓はせんでもよかった。ところが、戦後どうしても自分たちで働かんと食べられないという地主のあわれな時代がやってきまして、少しずつ返してもらって、五反半つくなっていきます。私自身が全然百姓の経験がなかったのに、自分が力いっぱいやっても、半人前ぐらいかやれない……というような苦勞をしながら、どうにかこ

うにかつてやってきたわけですが、わたしがそういう経歴をもった関係かどうか分らんけれども、とにかく田舎のお嫁さんはいかがいそうだとすることが身にしみていたわけです。それでなんとかして、農村の若いお嫁さんというものを、すこしでも幸福な状態にしたいという念願から、十年ほど前に、若嫁会というのをつくってもらった。私たちが応援して若い人が喜んで会をつくったわけですから、も、やはりしゅうとさんに理解のないために、一時、解散しようかという危機もありました。しかし、それじゃあなた方せっかくつくった甲斐がない、自分たちの力で幸福をかちとらなければいけない、負けずにやりなさい、と激励して今日にいたっております。そして去年はからずも部落学級、地区の婦人学級の指定校になりました、部落学級のリーダーとして一年送ったわけです。

それで部落学級をもつに当たりまして、一年間の計画を立て、毎月一回どうあっても婦人学級に当てようと約束して、若い人を主体に学級をもった。ところが、さて婦人学級を始めてみますと、一月に一回の婦人学級に出る時間をつくるためには、前日に島の仕事の手回しをせんと出られない。それでも万難を排してやっているうちに、どうしたら時間を生み出すことができるかという問題にぶつかって、では今年一年かかってあなた方の生活の実体、労働作

業その他の実態を記録して、調査しようということになったわけです。春の農繁期と秋の農繁期、夏の農閑期の三つに分けて調査した。

春の農繁期の農作業は十二時間半、秋は十一時間、夏は日が長いから農閑期といっても十一時間やっている。それから春の睡眠五時間半、秋が六時間半夏が六時間、家事労働は春が五時間、秋が五時間半、夏が五時間半。

自由時間とみなすべきものが、春、夏、秋を通じ一日一時間しかできない。次に気のついたのは、労働に対する睡眠時間が少ないということ。それから、なぜこんなに機械化されているのにその労働時間が長いのだろうかということ。ところが機械化によって次々と入る農器具の借金を埋めるために、嫁さんが働かなければならないというわけです。そして新しい農機具が出てくるとまた無理をしてそれを購入する。悪循環です。わたしは、今後の農村は機械化貧乏という大きな荷物を背負っていると思うんです。

私の希望としましては、山中さんのお話のように計画的に時間を立てて、せめて一日に一時間早く仕事を繰り上げて、自由時間もせめて一日に二時間もほしい。それからその一時間の自由時間を、どんなふうに使っていききたいかを尋ねたところが、まず、子どもと一緒に勉強をみてやりた

い。それから自分の着物のつくろい、簡単な手芸もやってみたいし、夫婦で話す機会を持ちたいという程度の、ほんとうにささやかな願いなのです。それからもう一つ、老人の自由時間の問題ですが、老人はたくさんもっている自由時間を、自分の教養とか楽しみに当てませんから、いきおいお嫁さんの監視になる。家族制度が解消しない限り、老人の自由時間のことを考えないと、お互が不幸になるぜひこの問題を考えたい。

団野 老人たちの時間の問題、これは重大ですね。

斎藤 今まで若い方の、ほんとうに明るい工夫をしていらっしやるお話を聞いて、うらやましく思いました。

島根県はすごく豊かで、お茶飲み時間が長くて困るといふ問題が出ていますが、ある郡は零細農家で、平均反別は五反ぐらい。十俵ぐらい供出して、そのお金で一年中の税金と、肥料代を払ったらお正月からはまたゼロから出発です。男の人たちにもっと本気になって自分の生活を考えたというが、投げやりです。婦人にも生活をよくしようとか、自分の生活をみつめるとかいう反省なんか全然ない。ただ今まで通りに働いて、二人で、夜になったら木が倒れるようにねてしまう。くたくたになって……。雑誌でも回覧しましょう、というんですが、疲れて本読む暇がないという。それでも五分ぐらい、ねる前の時間がないかとい

うと、本を読む気持になれないという。しかし人のうわさ話なんかになると一時間でも二時間でも話すんです。それでもどうやら本を読みたいという人たちだけが集まってグループをつくったんですが、そうするとたちまちあの人は婦人会長になりたいのだろうといわれる。また私のまわりの人たちはそんなわけで、そのグループに入っておりませんから、一部の人たちは、先ず自分の足元からグループをつくるべきだ、自分の足元を捨てておいて、ほかの人と仲よくするのは間違いだと言非難される。しかし、やる気のない人たちをどうして……。

団野 いま斎藤さんのいわれた、自分の住んでいる村でグループをつくったらどうだという村の人の要求が正しいのか、そんなこといっても、わからん人ばかりだから、地域が飛び離れていても話の合う知った人を集めるといふものの考え方が正しいか、これはひとつよく話し合ってみなければならぬと思います。グループのつくり方です。

花岡 みなさん方、たいへん裕福な方ばかりですが、私たち漁村の婦人の生活はみなさん方の想像もつかんほど生活水準が低いのです。それで自分たちはこの暮らしをどうしたら楽になるかということではっぱいの努力を続けてきました。

うちは、主人が漁業しておりまして、わたしが三反ほど

畠をつくっております。以前は主人がとってきた魚をわたしは売りに行くだけで、あとはのんびんだらりと無自覚な自由時間を費やしていたわけです。しかし、これではいけない、どうしたら自分がこの暗い生活の中から明るい生活ができるかということを反省し、主人と二人で話し合いました。そのころに学校の役員に出され続いて婦人会の役員になったのですが、右を見ても左を向いても私のような馬鹿たれは一人もいないのです。それで主人と暮らしのことから話した結果、洋裁を習いに行くようになりました。四十八の年からまる二年続けて洋裁習いに行つて、洋裁の先生のおかげでどうにか少しは収入もあるようになったのですが、寄る年波で老眼がひどくなり、目が悪くなつてそれまでできなくなりました。せっかく習ってきたものをどうしたらいいだろうかといろいろ悩みましたが、昔、畠を借りて開墾したときに、畠はやっぱり漁業者にとって必要なものだと感じたことを思い出し、同情してくださる方もあつてようやく畠を買つて、三反ほどつくり始めました。しかし、ただ働いて食うだけじゃつまらないから、どうしても自分の自由な時間というものをつくらうと考えました。現在、一日中を二ばいに働かず、朝一時間早く、四時半頃起きて、朝のうちに家のことを片付ける。そうしているうちに主人が漁から帰ってくる。その魚を七時から九時頃

までに商なつて、九時から畠に行く。畠のない日は家の用事をする。おひるになると、おひるに夕飯の支度をしておく。それからがわたしの自由時間で、婦人会の会合に出るとか、話し合いに出るとか婦人部のお世話をするとか、そういうような毎日です。

前川 私のところは純農家で、一町歩。一日の分解された二十四時間の中で、つりあひのとれた生活をあてはめなければならぬと思ひまして、どうして時間を巧く切り廻していくかということいろいろ考えました。時間というもののは上手に言えば二倍三倍もの時間が出てくるものなのです。そして豊かな生活ができる。それで私は、家族会議を開きまして、一日の生活時間の表をつくり、勤務のほうは家事が四時間、休養のほうは睡眠八時間と食事と休息が二時間、教養が二時間二十四分。生理時は三十六分、これは着替え、排泄の時間も入れてありますが――ざっとこのような家事時計をつくつてあるのです。もちろん時期によつて順次変えてゆきたいと思つています。

弥富 私は都市から農村に嫁いだものですから、農村の婦人があまりにも自由時間がなさすぎる、同じ女性でありながら、これでいいのかと考えさせられました。わたしの村では戸数が八十戸。農家が六十戸で、平均反別は一町三反といいますが、二町以上の人がおりますし、また少ない

人もある。乳牛は三十頭。ちょっと考えると豊かなような感じですが、やはりさっきおっしゃったように、機械化貧乏で、副業をずいぶんやり、大きな自動式のカマス織りを取り入れていますので、雨の日も夜おそくまで働くことになっております。

そうして、わたしは若妻の場合ですけれども、今の若妻の自由時間といいますと、PTAに行った時と里帰り、それから年二回の若妻会だけです。有線放送や水道設備など文化生活は水準が高いが、男の考え方とお年寄りの考え方が古くて、話し合いの場がとても少ないように思うのです。私が、話し合いをもっとなさったら、と呼びかけましても、そんなことで一家に風波を立てたくない、ただささやかに、暮らせれば結構だという。ただ一つ村全体の農休日を含めていただきたい……それがほんのささやかな願いです。

団野 どうもありがとうございます。今日お話し合ったことの中で、どういうことが問題になるか、一応主なものをあげますと、自由時間というものが果たしてできるのかできないのかという問題。できるといふ人もあるし、なかなかむずかしいという人もあるし、むずかしいならどこに原因があるのか。それから、自由時間はたくさんあるのに無自覚だったというふうなこと、自由時間をどう使うのか

かという問題があります。また生活を合理化したり、計画化したり自由時間をつくり出すには、家庭内の問題がたくさんある。それをどう処理すれば一番いいのか。さらに社会生活との関連。それから、自由時間というものは単に頭で考えたり、紙に時間表を書いてできるものじゃない。やはりそれは経済の問題とも結びついている、生産の問題とも結びついている、それをどう処理したらいいのかという問題。

それからものの考え方ですね。たとえば、農民は働いてばかりいるべきだという考え方がともかく農村にある。そういう考え方をだんだん取り除いてゆくためには、どういう手順によればいちばん取り除き易いか。そういう考え方を改めてゆくには、農業を直接やっている人たちだけじゃなくて、農村の外から入った人のものの考え方が、かなり役に立つ。しかしその人がいたずらに孤立しているのではだめなので、農家と非農家の婦人が、どういうふうな手順で結びつくことが可能であるかどうか。そういうことじゃないかと思えます。

(第一日閉会)

移動会議の中で

団野 今日、始めます前にみなさんから昨日の移動会

議でごらんになったものの印象を一口ずついっていただきたいと思いますが、そのまえに漁業協同組合の池田さんから第一日目の会議の印象をお話し願いたいと思います。

池田(漁協) 私、特別オブザーバーとして参加させていだきまして感謝しております。

私、第一目ずつとみなさんの会合のご様子討議のご様子を拝見させていただきましたが、第四部会は農漁村の部会ということで、私としてはたいへん期待をもって仲間入りさせていたたいたのですけれども、漁村の関係の方はたったお一人で、会のもようも、非常に農家の方面のご発言が多くて、ちょっと私、残念に思いました。これはやはり全国的に漁業方面の婦人の応募が少なかったということにもよりましようし、またひるがえって考えますと、漁業経済の不振と貧困の重圧から、漁村の婦人は、自由時間どころか、朝から晩まで時間に追いやられて、非常に苦しんでいらっしゃるということがいえるのではないかと思います。自由時間の設計、一日の時間の設計を立てても、とても思う通りに行かなくて、自分の自由な時間の確保はとてむずかしい状態にあるということでしょう。

そういう点から眺めまして、全国的なこういったご意見の交換の場を、漁協のその自由時間の確保もできないような苦しい状態にある婦人の方たちも、いまま少しこういう場

に出ていただいて、共に語り合う機会を得ることができたらなあと痛感させられました。まあ私も来年度はせいせい応募のほうもみなさんに奨励して、こういう勉強の機会をみなさんにもさせてあげたいという念願をもちまして、いろいろ勉強させていただいております。

団野 いま池田さんのお話にありましたように、こうした会議に参加できないたくさんの方が漁村にももちろんいらっしゃいますし、また農村にもいらっしゃると思うのです。したがって今日のお話は、みなさん自分だけじゃなくて、みなさんの周りのそういう人たちの生活、あるいは希望、要求、そういうものを代表するという立場で、幅を広くして話していただきたいと思うのです。

それでは昨日の印象を、一言ずつ簡単に話していただきましたましよう。弥富さんからどうぞ。

弥富 雑誌とか何かでオートメーションということをよく聞いておりましたけれども、実際自分がこの目で乳業の工場と電機工場を見学しまして、予想以上に人手がいらないので、農家の二、三男坊の就業問題に悪影響があるのじゃないかとちょっと暗い感じを受けました。

前川 私は昨日千葉班のほうにまいりまして、東京電力株式会社を見せていただきました。その規模のとても大きいのにおどろきました。

花岡

こんなことを申しますのはまことに失礼なことですが、埼玉県の美園村の生活改善グループに連れて行ってもらいまして、何か勉強になることがたくさんあるだろう、みなさんのおっしゃることを聞いてみやげの一つにしようと思ってまいりましたのですが、とりたてて役立つようなことがなかったものですからちょっと残念です。

小泉 わたしも感じましたね。やりつつあるということでは、はつきりしてないですね。わたしたちのほうがまだはつきりしているかもしれない。

斎藤 わたしも埼玉班に入りました。私の住んでおりますところとくらべまして、黒々した麦畠が続いている恵まれた条件の中で、一戸当りの耕作反別も豊かに暮らしている様子を見てほんとうにうらやましいと思いました。

土井 私が東京班に参加したのは、団地の奥さんの生活と、農村の主婦の生活を比較したいということでした。それよりも印象深く見ましたのは三鷹保育所です。わたしの村にも保育園がありますが、三才以下の幼児を取扱ってはおりません。そういう形式で保育園は開かれているのですが、実際は四才以上だけを取扱っている。けれども農村の実態としては、三才以下の子どもを預かってもらって、午前中のおしめの交換、あるいは授乳ということをやってもらいたいわけです。私はこの施設をほんとうに農村

にほしいと思って、強く印象付けられてまいりました。

高見 わたしは、三菱造船所の社宅の奥さん方とお話しさせていただいたのですけれども、いままで都会の主婦の方たちはいいなあとうらやましかったのですが、実際にお話し合いますとそんなに豊かではないし、同じような悩みがあるのだということを知りました。

山中 わたしは昨日千葉県にまいりました。生まれて初めて漁村というものを見たわけですが、漁港が埋められてどんどん大きな工場が建っております。私の村にも多くの田地がつぶされて工場がどんどん建って行くのですが、たがやす土地を失なっていく農民と、海を失なっていく漁村の方たちの共通した淋しい気持がわかる気持がして、涙がこぼれました。

萩原 私は日常科学に縁のない生活をしておりますので、千葉班の農業技術研究所というところを尋ねて、そこで牛や豚や鶏の人工授精をしているのを具体的にを見せていただいたわけですが、私たちがしゅうとの問題やそのほか複雑な人間関係に悩まされている間に、丹羽博士をはじめ所員の方たちが人間関係をはなれて一生懸命地味な研究を続け、ここまで科学を進展させられたのかと深い感銘をうけました。

海野 私は千葉班にまいりましたが、登戸生協を見まし

て婦人の力であれだけの経営ができるようになったということにおどろき、役員が今でも二日に半日ぐらい奉仕の時間があるというをおっしゃっていましたが、その集団活動に費やす時間のしお寄せが家庭に及んでいるのではないだろうか、非常に疑問に思いました。

片口 私は埼玉班にまいりました。花岡さんと同じで、美園村の生活改善グループのみなさんとお話ししましたが、やはりそこに集まって来られたみなさんの身体つきとか、お顔を見ますと、わたしたちと同じように陽焼けしたやつれた方がたくさんおられた。やっぱりこの人たちも自由時間はあまりないのだな、という感じを受けました。

小林 神奈川班に入っていたきまして、旭ダウと日本石油を見学してきました。百姓ばかりして、工場の機械化とかオートメーション化など見たことありませんが、持ち運びどころか、一つの施設で完全な製品が出来る。結局量より質ということで割り出された労働を感じてきました。

それから、社宅の奥さん方とお話しましたが、ラジオを聞いたり、テレビを見ることで、自分の時間をもてあましている若い嫁さんの人がいました。ああいう人が集まって自発的にグループをつくって、自分なりにわきの人と勉強したら……女というものの勉強とその時間、それは自分の前にあるのじゃないだろうかということを感じまし

た。

団野 いまのお話は二つ問題点があると思う。一つは、都市の工業というものが非常に機械化されて、オートメーションが進んで、むずかしい言葉でいえば労働生産性が高くなる。——一日働いてそれによって生み出される富、財産、そういうものが機械化されていることによって非常に高くなり、その人たちは高い賃金を受けることができる。農村の場合はめいめい手でやる作業が多い。したがって一日一生懸命働いてもつくり出されるものが少ない。したがって収入が少ないということになるので、将来の日本の農業というものも、やはり工場のように考えなければいけない。農村もできるだけ工場のようなやり方に近づいていかなければならない、という問題が一つあると思います。

それからいま一つは、都市のそういう奥さんたちが、自由時間をもてあましているということですね。日本の婦人の中には、自分の時間をつくらうとしてもつくれないう人、あるいはつくり出すために苦心しているみなさまのようなグループとみなさまのような立場の婦人と、自由時間を非常にもてあまして処理できない、暇があり過ぎて困っている人たちがいる。こういう婦人層をどうすればいいのか。もう少し話し合って、社会奉仕のようなことでもやったら

どうだろうというお話は、都市の人に聞かせたい話ですね。

渡辺 私も神奈川班で、社宅の主婦の生活をお話し合いましたのですが、立派な子供を育てるとか、尊敬されるお母さんになろうという面で努力していらっしゃる姿は、私たちと変りはありません。しかし、時間を持てあましてくらしている人たちに比べて、農村のほうがむしろ計画的に子どもと遊んでやれるとか、家事に没頭するとか……ということができないのではないかとうれしくなりました。

団野 都市の婦人と農村の婦人と、いろいろ生活の環境も条件も違いますが、お互いに非常に気の毒である。あるいはうらやましいという二つの気持があると思うのですね。しかしただうらやましいとか気の毒だというので止まれば、それはそれだけのことだと思えます。しかしほんとうは、めいめいがその世界で生きている……漁村なり農村なりで生きているのだ、そういう自覚をはっきりもつ必要があると思うのですね。それが今度のスローガンにある「自主的な」ということだと思えます。

自分たちの環境の中で、どう考えるべきかということですね。自分たちの環境の中で、都市の人がやっている生活が参考になれば採り上げ、漁村でやっている生活が参考になれば採る。しかし、考える主体はあくまで自分だという

ことが今年のスローガンだと思います。

そういう意味でもう一べん家に帰ってみられて、うらやましいというのはどういう点がうらやましかったか、気の毒だというのはどういう点が気の毒か、それを自分のところに引き比べたらどういうふうに解釈すればいいかということ、あとで考えてもらいたいと思います。

堀 私も東京班で、三鷹の保育所を見学いたしました。わたしのほうは農家ですので、年間を通じてとはいいませんが、せめて農繁期だけでもあのような施設がほしいと思いました。

清水 神奈川班に加わらせていただきました。軽井沢の社宅の婦人たちとお話しをしたことで感じたのですが、社宅の奥様たちが、家族みなさんの理解と協力のもとに毎日心強くお隣りの人たちとも手を取り合って生活していらっしゃるということをお聞きしまして、私たち農村も自分たちの生活だけを考えるという気持をなくして、もっと助け合って、明るい生活をするにつとめなければならぬということ強く感じてまいりました。

小泉 花岡さん、片口さんと同じに埼玉班に加わらせていただきました。片倉ハドソンを見ましたが、あんな立派な機械化でなくてもわたしたちの辺りな開拓地ももう少し機械化されてもいいなと思いました。どこに行っても機械

化機械化で、わたしたちばかり機械化されていないような、重労働は私たちが引き受けているという感じてしたけれど、せめてもう少し北海道も電化されたら、と思いました。それから盆栽村に行ったのですが、私たちの村からちょっと持ってきたと同じような草木が、あそこでは五百年も六百年も経った立派な木で、五万円も十万円もするといひます（笑声）。二十町歩の村に置くと一銭の価値もないようなものが……。

団野 いま小泉さんのおっしゃった中で、おもしろいと思つたのは都会で何十万もしている盆栽が、自分のところに来たら無価値だということですね。それから人の知恵も場所によって違う。都会においては全然無意味なことも、田舎では非常に大きな意味をもっていることもあるし、その反対もある。したがって婦人雑誌なんか読む場合も都会を標準に書かれていることをそのまま真似するのでなくて、自分の村に持って来て果たして価値があるのかどうかを見きわめることが大事です。

これで一応終りました、漁協の池田さんに昨日の視察の印象をちょっとお話ししていただきますよう。

池田 私、昨日特に選びまして埼玉班に参加させていただきました。さきほど美園村の生活改善クラブをこらんになつて何も得るところがなかったというお話がありました

けれども、私には非常に得るところが多かったです。

みなさんと見方がちょっと違っているかもしれないけれども、あのクラブ員のみなさま方が、研究途上にあるからでもありませんが、ほんとうにみなさん方の質問をよくお聞きになるその態度に、私は心を打たれるものがあつたのです。クラブ員のお一人にお聞きしてみましたところ、クラブ員の信条として、人の意見をよく聞いていいところを探り入れましょうということがあるそうです。その信条が、ほんとうににじみ出ていると思つたのです。

それから最初から最後まで、非常によく私たちを純朴な心持で迎えてくださいましたね。帰りには心のこもる苗木までくださつて、「この苗木をみなさんで育ててください、何年か経つてみるように育ててください。」とおっしゃった心根、ほんとうに私は農民の純朴な心に打たれました。これが日本の農民の姿である、研究そのものは途上にあるかもしれないが、その心根にほんとうの純朴さというものを見出して、私にはほんとうに得るところが多かつたのです。

二十四時間の組立と分類

団野 それではこれからいよいよ問題に入ります。一昨日みなさん方のお話を私がいちばん最後に問題点だけ大ざ

っぱに洗い出したのですが、みなさんがこの上に何か付け加えて、こういうものも採り上げてもらいたいということがあれば教えてください。

山中 生活時間と自由時間というものを混同して考え易いのですけれども、生活時間と自由時間というものの違いを。

団野 それは非常に面白い問題ですね。それでは、生活時間と自由時間の問題から入ることにしましょう。今度こういうスローガンを婦人週間の課題として掲げた意味は、生活時間というのには要するに一日に二十四時間だ。それをなぜ生活時間というむずかしい言葉でいい直したかというのは、その二十四時間の組立、分類を問題にしているということですね。どういうふうに二十四時間を仕分けていくかということの問題にしようとしたので、仕分け方は、主婦により、労働婦人により、あるいは農漁村の婦人によって、それぞれ違うのではないか。その違い方は自分が決めなければいけない、自分で決めるということが自主的だということになる。そういう意味だと思います。

次に自由時間というのは、その生活時間の中にはめこまれるべき時間ですが、簡単にいえば暇な時間だということでしょう。暇な時間であるけれども、それはぼんやり遊んでいる時間ではなくて、自分の意思で自由に処分できる時

間、主婦が自主的に処理できる時間が主婦の自由時間だ。

そして自分だけが自由時間をつくるのではなくて、主人とか息子の自由時間がどういうふうになるのか、あるいはお友だちの自由時間はどうか、そういう縦横のつながりをもったものとして、自由時間を考えねばならないと思います。ところで、二十四時間というものをなぜ仕分けなければいけないのですか。

弥富 生活を計画的にやるために仕分けたほうが良いと思います。

永井 計画性がないと、自由時間が出てこないと思います。

山中 人間として生きる以上、やはり人間としての喜び、生活してゆく楽しみ、仕事と生活を楽しむ時間をつくるために仕分けるのではないかと思います。

萩原 仕分けてみてわかったことですが、自分でどう生きていくかということを見つめるためだと思うのです。

斎藤 うっかりしていたら時はどんどん流れてしまいきますから、時間に区切りをつけることが大切ですね。

土井 今のその時の生活を幸福にするために生活を区切ることが必要だと思います。先より今の時を大切に。

団野 いまのお話をちょっと分けると、三つぐらいある。弥富さんは生活を計画化するために仕分けるのだ。な

せ計画化するのか、それは自由時間、自分の時間を生み出すためのものだ。一方からは、そうじゃない、生活を自覚するために、今日生きていることを自覚するためにつくるのだ。ということが出た。ぼくはこういうふうに思うのです。

この二十四時間というものは、刻々に過ぎて行く。ぼんやり過ごしていったら動物が二十四時間生きているのと、人間のそれとは全く同じで、人間ではないということになる。人間は今日の生の喜びをやっぱり感じなければいけない。しかしそれだけを感じているだけでは不十分だ。なぜならそれはずっといくと自分の子どもや孫につながるということになる。過去から現在、未来と永こうに流れてゆく時間の中に住んでいるわれわれは、ちょうどりレーをやっているその一つのボタンを握っているわけで、その中で自分も楽しく走り、次に走る走者に早く楽しいボタンを渡すというわれわれの使命があるわけです。喜びも感じなければいけないが、悲しみもつらさも、もちろんある。しかし悲しみも辛さも、大きな人間としての喜びの中にとけ返さなければいけないと思います。

そこで始めて生きがいというものが出てくるわけで、生活時間を区分けすることとは、そういう大きな裾野の上に乗った一つの問題だということになるのじゃないでし

ようか？　そういうことのために計画化するのであって、ただ三十分、一時間を区分けして、赤白青に塗って壁にはりましょうということじゃない。それはなぜするのだ、ということでないかと、壁にはっても無意味だということがわかりますね。そういう考え方を、みなさんは帰ってみんなと話し合っていただいたいと思います。

次に、今日のプリントの第一番目にある、自由時間は果たしてできるかという問題。これをやりましょうか。むずかしいという意見とできるという意見、それに一時間しかできないという人と、三時間、五時間できるという人もありましたね。まず非常にむずかしいという意見を聞いて、こうしたらできるのじゃないかというご意見をうかがいましょうか。

機械化貧乏

小泉 私には前からいっている通り特別開拓地ですから、電化されていないなどといったようなことから、その人間の自由時間を出すのに苦労なんです。

海野 山梨のように零細農家が多い地域では、量よりも質のよいものをとらなければならないというので、非常に細かいところに手をかけています。また農繁期には果樹栽培は非常に労働時間が長いものですから、農閑期には自覚

によって持てると思いますが、農繁期には自由時間を持ちにくいと思います。

土井 自由時間はぜひほしいし、とれると思うんです。ただそこに壁が二つ三つあるのです。それはもちろん封建制の問題とかいろいろあるのですが、その一つに私の村には特に例の機械化貧乏によって生れる労働の過重、もちろん大きな農家には必要のない悩みかもしれないけれども、都市に隣接しました零細農家、しかも兼業農家には特にこの問題が、次々と新しい機械が生まれてくることによつていよいよ解決しきれなくなるといふ気がします。

弥富 わりあい豊かな農家であっても、自由時間がないのです。豊かな農家としましても、やはり機械化貧乏はありますし、機械化によって生まれた暇を、ほかの副業とかに回します。百姓に暇を持ってどうするのだ、という考え方から、今帰っても作業服は脱かれないからというので、ずるずると非能率的にやつて自分で自分の自由時間を失なうわけです。

渡辺 私は新潟の農村で育ちましたが、農繁期には自由時間はとれないと思います。ある程度自分の実績をつくつてからならば、自分の計画通りに行動することにそれほど手きびしい批判はないにしても、来たての嫁さんは、まずみんなの理解をつくるために働かなければならないから、

おそろく自由時間がとれない。

斎藤 私のほうは零細農家で、生活が貧しいために、いつも不安な気持であきらめてしまうのか、投げやりになるのか、自由時間を考えるという心の構えができておりません。

堀 農繁期でしたら、自由時間はどこも同じと思うんです。それで、部落ぐるみの修養日を設けてぜひとも出してもらうようになって、いくぶんいいと思います。

高見 わたしのところでは耕地が少ないので、農繁期農閑期とはっきり区別がつくことはないのです。あらゆることをやつて何とかしてお金をもうけたいと思つていのですが、それがなかなか思うようにもうからないものですから、生活の設計ということからして、てんで頭がない。

永井 わたしは働く場が多過ぎて、自由時間がとりにくかったです。

団野 いろいろと出ましたね。それじゃあこれをどうとさほぐすかということをお話しましょう。

一番最初に自然の条件ですが、小泉さんにまず発言してもらいましょう。あなたは入植されて十年あまりになるのですが、その十年間どのように変ったか。生活は多少楽になったか？

小泉 わたし入ってから十年くらいたちますが、入った

その年が豊作だったのです。しかしその後の七、八年は冷水害で全く収穫はなく、どん底まで落ちこみました。人間は働け働け、働けば何とかなると思っていました。結局自然の力には勝てなかったわけです。そこでなんとかほかに生活の手だてをないものと、三年ぐらい前から乳牛の飼育を始めたわけです。半農半畜というわけですが、これで息をついています。

団野 自然条件が悪いからといってあきらめちゃいけない、ということですね。だからわたしの村はどんなにやってもだめですよ、という人が多いんですが、実はそうじゃない。きびしいことはきびしいし、その条件はなかなか取り去ることはできないが、その中で生きて行く道はあるのだ、やることはまだ残っているのだということですね。それじゃ次に機械化貧乏という問題に入りましょう。

土井 百姓というものは低級だから、商人がもうけるために次々と新しい機械をもってくると、まだ十の能力のある機械があるのに十一のものを買い、更に十三のものが欲しくなる。また、たとえば消毒薬の撒布なども共同でやっています。共同精神が欠けた場合には、たくさんふってもらったところと、ふらんところが出てくる。そうすると、やっぱり機械は自分で買わにゃいかんということになる。

片口 経済面からいったら機械はどうしても共同で買わ

なければだめだと思います。いまの消毒薬撒布の機械でも共同で買って、使う場合は自分自分で使ったらいいでしょう。

土井 やりにくいというのは、私らの場合は兼業農家です。日曜日を利用して仕事をしようとする、その日がぶつかるのです。それで共同しにくいということがあります。

堀 それもありますけれども、若い人は共同で機械を買うというのをやがっています。

団野 機械化貧乏にならないためには、共同で購入し、使用したらいいということはわかっていながら、なぜ共同で買わないのか、なぜいやがるかという点を……。

堀 わたしのほうでは、共同といっても、ほんとうに自分のものでないから、早くこわれるというようなことも話に出ておりました。

弥富 時期と天候で、使う時が同じだということもあります。

花岡 私も、漁業と申しまして農業者も少しやっています。わたしの村では、農協が、豆すり機とか、麦の脱穀機を買い入れまして、その機械でやるのですが、何日の何時から何時までやりますから、と有線放送で伝える。そして田満にやっています。

私のような小さい貧乏部落では、協同組合で機械を買ってくださることをありがたく思つて、協力してスムーズにやっていたのではないかと思うのです。

堀 あなたのほうは反別が少ないようですからそれでもいいですが、秋の早場米の時期になると、誰もが早くやつて奨励金をもらいたいから、死にもの狂いです。だから若い人は早くやりたいから個人で持ちたくなる……。

団野 共同で利用できないということの一つには、天候と時間の点がある。それには早場米奨励金が大いに關係しているわけで、それをみんなほしがる。これは当然です。しかし一方には、機械を共同で利用しなければもうからないというこの二つの矛盾がある。

萩原 奨励金出すというのは、結局早く出させたいためでしょう。農民に競争心を起こして、早く出させるというその政策をやっぱり考えてみる必要があると思う。

永井 競争心と違ふ。やっぱり経済です。

弥富 農家が豊かだったら競争しない。

片口 早場米奨励金は、ないほうがいいと思います。あのためにどれだけ身体を使うか――。

共同の利益のために

団野 早場米奨励金というものは、米が足りない時に、

国が早く米を集めたために、競争して早く出させた臨時的な制度ですが、農村としては今までもらっていた早場米奨励金がなくなれば非常に困る。だからこの早場米奨励金を基本米価の中に入れてくれればいいのですが、一つの部落なら部落を単位にして、早くする人おそくする人のそれを一緒にして、部落の中でプールの分けたらどうだろうということも考えられる。自主的にやろうとすればそういう解決の仕方もあるわけです。政府に対する要求というか、気持と同時に自分たちの中でどうして矛盾を解決したらいいかということを、自分で考えなければならぬということもあるわけです。

いま一つ、気にかかる問題は、機械を共同に管理していた時に無責任に扱われるということですが……。自分が一部を負担しているもの、一部は自分のものであるものを、なぜ自分だけのものと区別するのでしょうか。

土井 心の問題です。

原 周りの人の迷惑を考えない。

片口 個人主義です。どうも農民にはそういうところがあるようです。

小泉 機械を買い入れるときは、共同精神は割り合にあるのですが、あとの収獲が期待はずれになると、ガタツとくるという傾向もあるようです。ドンと収獲があると、

みんなの気持が一致するのですよ。

山中 私の方で共同購入したのは、責任者が二人ついている。二人が責任もって、使用したあとは必ず始末します。そしてこの責任者は、八人の一つのグループの中から今年は二人、来年は二人と、だんだんに回ってゆくのです。

萩原 共同化したらいよいよといわれれば、すぐ共同化のほうに飛びついて行って、管理の方法もなにも考えないでみんな、わあーわあー使っちゃう……。

花岡 他人に依頼するという心が強い。

清水 自分の生活をみつめて、あまり大きなことに手を出さなくともやれるようなことも考えたらいいのじゃないかなと思います。

団野 共同の仕事をする場合に、個人の役割、心がまえはどうあるべきかという問題ですがその前にこうしたらよくやっていけるのではないかと二つ三つあげてみましょう。一つは、自分がその責任を負わされて、こわしたら弁償するという義務を負わされている場合。いま一つは、奉仕の精神というものにあるだろうかと思えます。わたしはみんなのためにやっていけるのだというそういう奉仕精神、それは奉仕の精神ではありません。むしろ反対のものです。自分が共同のための何かをすることが同時

に喜びにならないければならない。その中に喜びを感じてつとめるということ、始めてうまくいく。

みなさんグループ活動やっている場合に、わたしは指導者であります、みなさんのために自分の時間を犠牲にしてやっていますという、そういう思い上がった気持でやるならやめたほうがいいと私は思います。そうじゃなくて、みんなと一緒に生きてゆくために、自分は社会人として一つの役目を果たしているということに喜びを感じるグループ活動でなければだめということです。そういう考え方がみんなにあれば、共同の品物も自分の品物と同じように大切にすることがつくられる。したがって共同化の問題は、村に帰って、こうしなさいというような修身の教科書みたいな言葉の問題じゃないということがわかるでしょう。そういうものの考え方に立ったうえの共同だということです。

それからもう一つ、機械化貧乏の問題ですが、商人にやられるということ、それから機械を買って、それで借金がふえ、それを減らすためにまた機械を買う。そうして私たちは貧乏ですといっている農民の姿はどういうことでしょうか。

渡辺 そういう商人にやられるほど弱い農民だからこそおたがいに手を結ばなければならぬのに、今までの苦しかった環境から、そういう機械が出てくると逆に競争にな

ってしまふのだと思ふのです。

山中 自分の経済をしつかりみつめて、経済を計画的にやっていく。自分というものを、自分の耕作反別収入をしつかりみつめて、機械と取り組んでいくことが大切ではないかと思ひます。

土井 わたしはとにかく農民がかしくくならなければならぬと思ひます。商人の販売するものを判断する頭を養わないと、今後伸びていかぬと思ひます。

弥富 目先の利益にまどわされないということが大事だと思ひます。

団野 こういうことになりませんか。機械を買って楽にしたい、これは人間の要求から当然のことですが、そのために機械を買って、それで借金ができて……ということ、これは自分の家の生産生活の家計が、最初から立ってない。まず農業自身の中でソロバンをはじかなければならぬ。どれだけ肥料が要って、経営の収支はどうなったかという設計をやる農家は、おそらく日本で一割くらいしかありませんまい。自分の家のソロバンをはじめてみて、共同化したら得になるか、自分だけで買ったら得になるかを計算しなければなりません。

それから土井さんが、頭がよくならなければいけないといわれたが、それも家計をつけ、自分の家の経営の計算を

やってみることでかしくなるんで、そうすることによって、どうして機械化貧乏になるかという原因がわかる。原因がわかれば解決の手段がわかる。だからまず帳面をつけることだ、ということになりますね。

それからいま一つの商人に対する問題は、やっぱり農業協同組合というものがしつかりして、商人に馬鹿にされないうように、商人のいうことをウのみに、聞いてはだめだということ。共同組織である農協は利用しなければならぬが、農協がどうして売るかということは、絶えずみなさんが自主的に見つけていることが肝要です。

(休憩)

封建的な鎖からの解放

団野 それでは引き続き家族関係に入りましょう。家族関係についてはずいぶんみなさんから意見が出たのです。が、どういうふう調整したらいいかということが問題ですね。こういうことがあったけれども、こう解決した……というふうなことをどなたからでも発言してください。

土井 おしゅうとさんの自由時間を考えることによつて、お嫁さんの自由時間を生み出すということが一つの方法になってくると思ひます。

海野 農家では非常に開放的な大きな家をもっているも

のですから、家の中が一目で見わたされてしまう場合が多いのです。それで嫁は昼休みにもっとからだを休めたいと思っても、手や足を心の底からのばすことがない。それで夫婦だけの部屋をつくってあげて、家族関係を円満にしたおしゅうとさんの理解あるお家がありました。

弥富 テレビを家に入れましたところが年寄がテレビを見たいために早く作業があがるようになり、そのために若い夫婦の自由時間がもてるようになった例がありました。

山中 若い嫁の自由時間がないといわれるのですけれども、若いお嫁さんは新しい教育を受けて、自分というものを十分自覚しているのではないかと思うのです。それで人から自由時間を与えてもらうよりも、自分がこの家の中でほんとうに自由時間が欲しければ、どのような暮らし方をすればいいか、ということをもっと考えればいいのじゃないかと思います。

渡辺 大分手きびしいいい意見が出ましたが、わたしは娘の立場として、その家の娘はお嫁さんにもお母さんにも物をいう場合に有利な立場にあるわけです。誤解を招くことも少ないと思いますから、その立場を利用してお嫁さんの意見なり意志を代って話してあげたり、きっかけをつくってあげたりすれば……と思うのですが。

土井 今の若い人は自覚をもっておりすし、そういう

計画も希望もっておりすけれども、農村では自由にふるまうことによって家庭の和を欠くということがまだまだあると思います。ですから団体の力などでそういう場をつくってあげることが必要ではないかと思ひます。

前川 わたしは一町五反のところを、主人と二人で朝早くから夕方うす暗くなるまで、機械のように働くのが生活のすべてです。最近になって大分機械化されて、時間的には楽になってきたのですが、やはり、生活のバランスもとれておりません。これではいけないと思ひまして、今年はじめていろいろしゅうとめにも話をいたしまして、月から時間割をつくり、それを家事時計にあらわしまして、そうしていまの時間の新生活を打ちたてることができました。

団野 大分いろいろ問題が出たのですけれども、一つ具体的な例をあげて、これを議論してみましよう。

これは数年前に茨城県で、若いお嫁さんが子どもを生んで間もなく池へ飛びこんで自殺したという事件がありました。最初新聞には神経衰弱で自殺したと報道された。ところが投書があって、そうじゃなくてお母さんがきびしかったからだという投書がきました。記者がそこへ行って調べてみますと、やはりその通りで、産前、産後にお嫁さんを非常に働かせ、お嫁さんはそれに耐えきれなかったわけで

す。その家は、村の中でかなりいい農家で生活的には楽な農家です。記者がお母さんに会って聞いてみましたら、お母さんは「それは嫁が弱かったのだ。自分が若い時はどんな働かされたものだ、足腰のばししていることもなかった。それに耐えられないお嫁さんだったからだめだったのだ」ということを、非常に強い言葉で自信をもっていたというわけです。そのお嫁さんはどういう立場にあったかという点、やはり農家からその家へ嫁いできた、つまり一度実家に帰ってお父さんに訴えたが、お父さんに「嫁む二十年といつて、しばらく辛抱すべきものだ」といわれ、お嫁さんはやむなくまた、その家に帰って働いていたけれども、とうとう耐えきれず、子どもを生んだ直後に死んだということが報道された。

この問題に対して皆さんの中でも賛否両論があると思います。お嫁さんがいったい弱かったか強かったか、お嫁さんに責任があったか、それからおしゅうとめさんをどういうふうに批判したらいいか、娘が訴えてきたのに、嫁む二十年だからお前辛抱しろといつて、ただ送り帰した実家のお父さんはどういうことなのか。おむこさんはどういふことなのか。それから嫁ぎ先のお父さんはどういふことなのか。みなさんこの五人のだれに責任があったと思いますか？

小泉 その奥さんは子どもが生れたといいますね、その子どものためにももう少し自分が母親として強くならなければいけなかった。

山中 日本の何百年続いた慣習、家族制度そうしたものがある人を死に追いやったものと思います。おしゅうとさん、嫁、夫、実家の父親、その人たちはそれぞれの時代時代の教育を受けた人で、自分のいうことは当然であると思っている。

小林 しゅうとさんとすれば、自分たちのいままでのいき方から嫁を判断した。もっと嫁さんが自発的に自分は母親なんだという強さ、これは正しいのだという自信をもっと強くもったほうがいいと思います。

団野 この事件の中で非常に重要なことはおしゅうとめさんが自分は悪くなかったという自信をはっきりもっていることです。それでお嫁さんが嫁として不適當であったというふうにきめてしまっていること。

渡辺 実家に帰って、苦情をいった嫁さんが、兄弟にもなにも聞いてもらえなくてそのまま飛び出して川の中に飛びこんだらしいですが、本当に身近でいつも力になってくれる人がなかったというのは、つまり旦那さんにずいぶん責任があると思います。

斎藤 私も、嫁一人を苦しみに追いやったその主人に責

任があつたと思います。おしゅうとさんも古い時代にいつまでも生きていないで、新しい嫁に対する思いやりというやさしい心であつたらと思います。

堀 わたしの部落にも自分の息子がかわいいが、嫁が気に入らんから、嫁を帰そうとしたしゅうとさんがあつた。その時息子さんが、「おれたちはほんとうに愛し合った夫婦だから財産なんかいらぬ。ふたりで出ていく」といったそうです。そうしたらその家の問題はすっかり解決しました。

土井 わたしは、責任は夫と妻とに半分ずつあると思います。

萩原 わたしだれにもみんな責任があると思います。

花岡 漁村の立場から、農家の嫁さんの話を聞いていると息がつまるように思います。漁村ではその反対に嫁さんのほうがのびのびとして、むしろしゅうとめのほうが氣を使っているくらいです。

団野 いまのお話を整理してみると、年配の人はだいた嫁が弱かつたという説と、嫁の主人が弱かつたという説が強い。それから昔からの因習のためだという説もありましたね。

私の結論をちょっと申し上げますと、みんなに責任があると思うのです。その中でまず一番責任があるのはお嫁さ

んの主人じゃないかと思う。結婚というものは、愛情の中に築き上げねばならないもののに、その主人には築く努力と自覚がなかった。お嫁さんが自分のなやみを夫に訴えるチャンスもなかったかもしれないが、訴えても聞いてなかったかもしれない、あるいは非常に両親の力が強すぎて小さい時からその夫というのは発言のできなかった。人間として半ばな人間に育てられたのかもしれない。

それからお嫁さんの覚悟、母としての自覚がなかったということがあるでしょう。それから実家の父親というのは、これも実に古い人間だと思う。娘が訴えてきているのに実の親としての努力を払わない。

さらにしゅうとめさんの立場が一番問題です。しゅうとめさんが自分の子どもに対して全然心の痛みを感じない。はつきり自信をもっているところに問題があるのです。自分分は若い時にはやってきた、やり通してきた、だから自分のお嫁さんにもそれを要求したのです。これは日本の悲劇だと思います。この連鎖をいつの時にか断ち切らねばなりません。因習とみんながいう、その因習とはなにものか、わたしららの村の古くからの慣習ですということでは終る。それじゃその因習はどういう手順で切るのかということの問題だ思うのです。その破り方についてみなさんこれなら成功しそうだということがあったら出して下さ

い。

小泉 わたしは、自分を犠牲にするのはよくないですが、一応しゅうとめが死ぬまでは辛抱したら……と思います。

堀 なかなか自分だけでは解決できないと思います。わたしたちのほうでは、嫁の会とかしゅうとめの会とかそれぞれの立場でいろいろな会合をもって、お互いに勉強するという機会をつくるようにしておりますけれども。

渡辺 一番実権を握っているのは女性であるという自覚から、グループ活動なんかいま盛んにやって、そういう努力をすることが自分の子どもを幸福にする力になるということをしつかり認識する必要があると思います。

土井 わたしは、嫁の才覚でもって、犠牲になるような形はとっているが実は自分が勝っているのだという方法を——実力と和合の力で。

山中 私は、グループや家族会議で話し合って、結論が出たとしても一週間、一月の後にその因習が破れるものだと結果を急ぎすぎではないかと思うのです。家庭の中では、何度も話し合う努力をし、また外からはグループとか婦人会とか団体の力をかりて、徐々に力を盛り上げてゆくようにすればいいのではないかと思います。

団野 花岡さんがさっき、農村のお嫁さんは可哀想だ漁

村はむしろ反対だとおっしゃったけれど、花岡さんの場合は、ご主人がとってきた魚を自分で行商して売っている、つまり生産活動に参加しているということです。ですから農村でもこの因習を、打ち破るには、うけつがれた財産の上に行なわれている生産の形を改め、何らかプラスを生み出すことによって若い世代が発言権を得るということもできるのではないか。そういう実例はたくさんあります。ただ口の上だけの議論だけではなかなか解決しないということです。高見さんはからだを張ってやったとおっしゃったが、それがいいか悪いかは別としても、やっぱりそういうことから発言力が生まれるということは確信していいのじゃないでしょうか。生活生産の中心に入っていく、それには自分の頭をしょって中働かせて、いい知恵を出す努力が必要であると思います。

この家族関係の改善は急いではならない、けんかして解決できるものではないということ。ゆっくりやる。少々のことではなかなか倒れない。それほど因習というものは深いものであるから、そういう取り組み方をしないと、なかなか解決できないんだという、太い神経をもたなければいけないということも出ましたね。

また気持を明るく持つということ。しゅうとめさんからおこられても、じめじめ、めそめそ泣かない、明るく自分

の家庭環境をかえるように努力する。そういう努力、気持の持ち方、これは非常に重要です。

次に昨日だけおっしゃいましたが、演技力というものを考えてみる。おしゅうとめさんにはどういにかその効果をいけばいいだろうか、というような生活上の演技力も欲しいですね。グループ活動でもって話し合をやり、それを家庭の家族会議に結びつけるということ、これも一つの有力な手段だけれども、その結びつき方を誤ったらこれは間違ったことになる。このあたりにも、演技力とか、辛抱とか、根強さが、いるということです。以上がみなさんのご意見をまとめた結論ではないですか。

最後に昨日から気になっている問題を出します。それはグループ活動やっていて、なかなか農家の若い嫁さんはそこに出られない。それでも、自分でグループの中にある一人のお嫁さんが野良仕事にいくといって家を出て、途中からグループに参加してくれた、という発言があったのですが、これはちょっと問題だと思ふ。うそをついてグループ活動に参加したらグループ内のことは調整されるだろうが、それによって家族関係が調整されない。そういうことわかった場合、その人の家庭内の立場はとんでもないものになる。やっぱりちゃんと出てくるように指導しなければ

いけないと思います。あなたの家の人が出ていってはいけないというなら無理して出てこなくてもいい。それを説いて出るというふうにグループの人が協力する、そういう手順をふまなければいけない。いいことだからどういう方法を使ってもやってもいいというのでは、いよいよ関係が悪くなるのではないのでしょうか、それでは部落との関係に移りましょう。

井戸端会議の是非

海野 自分の生活を考え他人の生活を考えて自由時間というのは絶対にといていくくらいに侵さるべきものでもないし、侵すべきものでもないという自覚をもって、お互いの自由時間を尊重し合うような工夫をしていったらいいと思います。

小泉 お客さんがきて仕事にならないという時がありますが、特殊なお客さんならべつですが、近所の方がきた時は、悪いけれども手仕事さしていただくわねと打ちあけたらいいと思ふ。

団野 井戸端会議というものの、これは農村にも都市にもあるのですが、井戸端会議というものは必要ですか、必要じゃないですか。

山中 人間が生きていく上の、ある生活の一部分ですか

らむだ話ということも一つのレクリエーションとして必要じゃないかと思いますが。

土井 時間を生み出す上からみますと「時は金なり」という言葉もあるくらいですから、そういう意味からいえばむだ話は大きな敵です。

萩原 賛成です。

永井 むだ話ってどういうことをむだ話っていうか知りませんが、わたしも必要ではないかと思ひます。なにか問題があったら井戸端会議がいちばん手取り早いと思ひます。

小林 やっぱり百姓は百姓の姿の時のほうがいちばん気やすく話ができる。井戸端会議でも人を批判するとかそういうことは抜きにして、実のあるむだ話を……。

花岡 わたしはむだ話から出発して、順に向上してきましたから、むだ話も必要ではないと思ひます。井戸端会議と一概にいわれますが、家において新聞読もうにも新聞なし、ラジオを聞こうにもラジオなし、というくらいに貧しい人もいるわけで、そういう人にはやはりなにかを見つめるための井戸端会議は必要ではないかと思ひます。

土井 わたし、むだ話の中に案外いい話をひろふこともありますから、むだ話をする時間もあってもいいですねけれども、それは他の人の生活の時間計画を邪魔してはいけな

いと思うんです。夜の自由時間とか会合のときに、その会合は必ずしも勉強でなくともいいのですから、その時にむだ話に花を咲かせてもいいと思ひます。

山中 自由時間に十分むだ話をすればいいといわれますけれども、緊張した合間合間にもやはり悪い意味でないむだ話、ユーモラスな話は、人間の心を豊かにすると思ひます。

団野 むだ話の中のうわさ話を土井さんが非常にいいなという。ところが農村の中でなぜそんなにうわさ話するのだろう。うわさ話するということは、お互いの人間関係をますます冷めたくしていくわけでしょう。どこの村でもそういう人が一人か二人いる。そういう空気をなくするにはどうしたらいいか。

弥富 なにかほかに共通の興味をもてる話題をもつようにしたらいいいと思う。

萩原 うわさ話をしたいという気持は、多かれ少なかれ誰もが持っているものだと思うのですが、それをできるだけ少くするには、結局健全なレクリエーションというか、遊び場所、話し場所が問題だと思います。

グループ活動の精神

団野 その話し場所は結局グループみたいなものになり

ますね。心のうさの捨てどころが必要です。うさを捨てるばかりでなく、かなり積極的な明るいものでなければいけないわけで、その話題を見つけることがむずかしいですね。みんなの共通に関心をもつ問題をどうして見つけるかということもむずかしい。ある特定な人が思いつきでおしつけるのではなく、みんなの気持を合わせて、こういうことだというふうにもっていかなければだめなわけですね。

もう一つ、部落との関係で、問題を出します。これは一昨年出た問題だけれども、あるグループが地域婦人会と対立している。地域婦人会の会長さんは昔ながらのボスの奥さんがなっている。そこに新しい別のグループをつくると、これが既存の組織とぶつかる。あれは、はねあがりではないかと、白い目で見られている。こちらの方も、なにっているのだ、昔ながらの肩書だけのボスではないかと思っている。これは昨日お話のあった、自分のまわりの部落からまとめたらどうだ、ほかの部落にも手を出してあちこちまとめる必要はないじゃないか、という問題ともからみ合っています。どうすればいいでしょう。

堀 グループというものはただ自分の周囲の人だけで固められるものではない。一つの目的をもって人が集まって話し合ったりしていくものではないかと考えております。

小林 やっぱりグループの目的は婦人会の目的と違つて

いるのじゃないかと思えます。グループというものは自分の身近な足もとのほんとうの自分というものの勉強をもとにして、——大きいことは婦人会にまかして——ほんとうに身近な困ることを気のあった者同士話し合い、助け合うそれがグループじゃないかと思えます。

土井 わたし下からもりあがったグループというのは、もちろん大切だと思いますが、やっぱり婦人会活動とつながりをもちながら手を取り合いながらいかなければならないと思う。

斎藤 最近なにかにつけてグループ、グループといわれていますが、ほんとうに意欲のない人なら、いくら形だけこしらえても長続きしない。結局グループというものはほんとうに気の合った同士だと思う。

渡辺 日立市の場合を考えても、地域婦人会の活動の中でグループ活動が育っています。地域婦人会の目的とグループの目的とを、うまく一致させていく、そういう形もあると思います。

萩原 私も農村に住んでいる以上、婦人会に一応属している、自分で入ったわけです。そこに入りながらグループ活動もやっています。

小林 なにかグループと婦人会と別個のように考えられがちですが、結局同じ人間が婦人会員でありグループ員で

ある。共通しているのではないかと思います。

団野 グループ活動にしても、一つの村の中での組織活動というものは、これまである組織とむやみにぶつかってゆくのは誤りで、できるだけ避けて、調和をとって、大きな渦をえがいていかなければならないということでしょうね。

もう一つおうかがいしたいのは、みなさんのような人たちと別に、自分の家で時間を取ろうとしてもできない非常に気の毒な人がたくさんある。生活的に気の毒な人、家族関係でも気の毒な人、自分はともグループに入れないうちで思っているたくさんの人たち、そういう人たちは見捨てておいていいのでしょうか。

山中 わたしはそれをみなさんと話し合って、先生にもご相談したいと思っています。農家の主婦はわたしたちの目から見ていると、自由時間は十分にありそうなのです。その人の考え方によっては暮らし方によっては、それを忙しい忙しいと毎日かけずり回って、髪結う間もないという人たちにどうしたら考える時間を計画的な考え方をもちあがせられるか、ということをお先生やみなさんとお話し合いたいと思います。

団野 ですからこれこそ人間関係なのです。みなさん農村の比較的先覚者だと思いますけれども、いったい自分は

指導者だという顔でこういうものをつくって、自分のつくった円の中に人を入れるのか、あるいは、そういう気の毒な人たちの中に自分が入っていくのか、ということに問題の差があると思う。前者であれば指導者面の運動になってしまふ、こっちから相手に近づいて、その人のところまで下げていってから積みあげていくということになってもらたいます。そうしないとこの運動は広がらないでしょう。

堀 わたしたちのほうでは部落の婦人部の支部活動ということがあるのです。グループをつくるといってもなかなかそれぞれ環境や立場や望みが違うと思う。それで私の方では衣、食、住にわけて、どこでもいいから希望するほうに入るようにして部落で四つくらいグループをつくることにしています。そしてそのグループにはだれそれがリーダーということがなくてもやれるように、講師なんかたのむ場合でも、お互いに自分たちの問題をそこにもってきと、わたしはこういうふうにしたいけれども、こういうことはできないから、だれかいい方がないか、という程度で集まる会をつくっておりますがどうでしょうか。

団野 会長、副会長があつて、しかつめらしく演説するというよりも、みなさんのなやみを聞き、その解決について一緒に考えてあげる、その人の身になって……。

花岡 わたしら漁協婦人部では、グループを五つくらい

つくって、家族計画とか、生活改善とか、宗教的には修養の場とか、いけ花、そういうグループをつくってやっておったのですが、三人でも五人でも集まってくると、次には会員さんが仲良しをそれぞれ誘って集まってくるという工合に、スムーズにやっています。

農村婦人の財布

団野 一番根本の考え方は、みんなおんなじ人間だと思うことだと思う。ある人は大学出ているが、ある人は学歴がないとかあるでしょう。また頭がいいとか悪いとかもあるでしょうけれども、人間であることにはだれも変りがない。人間の優劣なんかはそんなことで決められることではない。だから人間としてはみな同じというものの考え方が一番根底にあって、互いの接触が行なわれたなら、そこからみんなの成長が生れる。すべての活動、自由時間をつくる活動でもなんでもそういうことじゃないかと思えます。

では次に、自由時間をどう利用するかということ。自由時間は非常にむずかしいけれど、工夫し努力すればつくれるだろうということを前提にして、自由時間をどうつかうべきかということを話し合いました。

弥富 自由時間は、農繁期と農閑期とで違うと思うのです。農繁期の自由時間はぐっすりやすみたいだけです。農

閑期ですと趣味とか教養といったものにまわしたいとか、子どもと遊びたいとかそういうふうになってきます。

山中 自由時間は、ほんとうに自分で自由につかえる時間であって欲しいと思います。

団野 他人の自由時間と自分の自由時間の問題。自分も勝手に自由時間の設計をやり人も勝手に設計している。むこうの自由時間とこちらの自由時間との関係、これはどうでしょう。

渡辺 他人の自由を侵さない自由。

山中 農家では、一人一人が自由時間をもつということが、わたしはできないだろうと思います。自分の経験から、それで家族全体が自由時間をほんとうに自由に、子どもが勉強したければ勉強、話し合いたければ話し合い、ものを読みたければものを読む。家族全体が自由につかえる時間は、農家の場合はだいたい一日の仕事を終った夕食のあとだろうと思います。

前川 私の自由時間は昼食のあと片づけがすんで二十分間、夕食後家計簿の記帳がすんだあとの七時半ころから九時半までの二時間をつかっております。食後の二十分には小さい仕事をするようにしており、夕食後にはテレビを見るとかみんなで話し合うとか雑誌などを読むとか……。

永井 わたしのところは部落全体一定しております。自

由時間を昼食後一時間とっております。私はその自由時間を本を読んだり、会の連絡とかにつかっています。

萩原 私、自分の自由時間というものはっきりわけたつもりでしたのですが、小林さんのほうでは農休日が設定されていて、その日に自分の好きなことをやる。それを生産活動というお金をとるところにつかっているというお話でしたが、自分で自由につかっているが、お金をとるためにつかわれているということ、それは労働時間じゃないか、本当の自由時間ではないのかということを考えてみました。

小林 五の日が休みですからほんとうに自分が解放的になれる時間がよいあります。農村では経済面が困っていますから、自分の自由な時間を、自分が自由につかえる金を得るということに費やすということは、自分で好きにやることだから労働にはならないと思います。

萩原 そうすれば家事労働でも自分が楽しくゆったり労働時間でないということにもなる。

団野 自由時間と見ても労働時間と見てもどっちでもいいと思います。実質的には労働時間だろうけれども、気持では自由時間ですね。強制されない時間だから。だから自由的労働時間といっていいと思いますけれど、それで得たお金は全部自分の自由にできるのですか。

小林 子どもの学用品とか、その他自分の好きなものにつかわれます。

団野 いまの小林さんのお話は自由時間であるか労働時間であるかということとはたいした問題じゃなくて、主婦が自分で自由にできるお金を自分の自由な時間を労働に当てることによって得ることができ、そういうお金の問題です。いったい主婦が自由な金をもっているかという別の問題になってきます。小林さんはそれを同時に解決しているというケースだと思えます。それから、小林さんのお話の中でぼくの印象に残ったことですが、この方は自分の自由時間をつかってお金をもうけ、それを子どものため、あるいは自分のためにつかっているということを通じて、時間の貴重さということを学んでいると思うのです。午前中間題になりましたむだ話、うわさ話は時間の浪費だという話がありましたが、浪費であるか浪費でないかということとはこの人の場合はとくにふつ飛んでしまっています。

渡辺 私のところは、水田単作地帯ですが、女も男の人と同じ労働をする。そして収入が五十万なら五十万あったとしても、農協に貯金されると、財布を握っているしゅうとさんならしゅうとさんのところにおりるわけですね。その他の者には自由に使える金がない。小林さんのようにやればいいが、労働の報酬の分配が何か不合理なような気が

するのです。

弥富 小林さんのお話を聞いてうらやましく思いました。私のほうですと、卵を若い者が売りましても、年寄りの手に握られてしまう。

清水 休み日には休みたいけれども、生活費ですら自分に持たせてもらえないし、小遣いに不自由しているところから、例えば、子どもに学校に納めるお金とか小遣いとかをねだられても、お母さんのほうには全然お金がないわけです。おばあさんにいいなさいとか、おじいさんにいただきなさいということになる。結局母親としてやりたいことができないし、子どもからはお母さんは役に立たないという感じで見られる。そのために、少しでも子どもに学校に納める金を出してやりたいという気持で、休み日も働くということになる。小林さんのように朗らかに働ければいいと思うんですが。

団野 お母さんが自分の子どもにお金をやろうとしても自分は一銭も持っていないから、おばあちゃんにもらいにくくといわれる。その母親の立場はどうなりますか。それで孫がお母ちゃんよりおじいちゃんになつたといつて喜んでいるとすれば、これほど悲惨な話はない。そういうこと農村にうんとあるでしょう。これはみなさんしゅうとめさんになった時には、解決してやらなければならぬ問題の一

つです。

小泉 わたし、自由時間というのは、電気がないので、テレビを見るとかラジオを聞くとかをいうことができないので、主人と交替で夜学に通っているのです。今すぐ役に立たなくても、子どもが大きくなってからでも、家のお母さんは、勉強ができない時は話し合いになってくれた母だということが分ってくればいいし、子どもの力になってあげれる母になりたいと思って、夜学に通っているのですけれども。

片口 わたしは、小林さんの場合とちょっと違いますけれども、農閑期になりますと、時間がたくさん余ってくるのですから、自由時間に、編物が好きですから、編物をやっています。自分の家のものを編んでもまだ時間がある場合に、近所の方に頼まれたりすると、編み賃はわたしは自分のものとして取らないです。それを一応別の財布に入れて、自分に何かほしいものがある時に、自由に、大ぴらに、お母さんに平気でもらえるようにしています。

土井 いまお話うかがってましたら、たしか小林さんのところは、鶏を七十羽ぐらい飼っていて全部自分のお金にもらえるというが、私らのところは七十羽も飼っていたら実計費に当然繰り入れられる。だから嫁さんが、月五百円でもいいから自分の金をほしがっていますけれども、も

し立場をかえて、主婦が一家の財布を預かったら、たとえ自分の金が一銭なくともやりくりして満足して耐えられると思う。三年とか五年とか、年がたったなら一応家計をまかして、自主性をもたしてその中から自分が稼ぎ出して、小遣いも取れるほうがよいし、それだったら満足すると思う。

自由時間の確保

団野 話がそれたようですが、自由時間という問題はそういう若い嫁さん、あるいは婦人の持つ金を持てるかという面とも共通の問題だということがわかります。つまり人間解放の問題です。両方とも。ですが自由時間の問題だけに話し合って事がすんだというのじゃなくて、それとつながっているほかのたくさん問題も見つけていかなければならない。

労働の報酬の問題を、アメリカの農民の場合はどうしているかという、親子の間で契約を結ぶ。親と子どもが収入の中から必要経費を差し引いた残りを、それぞれにある割合で分配する。親子の情がそれによって冷たいかというところでない。労働に対する報酬というものははっきりと割り切っています。だから、金が汚いという考え方はおかしいので、もちろん汚い金もありますが、しかし労働で稼いだ金は汚くない。金は労働に応じて配分されるのがいち

ばん正しいということです。農村ではお金に非常にこまかくいくせに、見得でお金をいやしむようなふうがあるでしょう。そういうこともやっぱり直さなければならぬことです。

最後に自由時間というものは部落あるいはグループで決定して、それをみんなに強制すべきものか、どうかということに入りましょう。

山中 自由時間とはこういうものである。生活時間とはこういうものである。人間の生活に自由時間というものはこういうふうに大切なものであるから、できるだけこの方向に進むように努力しましょうと、ぼつぼつとその方向に近づいてゆくのがいいのじゃないかと思えます。

小泉 わたしはその自由時間をうわべだけ、ただ、あんたしてみないかい、いいんだよ、といったように、自分がほんとうにする気がないのに他の人にいっても絶対だめだと思う。真実があって、すじ道をたてて教えてくれるのでしたらいいけれども。

永井 私のところでは自由時間について話し合いましたとき、これは団体の力で決めてもらったほうがいいという声が出たので、そうしました。

土井 私はその自由時間をとるのに、やっぱり個人ではとれない。家族の協力がある。仕事を家族一人一人に分担

させて、子どもには子どもなりの仕事、おばあちゃんにはおばあちゃんなりの仕事をしてもらう。そういう家族の協力と、それからまた黒板に今夜の献立はこうとか、今どこの田んぼに出ているとか、そういう大事なことはしるしをつけて、一目見てわかるようにするようにして、時間の節約をして自由時間をふやすようにする。また村全体に農休日を厳守してもらうとか、農休日には会合をもつことはなるべくやめて欲しいとかで、内側と外側とからで完全にやりたい。

堀 日中は一日働いて、夜自由時間を持ちたいと計画しても、訪問客なんかがあったりして自分だけでは解決できないので、部落としても、夕食後の訪問は避けるように、これを守ろうではないかということにしております。そして、午後八時になりましたら、サイレンを鳴らして、これからお母さんの時間だということにしております。お母さんの立場になれば、夕食後は自由時間となっておりますけれども、なかなかみんなの手前を考えて、ねたくてもねられないことがある。それでは困るというので、今でしたら八時、日が長くなると九時にサイレンを鳴らして、何も気を使わないで、すらすら自分の部屋に行けるようにしました。

自由時間の使い方

団野 では自由時間は個人で使うのか社会のために使うのか？ ということを……。

海野 わたしは兼業農家の主婦ですから、自由時間は自分のためにまず一番最初に使いたいと思っています。夫は勤めておりますし、汗とほこりにまみれた身体で夫を迎えるということがないように、自分で得た自由時間をそういうことのために、まっさきに使いたいと思います。

萩原 私はみなさんより自由時間をたくさん持っていますから、個人のために使うのと、周りの仲間の人と一緒に仲間のために使うのに分けています。

小泉 わたしは、自分の自由時間を誰にも束縛されないで使うだけじゃなくて、その内容として貴重な時間を将来の子どものためや、教育のため、よい家庭を作るため、そうして社会のためにもつくすことになるような使い方がいいと思うのです。

前川 私の場合、積極的時間と消極的時間の二つに分けているので、家事に四時間当てておりますが、積極的に処理して、三時間でつき上げたならば、あとの一時間は自由時間として当てております。そうして大きい時間には大きい仕事小さい時間には小さい仕事、たとえば私は編物がす

きですから、小さい時間には二十分ぐらい編物をしたりしています。

斎藤 私は、自分のやりたいこと——いちばん本を読みたいので、一応計画を立てて、一カ月に一冊くらいまとめ、本を読んでおります。

花岡 わたしは朝五時に起きて、午前中にすべての仕事を一生懸命やってしまつて、昼からは一切仕事をしないことにしております。どういふわけかといふと、わたし今まで、無理に無理を重ねて、神経痛が出ています。それと婦人会と漁協婦人部の役員をしてる関係で、いつどこから召集がかかって来ても、その度に機嫌よく出してもらうというようにしております。

団野 この自由時間をどう使うかという問題は、めいめいそれぞれ違うだろうから、これを一律にどうこうしろということは無理ですね。ただ婦人の立場が非常に弱いから、堀さんのおっしゃったようにサイレンを合図にその後休養をさせるとか、あるいは訪問しないようにしようという申し合せとか、そういうことが単にグループだけじゃなくて、村全体の申し合わせになって、それが別に窮屈もななく行なえれば非常にこれはいいことです。そういう工夫なり知恵はいくらでもある、というふうなことです。それから最後に一つだけ、農休日をあちこちでやっています

が、農休日に違反した場合にどうしますか。村八分にした例もあるんですが……。

弥富 わたしの部落ではみんなでそこにお手伝いに行つてあげる。村中で手伝いに行つてあげる。

土井 わたしのほうでは農休日を忘れて、田んぼに出ている人があつたと、見た人が注意して必ず帰ってもらつていゝる。農休日には田んぼに出ないことにしている。

渡辺 違反した時は、その場所に行つてホラ貝を吹きま

す。
堀 わたしのところは、日曜日を必ず休むことにしている。しかし、農家ですからお天気の場合で前に繰り上げるとか、またその作業をどうしても明日の日曜日にやつてしまわなければならないという場合は、月曜日を休みにするとかして、とにかく一週間に一日は休みます。融通性がありますから、違反者も出ないわけです。

団野 大体三つの回答が出ました。その人の手が足りない家に、手の余っている人がお手伝いするという解決の仕方。働いている人の耳のそばに行つて、ホラ貝を吹くなり、注意をするという仕方。また、農休日には弾力性を持たせるという解決の仕方。三つ出ましたね。

弥富 お手伝いというのは、いやがらせの意味です。

団野 なるほど。しかし、農休日をなぜとるかというこ

とは、ぼくはやっぱり婦人のためだと思ふんです。ですから婦人の間で、ものごとをやっぱり円満に解決すべきじゃないか、ほんとうにその家が休んだのでは仕事が片づかないというのであれば、いやがらせじゃない、ほんとうの意味のお手伝いをしてあげる解決の仕方、その方法が望ましいのではないかと思いますが、しかしこれはなかなかむずかしいからこれで打ち切りましょう。

終りにみなさんにお願ひがあります。みなさんは選ばれて東京に來られた。そこで、今度歸られたら、みなさんの言動というものは非常に注目されていると思うのです。みなさんがいちばん心すべきことは、威張った氣持があつてはいけないということではないかと思ひます。東京に選ばれて出たんだからわたしはえらくなつたんだという誤まつた氣持の片りんでも出たら、みなさんはすでに選ばれてここに來た価値が全然失われてしまうということです。それでは誰も話しを聞いてくれません。おく病になる必要はないけれども、さきほど私の申しました同じ人間なのだ、みんな手を取り合つて行こうという、そういう氣持で村に歸つてほしいということをお願ひしておきます。長い間どうもありがとうございました。

総 会

会議報告と話し合い

リーダー

那	西	塚	団
須		本	野
宗	清		信
一	子	哲	夫

部 会 報 告

第一部会(谷津) 私たち家庭婦人は、家事と育児の合理化と計画化をはかり、いろいろの障害を乗り越えてつくった尊い自由時間を、自分を高めると共に社会のために役立たせたいと思います。そのためには、主婦として母としての経験と特徴を生かして、パートタイムのような形で保育、ホームヘルパーとしても進出したいと思っています。しかし、現在まだそういう施設が非常に少ないので、この点では私たちが地域社会におきましても、その中核となって勤労婦人の方々とも協力して解決してまいりたいと思います。またそのほか、盲人への奉仕の点字とか老人のお世話など、家庭婦人としてできる奉仕もしてまいりたいと思います。また、私たちが月々一般の教育文化費として使えます額が非常に少ない現状でもあり、また、一般の家庭婦人は、各々の自由時間を意識して使う自覚が低い現状でもありますので、私たちここに出席いたしました会議員は、この大会のほんとうの意義を、広く家庭婦人に理解していただくよう、今後努力いたしてまいりたいと思います。

那須 ただいまの報告に多少付け加えさせていただきます。お集りになった家庭婦人のみなさんは、私の印象では、かなり教養の高い方々がおいでになりました、そして家庭

の状態もまあ日本で申しますならば、中産階級あるいはそれ以上の方もいらっしゃるように思うのです。そういう点から申しますと、家庭の中で自由時間をつくるのに苦労なさっている方々、日常生活に追われているような人たちが、その中でどうして時間をつくってゆかかという問題については、実はあまり切実感がなかったというのが私の印象でした。

それから、論議されました中に非常に面白いことがいくつかありました。ことに生活技術の面ではたいへんにはつきりして、われわれ男性から見るとおどろくくらいみなさん努力なさっている点があるのですが、それらの障害の中で、旦那さんが、やはり非常な障害になっていることを聞かされました。

また、一つ私、感じましたのは、家庭の中で自由時間を持つのと、外で自由時間を持つのと、この二つをどういうふうに調節してゆくかという問題です。これは後ほどみなさまからいろいろ質問を受けたい、その時に会議員のみなさまからも回答をいただきたいと思います。

第二部会(田中) 私たち職業婦人が、婦人の職場を守ると共に 家庭生活あるいは地域社会においての生活の中で、いかに自由時間を生み出しているかということを話し合ったのです。

まず第一に考えられますことは、私たちは今まで労働時間というものに対して、あまりにも甘く考えていなかったのだろうかということです。私たちの労働時間は基準法では一応八時間という規定が定められておりますが、実状はまだで、私たち、せめてここに集まったすべてが協力し合って、その最低八時間の線まで引っ張り上げていこう。

それには大きな問題として、婦人の地位を高めると共に、婦人に与えられている産前産後休暇、また生理休暇を完全に取り、有給休暇を完全にとることによって、職業婦人としての意識を高めなければならないと痛感したのです。

次に、私たちは職業婦人として男性に劣らないように働くには、まず育児問題が解決されなければならない。それには保育所あるいは私たちが気軽に家政婦、お手伝いさんを頼めるような厚生施設をつくるよう努めなければならないということです。

また私たちがこのようにして一生懸命つくり上げた自由時間を、いかにして使うかということは、合理的な時間の使い方とも関連するわけで、計画的な手順、あるいは経済的裏付けによって、経済的合理性を自分の身につける、そういうことによって大きく時間が浮いてるわけです。

また私たちは、地域社会における私たちの位置が浮き上っていないだろうかを反省し、積極的に地域の人たちと手

をつないで、職業婦人として、また地域の婦人として、明るく働いていけるような社会をつくりましょう。このように私たちは話し合ったのであります。

西 私を感じましたことは、さつき浅沼局長が、この会議にご出席になります前に、みなさんがそれぞれグループで、地方会議で話し合いなさってきたその中から、たくさん問題を持ってきておいでになり、問題を深く掘り下げる材料を、会議に持ってきておいでになったとおっしゃいましたが、そのことが非常に大きな収穫だったと思います。

話し合った内容で、一つだけ補足したいのは、田中さんもおっしゃいましたように、労働時間に対する考えが非常に甘かったのじゃないかということです。甘かったということは、結局は、甘いと同時に非常に無理をして働いているのではないかという現象が出されたわけです。無理をしているということは、現在の職業婦人が自分の地位を確保するために無理をそこまでしなければ働けない。働く女性の全体の社会的地位が非常に不安定であるということです。

ここで大きな問題は、家族の協力があっても地域の理解があっても、働く女性には使用者という対象がありまして雇用関係というものがあるものですから、この問題の解決ということが、やはりほかの婦人層の方たちにはない一つの

大きな条件だと思ふのです。そこまでまいりますと短かい時間ではなかなか話がつきませんけれども、社会問題としてやはり考えてゆかなければならないのではないかということ、私は特に感じたわけではす。

第三部会(安倍) 私たちは、問題点を二つ挙げたのです。それは、意識がないために自由時間を持てない。それから経済上の理由で自由時間を持てない場合との二つです。

意識の問題としましては、ほかの方々と同じように、家族の協力とか家庭生活の簡素化とか、生活の計画性をもつ社会の不合理な考え方とか習慣をなくしていく、というようなことが、考えられる問題であつたわけです。

それから最も重点として考えましたことは、経済的な問題で、これも二つに分かれたのです。一つは小売店の店主や観光業などに従事しているお店を営営していらっしゃる方と、中小企業に働く者、零細な内職をしている者の二つの立場に分かれました。

商業をしている者の場合は、主婦はもちろん家族も使用者も含めて自由時間がない。営業時間はただらとして、営業時間を短縮させるといふことがほかのお店との競争上、非常にできにくいということが問題になりました。店主の側としましては、自主的に閉店とか開店とか休日といふ

うことを合理的に自分たちが強くなつて、地域ぐるみの運動としてやっていかなくてはならない。それから消費者の側の方々にお願いとして、これに協力していただきたい、ということが問題になりました。

それから中小企業に働く者といつたしましては、労働時間と収入と生活費が問題になりました。これは中小企業がほとんど下請けで、中間搾取があつて、内職の賃金が安いということ、ここまです。ここまですと、国の経済のあり方ということになつてしまひまして、最低賃金を保証していただきたいとか、社会保障していただきたいとか、国の予算をこういう方面に使つていただきたいとかいう大きな問題になつてきました。私たちは、この問題を解決する方法は、地域ぐるみのグループをつくつて、横につながる組織をつくつてやつてゆかなければならないということを感じたのです。

塚本 会議の内容につきましてはただいま報告がありましたから省略いたしました。私の受け取りました印象を申し上げますと、お聞きのように、このグループは、商店を営営し、あるいは自分で内職をしながら、あるいは行商しながら、という切実な方ばかりでして、その問題が実に地についておりましたし、内面にもえるような情熱をもちながら、しかも非常に謙虚な態度で、心から頭の下がる思い

がしたのです。

問題をしばって申しますと、大きくはこの問題は、一國の政治経済、あるいは社会体制とかにふれてくる問題ですが、これを明日からどうして変えていこうということは困難ですから、一方にそういう問題をもちながら、一方においてたゞい報告のありましたような、手近かに組織をつくる。そうして社会への呼びかけと共鳴をもつ、自分たちのグループにおいても適正な時間の使用をする、同時にお客、それを利用する側においても、そういうものに深い理解をもつて、休日に買に行かないとかいうようなことがたいへん必要ではないか。こういう点で、非常に熱心な討議が行なわれましたことを併せて報告いたしておきます。

第四部会(永井) 第四部会では、きびしい労働に従事しながら、どのようにして自由時間を生み出すか、どうしたら自主的な生活ができるか、いろいろ話し合いました。

自由時間の取りにくいことの理由として、季候風土自然状況のきびしさもあり、また機械化貧乏という切実な問題もあります。それは生産のやり方、生活の計画を改めることによってある程度の解決はできると思います。

もう一つは、農村には特に、古い習慣、家族関係があって、人間関係がたいへん複雑で、特に、若いお嫁さんには自由時間が与えられない場合が多い、そうしたむずかしい

悩みを話し合いました。

その解決には、婦人自身が心を明るく持ち、いい意味での生活上の演技力もつけることも大事であり、またグループによる解決もできる、ということも出ました。

そしてわたしたちが最後に得た答は、合理的な生活設計をすることは、絶対にほかから教えられてできるものではなく、また机上の理論から編み出せるものでもない、婦人が自覚することによって、勇氣と知識で自分がつくり出していかなければならないということです。そうすることによって、家庭での婦人の地位も築かれ、同時に自主的な生活設計もでき、自由時間も生み出すことができるという結論を得ました。私たちはそこに生産の喜びと、毎日毎日生きがいを感じて生きていけるのだと思います。

団野 私のほうの部会では、リーダーがさばきに困くらしい発言が多くて、実はその処理に悩んだくらい活発でした。さきほどもお話のありましたように、自由時間がなかなか取りにくいという意見と、いや取れるという意見と二つありまして、結局いろいろ考えてやれば、農村、漁村でも自分たちの時間が取れる、そして生きがいを感じる生活ができるのだ、というふうな結論になったわけです。

それから家族関係の問題が出ましたが、会議員の方は大抵しゅうとさんと若い夫婦と、さらにその娘さんという三

つの年代を代表しておられまして、それぞれの立場から、家族関係をどう調整して行くか。立場の違う年代から、それぞれの意見が出て、話が非常に地についたと思うのです。

司会 次に会場のみなさんからのご意見や質問をうかがいたいと思います。

問 第二部会の働く婦人の問題について……。私は教師をしておりますが、最近「女は家庭に帰れ」ということをいわれまして、職場がだんだん狭ばめられております。と申しますのは、女の先生を雇えば使いにくい、条件が悪い。産休は取られる、生理休暇もいる。それから仕事に熱が入らない、結婚すればいいかげんにして切り上げる、そういうことから女が嫌がられているのが現状です。私たち教員をしておりますと、生理休暇をとりたいと思っても五十人も五十五人もの子どもをほっておいて絶対休めないんです。苦しいながらも、教壇の上に腰掛を持って行って、坐りながらも授業しているのが私たち女教師の現状ですが、この点について。

西 生理休暇が非常にほうぼうの職場で問題になるのですけれども、私は、これは一応労働契約などで認められて取ることができるというふうな約束があるならば、それは何も、取るべきか、取らないほうがいいのかという議論で

なくて、母性保護のために必要であるならばそのまま置いておくことは大事だと思うのです。けれども、生理休暇をどういうふうにして取るかということが、今この職場でも問題になっているのです。これを下手に取りますと、つまり、必要があるかないかにかかわらず、私たちの権利だ、ということで取りますと、そこからくるいろいろなもの——働く婦人はそれだから、というふうな問題が出てくるわけです。ですから私は、どうにも取らなければならぬ婦人に対しては、働く女性同士がお互いに取ることを守ってあげなければならぬけれども、自分の肉体にそれほど障害がないならば、それを固執してまでもこれは婦人の権利だということについては、ちょっとここらで考えてみる必要があるのではないかと思います。(拍手)

問 第一部会へ。私たち今、地域婦人活動を始めようとしているのですが、皆さんがやってこられたことについて……。いまその活動をどのくらいの地域的範囲までひろげていらっしゃるか、またどういう組織でなすっていらっしゃるかをお伺いしたいのです。

私、神奈川県登戸のグループのものですが、近所の奥さん七人ぐらい、多い時は九人から十人ぐらいで、家庭食栄養研究会と名付けて、お料理の講習をしております。

地域としましてはごく近所の方、ふだんお話し合いの連

絡のつく方。区域としましては、部落の四分の一くらいの家数で、八十軒くらいの間で呼びかけて、グループ活動をしております。

山崎 私のところでは、村念仏と申しまして月一回念仏講をやる風習が昔からありまして、念仏をやったあとは雑談などをやって、今までは過ごしておりましたが、その時間をどうにか有効に使いたいというので、その後、社会教育の映画や、テープレコーダーなんかを公民館からお借りしまして、それを見たり聞いたりしながら、お話し合いなんかをして勉強しております。大体近所の方十人くらいで集まりますが、それ以上になりますと、お話し合いもなかなか数が多くて、発言も自由にできませんから、十人どまりくらいがいいかと考えております。

問 私は都会のいちばん中心地に近いところの商店の主婦です。私のいちばん困っております問題は、買物時間で、朝早くから夜おそくまで店を開けておりますために、商店の主婦も苦しんでおり、疲れ切ってしまうことです。十四時間、十五時間の勤務時間を、何とか縮めて、もう少し自分というものを見出してゆけるようにしたいという願いをもっております。消費者の皆様のご協力をお願いしたいのですが……。

塚本 それは第三部会で討議し尽された問題でして、結

局商店自体の団結によって短縮すること。もう一つは社会の理解を得るということで、今日出席のみなさまにもそういう気持ちをもっていただきたいということで尽きると思います。

問 私は家庭婦人ですが、さきほど職業婦人の方が職業婦人は休暇がとれないとか、いろいろ悪いことばかり発表なさいましたが、私たちの立場から申しますと、職業婦人の方は両方から収入があるので、たいへん私はうらやましいのです。豊かなところはさっぱり発表にならず、悪いところばかりを指摘なさいまして、少し勝手じゃないかと思うのですが。

西 たいへん家庭の奥様からおしかりを受けたようですが、みんななにも遊び半分で働いているわけではありませんで、働くということについては、大きな目で見ますと、その人が働いていることによってやっぱり世の中が動かされているのだ。そんなら、家庭の主婦もみんな働きたいのじゃないか、生活が楽になるのじゃないかといわれるかもしれないが、しかし働くことのできる人もあるし、できない人もあるし、そういうことになりますと、収入の面だけで対立するということになるわけです。

家庭の奥さん方にしますと、収入がないということが、何か劣等意識をもたせているということですね。それは、

働く女性には収入があるからいいじゃないか、家庭の主婦は収入がなく、台所で一日中はいざり回っている。どっちのほうに得があるかということですが、それで女性同士対立していたのでは仕方がない。それならば、家庭の主婦の経済生活というものを、もっともって考えなければならぬ。そうして、旦那さまの収入がそれで妥当なものであるか。自分たちの置かれている、主婦の経済的地位が、果して社会の政治の面とか社会保障の面でいったいどれだけ評価されているのか、そういうところまで考えて、主婦の経済的地位というものも社会的な安定ということも考えなければいけないと思うのです。

働く人たちも——わたしは、味方するわけじゃないですが、実際にそれは、遊び半分の人もいるかもしれないけれども、少なくとも夫をもち、子どもをもって働いている人たちは非常に苦労しています。世の中は持ちつ持たれつですから、働いているから、ということ、地域のドブの掃除、アパートの階段の掃除もしない婦人もありますが、それではいけないので、ふだんの暮らしを家庭婦人にお願ひしているならば、地域社会をよくすることには自分も仲間に入り、自分の生活も理解していただく、そういうふうなことを忘れてはならないということを、十分みんなで話し合ったわけです。

婦人同士が、給料があるからいいからということだけで対立しないで、もっとお互いが生活をよくするためにどうしたらいいかということをお話し合っていく方向に、そここそ家庭婦人と職業婦人が手をつないでいくということに問題の解決点があるのではないかと思います。(拍手)

問 第一部会に訪問による時間どろぼうということがありましたけれども、遠くからいらしたお客さまの断わりやうのない時があります。どういうふうに第一部会のほうでまとまりましたかを……。

谷津 その問題は、お集まりの方みなさんお考えのことでしたが、突きつめて考えますと、日本の女の方が時間の觀念がないということに尽きるのですが。ほんとうに用事のある方は、毎日毎日はいらっしゃらないと思うんです。結局お悩みは、近所の奥さん方の暇な時のおしゃべり、ということになるのではないかと思います。私はそういう問題に対しては、時間的な不経済、といえ、いらない方々に申しわけないが、たえず雑巾とか編物とか、小さい仕事を用意しておりまして、「ごめんなさい、忙しいからお仕事させていただきながらお話ししましょうね」というふうにいたしておりますので、そんなふうになすたらいいかがでしょうか。(拍手)

司会 まだ活発にご質問やご意見も出そうですが、時間

も迫ってまいりましたのでこの辺で終ります。どうもありがとうございました。

移動會議

東京班

○三鷹市立東保育所視察

○株式会社横河電機製作所視察

○協同乳業株式会社東京工場視察

○日本住宅公団武蔵野緑町団地見学及び主婦との懇談

会

○生活改善技術館視察

懇談会出席者

○会議員

田村 カヲル (北海道)

黒滝 千鶴 (青森)

堀 信 (秋田)

井上 敏 (山形)

新里 昭 (東京)

森 満 (神奈川)

蟹本 久 (福井)

佐橋 八寿 (愛知)

野口 敬 (大阪)

岡田 アサ (兵庫)

永井 八重 (和歌山)

土井 浜子 (鳥取)

松尾 君代 (福岡)

弥富 育子 (佐賀)

橋本 ふき (熊本)

福島 安代 (宮崎)

○武蔵野緑町団地主婦 一五名

○リーダー 那須 宗一

○司会 塚本 哲

東京婦人少年室長

司会 それではただいまから第十二回婦人週間にちなみまして、東京の移動会議の中の、団地の奥さま方と、全国会議で東京においてになった各県の主婦や、働く婦人の方たちとの懇談会を開催させていただきます。今年の婦人週間のテーマが、私どもが生活を計画的にして、なんとかして時間を生み出して、その時間を、自分のためにも、家庭のためにも、また社会のためにもしあわせにするために使わなければならぬが、そういうことについて、皆さん如何でしょうというようなことを呼びかけたわけです。この自由時間という問題、たいへんむずかしいのですが、こちらの団地の若い奥さま方が東京という大都市の中で、最も近代的な、そして非常に接近して一緒に住まなければならぬという団地生活、この中でもって、どういうふうな生活をやっていらっしゃるかということ、それからどうしてこういうグループを作って、お入りになったのか、またグループをお作りになって、どんな点にいちばん喜んでいらっしゃるか。グループのリーダーをやっていらっしゃる渡辺さんに、ちょっときっかけをお願いいたしますようか。

主婦 まずこのグループの説明をいたしますと、皆さんご存知だと思いますけれど、友の会という団体があります。東京にいま二千七百、そのうち吉祥寺方面が五十名、それを四つのグループに分けて、現在ここに十一人おりま

して、団地の方が六人、都営アパートの方が四名、それから私は近くの住宅のアパートにおります。ここの特色と申しますのは、家族の単位が全部夫婦と子どもだけということです。四人以上の家族という方は一人もおりません。農村や、地方とずいぶん違って、家族構成が非常に小単位だということですよ。ですから自由時間を生み出すための苦労ということよりも、むしろこの合理的な生活の中で、子どもを本当によく育てる意味で、主婦がどういうふうに勉強していったらいいかという努力を、一人でするよりは、みんなが集まって、いろいろの経験や、困っていることや、またお互いのいいところや、わるいところを出し合って、そして進歩していこうというのが私たちの集まりです。

司会 いま自由時間ということとは考えてない、ただ何とかして子どもをよく育てたいということで、みんなが集まって自分たちを高めるといふようなことをやっているといふことですが、それも結局は時間がなければできないと思うのです。

主婦 私たちのグループは、さしあたってどういうふうに集まっているかというと、グループ全員が集まるのは木曜の午前中の十時から十二時までの二時間です。そのほかに個個に子ども係とか、共同購入係とか、いろいろな役をもっているわけです。

司会 平均二時間という時間を、小さい子どもがいる母親として、特に午前中二時間出すのはたいへんだろうと思いますか……。

主婦 一日二十四時間のうち、睡眠時間は六時間、そのほか子どものためにおむつの洗濯から、授乳まで全部含めて八時間かかります。その残りが衣食住で、本当に自分の自由時間というのは、三十分から一時間くらいしかないんです。でも友の会に出るためには、お洗濯を翌日の自由時間に回したりして、その一週一度の二時間だけはほんとに都合つけて出席いたしております。

田村 会場は持ち回りですか。

主婦 はい。今週はどこ……というようにして、お当番になった方が、読書などの準備をしていて下さるわけです。

主婦 いままで子どもは別の部屋において、それぞれのお母さんが気をつけるといった程度でしたが、今度から子どもがいる五人の母親が、二人ずつ交代で、お天気の日以外は外で遊ばせて雨の日は、ほかの部屋で見るということをして、二十円くらいの予算で準備しているおやつを十一時になったら与えるというふうにしています。

主婦 次に、お子さんが少し楽になった方の一日の時間がどうかということ……。

主婦 家事の合計は五時間三十九分で、内わけは衣のことが一時間二十一分、食のことが三時間四分、住が四十九分、家事事務―家計簿つけたり手紙書いたりする時間が二十七分、合計五時間三十九分になっています。子どもがもう大きいので特別に手がかかることはないんですけれど、父兄会などがありますので、平均一日三十六分というのが子どものための時間です。あと社会的なことというのは、いま友の会に入っていたいでいるので、その時間として平均一時間二十九分。生産的な仕事というのは、私はよそのあみものなどしております。それが大体一時間二十九分、睡眠が七時間四十四分、自分の娯楽教養の時間として、テレビや、新聞・ラジオを聞いたりする時間が一時間、そのほか食事や家族と一緒に話合ったり、入浴とか全部入れて六時間三十四分ということになっております。これは一週間の平均です。

松尾 グループの集まる時間を十時から十二時までの午前中二時間ということは若い方は時間を上手に使っていらっしゃると思いますけれど、午前中になすった理由がありますか。

主婦 午後になると、子どもが帰って来ますし、朝の仕事は十時までにはしましうという約束で、それに向かって励んでいるわけです。

松尾 まとま とうまくお話ができますか。

主婦 読書と讃美歌が三十分、あとはその週によって、今週は衣のことについてお話ししよう、住についてお話ししようということで。月に一回、本部で衣食住について研究会というのがあって、それに「もより会」から三人くらい、代表を出して聞いてきて、お話を伝達するというようにしております。

土井 ちゃっとお尋ねしたいんですけど、いま若い人たちのあこがれの的は団地の奥さまなんです。娘をもつ親としても、やはり、やりたいと思います。しかし、そんなことしていたら、田舎にくる嫁さんがいなくなるし、困ったことだと思ふんです。で、えらい無理な注文かもしれないんですが、団地の奥さまは奥さまなりに、それでもなんかそこに悩みか何かもっていらっしゃるだろう。それを一つみやげ話にお聞かせ願いたいと思います。

主婦 団地に住んでいて不便なことで申しましょうか、たとえば便所は水洗便所なものですから、夜分遅くに流されると、その音がものすごく響いて、なれないうちとはとてもやすんでおれないくらいなんです。それに湿気も多いです。またもしご用聞きや押し売りでわるい人が来ましてね。入られてしまうと、逃げ場所がないので困る場合もあります。

主婦 私のところは小さい子どもがいるので階段を上がったり、降りたりするのが、近所に気がねです。ドアを静かに閉めなさいと何回いっても、無意識のうちにパターンと閉めちゃったり、ベランダを下駄はいて歩くと、下の方に響いてうるさいとか、集団生活ですからいろいろ気がねがあります。

主婦 子どもが小さいうちはよかったのですが、三才位になりますと、近所の子とも遊びに来たり、行ったりするんです。それで自分で予定を立てて、自分の自由だと思っても子どもが遊びに来ますと、暇な奥さまたちも一緒にいらっしゃる。それをお断りするのが、とてもつらくて困るんです。それに特に競争意識が強くて、あそこの子がどうしたとか、あの子よりどうか……。自分は自分の思う通りにやりたいという決意がなくなっちゃいます。

野口 私も勤めを持って、大阪の団地に住んでいるんですが、同じ階段八軒の中で、共かせぎというのは私のところだけでテレビがないのも家だけなんです。そうすると「あそこは二人でかせいでいるのに、テレビを買えない、よっぽど貧しいのね」というようなことを廊下でいっているのが聞こえるんですよ。あれやこれや、近所付き合いのいやらしさというものを、ひしひし感じていますけれど、

忙しい忙しいといってるくせに二時間くらいしゃべっているのがざらなんです。

佐橋 農村でも同じくらいうるさいです。このあいだ婦人会のときにもいったのですが、人さまにかげ口をきくなどということはいいない、しかし自分自身でつまらんかげ口を気にするなどということはいままらでも実行できる。これも一つの解決方法じゃないかと思っています。

塚本リーダー 私ども、団地を少し調べてみたところによりますと、どこでもそうですが日本人の特色として、非常に自分の近接したもののだけを大事にする。庭があると自分の前だけは、きれいに花を飾るけれど、よそのところの道まで掃くことがない。あるいはそこに課長さんもあれば、平社員もあるということになると、奥さん同士のさやあてもあって、団地の生活というものも外から見ただようなきれいなところばかりではない。自分の友達とか、親しい人だけに親切丁寧にしなから、公共のためには全然尽さないというのが、日本人の習性なんです、その考え方を変えなければいけない。そこで初めて時間の合理化ということも出てくるのであって、公共のために働くことは、みんな働くんじゃないか、そうして面会日なりを決めようじゃないか、あるいはあの人はこういう職業の人だから、あそこに行つて話すことはやめようじゃないかという、お互いが配

慮することがたいへん必要と思います。その前に皆さんには非考えていただきたいことは正しいと思うことを自分で進めていくということ。そう思う人たちは、団地でもできるだけ手をつないで、正しいことを我々は主張しているのだと進んでいく。それには風当たりがかなり強いと思いますが、それは日本に課せられている使命であって、それを切り抜けていくというのが、婦人の自主性であり、今のテーマであるというふうに、私は考えております。

新里 東京でも集まりがありました時に、家庭の主婦の方たちのグループと、それから勤労者のグループ、労働組合、地域団体、そういうものとの交流が大変できにくくというお話がたくさん出たんです。勤労婦人は時間的に制約がありまして、皆さんの集まりの中に積極的に入ってゆけないということがあるわけですが、そういうことを家庭婦人の方にも理解していただいて、家庭婦人の方もお忙しいでしようけれども、お忙しい勤労婦人が、育児とか、家事とかで悩んでいるそういった問題を、一緒に考えていただきたいと思うのです。

司会 都会の団地というのは、皆さん孤立したい気持でお入りになるのじゃないかと思うのですよ。隣りは何をやる人ぞで、知らん顔できるのだ、そういういい意味の個人主義的な理想的な住いとしての団地というものを、お考えに

なったのじゃないか。それが結果において、こういうことになるわけですね。本当にやり切れないような状態、それを気にするなおっしゃっても、なかなか勇気がいると思います。自分が自主的にさっとやれるような、その勇気というのは、どういうところから生まれてくるんでしょうか。

主婦 いままでいろいろなやってみましたが、余計に抵抗が激しくなるんです。それが子どもに影響するのがいちばんこわいんです。何かあると、ああこの家に遊びに行かないからということ子どもが一人ぼっちにされちゃう。どうしたらいいか、いつも考えるんです。

塚本 いまおっしゃったような、ここで隔絶された孤立した生活がしたい、いい意味で個人主義の生活をしたい、そういう考え方は私は大体いけないと思うんです。どんなに個人生活しようとしたって、社会というものと隔絶された人間の生活というものはあり得ないんですから、団地なら団地一つをコミュニティと考えて、そのコミュニティのふん囲気をよくするということでなければいけないと思うんです。それができて初めて個人の生活も冒さず、冒されないというものができるのであって、地域ぐるみをよくし、地域ぐるみ明るくなって、その中において個人の自由なり、孤立というものが認められる。そういう考え方におきかえられなければいけないのじゃないか。大体人間とい

うものは、登山でもした時に経験するように、山で出会うと誰かれとなく声かけたくなって「もう頂上はそこですよ」「あそこ水がありますよ」とかいいうでしょう。これが人間の本性です。

土井 いまのお話ですけれども、カギ一つかけておけば、誰にもせいちゆうされない気やすさというものはうらやましいと思います。田舎の場合でしたら、いちいち隣り近所の干渉、いらぬお付き合い、いらぬ経費の無駄がずいぶん多いんです。その意味においては、カギ一つでお隣りが何をなさろうと、自分が、どんなことをしていようと、わからんという世界は、いい面もたくさんあると思います。

野口 私の団地も、入った時はばらばらで、本当に外に出るのが、ゆううつなくらいだったのです。ところが一年くらいたった時でしただけで、水道料金の値上げがありました。倍額の値上げになるということになったのです。それで奥さんたちが立ち上りましてね、その時に自治会を作らなければ駄目だということになり、自治会を作り、市会へ毎日波状デモをかけたんです。子どもを連れて行ったり、私も勤めを半日休みまして、傍聴に行ったりして、それで少しまとまりができたんです。このように何か身近な問題が起ると、皆さん近所の話から遠ざかって一つのことに集中できるんです。だから、私思うんですけれど何か

共通の話題というか、団地全部で話し合える話題があればいいと思うんです。

司会 この「もより会」は、あちこちばらばらなところから集まって手をつないでいらっしやるようですね。けれど、ご自分の団地にお帰りになって、そこでもってまたそういう働きをするということは……。

主婦 それが理想なんです。最初は団地には全然いなかったのが、これだけふえたわけなんです。でもいまこうして仲よく十一人顔を並べていますけれど、たった十一人の中でも、グループを作って、一つの組織の中で、みんなで責任を持たされて、一つの集まりを持つということは、めいめい相当な努力をしていると思うのです。やめたくなるような時もあると思うんです。ですから、これだけの大きな団地の中で、なかなかいい組織ができないということでは、こうやって集まってみて、とてもよくわかるんです。

それからもう一つ、農村の方たちがうらやましいと思うことがあるんです。それは私は子どもが幼児の時期を十二年ほど秋田で過ごしました。家の裏に行くと木の実が落ちていて、というところでも子どもを育てて来たのですが、この団地周辺には草一本満足にないんです。ですからこの子どもたちは、四季の自然の美しさも、虫やなにかについての観察も、教科書で習うだけで、本当のものを自分で見た

り、聞いたりすることができないんです。農村の方は対人関係とか、お付き合いのむずかしさとか個人的な生活がどうの、こうのとおっしゃるかもしれないけれど、子どもを育てる環境としてはどれほどいいかわからない。都会の子どもには、電気冷蔵庫や、テレビがあっても、そんなものにはかえられない良さが農村にはあると思います。

司会 最後に考えたいことは、せんだったの東京婦人会議で、団地にお住いの共稼ぎの方と、いわゆる主婦専門業の方との間に火花がちらつたのですが、それは同じ団地に住んでいる共稼ぎの方のお子さんを、お子さんのない主婦専門業の方が預かってあげましようということで、非常に喜んでお預けしたわけです。その方は自分の時間を何んとか工夫しながら好意をもって預かってあげた。そして共稼ぎの方が帰って来られたので、その奥さんがお子さんを連れていって、一日中の報告を一時間、二時間も長々とお話になる。すると共稼ぎの奥さんは、疲れて帰って来て、またそれではへこたれてしまふ、これではかえってたまらないということをおっしゃった。そしたら主婦の方も、なんて勝手なことをいっている、うちだって好きで預かっているのじゃないのに……ということと、とつてもとがっちゃったわけですが、この問題も団地に住む共稼ぎの方と、主婦の方の時間の問題からおこってくるわけですね。

新里 私も共稼ぎで子どもがあつて近所の方々にいろいろ迷惑をかけている立場から感じたのですけれど、両者の生活内容が、相当時間割の面から、違うものですから、共通の話題がとぼしいわけです。職場の中で、女はどうだこうだという問題がたくさんあつて、その問題の解決に、すでに頭がいたいわけです。このことを家庭婦人の方にも理解していただかないと、いくら帰ってからの時間の中で、共通の話題を見つけて話し合つても、本当に助け合うような状態にまではならないと思います。また私たちは労働組合の活動の中で託児の問題とか、いろいろやっているわけですがそして地域婦人の方々と連絡をとつて、自主的に婦人の問題を考えたいとしていのですけれど、労働組合というものに対して、皆さんあまりというか、ほとんど無関心じゃないか。そういう勤労婦人の生活を、私たちより余裕のあるという立場で、何か研究していただきたい。たいへんわるいんだけど、お宅のほうから積極的に勤労婦人に何か話しかけていただいたら、勤労婦人の、そういった普段肩をはって毎日勤めていのかたくなな気持がとけて、自然に解決の糸口がつくのじゃないかと思ひます。

司会 家庭にいてなんとか時間的な余裕が生み出せるような方は、その時間を誰かが喜ぶような時間に使つていただけたら、どんなにいいだろうか、そしていただくほう

も、するほうも恩を着せるとか、着せられるということではない、本当に素直な気持でお願いしお願いされる。そういう点から考えていけば、何か時間を生み出さなければならんという今年のテーマもうなずけるものがあるのじゃないかと思ひます。いろいろ勉強させていただいて本当にありがとうございました。

懇談会出席者

○会 議 員

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 上 | 角 | 末 | 安 | 大 | 水 | 高 | 荒 | 近 | 高 | 小 | 中 | 山 | 渡 | 清 |
| 村 | 田 | 広 | 倍 | 本 | 谷 | 見 | 井 | 藤 | 間 | 林 | 沢 | 崎 | 辺 | 水 |
| 淑 | 八 | 八 | 喜 | 隆 | 靖 | 紀 | 春 | 美 | 浜 | 芳 | | 京 | 範 | セ |
| 子 | 子 | 子 | 代 | 子 | 子 | 子 | 子 | 智 | 子 | 子 | 榮 | 子 | 子 | イ |
| (熊本) | (長崎) | (愛媛) | (山口) | (広島) | (奈良) | (京都) | (三重) | (岐阜) | (福井) | (新潟) | (長野) | (栃木) | (茨城) | (岩手) |
- 三菱日本重工(株)横浜造船所輕井沢社宅の主婦との懇談会
- 三菱日本重工(株)横浜造船所輕井沢社宅の主婦との懇談会
- 労働省婦人少年局婦人課長
- 司会 神奈川婦人少年室長
- 一四名

神奈川班

○日本石油化学(株)川崎工場視察

○旭ダウ(株)川崎工場視察

○神奈川県勤労婦人会館視察

○三菱日本重工(株)横浜造船所輕井沢社宅の主婦との懇談会

司会 今日三菱重工の軽井沢社宅の方と寮の方と、そうしてまた全国の会議員の十五人の方々とこれからお話し合うわけですが、今年、今年の婦人週間のテーマと申しますと「生活時間の自主的な設計」平たく申し上げますとむだのない時間をどうして工夫して有効に使いつつ、自分の自由の時間をそこから生み出していこうというのが主要なテーマのように考えられますので、皆さん方の日常生活の中からいろいろこうしたことについて、話し合っていたきまして、社宅の方、寮の方も全国の会議員の方と一緒にいろいろな情報の交換などをして、今後の生活時間の工夫を一層よりいいものにしていただきたいものだというふうなことを考えるわけです。

これから引き続きお話し合いに入りたいと思いますが、まず最初に全国会議にご出席の今日お集まりの方々からご発言願いますでしょうか。

高見 私は自由時間を持ってない農村婦人の立場でまいりましたのですけれども、皆さん方は大へん自由時間を豊富にお持ちのようですが、皆様方は自由時間をどのようにお使いになつていらっしゃるでしょうか。

主婦 今まで私たちはあまり自由時間というものを深く考えていませんでした。それが今度こういう会があるというので、調べてみましたところ、私たちには自由時間とい

うものはあるのですけれども、それをとてもむだに使っていたということに気がついたのです。それで自由時間というものを、どういうふうにしたら有効に使えるか教えていただきたいと思つてここに出席したのです。

水谷 私がちょっと思い浮んだことは、大へん抽象的なことですが、グループ活動の中に入って、自分以外の方々と話し合つて、役立つことをさせていたかどうか、また自分自身を磨くとかいうふうなことにお使いになるのも一つの方法かと思ひます。

今度は私からのお尋ねですが、今日まいりますバスの中でここはモデル地区だとうけたまわりましたが、初めから今日までの間にどれだけなを改良なさつてきたかをお教えいただきたいと思います。

主婦 北軽井沢の主婦の会ですが、主人がみんな同じ会社に通つていらっしゃるのですから、心おきなく働いていただこうという話し合いのもとに主婦の会というのができました。そのうちでもこの方たちは役員の方たちで、学校のこと、社会のこと、全部お力づけになつていらっしゃるのです。ここは団体でなにかの場合は皆さん一緒になつて仕事をしていらっしゃるのですね。社会事業でも赤十字の募金でも、ほかの外部の交渉というものを婦人たちだけでやりやうとしているのです。

大本 会社の厚生課あたりで指導されたのですか、主婦の盛り上りからでき上ったのですか。

司会 実は婦人少年室のほうで労働者家族生活技術指導というのをいたしております、今年からそのモデル地区をここに定めたわけです。そのモデル地区として発足してから二回ほど会合を持ったわけです。その会合で主婦の方々の要望によって、栄養的でそうして簡単に経済的な料理を最初に覚えたい、こういうことでその指導に今かかって、今度二回目を実施するわけですけれども、そのふん囲気の中でいろいろな問題も語り合い、また家庭のいろいろな計画も立て、しかもむだのない時間を経済的に使っていくという慣習をつけていきたいという意図のもとに始められております。

荒井 私たち家庭で内職を持っている婦人や農村、漁村の婦人なんです、社宅の方々は経済的に恵まれた方々です。自由時間というものに対する考え方、そういうものが根本的に違うのじゃないかという気がするので、けれども、収入を得るために一生懸命働かなければならない者が求める自由時間と、経済的に恵まれている人が考える自由時間とはおのずから違ってくるのじゃないでしょうか。

主婦 私たち経済的にはそう大して不自由は感じておりませんけれども、やはり子どもの教育費などがかさんでま

いますので、内職は非常に大ぜいの方がしていらっしゃる。そういうわけで、自由時間はやはり同じだと思えますけれども、いかがでしょうか。

主婦 ただいま社宅のご婦人の方から発言がありましたように、こちらは集団生活をしておりますので環境に支配されるという面が多分にあるのです。まして私ども寮です。同じ棟に十二世帯とかたくさんさんの世帯が住んでおり、そしてお母さん方が外に職場を持っておられる方もたくさんおられるわけです。そうしますうちに残っている者のそこが共同生活しているもののきかない心だと思っております。おつとめの方々もお当番やなにかは回り持ちでやるわけです。そうしますと、お勤めに出来る方は当番が回ってきたからというわけで、さっとやっていってしましますね。あとに残った者はそれから洗濯やなにかやりますしお炊事もやるとよくなります。そうしたことでまたお掃除をやり直さなければいけないという点もあるわけなのです。また旦那様も働いていらっしゃり、奥さんも働いていらっしゃる方でお金があったような話をされますと、私どもとしては留守を守ってあげていながらなんつてつまらないというような気になるわけです(笑)。そうしてそれじゃただおしゃべりをしてはあまりもったいないから、内職でもやろうかという気持ちもこれはわいてくると思うんです。

よ。それで内職ということをほとんどの方がやっておられるのですが、そうなりますと、おしゃべりなんかそうそうにして早くうちの中の仕事を片づけ、内職にはげむことになり、時間の浪費ということはだんだん少なくなってきました。

高間 ただいまのお話をうかがいまして、こういう社宅住まいの奥さん方も、やはり私どもと同じで、おひまがあれば社会的施設にお働きになったり、あるいは内職を求め、お勤めをなさって自由にふるまっていられたいということを再認識いたしました。

安倍 私小さい洋裁店を経営しているのです。主婦であって、そうして職業婦人であるものですから時間が非常にないのです。皆さん方はご主人が、立派に勤めていらっしゃるから、内職なさるとしても一日何時間くらい働いていらっしゃるのか。またそれをするために家計のいろいろなやり方や家事労働をどんなふうに簡素化して、そうして時間を生み出していらっしゃるのか、眠る時間とか自由な時間をお持ちにならないでやっていらっしゃるのか、そこら辺を。

主婦 私編物をやっておりますが、うちの仕事というのはやり始めればきりがありません。ですからある程度早く片づけまして、お洗濯なんかない日は十時ごろから、そ

れでなければ十一時ごろから編物を始めるのです。お昼は大体一時ごろまで新聞を読んだり、手紙を書いたり、それからまた四時くらいまでは午前中の仕事の続きをやりまします。あと夕飯の仕度をしまして、夕飯が済みましたら、夜は子どもたちが勉強を始めるまで子どもたちと話をしたり、ラジオを聞いたり、平均して一日四時間位を内職していますね。ですから家計の足しになるといふほどじゃないですね。

山崎 私は時間をいろいろ合理化しまして自由時間を作るべくたくさん作って勉強したいと思っておりますけれども、やはりグループを作って、みんなで勉強し合わないと向上はとても望めないということがわかりまして、皆さんにお話して呼びかけてグループを作ってみませんかとお申し上げました。でも環境のせいもあってなかなか皆さんがそういう気になってふり向いてはくれないのです。皆さんの方で、そういう自覚を持って自分たちから盛り上げて作るという気構えがございましょうか、そういう点についておうかがいしたいと思います。

主婦 ただいまのお話ですが、こういった集団生活でするので永住の地でないという考えがあるのですね。それでグループ活動とかそういったことがまとまるということがないわけなのです。子ども会の場合ですと非常にお母さ

ん方が協力して下さるのですが、婦人方のグループ活動とかなにかグループを作って勉強しようということは、永住の地でないという皆さんの頭がありますのでちょっとまとまりにくいということはいえると思います。

中沢 私も勤め人ですから、永住の地というのがまだきまらないのです。けれどもここは長くいないところだからここはいつ移るかわからないといっているなら、ずるずると一生終っちゃうような気がするのです。だからたとえ一日いようといつ転動しようとかわからないけれども、自分の誠意だけは尽して共にやりたい。私は「郷に入ったら郷に従え」という気持ちで臨んでいるのですが。

上村 私は今までの話の中で感じましたことは、私共稼ぎなんです。その共稼ぎと申しますのは主人の収入だけではとても生活ができないので、共稼ぎを最初から決心して結婚したのですが、それで私の悩みといえますのは、結婚して一年三、四ヵ月目になりますけれども、子どもがほしいと思いつながら作りきれないでいるのです。子どもができて安心して頼んでいかれる方がいないので、作らないでいるのですけれども、杜宅の方でも共稼ぎしていらいっしやる方はその点どういうふうになっているかお聞きしたいのです。

主婦 私は共稼ぎをやっているわけではありませんけれ

ども、近所に共稼ぎのお母さんがいらっしやるわけですね。それで、近所の若い方たちのことをお話ししてみたいと思います。旦那さんが非常に奥さんに協力していらいっしやるのですね。共同生活ですからいろいろ炊事場とかご不浄のお掃除はみんなで当番制でやるわけですが、旦那さんがご不浄のお掃除にまで出てこられるのです。

上村 私の主人も協力ということは非常に積極的にくれるわけです。私が今真剣に考えていることは保育所の問題で、すぐ近所に保育園がないのです。私はいま、お隣りの方が責任を持って預かってくださるとか、婦人会のような団体でお世話して下さって、何時から何時まで預かって上げますというふうなところがないかなと思って探しているのですけれども。

末広 私の学校でも最近赤ちゃんのできた女の先生がおりますけれども、授乳時間を、十時と十二時ときめておられるのですが、十時の十分間の休みでは赤ちゃんがお乳を飲み切ってくれないのです。お乳を飲ませようとすれば五十人ほどの児童が勉強をくい込まれる。それでその先生は赤ちゃんを人口栄養にかえてしまったのです。女教師としてはそんなにまで子どもを犠牲にして授業に立たなければならぬが、ほんとうにそうしなければいけないか、保育所以前の問題として私も考えさせられています。

高間

私の地方は県でも有名な織物の集散地で、普通託児所が市内四カ所にあります。これは市の経営で、赤ちゃんから幼稚園に行くまでの方をお預かりしているわけです。またたとえば先生方のお子さんとか、託児所に遠い人の赤ちゃんはどうしているかと申しますと、未亡人会というのがあります。うちで内職をしている方などで、その赤ちゃんを三人以上預かる場合には、市からの補助がおりるようになってゐるのです。一人について八百円くらいの補助だと思います。そうしてあとお母さんのほうから半額というふうに、大へん市の援助が大きく響いておりますので、三人以上の場合には保健所の指導と市の補助で責任を持って、適令まで乳幼児を預かるという制度になっております。それは市の未亡人で市役所のほうにおります未亡人会の世話をしている方々の方に申し込みますと、その方が全部希望者をつのって登録しておきますから、そういうところに三人くらいずつ割り当ててお世話するようになっております。もし皆さん方の地区で、そういう未亡人会とかあるいはお年寄りのお仕事としてそういう方を募って、婦人会などで一つの組織をこしらえますと、大へん簡単にいく問題じゃないかと思ひますがいかがでしょうか。

小林 その預かる場所とか、預かっている人に対する報酬はどういうふうになっているのですか。

高間

報酬は市で出しておりまして、場所は家族が三人くらいになるべく赤ちゃんのいない、お子さんの年が幼稚園から上くらいはの家庭で、お部屋も三間だったらいいというその程度の条件はあります。

水谷 今までのお話とは違って少しのんびりし過ぎたお話になりますけれども、こちらの方々のお話を聞いておりますと、生活の保証はあって、そうしてなおかつ収入を得たいので割り合いにのんびりと内職をしたりなにかのお仕事を習っているというふうに受け取れますが、自分自身の向上とか、心のうるおい、趣味を持つとか、自分を磨くというふうな面に意欲はおありにならないのか、これからしようと思つておられるのかを……。

主婦 私も今は四年生になっている子どもが、幼稚園の時代のときの方のグループが現在まで五年間続いております。そして毎月一回集まるのですが、子どものことや学校のことをいろいろ座談会をいたします。そのときに私がいつも感ずることは、ああこの会に今日出てきてよかった、またプラスすることを聞いてきたということで、いつでも感謝して帰ってくるのです。次の集まりをいつでも楽しみにしています。

主婦 私の場合結婚して一年二カ月くらいですからひまがたくさんあるのですが、外へ出てなにか習うといつても

お金もひまもかかりますので、私の場合はなにかしながらテレビやラジオを上手に使って自分の向上にしようと思っております。ですから皆さんとおしゃべりする時間が割りに合いません。おしゃべりもつき合いのうちといわれますが、ほんとうにおつき合いのうちなんでしょう。

末広 あまりおしゃべりをしてはいけないというのは私も大賛成なんです。しかし、無難なおしゃべりの中に、自分にプラスすることを見つけることもあるわけですね。

自分がものをいってみなければ人が私のことをどう考えているかわからない。黙って孤立していれば人がどう評価しているかわからない。私たちはときどき合わせ鏡がいる。それには自分が行動したり意見をいったり人中に行ったりすることも、ある程度は必要ではないかと思うんです。ですからおしゃべりはしてもうわさ話、陰口じゃなくて、いいおしゃべりということをお互いに考えたいと思うわけなんです。

主婦 先日記念会館で催された地方会議というのを傍聴しましたときに、ある婦人が、自分のところは夫だとか妻だとか親だとか子どもだとかそういう関係と別に、ただ人間としてのおつき合いをしているという話を話しておられたのです。ボタンつけにしても、男の子どもさんも、旦那さんも、全部お母さんの手を全然わづらわせないというこ

となのです。それを聞きましてとても感心しちゃったのです。よくもそこまで仕込まれたと思うのです。(笑)ですけれどもまたちょっと考えまして、もしそのまま人間関係として続けていかれて、その方が、やがて息子さんにお嫁さんがきておばあちゃんになったときに、人間として扱われる、単なる年取った女として、扱われたなら、その方はどんなにみじめな思いをするだろうと考えたわけです。ですからやはり一軒の家というものは夫は妻に甘え、妻も夫に甘えて、子どもを中心にいたしました一家の団らんの時間というものを、この生活の時間割の中には必ずとっておきたいと私は思ったわけです。そうしてなんでも話してくれるお父さんであり子どもであり、またそれを上手に聞かせるお母さんにならなくちゃならないのじゃないか、そういったなごやかな家庭のふん囲気はやはり社会に出て行く子どもに、社会と繋がっていく大きな心をはぐくんでやる温床となるのじゃないかと思ひまして、時間割ということに對しまして、ぜひ一家の団らんの時間も取りたいと私はこう願って努力しているわけなんです。

司会 今皆さん方からお話をうけたまわって、私自身も参考になったり感心したわけですが、今度の婦人週間のテーマはもっと時間に対する観念を持っていたきたいというのが主要な目標になっておりますので、いっそう工夫、

研究して今日の懇談会で話し合ったことをひとつ皆さん方がお帰りになって生かしていくように努力していただいたならば、一人の力が十になり百になり千になり、皆さん方の地域社会全体に行き渡って、それが生かされたならばどんなに頼もしい生活が生み出されるのじゃないか、という大きな期待を持っているわけです。最後に労働省婦人課長にご挨拶をいただいてこの会を結びたいと思います。

高橋婦人課長 今日には社宅の皆さんもお忙しい中をこんなに大ぜいお集まりいただきましてほんとうにありがとうございます。会議員の皆さんも連日お忙しいところをご苦勞さまでした。相当お話がはずみまして、それぞれ皆さんお感じになったことがあります。私もいろいろ学ばせていただきましたが、ここで私の非常に感じたことを一、二点申し添えます。

それは皆さんもすでにお感じだと思いますけれども、それぞれの主婦の方々が、その属しておられますところの生活の階層と申しますか、環境によって非常に生活の仕方が違い、それにつれて生活時間という点なども大へんに違うということです。これは大へんに大きな問題だと思ふのですが、そのように違う立場の方々が、一堂に会していろいろと体験を語り合うということ、そこに全国婦人会議というものの意味がありますし、また特に移動会議で皆さん方に

直接お目にかかってお話するこの会議の意味があるのじゃないかということ。そのことからいえますことは、そのように立場によって非常に生活の様式も仕方も違うその主婦、あるいは婦人の考え方というものの、公式論的なものを押しつけるとか、きめ込むとかそういうことは無理なことだし、またこっけいなことだ、といえるのじゃないかと思うのです。そうしてそのことからいえますことは、結局いろいろな立場におきましても、それぞれのその毎日をもどのように忠実に生きるかということ、そこが問題じゃないかと思ひます。毎日を永住の地区だと思つて生きるのと、この言葉を私は大へん感動して聞いたわけですから。

そういうことで生活時間の設計という問題も、自分の生けるしるしありという気持ちで暮すためのものでありまして、生活時間の設計のために、生活時間を設計するのじゃないかと思ふのです。そのためにはまず自分はなにをしたいかという目標があることになるのじゃないだろうか、目標があつて初めて自由時間の意味もあるのじゃないかと思ひますね。

それからもう一つ、討議の中で落ちてゐるのに気がつきました点は、お話のいちばん最初から、社宅の方は大へんに経済的に恵まれてしまつたというふうなきめていらつしたようですが、私もそれを疑うのじゃないのですけ

れども、しかし勤め人の家庭というものは、現在非常にしあわせなものであっても、本来は不安なものなのです。つまり勤労者の収入、皆さん方でいえば夫の収入以外に、生産手段というものがないわけですね。万が一皆さん方のご主人がなにかのはずみで病気になる、なくなれるということがあったときに、それはただちに家庭生活全体の不安を意味する。一方のお百姓さんの方は、あるいはお店の方の方はそういうことがあったとしても、家族が路頭に迷うということはない。この勤労者の世帯の経済的不安という問題、これは非常に大きな問題があると思います。皆さま方もそういう面からいろいろお考え願ったらと思います。

それからもう一つはいろいろ立場が違うということにつき申し上げたのですけれども、そのいろいろな立場の相違にもかかわらず現在共通にいえますことは、日本の社会はだんだん工業化が進んでいくということ。近代化と申しますか、それが進んでいきますと、今非常に著しく違つて見えますこの相違もだんだんと少なくなっていくことが考えられますし、農村の生活はより都会的になっていくと思えます。またそのことと関連しまして主婦の生活、婦人の生活の中に家事というものについてやされるエネルギーもだんだんと減っていく、これは大きな動きなのです。その大

きな動きの中で、女の人たちが今後の生活設計をどのように立てていくかということが課題だと思ふのです。またこのような近代化に伴って、人間の気持はこのごろ流行の言葉でいえば大へんドライになっていくと思ふのです。大へん世の中が忙しく、ドライに合理的にハイカラになっていくのが今の日本ですが、しかもそういうふうな世の中がなっていけばいくほど家庭の安定、そういうものも非常に値打ちが出てくる。家庭というものが人間に持つておりますことの大きな意味は、その人間性の精神的な安定、そこにあるようです。もちろん経済的な問題が大きいわけですが、経済的な問題だけでしたら家庭なんか作らないでみんなで共同生活をするのがいちばん経済的なのです。しかし、なおかつ人間はみんな家庭を作りたいと願う。それはやはり人間と人間がそこに愛情の充足を見出し、そうしてまた次の世代に自分の望みを託すという精神の安定作用、これは世の中が忙しくなればなるほどその価値が上がっていくように思います。

そのように日本が激しい動きの中にあつて一方で近代化し、一方では家庭という問題がどうあつたらいいか問題になっております。これをどのように受けとめていくか、これが私たちみんなの課題ではないかと思ふのです。

司会 皆さん方の今日のお話し合は非常に私参考になり

ましたし、皆さん方も得るところが多かったと思います。
ほんとうに長い時間大へんありがとうございました。

埼玉班

- 川口内燃機鑄造株式会社視察
- 美園村大門下生活改善クラブ員との懇談会
- 盆栽村見学
- 片倉ハドソン靴下株式会社視察

懇談会出席者

○会議員

小	三	古	古	関	奥	田	片	大	柳	斎	花	鈴	小	渡
泉	浦	川	谷	口	宮	中	口	野	木	藤	岡	木	池	辺
和	ミ	ち	し	知	惇	丸	伸	綾	美	田	チ	清	憲	敏
子	チ	か	づ	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	(鹿見島)
(北海道)	(宮城)	(茨城)	(埼玉)	(千葉)	(東京)	(石川)	(富山)	(静岡)	(大阪)	(島根)	(広島)	(香川)	(大分)	

○佐々木生活改良普及員

○美園村大門下生活改善クラブ員三十名

○司会 埼玉婦人少年室長

司会 みなさまがた遠くからお出でいただきましてありがとうございます。さっそく懇談会に移りたいと思います。

最初にこの土地の生活改善クラブの会長さんから、勉強を始めた動機とか、いまだんなふうにしてやっていらっしゃるか、どんなふうに家庭の中が明るくなったとか、いろいろ結果が出ていると思いますが、そんなことからふれていただきたいと思います。

主婦 私たち農家の主婦は毎日忙しい忙しの連続から、心にゆとりもなく、楽しみのない生活を繰り返しているのが普通でした。そこで何とか近所の人と話し合ってみたい、いまだ少し自分たちの生活に楽しみをもちたいと考えておりました。昭和二十九年の秋、普及員さんから生活改善の話をお聞きして、たいへん結構なことと思い、希望者だけ集まって、何でもいい、自分のできることから始めようと、十九人で出発したのが始まりです。昭和三十年には二十五人を数えました。そうして農繁期を除きまして年八回の研究会をもつようになり、毎月四日を私たちグループの研究日と決めまして、普及員さんに出席していただいて指導を受けつつ研究を進めております。

現在までに研究したことは食生活が主ですが、なごやかな気分の中で問題を解決していくというように努めており

ます。責任を分担して、事業計画も無理のないようにみなさんの都合を考慮し、また記録も当番制で、次の集会において読み上げるようになっております。

司会 それでは、この地区で普及員さんの指導の下に生活改善の中でも、特に食生活の問題を取り上げて勉強始めたそうですので、なぜ食生活を最初に取り上げたかということについて……。

主婦 戦後の農村の食生活はたいへん低下しておりますので、一番身近な問題からということで研究し始めたのです。例会の日に集会場を料理場にしまして、夜の副食だけを家族全部の分をこしらえるわけです。

司会 みなさんそれで今まで自分で経験から使ったお料理と、栄養的にも味の面からも違ったものができるということになってきたわけでしょうけれども、その結果はどうでしたか、家に帰ってからの反響とか、みなさんがつくってみた感想とか……。

主婦 なかなか一人で作ると手間がとれて面倒ですが、共同でやりますととても早く、面白くできる。

主婦 子どもや年寄りが喜んで、私たちが料理の講習から帰ってくるのを待っております。いちばん直接的で、直接利益のゆく問題なので、成功したと思います。

小泉 副食と主食と、どっちが家庭に帰って喜ばれます

か？

主婦 副食のほうを主にやっています。その材料はやはり普及員さんに献立をお願いして、農村で私たちがいちばん手近に利用できる料理をするわけです。

小泉 材料を買うお金はどうしていますか？

主婦 うちの会は会費制です。だからその会費のまかないのつく範囲で、一カ月の支出をまかなっている。お金の少ない時は話し合いにします。

鈴木 農繁期の共同炊事をなさっていらっしゃいますか。

主婦 そこまでいっていないのですが、やがては共同炊事にまで進めたいと思います。

小池 その研究会の日の時間というものはある程度決めているのですか。

主婦 忙しい時ですと午後一時からです。冬は一日ということになる。その時はお米を出し合って、私たちおひるにこしらえたものを食べて、夕方やはり自分の食べるものと副食をこしらえて家へ帰るわけです。

古川 年に八回集まりのある予定とかですが、そうすると、年の大体の計画というのはどういうふうになっておりますか。

佐々木(普及員) 年計画というのを、三月の総会の時に

大体決めて、今年度は何をしようかということを含んで話し合いをするのですが、取り立てて、ぜひ今年度やりたいというようなものを特別あげまして、そのほかは今までのような料理をつくって、それを試食しながら、なごやかに話し合いをするといったような計画になっているわけです。十五人くらいですから、そんな大きな仕事は経済の面から、考えてもできないわけです。小さなことでもできることから始めようということで、身近な問題から取り上げてやっているわけです。

大野木 農家のお母さん方というのは、自分の余裕時間なんか生み出せないと思いますが、こういう生活改善クラブができ上がるまでには、お家の方の協力というものがすごく蔭にあったのではないかと思います。そういうお家の人の理解とか、何かトラブルとかがありましたら、具体的にお話ししていただきたいのですが。

主婦 若い人ばかりが集まって、年寄りの集まる機会がないと非難されました。子どもや年寄りはお茶づけばかり食べているのにというような……。それで、ぜひ年寄りの人たちも集会を持ってください、私たちが協力しますからということ、今度お年寄りの方も毎月集まるようになります。現在では非常にスムーズに行なわれておりまして、私たちもこれから先、若いお嫁さんたちの会合を開き

まして、嫁としゅうとの中をうまくやっていきたいと、願っているのですが……。

司会 会合をもつということについてはずいぶんみなさん苦勞していらっしやると思いますが、もう少し苦心談を……。

主婦 この会合を始めたときは、みなさん好奇心でたくさん出て来ましたが、しまいにはやっぱりあきがきましたので、役員だけで骨折ることになって、私たちこういう思いをして一生懸命やっているのにと辛いと思いました。みなさんが理解してくださって、現在は当番制にしましたから、責任もって出て来て、家庭でも理解してくれるようになったので、会がよくなりました。

片口 その集会所では、料理の講習なさる時の家事室を、全部みなさんの会費でおつくりになったのですか。それとも家からお持ちですか。鍋とかこんろとか。

主婦 備え付けもあるんですが、それだけでは足りませんから、当番の人が責任をもって持ち寄ります。設備も何とかしなければと思いますが、いかにも財政が許しませんので。

古川 その食生活の改善なんかに、家計簿のつけ方とかいろいろやっていらっしやるようですが、月一回のその日にみんなできるのですか。

主婦 毎月毎月、今月は料理の講習、来月はお金もないから、保健所の先生にお願いして家族計画のお話を聞きましょうとか、毎月違っているのです。

主婦 一家のお財布を握る経済の主人格の座は、結婚して何年ぐらいで、生れるわけですか。

主婦 それは家庭によりましようね。おしゅうとさんが早く亡くなると、どうしてもやらなければならぬ立場になりますから。

小泉 家計簿をつけるだけなら、誰でも書けるんです。それで、最後のまとまりを、収入のある時はどういふふうにする、ない時はどういふふうやりくりをするということは誰がやりますか。

主婦 その点、私たちは農村の中の非農家で倅給生活していますから、私が全部取り上げて、大学に行っている子にはいくら、高校は何千円、中学は何百円というふうにして、最後の小学校の生徒だけは、私がそのつと出して、あとは全部まかないして……。

司会 農家の方はいかがですか、その点。

主婦 米の供出とか麦の供出という時はお金が入るが、そのほかはとて入らないから、この辺は苗木とか、植木の生産地帯ですから、そういうものを売るとか、保存のきくものは現金収入の少ない時市場に出すようにやっていま

すが……。

小泉 家事の分担制ということがありますが、その分担を教えてください。

主婦 朝、嫁さんがご飯を炊きますと、おばあちゃんが座敷はくとか、子どもは雑巾がけをする、主人は庭をはくとか分担するのですね。

小泉 野良に出て働く時間はどのくらいですか。

主婦 農村の娘さんはいへんで、朝は洗濯物も、ゆっくりできない。この頃は五時ぐらいに起きて、七時か七時半ごろ畠に出ます。そしておひる前にお茶があって、三十分ぐらい休む。おひるに一時間ぐらい。午後の休み三十分ぐらい。あとは日のある中はやって、帰るのは六時過ぎますね。

司会 この地区では生活時間の調査をして、自分の生活時間を記録して反省する、ということをやったらしいですが、その中で、おひる寝の時間をとることにしたということをうかがっておりますが。

主婦 夏の暑い時、とても野菜の出荷で忙しいので眠りが狂っていく、それをがまんしてやっていますと、やはり能率が上らない。三十分でも二十分でもひるねしますと、そのあと能率的に働ける。ですからみんなでひるねするように相談したわけです。

大野木 それを決めて、実際お宅でお母さん方がおひるねできますでしょうか。

主婦 なかなか、嫁の立場ではやりたいと思ってもできないのですが、このころはたいへん年寄りの方も理解しまして、おひる休みにはなるべくやすむということにしています。

司会 生活時間の記録を取るということは、非常な努力だったと思いますが、どんなふうにしてお取りになったのですか。

主婦 朝起きた時に時計を見て記して、また畠に出ます時には、何時ころ出て行けるかという時間を記して、というふうに一々時計を見て記しておきまして、晩になって一日の働いた時間、休養した時間を記入しておきました。

主婦 円グラフをこしらえて、二十四時間の記録をとりました。

司会 今までばく然と過こしていた時間が、記録をつけてみて気がついたとか、こういうことだったらもう少し考えなければならぬ、という結果が出てきましたでしょうか。

主婦 五世帯で記録しましたが、農家の従業員が三人の家庭で、Aの家庭とBの家庭とでは、主婦の働く家事労働の時間に違いがでてきました。片方の家庭は、仕事も相当

たくさんやっていて、休む時間も多く取っているが、片方の家庭に農反別も少ないのに、休み時間が少い。相当時間を空費しているという結果ができました。やはり農家の労働作業を計画的にやっていかないと、休める時間でも動くようになると思いましたが。

花岡 保健衛生のらんで、家族計画というものがありますが。

主婦 生活改善クラブだけじゃなくて、婦人会で愛育班をこしらえて若い人も集まってやっています。そして、みなさんの希望によりまして助産婦さんに個人指導していただいております。

三浦 農村の方は、お子さんの数を計画するにしても、都会より多く見ていらっしゃる。大体標準としてどの程度だったらば子どもは何人ぐらい、という考えがありと思いますか……。

主婦 三人ぐらいじゃないですか。

片口 家族計画といっても、器具に費用がかかるでしょう。役場のほうから何か援助がありませんか。

主婦 援助があるのです。器具や何かの場合は、普通の家庭で半額ぐらいの負担ですが。

花岡 半額なんていうことをやらないで、婦人会で運動して、無料にしてもらったらどうですか。わたしのところ

は無料にしています。半分出すということになるとお金が惜しいからまあまあということになる。無料だからやってもらいなさいといったら、ついてくる人がたくさんある。

田中 つわりのとき農家の方は重労働と思いますが、みんなお互いがまんし合っていらっしゃるのですか。つわりだからと遠慮することないですか。

主婦 親たちが理解があるから休んでおられます。一般的にこの辺は理解がありますね。今、若い方が妊娠しますとすぐ親に、妊娠したということを話すらしい。うちの嫁もできたから、と親も心得ているらしいからわりあい問題ないのじゃないでしょうか。

鈴木 農繁期に共同炊事をしておられないというお話でしたが、すると主婦の家事労働が相当きついのではないかと思います。

主婦 共同炊事はやっておりませんが共同購入をやっております。肉とか、お魚、フライというものは共同購入しまして、家庭に分けています。

鈴木 私のほうでは共同炊事していますが、一般の声では、共同炊事したら、田んぼから帰っても身体が疲れない。農繁期がすむと病人がたくさん出るようだったが、共同炊事になってから病人が出なくなったということです。

主婦 共同炊事といいますがと主食から始めるのですか。

鈴木 ご飯はうちです。一週間でしたら卯一人当たり三個、オムレツが二回、野菜サラダ、フライ、相当ぜいたくなものをつくるんです。お金は、一食分として十円集める。副食ですが、おひると晩ですから、一日が二十円になる。薪は、一人当り約一貫目集めます。野菜は、ネギやらホウレンソウ。豆が、ソラ豆に大豆一合ずつです。だから家庭ではお漬物を出すだけです。

主婦 献立は婦人会が何かでつくるのですか。

鈴木 普及員に相談の上で農家の方の希望も聞き、みなさんの好きそうな、おいしそうなものを一回すると、その次相談して、何がおいしかったから何をするというふうに……。一回に百二十人くらいです。三人でします。

主婦 調理の担当者はどんな方が……。

鈴木 非農家の方です。責任者一人置きまして、名簿をつくりまして、今、お豆が出ていますから、何日から何日までにお豆の料理をつくるからと有線放送します。一食二品動物性蛋白と野菜の料理と二種類ずつあります。

主婦 手伝っていただく方のお礼は？

鈴木 それは現品で集めて換金するのです。

主婦 大体何日間やるんですか。

鈴木 一週間でですね。十日のこともありますし……。

主婦 一部落ですか。

鈴木 一部落です。部落会場に炊事場がついているのです。婦人会の補助があったり、村から補助があったり、農協から一回ごとに五千円、三回くらい出しましたかしら、器具を買うための補助を受けたのです。いろいろな方の力で大体整えました。

佐々木 さっきの、おひるねの時間を三十分とるように決めたというのは、生活時間の調査を男女別にやったところ、婦人の方が、睡眠時間が一時間ほど少なかったわけです。それを何とかうまくとる方法はないかというので考えたわけですが、炊事の時間とか家事の時間で、どうしても主婦の方は、自分の自由時間というのがそれだけ縮まってしまうから、仕事の能率を上げるために休息をとってやったほうがいいということで、三十分休むことにした。

それから家事の分担も、特に子どもの協力を得て、洗濯物は一人一人名前をつけた箱をつくっておいて、そこへ洗濯する物が入れるとか、各自やるように協力してもらおうといった、しつけの面も兼ねて協力してもらおうようになったわけです。

主婦 ちょっと話は違いますけれども、近ごろ農村にお嫁さんのき手がない。都会にばかりあこがれて。どうしたら農村に来るようになるかということですが、どういよう

うにして解決していられっしやいますか。

小泉 私のほうは北海道といってもずっと端なんです。町から八キロも入っている。全然電気がないし、何につけほんとうに不便なところです。だからわたしの娘ならぜひお嫁さんにもらってくださいといいたい。こちら辺はほんとうに生活水準が高いですもの。わたしのところでは全然長男にお嫁さんが来る人はいない。それをみなさんで話し合って、ぜひお嫁さんを探しに北海道に来ていただいて、違うほうと違うほうと交換して、そこを盛り立てて行ってくれたら、まだまだ北海道は開発できると思うんです。

大野木 わたし、娘の立場として申し上げますと、私自身、女子の寄宿舎に入っている人の恋愛や結婚の座談会の司会者もしますが、決して農村にいくのがいや、というばかりじゃないということを申し上げたい。もちろんサラリーマンの生活はきれいで自分の時間もあるように見えるが、ある程度年令が来て結婚を真剣に考えるようになりすると、農家はいやだということはいってられない。それよりも、ほんとうに人間と人間のふれ合いというものをまじめに考えるようになりますから、私自身も、長男でもいい、お母さんがあってもわたしは働きたいと思っていますから、お母さんに家を見てもらって、うちの人が温い雰囲気をつくっているなら、どこにいてもいいと思っています。

す。わたしの周囲の友達もそういう考えをもっています。だから、お母さん自身が進歩的になってほしいと思います。そうしたらきつとすばらしいお嫁さんがくるのではないかと思います。

司会 お話は尽きませんが、このくらいでおしまいにしたいと思います。地元の方々と非常に楽しく、和気あいあいと会議ができましたことをお礼申し上げます。

地元婦人会長 本日お出でになった方に、会員たちの生産しました桃の苗木を一本ずつさしあげたいと思います。

千葉班

- 東京電力千葉火力発電所視察
- 登戸生活協同組合員との懇談会
- 農業技術研究所視察

懇談会出席者

○会議員

山本	谷津	国分	土屋	海野	萩原	猿渡	大橋	山中	北波	前川	三野	山崎	富永
富喜子(岩手)	千代(宮城)	礼子(福島)	政江(群馬)	幸子(山梨)	道子(長野)	美治子(岐阜)	いね(静岡)	もと(滋賀)	洋子(岡山)	豊子(徳島)	文代(香川)	田鶴子(高知)	美津子(大分)

○登戸生活協同組合

大河内組合長

樋口専務

外組合員

三十名

○司会 千葉婦人少年室長

司会 登戸生協のことを私が知りましたのは昨年のこと
で、ほんとうに感激いたしました。婦人の力だけでこれだ
けの大きな事業をなさるといふのは、珍しいことではない
かと思ひます。私が感激するとともに、どういふご苦労が
おありになるか、また主婦の方々がなさっていらつしやる
ので、生活のことをどんなふうにやっていらつしやるか、
非常にお聞きしたいと思ひました。初めに組合長さん
に設立当初のことをお話し願ひたいと思ひます。

生協員 おほめいただいて恐縮ですが、登戸生協をおこ
しましたのは戦後の二十三年ごろでしたが、とても物資の
不足なところで、当時は隣組単位になっておりまして、隣組
長さんの奥さんたちの中から、これをなんとかしなくちゃ
いけないという声が起こりました。その当時市の厚生課あ
たりで、物資をあっせんしてくださいましたので、これを
皆さんで分け合おうじゃないかということになり、安定会
という会を作ったのです。そして日曜とか土曜とか、ひま
なときに物を分ける会をやり、一年ぐらいそんなことをし
ていたのですが、ちょうどこの地区に経験のある方がいら
つしやいました、力を合せて、協同組合にしたらという
ようなことをうかがったのです。しかし、私どもはそうい
うことは何もわかりませんし、自分たちにできるかと、非
常に疑問に思ひましたが、指導者の方の熱意に動かされ、

私どもの生活も切実だったものですから、やれるところま
でやってみようというので、その当時二十五人ほどの参加
人と一緒に、組合員獲得ということをやったわけです。三
百人ないと認可になりませんが、割り合ひに順調に進みま
して、組合の看板をかけることができたわけです。いま考
えてもおかしいんですが、当時福神漬ぐらいしかないんで
すね、何をこれから売っていいか、大げさかもしれませんが、
夜も眠れないくらいで、自分と組合というものが、一
緒に生きていると思うようになりまして、一日も休むこと
がない。当時お豆腐とか納豆が比較的手に入りましたが、
物がないうきなのでよくはけました。そのうちいろいろな
ものを置くようになりまして、とても玄關先では間に合
いません。どうしてもお店を建てなければいけない。それで
当時十万円ほど借金いたしました、店舗を建てたのです。

いま考えてみると、そのときは無謀と申しますか、こう
したら品がなくなるとも何とも思われないですね。なんと
かなるという信念で、当時組合員から百円の出資金を、三
百人いますと三万円ですね。それにうちじゃ主人と二人で
百円ずつ出しましたという方があって、四万五千円ぐら
いの出資金だった。それだけの資本金でいいことができる
はずがないんです。十万円拝借しても、家は建ちましたけ
れども、中へ入れる品物はないというわけです。

それから私も考えまして、千葉市の間屋さんを歩きまわして、決して迷惑はかけない、あと払いになるけれども、品物を貸してくれないかとお願ひしたんです。そうしたら快く引き受けてくださいます、品物を持って行ってはやれない、取りにくるなら借してあげるということで、それでお店をあげました。ちょうど昭和二十四年の九月で、その開店いたしました日に三万円の売り上げがあった。そのときはほんとうに自分でもびっくりしました。二日目は一万五千円ぐらいで、それがたいへんまわりの商人を刺激したんですが、とにかく珍らしいのと、何もないころに品物集めは一生懸命やられたということで、それだけの売り上げがあったと思います。

そんなことをしてうちに、こういうことはほんとうに秩序正しくやらなくちゃいけないんじゃないかということ、が役員たちにもだんだんわかってまいりまして、現在のようになりましては、相当いろんな勉強もしたり、苦勞もしたわけです。まだまだこれでいいというわけじゃなくて、こういうふうに大きくしますと、いろんな面で費用がかかります。小さいときには皆さんに割り戻しなんかたくさんあげられたんですが、いまはそうはいきません。そのかわり文化事業とか、お金で買えない精神的なものを皆さんにお返しするということを現在していますが、それも皆

さん方に満足のいくようにはできないということは、たいへん心苦しく思っております。

国分 生協だから、皆さんの便宜をはかって、市価よりも安いとか量目が正しいとか、そういう特典もあるんじゃないですか。

生協員 それはあります。しかし最近みんな安売り攻勢に出ていますから、必ずしも組合のものが安くはないというおしかりを受けますが、だいたいは三分から、品物によっては一割ぐらい安くなっている、と思っております。

萩原 圧力が加わったとおっしゃいましたが、どんな圧力がきたんでしょうか。

生協員 問屋が安くしてくれて、一つ十円のお豆腐を八円か七円で売ることができたんで、それをしたところが、ほかのお店が、生協へお豆腐を入れるなら、うちへは置いてやらないという形で、豆腐屋を圧迫し、結局普通と同じ値段にしてみました。

生協員 よそのお店で券を出したというのもありましたね。

生協員 ここは市価より幾らか安いのですが、ほかのお店はサービス券を出した。ここでは安く売ること以外に割引しの制度があるんですが、一年に一回しかできない。総決算の結果、利益があれば割り戻しですから……。お店の

ほうは買うたびに、毎日でもその券が出せるわけです。それをためておけば割り戻しと同じように返ってくる。そんなような券を出したことがあります。

山崎 夜も眠られないくらい、ということ、生みの苦しみはたいへんだったと思うんです。当時家庭とこちらのお仕事と、どういうふうになさっていたかをお伺いしたいのですが。

生協員 そのころは役員は比較的ひまのできる、時間の作れる方に交代に出ていただいたわけです。初めのころはおうちのほうから苦情が出たこともありましたが、このお仕事が意義のあることだということが、だんだんわかっていただけるようになって、今ではむしろ協力をしていただいています。

司会 いろいろまだご質問があるかと思いますが、この辺で前の登戸生協、それから現在のことにについて、専務理事の樋口さんからお話をいただきたいと思っています。

生協員 こちらに移ってきましたのは三年前で、以前のお店は作業場と、それから在庫品置場にしてあります。つまりお店だけこちらへ移ってきたんですが、初めは出資金が、四万五千円ぐらいでしたが、現在は一口出資金が五百円になり、およそ六百人ぐらいの組合員がありますから、一人でたくさんの口数を持っている方も多く、現在の出資

金は九十万ぐらいになっております。売り上げなんかも以前のお店のときが一万から二万ぐらい、ここへ移ったときは三万ぐらいありました。現在はだいたい二万五千円前後です。現在月に二回お休みがありますので、一カ月が二十八日ぐらいの営業になっております。ここでしている事業はお店で売っていることと、そのほかいろんな依頼を受けて、毛布とか、毛糸のようなものとか、あるいは新学期になると運動靴、そういう特別なものは月賦で売ることがあるわけです。三回ないし五回の月賦販売をしております。それから洗濯です。洗濯屋さんで協定ができていて、中継ぎをしております。それから牛乳は店でも売っておりますが、配達牛乳もやっております。一応日常生活に必要なものはなんでも扱える。主食とか、生鮮野菜、それからお肉、お魚、そういうものはみんな扱えるわけです。そこまでいかなければ生活協同組合とはいえないと思います。が、それには専門的な知識と技術があるので、そのためにまた人を雇うとか、そういう損得を考え合わせるとできないものもあります。生活協同組合だからといって、別に組合員の上にあぐらをかいているわけにもいきません。ごく普通のお店と同じに経営はしていかなきやならない。

お客さんは組合員だけで員外利用はさせない建前です。結局固定したお客さんになるわけですが、そうかといって

組合員だからサービスが悪くてもいいというわけにはいきません。それから組合組織になっているものですから、金銭関係は非常に厳密にしなきゃいけないということですよ。

というのは、監督官庁があるわけです。いまは市の厚生課の中に、生協の係があって、一年に一ぺんぐらいは監督官庁の監査を受けることがある。そのときは全部のものを記録に出さなきゃいけないのですから、総会はどうしてもいろいろの決算報告なんか出さなきゃいけないので、そういう素人でできない仕事がたくさんあるわけです。そういうことを一切を含めて考えてみると、生協の経営ということは、そんなになまやさしいものじゃない。主婦が家事の片手間にといい性質のものじゃないわけです。現在生協をやっていく上の人員構成をいいますと、役員がいる、役員の中には理事がいる。各組合の定款によって人数が決っています。現在ここで十三人の理事がおります。家庭の主婦ばかりです。それから経済行動を行なっていますから、監督していけないことがあれば指摘しなきゃならない。そういうために監事が二名おります。それから一切の事務なり、経営なりの実際の仕事をしていくための職員が現在八人ぐらいおります。それで私たち理事が、どうしてもしなきゃならないことは運営を決めるということなんです。

すね。どういうふうにやっていくかということの、おおもとを決めるわけです。職員の給与規定とか、どういう方針で、この会館を利用していくとか、ときによってはお店のほうの品物を、これはぜひ入れなきゃいけない、これは入れては工合が悪いということがある。それから事業の状況をいつもよく監督して、そして常任の人たちはそれを理事会に報告して、皆さんの了解を得なければいけない、そういう仕事があるわけです。とにかくここで行なうことのおおもとを決定する機関が理事会ということなんです。そして私たち十三人のうち四人が半常勤ですから、一週間にだいたい一日おきぐらいの割り合で、何時間かここに来ることになります。だいたい一週間に一度ぐらい常任会を持って、もろもろのことを決めて、それを理事会に出してはかるといふ形を取っております。ただいま申し上げたように、お店のほうの売上げは一日に二万円のとときもありますし、三万円の日もあります。だいたい年に百八十万ぐらいの利益になりますが、純利益というのは、経費が多いものになってしまふわけです。

次にここのお店で売っている品物はどれくらいマージンがあるかといいますと、一割三分ぐらいです。一割三分なんていうのは低いといわれるわけですが、ここにいる理事者は、みんなしろうとのわけです。私が常任になったのは

六年ぐらい前ですけれども、初めはそんなこともなにもわからない。ほんのここの二、三年ぐらいのところでお店の経営はこういうものだといことが少しのみ込めてきたという程度です。お店をひとつ経営していくことは、主婦の片手間というものじゃできない。実際のお店を経営していくために、どうしても必要なのはマネージャーですけれども、普通は専務理事が一切の責任を負うはずのものでさうです。それは私もできればいいんですが、第一に家庭を置いている、第二にこの仕事を置いているわけです。組合のことを第一に置く人がなければ組合というものの性質が、そうなまやさしいものじゃないということをこのごろ非常に感じてゐるわけです。

北波 組合員の方はサラリーマンの家庭の方が多いんですか。

生協員 だいたい九十五%ぐらいまでが俸給生活者です。ほかに商業と半農半漁が少しあります。

萩原 設立当初の十万円 of 借金は借りるのにたいへんだったろうと思うんですが。

生協員 二人の男の方と一緒に銀行へ行つて、苦勞しながら頼みこみました。そして一万円ずつ月賦返済をしました。

いちばんありがたいと思ひましたことは、県で融資をし

てくださった。それは成績によつてということでしたが。司会 組合員の方は、この大事なお客さまだそうですが、どういふふうにご利用になつてゐるかを……。

生協員 組合員の方が、ここできにかく買つてくださなければ経営が成り立たないわけです。だいたい月にどのくらい買つてゐるかといいますと、私どもの計算では、一人がだいたい月千円ぐらい利用していらつしやるんじゃないかと思ひます。私のうちでは、ここにあるものはすべて利用することになりますので、月五千円から六千円です。

国分 いままで非常に経営が順調にきてゐるようですが、組合員の方で、ほかのお店でお買ひになつたときよりもうまくなかつたというような経験の方ありませんか。

生協員 たまにあります。でもバターなんか変質してにおいがあるような場合は、気分よく取りかえてくださるんです。

司会 こちらはそういうことのほかに文化活動をなさつてゐると伺ひましたが、組合員の方はそれをご利用なさつてゐるわけでしょうか。

生協員 お料理の講習なんか、ごく身近かな料理なんかやつていただいてゐることがあります。

生協員 それから毎年ふとん綿を入れる講習会があるんです。おうちですと、ほこりでたいへんなんですが、

こちらで指導してくださる方がお手伝いして入れてくださるので、たいへん参考になるし、いいと思っております。

山崎 組合の理事の方、それから役員の方々のここへの時間的な奉仕、それはどういうふうにして生み出しているのか、どれくらいの時間奉仕して、また家族はそれに対してどういうふうだということを伺いたいんです
が……、

生協員 私は常任理事をしております。私欲ばかりまして、学校のほうだの、いろいろ首を突っ込んで忙がしい思いをしておりますが、主人と子どもの理解のもとにやっております。まだ私は常任になったばかりで、勉強している最中ですが、うちの仕事はやりようによっていくらでもひまが出る。私は一週間のうち大々的な掃除は二日、あとはその日にしなきゃならないことだけしています。まあ家事が夜になって、そのため幾分睡眠のほうにしわ寄せがくるということはありません。ここへ一日おきに半日出ることを目標にしていますが、一番悩むのは不意のお客さんです。そういうときどうもしなきゃならない仕事があると、かぎをかけちゃうんです。そんなふうにして時間を生み出しています。

土屋 それは全くの奉仕ですか。

生協員 まあそうですね。多少いただいてはおりますが

……。組合長さんが現在月四千円、常任は二千五百円ずつ、ほかの役員の方は監事を含めて年に二千円ずつ差しあげています。

ここで申し上げたいのは、そういう奉仕でもって組合の経営が成っているのじゃまだまだ子どもだということですよ。本来こういう仕事は、だれかの奉仕の上に立っていたいんじゃない事業じゃないので、そういう点をなくしていきたいと思うんです。そのためには経営の実績を上げなきゃならない。月に多くて百万、せいぜい七十万か八十万じゃどうにもならない。ここを建てるには三百万近くかかっていく。一部は借金があるわけです。それをどんどん消却していかなきゃ、この組合の建物は私たちのものじゃない。それだけのものをあげていくためには、月に百五十万円年間二千万円ぐらいの売り上げがほしい。それがなければここは成り立っていかないわけです。そういうことを考えて、まだまだ奉仕の部分が非常に多いわけです。

三野 先ほど文化的なお返しをしていらっしゃるということでしたが、組合員を対象にして定期的な催しをやっておられるんでしょうか、この場所なんか利用して……。

生協員 お料理の講習なんかやりますが、その場合は会費といっても材料費だけで、講師のお礼とか材料代は組合で出すようにしております。それから月二回ぐらいここで

お茶やお花がやられてますが、そういうものも、それから催物、展覧会をここでしたします場合も組合から補助しております。あれやこれやこまかく計算いたしますと、千円ぐらいは出てしまいます。こういうものは結局組合員にお返しするお金の中から運営されているとみていただきたいと思ひます。

先ほど割り戻しと申しましたが、出資金が百万円になるまでは出資金に繰り込むことになっていて、現金は返しております。組合を大きくするためには、そういう制度にしないでいいかと思ひてやっております。

司会 皆さんお話が尽きないようですが、もう時間も過ぎましたので、これで終らせていただきます。

生活時間の
自主的な設計のために

第8回全国婦人会議記録

昭和36年1月11日 印刷

昭和36年1月15日 発行

東京都千代田区大手町1の17番地

発行者 労働省婦人少年局

東京都中央区入船町2の3

印刷者 永井直保

